新潟県埋蔵文化財調査報告書　第205集

北陸新幹線関係発掘調査報告書XIII
一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

田伏山崎遺跡

２００９

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸新幹線関係発掘調査報告書XIII
一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

田伏山崎遺跡

２００９

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北陸新幹線は、東京を基点に信越地方・北陸地方を経由し、新大阪まで達する予定の鉄道です。現在は長野県長野市－石川県金沢市間を整備中です。北陸新幹線の開通により、北陸地方と首都圏、関西圏は短時間で結ばれ、沿線の産業・経済・文化の交流に多大な効果をもたらすものと期待されています。

また、一般国道８号糸魚川東バイパスは、糸魚川市間脇から同市押上に至る延長6.9kmの道路です。国道８号は新潟市から長岡市を経由し、北陸地方を日本海沿いに西行し、京都市に至る主要幹線道路となっています。糸魚川東バイパスは、糸魚川東地区の交通渋滞の緩和を目的に計画されました。

本書は北陸新幹線建設、及び一般国道８号糸魚川東バイパス建設に伴って平成18・19年度に実施した、田伏山崎遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査によって、弥生時代～古墳時代、平安時代、中世の遺構・遺物が検出されました。古墳時代では竪穴建物のカマドや土器集中区、平安時代では建物の柱穴や自然流路が複数検出されました。遺物は弥生時代から古墳時代の土器・土師器・管玉・紡錘車、平安時代の土師器・須恵器・製塩土器・腰帯石銙・木簡・斎串、中世の青磁・白磁、天目茶椀・鳥形・馬形・下駄などが多数出土しました。なかでも特筆すべきは平安時代の八稜鏡で、県内での出土例は極めて少ないものです。

発掘調査で得られたこれらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し、多大なご協力とご理解をいただいた糸魚川市、並びに地元の方々、また、発掘調査から本書の作成まで格別なご配慮をいただいた（独）鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線第二建設局、国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成21年12月

新潟県教育委員会

教育長　武藤　克己

例　　言

1　本書は、新潟県糸魚川市大字田伏字山崎777番地ほかに所在する田伏山崎遺跡の発掘調査記録である。

2　この調査は北陸新幹線建設に伴い（独）鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線第二建設局、および一般国道8号糸魚川東バイパス建設事業に伴い、国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に依頼した。

3　埋文事業団は掘削作業等を平成18年度は株式会社みくに考古学研究所、平成19年度は株式会社帆苅組に委託して発掘調査を実施した。

4　遺物の註記は、田伏山崎遺跡の略記号「04タヤマ」（試掘調査）、「06タヤマ」（本発掘調査1年目）、「07タヤマ」（本発掘調査2年目）にグリッドNo.・遺構名・層位等を併記した。

5　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」は日本平面国家座標のX軸方向を示す。

6　掲載遺物の番号は土器・土製品、石器・石製品、木製品、金属製品の種別ごとに通し番号を付した。本文及び観察表、図面図版、写真図版の遺物番号はすべて一致している。

7　本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は、著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

8　第Ⅴ章の自然科学分析の分析・原稿は、株式会社パレオ・ラボに委託して行った。

9　八稜鏡については、久保智康氏からご教示をいただいたが、本文中の誤記等についての文責は佐藤友子にある。

10　木簡、墨書土器の釈文等については小林昌二氏（帝京大学）、平川　南氏（国立歴史民俗博物館館長）のご教示をいただいた。本文中の誤記等についての文責は佐藤友子にある。

11　遺構・遺物図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿し印刷した。

12　本書の執筆は、寺﨑裕助（埋文事業団　調査課長代理）の指導のもと、佐藤友子（同　班長）、村上章久・安西雅希（株式会社帆苅組埋蔵文化財調査課　調査員）が行い、編集は佐藤友子が担当した。執筆分担は村上章久：第Ⅲ章2・3、第Ⅳ章1B（1）～（3）、第Ⅵ章2A・B、安西雅希：第Ⅳ章1A・2・3・5・6・8で、これ以外は佐藤友子である。

13　調査成果の一部は田伏山崎遺跡現地説明会（平成19年7月28日）等で公表しているが、本報告書の記述をもって正式な報告とする。

14　出土遺物および調査・整理・自然科学分析等に係る各種資料・データ類は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターで保管・管理している。

15　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

相田泰臣　糸魚川市教育委員会　北野博司　木本元治　久保智康　小林昌二　笹澤正史　高濱信行
戸根与八郎　平川　南　水澤幸一　望月精司

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1
A　北陸新幹線 …… 1
B　一般国道８号糸魚川東バイパス …… 1

2　調査の経過 …… 3
A　試 掘 調 査 …… 3
B　本発掘調査 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 7

1　地理的環境 …… 7

2　歴史的環境 …… 8

第Ⅲ章　遺　　跡 …… 12

1　グリッドの設定 …… 12

2　基 本 層 序 …… 12
A　尾 根 地 区 …… 12
B　沢　地　区 …… 14

3　遺　　構 …… 17
A　尾 根 地 区 …… 17
B　沢 地 区 南 …… 17
C　沢 地 区 北 …… 22

第Ⅳ章　遺　　物 …… 26

1　土　　器 …… 26
A　中世以降の土器 …… 26
B　古代の土器 …… 27
C　弥生時代～古墳時代の土器 …… 33

2　石　製　品 …… 38
A　砥　　石 …… 38
B　腰 帯 石 銙 …… 38
C　石製紡錘車 …… 39
D　管　　玉 …… 39
E　翡 翠 原 石 …… 39

3　木　製　品 …… 39
A　中　　世 …… 39
B　古　　代 …… 40
C　古 墳 時 代 …… 40
D　そ　の　他 …… 41

4　木　　簡 …… 41
5　土　製　品 …… 41
6　金 属 製 品 …… 42
7　八　稜　鏡 …… 43
8　縄文時代の遺物 …… 43

第Ⅴ章　自然科学分析 …… 44
1　木製品の樹種同定 …… 44
A　はじめに …… 44
B　試料と方法 …… 44
C　結　　果 …… 44
D　考　　察 …… 45
E　おわりに …… 46
2　八稜鏡の成分分析 …… 48
A　はじめに …… 48
B　試料と方法 …… 48
C　結　　果 …… 48
D　考　　察 …… 49
E　おわりに …… 49
3　大型植物遺体 …… 50
A　はじめに …… 50
B　試料と方法 …… 50
C　結　　果 …… 50
D　考　　察 …… 51
E　おわりに …… 51

第Ⅵ章　ま　と　め …… 53
1　中　　世 …… 53
2　古　　代 …… 53
A　遺構と遺物の変遷 …… 53
B　製 塩 土 器 …… 55
C　墨 書 土 器 …… 56
D　祭祀遺構・遺物について …… 57
3　古墳時代後期の遺物 …… 58

《要　　約》 …… 59
《引用・参考文献》 …… 60
《別　　表》 …… 63
《抄　　録》

挿図目次

第１図　糸魚川東バイパス・北陸新幹線の路線と遺跡の位置 …… 2
第２図　試掘調査トレンチ位置図 …… 3
第３図　田伏山崎遺跡周辺の主な遺跡 …… 9
第４図　グリッド設定図 …… 13
第５図　土層断面図（尾根地区・沢地区南） …… 15
第６図　土層断面図（沢地区北） …… 16
第７図　沢地区北　土器出土分布 …… 28
第８図　古代の土器分類 …… 29
第９図　古墳時代後期の土器分類 …… 34
第10図　弥生時代後期～古墳時代前期の土器分類　35
第11図　木簡切断方法 …… 41
第12図　木製品材組織の光学顕微鏡写真 …… 47
第13図　八稜鏡の成分分析結果 …… 49
第14図　大型植物遺体 …… 52
第15図　古代～中世集落想定範囲 …… 54
第16図　遺構の変遷 …… 55
第17図　土器重量分布 …… 55
第18図　製塩土器の底径 …… 56
第19図　製塩土器口縁部数量分布 …… 56
第20図　古墳時代後期の土器機能別構成比 …… 58

表　目　次

第１表　発掘調査工程（平成19年度） …… 6
第２表　尾根地区　遺構観察表（ピット） …… 17
第３表　沢地区南　中世遺構観察表（ピット） …… 18
第４表　沢地区南　弥生時代～古墳時代遺構観察表（ピット） …… 21
第５表　沢地区北　古代～中世遺構観察表（ピット） …… 25
第６表　沢地区木製品集計表 …… 40
第７表　新潟県内古代鏡一覧 …… 42
第８表　木製品と樹種同定結果 …… 46
第９表　半定量分析結果 …… 48
第10表　大型植物遺体の同定結果 …… 50
第11表　SI13器種構成 …… 58

図版目次

［図面図版］
図版１　調査範囲と周辺の地形
図版２　尾根地区　遺構配置図・遺構個別図
図版３　沢地区南　遺構配置図（Ⅷb層・中世）
図版４　沢地区南　杭列平面図（33・34D・E・Fグリッド）
図版５　沢地区南　杭列平面図（33B・Cグリッド）
図版６　沢地区南　遺構個別図１　SK・P・SA・杭
図版７　沢地区南　遺構配置図（X層・弥生時代～古墳時代）
図版８　沢地区南　遺構個別図２　SI13
図版９　沢地区南　遺構個別図３　土器集中52
図版10　沢地区南　遺構個別図４　SK・P・SX・SD
図版11　沢地区北　遺構配置図（Ⅷb層・古代）
図版12　沢地区北　遺構個別図５　SK1003・1004・1006、土器集中1001、P、焼土1002
図版13　沢地区北　遺構個別図６　SD1077
図版14　沢地区北　遺構個別図７　SD1078・1079
図版15　沢地区北　遺構配置図・出土状況図（X層・古墳時代）
図版16　中世以降の陶磁器
図版17　古代土器１　土器集中1001・Ⅷb層・SD1077
図版18　古代土器２　SD1077・Ⅷc層
図版19　古代土器３　SD1079・1078
図版20　古代土器４　土器集中1081・1082・1083・調査区一括
図版21　弥生時代～古墳時代の土器１　SI13
図版22　弥生時代～古墳時代の土器２　SI13
図版23　弥生時代～古墳時代の土器３　土器集中46～49・52
図版24　弥生時代～古墳時代の土器４　土器集中52・56・57
図版25　弥生時代～古墳時代の土器５　土器集中58・1085・1087・SD1078・X層
図版26　弥生時代～古墳時代の土器６　X層
図版27　石製品
図版28　木製品１
図版29　木製品２
図版30　土製品・金属製品・縄文時代の遺物

［写真図版］
図版31　遺跡近景、沢地区南　SI13（古墳時代後期）出土土器
図版32　沢地区北　瑞花八稜鏡、木簡、墨書土器、腰帯石銙
図版33　尾根地区　完掘、基本層序、SK11
図版34　尾根地区　SK12、P6～10
図版35　沢地区南　Ⅷb層（中世）完掘、基本層序
図版36　沢地区南　SK23、P15、SA14・17・22・34
図版37　沢地区南　X層（古墳時代）完掘、SI13
図版38　沢地区南　土器集中44～50・52
図版39　沢地区南　土器集中52・56・57
図版40　沢地区南　土器集中57・58、SK51、P39・40
図版41　沢地区北　Ⅷ層（古代）・Ⅷb層（中世）完掘、基本層序、SK1003
図版42　沢地区北　SK1003・1004・1006、土器集中1001、P1009、焼土1002、SD1077
図版43　沢地区北　SD1077～1079
図版44　沢地区北　SD1078～1079、X層（古墳時代）完掘、土器集中1087、管玉出土状況
図版45　中世以降の陶磁器、古代の土器1
図版46　古代の土器2
図版47　古代の土器3
図版48　古代の土器4、弥生時代～古墳時代の土器1
図版49　弥生時代～古墳時代の土器2
図版50　弥生時代～古墳時代の土器3
図版51　弥生時代～古墳時代の土器4
図版52　弥生時代～古墳時代の土器5
図版53　弥生時代～古墳時代の土器6、石製品1
図版54　石製品2、木製品1
図版55　木製品2、土製品・金属製品・縄文土器・石器

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

A　北陸新幹線

北陸新幹線は地域住民の生活領域の拡大、並びに地域振興を目的に建設される新幹線鉄道である。東京を起点とし長野・上越・富山・金沢・福井等の主要都市を経由し、新大阪に至る延長約700kmの路線である。このうち高崎～長野間は平成９年10月から営業運転している。また、長野～上越間は平成10年３月に、上越～富山間は平成13年４月に、富山～金沢間は平成17年４月に着工し、長野～金沢間について平成26年までの完成を目指し建設が進められている。

上越市から富山市までの約110kmの区間は、平成５年９月に糸魚川市～魚津市間が新幹線鉄道規格路線としての工事実施計画が認可され、平成13年４月には上越～糸魚川間の新規着工およびフル規格化が決定した。これを受けて、（独）鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線第二建設局（以下、「鉄道・運輸機構」）との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査に関する協議が本格化した。

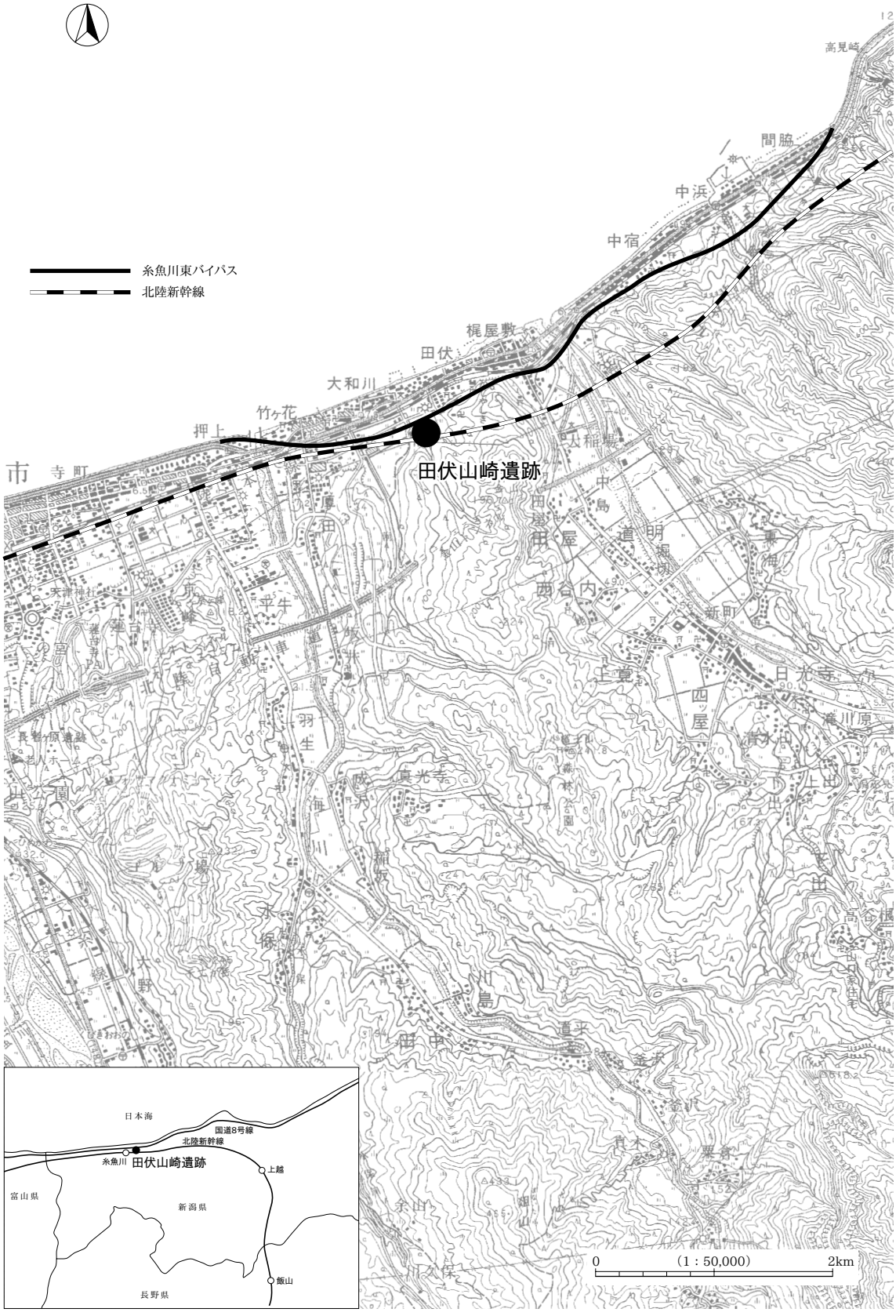
平成13年５月に鉄道・運輸機構から分布調査の依頼を受けた新潟県教育委員会（以下、「県教委」）は、同年10月に分布調査を実施した。調査によって、周知の姫御前遺跡とほかの数地点で数点の遺物を採取し、法線内数か所に遺跡が存在する可能性があると鉄道・運輸機構に報告した。鉄道・運輸機構の依頼により、県教委は北陸新幹線用地内の試掘確認調査を（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」）に委託し実施した。試掘調査は平成18年５月８日から５月17日までのうち８日間行った。調査によって、尾根地区は遺構・遺物を検出した24Tを中心に480m^2、沢地区は遺物が出土した7Tを中心に770m^{2}の本発掘調査が必要であると県教委に報告した。

B　一般国道８号糸魚川東バイパス

一般国道８号は北陸地方の主要都市を結ぶ主要幹線道路として機能するとともに、糸魚川地域における生活道路として重要な役割を担っている。しかしながら、糸魚川市間脇～押上間（6.9km）は道路幅員が狭く、国道沿いに家屋が連なっていることから、特に朝夕の通勤時に交通渋滞が発生している。また、交通量も多く自動車騒音等による生活環境悪化が問題となっている。糸魚川東バイパスは、このような状況を改善することを目的に整備が進められている。平成元年に事業化、平成４年に用地買収に着手し、平成10年から工事を着工している。これを受けて、建設省（現国土交通省、以下「国交省」）と県教委との間で、事業用地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

梶屋敷～押上間の分布調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が平成11年10月に実施した。調査によって、道路法線上に周知の遺跡は存在しないが、５か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘調査が必要である旨を県教委に報告した。

これを受けて、県教委は糸魚川東バイパス用地の試掘調査を埋文事業団に委託し、実施した。１回目は平成18年７月６日～８月23日までの間で23日間行った。２回目は平成18年12月４日～６日までの３



第１図　糸魚川東バイパス・北陸新幹線の路線と遺跡の位置

〔国土地理院「糸魚川」「小滝」１：50,000 原図〕

日間行った。調査によって、9か所のトレンチのうち1か所（18T）から遺構・遺物を検出し、3か所（14・16・81T）から遺物が出土した。埋文事業団は遺構・遺物が検出された18Tを中心に500m²について本発掘調査が必要であると県教委に報告した。

糸魚川東バイパス、北陸新幹線の試掘調査の結果から、両事業用地内で遺跡と判断された範囲は同一沢内で近接していることから、田伏山崎遺跡として新規登録した。本発掘調査は2か年にわたって行った。北陸新幹線分の尾根地区と沢地区南の一部は平成18年度に実施し、沢地区南の残りの部分と糸魚川東バイパス分の沢地区北については、平成19年度に実施した。

2　調査の経過

A　試掘調査

（1）調査体制

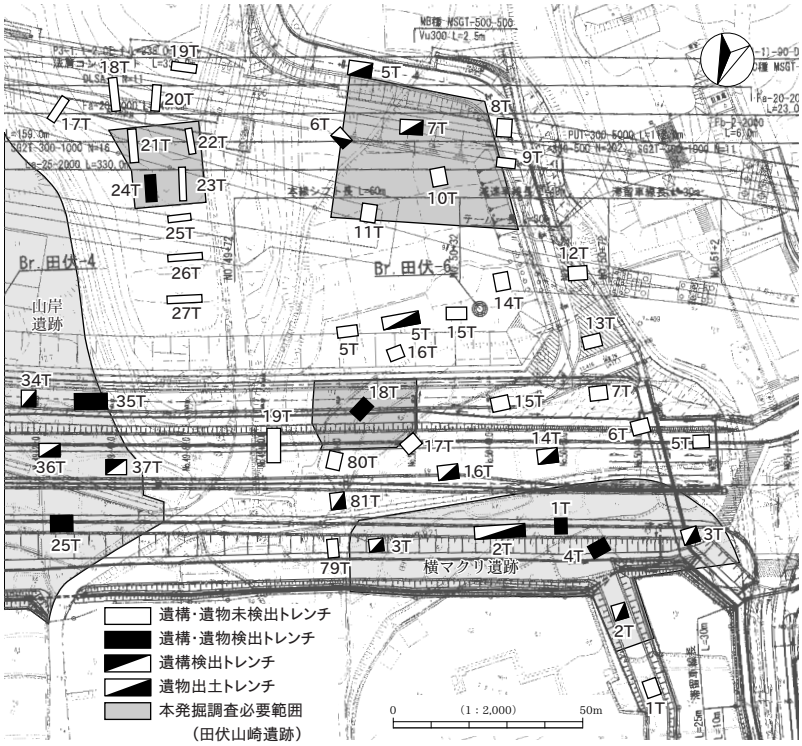
調査期間	平成18年5月8日～平成18年5月17日（北陸新幹線）
	平成18年7月6日～平成18年8月23日（糸魚川東バイパス）
	平成18年12月4日～平成18年12月6日（糸魚川東バイパス）
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	波多　俊二（財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団　事務局長）
管理	斎藤　栄（同　総務課長）
庶務	長谷川　靖（同　班長）
調査総括	藤巻　正信（同　調査課長）
調査担当	田海　義正（同　課長代理）
調査職員	田中　一穂（同　嘱託員）

（2）調査結果

対象範囲に任意にトレンチ（以下、T）を設定し、重機（バックホー）で薄く掘削しながら人力で精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。

北陸新幹線　調査対象範囲は、面積12,770m²で実質調査面積は308.2m²、確認率は2.4％である。このうち、田伏山崎遺跡尾根地区は遺構・遺物を検出した24Tを中心に480m²、同遺跡沢地区は遺物が出土した7Tを中心に770m²の本調査が必要と報告した。

糸魚川東バイパス　1回



第2図　試掘調査トレンチ位置図

目の調査対象範囲は面積15,000m^{2}で、実質調査面積は649.7m^2、確認率は4.3％である。この時点で後に田伏山崎遺跡となる範囲にはトレンチを入れているが、本調査の要否は判断保留となっている。2回目の調査対象範囲は面積4,310m^{2}で実質調査面積は87.6m^2、確認率は2.0％である。田伏山崎遺跡については1回目の試掘調査の結果も総合すると、9か所のトレンチのうち1か所（18T）から遺構・遺物が出土し、3か所（14・16・81T）から遺物が出土した。本調査範囲は遺構・遺物を検出した18Tを中心に500m^{2}となった。

B　本発掘調査

（1）調査体制

平成18年度

調査期間	平成18年9月1日～平成18年12月6日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	波多　俊二（財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団　事務局長）
管理	斎藤　栄（同　総務課長）
庶務	長谷川　靖（同　班長）
調査総括	藤巻　正信（同　調査課長）
調査指導	寺﨑　裕助（同　課長代理）
調査担当	渡邊　裕之（同　班長）
調査職員	入江　清次（同　主任調査員）
支援	株式会社　みくに考古学研究所
	現場代理人　関　健二　　調査員　桑原　健

平成19年度

調査期間	平成19年4月2日～平成19年8月31日
整理期間	平成19年5月21日～平成20年3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村　正昭（財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団　事務局長）
管理	斎藤　栄（同　総務課長）
庶務	長谷川　靖（同　班長）
調査総括	藤巻　正信（同　調査課長）
調査指導	寺﨑　裕助（同　課長代理）
調査担当	佐藤　友子（同　班長）
調査職員	杉田　和宏（同　主任調査員）
支援	株式会社　帆苅組
	現場代理人　今井　良男
	調査員　村上　章久　谷岡　康孝（8月31日まで）　安西　雅希（12月17日から）
	補助員　真壁　鈴子　釣巻奈美子　佐藤　直美　大瀧　明美
	前田　澄子　田中加代子

(2) 調 査 経 過

平成18年度

初年度は北陸新幹線分の尾根地区と、沢地区南の一部について調査を行った。

尾根地区　土坑２基、ピット５基を検出した。土坑から縄文時代中期中葉の土器１点、遺物包含層から石錘が１点出土したのみであった。遺構の時期を決める遺物は出土しなかった。調査面積は457m^{2}である。

沢地区南　遺跡の広がりや遺物の出土状況等を確認するため、３か所（A・B・C）にトレンチを入れた。その結果、B・Cトレンチでは遺構・遺物が認められなかったことから、遺跡は広がらないと判断し、面的調査は行わなかった。Aトレンチでは、試掘調査の結果と同様に中世と古墳時代後期の遺構・遺物を検出し、中世ではピット５基を検出した。古墳時代後期の竪穴建物（SI13）のカマドの芯材とみられる礫を検出し、周囲から多量の土師器が出土した。当初の想定を超えて遺物が多量に出土したため、年度内調査が困難であると判断した。このため、土師器の出土状況について写真・図面等の記録をとり、床面相当部の土師器は取り上げ、カマド内部の土師器は養生し、次年度調査に備えた。調査は408m^{2}を12月６日まで行い、周囲の750m^{2}については次年度調査とした。

平成19年度

２年目は北陸新幹線分の沢地区南と、糸魚川東バイパス分の沢地区北について調査を行った。

沢地区南　４月当初は18年度調査区に溜まった水の排水を行い、排土の運搬から行った。表土除去を４月16日から19日まで行い、同時に遺物が希薄といわれた中世遺物包含層（Ⅷa）上面も重機で薄く掘削していった。20日から24日まで暗渠・開渠掘削工事を行い、５月11日から作業員で遺物包含層の掘削を開始し、中世の珠洲焼や天目茶椀・青磁椀がわずかと、大量の木製品が出土した。遺構確認を行ったが、時期不明の杭列・中世のピット１基・柱根２基を検出したのみであった。６月６日には中世面の完掘写真を撮影し、間層のⅨ層は重機で掘削した。

６月14日から古墳時代の包含層（Ｘａ～Ｘｃ）を人力で掘削した。北側の遺物が希薄と考えられたところについては、包含層を重機で掘削した。Ｘａ層からは遺物の出土は少なく、Ｘｂ・Ｘｃ層で遺物が出土し始めた。６月27日から遺構確認を行った。７月16日に中越沖地震が発生し、柏崎市で震度６弱を計測し、中越地区に甚大な被害をもたらした。しかし、幸いにも調査区には影響はまったく無かった。７月19日に紡錘車が出土する。この頃から土器集中区が増え始める。SI13の礫を外したが、SI13の床面の下に当たる層から全面にわたって土器が出土した。SI13周辺からは玉類が出土する可能性があったので、一部土の水洗を行ったが玉類は出土しなかった。

７月28日に現地説明会を開催した。南区・北区の調査の様子を映像で説明し、出土した遺物の解説を行った。参加者は地域の住民を中心に117名の参加があった。

地山の礫層の直上からも古墳時代の土器が出土したが、古墳時代後期ではなく前期の土器の可能性があった。土器は１個体分程度のまとまりで散発的に出土したが、土器集中区以外に遺構は認められなかった。７月30日にはヒスイの原石が出土し、８月９日には古墳時代の完掘写真を撮影した。

沢地区北　４月25日から５月８日まで表土除去および暗渠・開渠掘削工事を行った。５月11日から土層観察用のサブトレンチを掘削した。５月16日には、トレンチ掘削土から木簡（28）と「田」の墨書土

器（35）が出土した。さらに５月19日には腰帯石銙（9）が出土した。引き続き上層のⅧｂ層の遺物包含層掘削を行ったところ、古代の土師器と製塩土器が多量に出土し、中世の珠洲焼も少量出土した。7月7日に自然流路の縁から八稜鏡（11）が出土した。7月25日に古代の遺構検出面の完掘写真を撮影した。7月26日から古墳時代の遺物包含層掘削に着手し、管玉が１点出土したことから、周辺の掘削土の一部を水洗した。水洗した中から１点管玉が出土した。そのほかに古墳時代前期の土器が出土したが、遺構はわずかであった。8月7日に古墳時代の面の完掘写真を撮影し、調査を終了した。8月10日に国交省に引き渡した。

北区については古代の自然流路（SD1077）が北に延伸することと、木簡、八稜鏡、石銙など特殊な遺物が出土したことから、北側に拡張して調査することを要望し、国交省の了解を得た。8月9・10日に拡張区の表土除去を行った。20日から包含層掘削を行ったが、自然流路を３条検出し、SD1077から墨書のある小瓶（16）や製塩土器、木製品が多量に出土した。8月25日に完掘写真を撮影し調査を終了した。8月31日にはプレハブ等を撤去し、全ての作業を終了した。

整理作業は19年度調査と並行し5月21日から18年度出土遺物の註記・接合を行い、19年度出土遺物も順次、水洗・註記・接合を行い、選別後実測作業などを行った。調査終了後、引き続いて調査班は阿賀野市の阿賀野バイパス関係の庚塚遺跡・狐塚遺跡の発掘調査を行ったが、田伏山崎遺跡の整理作業も継続して行った。

工程＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
本発掘調査	準備工												
	暗渠（開渠）掘削												
	表土掘削												
	包含層掘削												
	遺構検出												
	遺構掘削												
	全体測量												
	撤収作業												
整理作業	図面整理												
	遺物水洗・注記												
	遺物接合・復元												
	遺物実測												
	遺物写真撮影												
	図版作成												
	原稿執筆												
	編集・校正												

第１表　発掘調査工程（平成19年度）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

田伏山崎遺跡が所在する糸魚川市は、新潟県の最西端に位置する。市域の北は日本海に面し、南は長野県、西は富山県と接する。糸魚川は、古くから国史跡・松本街道の起点として知られている。「塩の道」と呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までのおよそ30里（120km）におよぶ峻険な山越えの道であり、海を持たない内陸部へ塩や魚介類を送る生命線として重要な役割を担ってきた。現在も姫川沿いに長野県へ通じる国道148号線・JR大糸線と、海岸線沿いの北陸自動車道・国道8号線・JR北陸本線の交点に当たる交通の要所となっている。

糸魚川市には、ほぼ南北に流れる姫川と一致するように、フォッサマグナの西縁に当たる「糸魚川－静岡構造線」が分布する。この構造線を境界にして、地質学的に西南日本と東北日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀～二畳紀に至る青海－蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩から成り立っている。青海－蓮華変成岩帯は、その断層面に蛇紋岩・輝緑岩・変斑糲岩などが介在する複雑な構造を有しており、ひすい輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。中でも、ひすい輝石岩は小滝川や青海川で産出することが知られており、「小滝川の硬玉産地」「青海川の硬玉産地」が国の天然記念物に指定されている。一方、この構造線以東の地層は、主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩から成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なることがわかる。このことが、地形・動植物の分布に相違を生み、さらに言語・風俗文化にも影響を与えることとなったといわれている。

市域の南側には、飛騨山脈の北延主稜と西頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山（2,769m）をはじめとして2,000m級の山々が連なる。その主稜は日本海に進むにしたがって高度を急速に減じ日本海に没している。この急崖が「親不知・子不知」であり、東西文化の障壁となった。石灰岩からなる黒姫山（1,221m）・明星山（1,188m）では山岳カルストが発達しており、日本最深の白蓮洞（513m）など多数の洞穴が存在する。市域には、ここから産出する石灰岩を原料とした化学工業地帯が形成されている。

西頸城山地は、新第三紀以降の堆積層が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨飾山（1,963m）や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、さらにその背後には本県唯一の活火山である焼山（2,400m）が位置する。標高400m以下の小起伏山地域では、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水量が増大する融雪期、梅雨期、初冬などには、崩落・地すべりが発生する［鈴木2000］。地すべり等防止法制定のきっかけとなった柵口地すべり（1947年発生）など、著名な地すべり地が多い地域でもある。

これらの山地を源流にして、青海川・田海川・姫川・海川・早川などが北流し日本海に注ぐ。中でもこの地方最長の一級河川である姫川は、長野県青木湖北部の湿地を源流とし、全長60kmに及ぶ。これらの河川沿いには河岸段丘がみられるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで6段に細分されている［鈴木1982］。高位の段丘には縄文時代～弥生時代、

低位の段丘には縄文時代～古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下がるにしたがって高位から低位へとその分布する主体面を移動させている［寺﨑1988］。

これらの河川はいずれも急流で、かつ海底が深いため、沖積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心に狭い海岸平野が存在する。このほかの平坦地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東－南西に平滑に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口左岸の須沢では最大幅300m、最大高11.5mを測る［鈴木1982］。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平坦地に細長く立地している。

本遺跡は、丘陵上と平坦地に位置し、砂丘列と丘陵に挟まれた三角州に立地する［鈴木ほか1982］。この三角州は、海川・早川によって形成された地形であり、扇状地のような形成過程をたどったものと考えられる。遺跡周辺の平坦地においては、海岸砂丘と接する範囲に北国街道が築かれており、その周辺に近世集落が築かれている。本遺跡周辺は、この集落よりも１～10mほど標高が高く、近世以降は水田として利用されてきた範囲に相当する。

2　歴史的環境

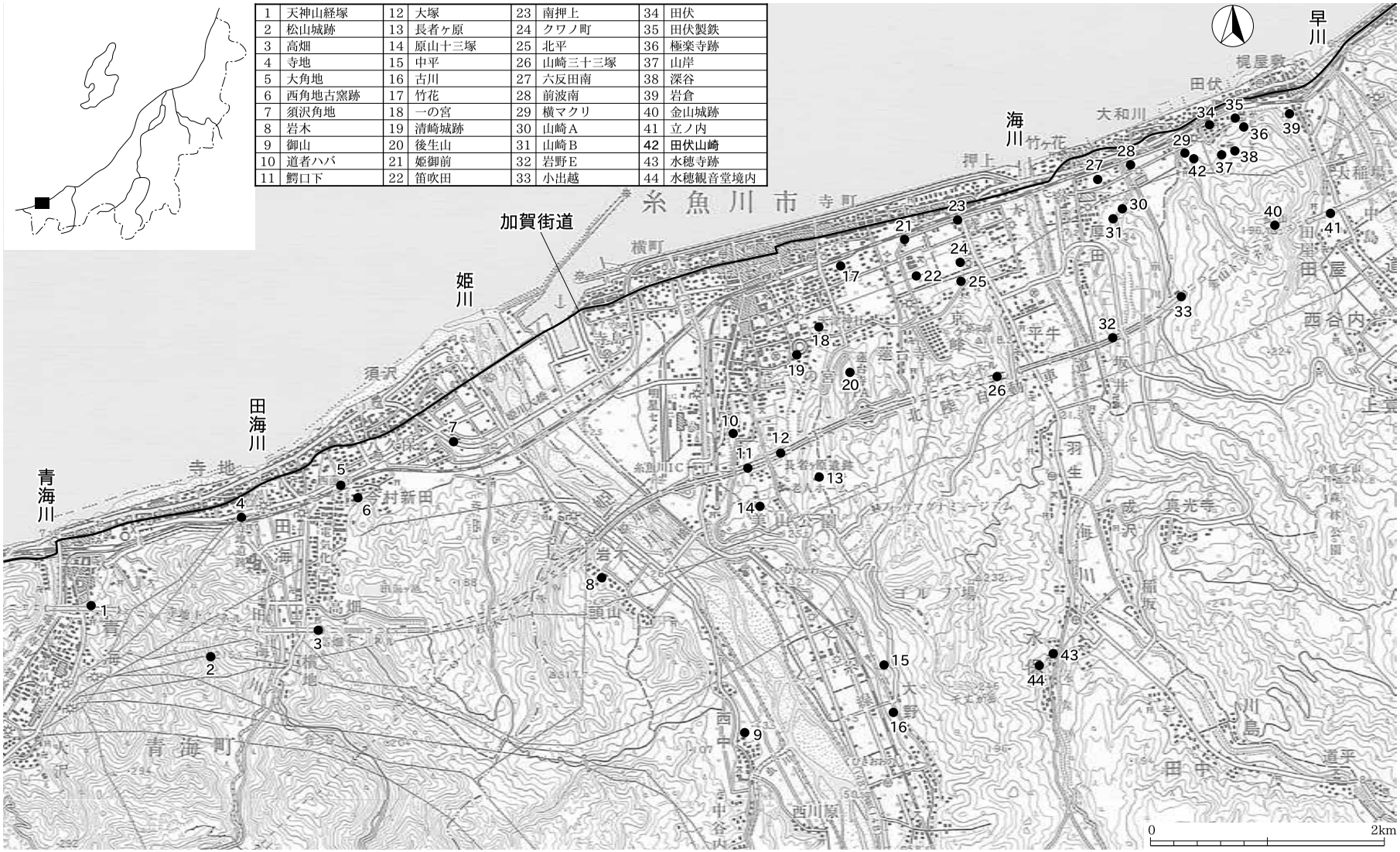
糸魚川市域における古墳時代・古代・中世の主な遺跡分布は、第３図のとおりである。姫川右岸の糸魚川地区では、標高100m以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高50m前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。また、近年、北陸新幹線建設に伴う発掘調査等によって、狭い平野部においても遺跡分布が濃密であることが明らかになっている。居住に適した平坦地が限られるため、土地利用が特定の範囲に集中した結果と考えられる。ここでは、本遺跡に関連する古墳時代～中世の遺跡について概観する。

古 墳 時 代

古墳時代の遺跡は、玉作に関連する遺跡が特徴的に発見されている。

笛吹田遺跡（22）は、前期を中心とする滑石製玉類を製作した玉作遺跡で、臼玉・勾玉・管玉・砥石等が出土し、玉作用の特殊ピットや方形周溝墓とみられる遺構が検出されている［安藤ほか1978］。また、近年、都市計画道路建設に伴う発掘調査が断続的に行われ、竪穴住居や枠、木製釣瓶を伴う井戸の検出、琴柱状石製品の出土などの成果が注目されている。なお、笛吹田遺跡は、昭和37（1962）年時点では姫御前遺跡として登録されており、昭和50（1975）年に別個の遺跡とされるまでは、姫御前遺跡と同一の遺跡として捉えられていた経過がある［土田1978］。両遺跡の間に遺跡の空白が存在することが確認されているようであるが、年代的に重複することから無関係とは考えられない。また、昭和13（1938）年に記録された相馬御風氏の身辺雑記には「六月五日私はKIを伴うて糸魚川町内の田圃中から沢山の弥生式土器や祝部土器の破片の出たという場所に見に出かけた。（中略）たまたまそこへ田の水を見廻りに来た老人によって、そのあたりの字名が神楽田、笛吹田、姫御前などであることを知り得た。」［相馬1938］とされている。笛吹田・姫御前周辺に古墳時代の遺跡が存在することが、昭和13年にすでに知られていたことがわかる。

大角地遺跡（5）は、昭和10（1935）年の朝日新聞に「石器時代の玉作り遺跡か。倉若七郎氏が青海町で発見した考古学上の宝庫」と紹介されている。その後、青木重孝氏によって蓄積された資料が契機となり、学会で注目され、勾玉の製作過程「オガクチ技法」［寺村1966］の標識遺跡として知られるように



1	天神山経塚	12	大塚	23	南押上	34	田伏
2	松山城跡	13	長者ヶ原	24	クワノ町	35	田伏製鉄
3	高畑	14	原山十三塚	25	北平	36	極楽寺跡
4	寺地	15	中平	26	山崎三十三塚	37	山岸
5	大角地	16	古川	27	六反田南	38	深谷
6	西角地古窯跡	17	竹花	28	前波南	39	岩倉
7	須沢角地	18	一の宮	29	横マクリ	40	金山城跡
8	岩木	19	清崎城跡	30	山崎A	41	立ノ内
9	御山	20	後生山	31	山崎B	42	田伏山崎
10	道者ハバ	21	姫御前	32	岩野E	43	水穂寺跡
11	鰐口下	22	笛吹田	33	小出越	44	水穂観音堂境内

第３図　田伏山崎遺跡周辺の主な遺跡（加賀街道の位置は［土田1991］による。）

［国土地理院発行「糸魚川」「小滝」1:50,000原図　平成８年発行］

なった。昭和45・48（1970・73）年の、都市計画道路建設に伴う発掘調査では、工作用特殊ピットをもつ玉作工房跡が検出され［寺村・安藤ほか1979］、前期～中期の滑石製玉類の製作関連資料が多数出土している。また、平成17年には北陸新幹線建設に伴う発掘調査が行われ、勾玉・臼玉の製作関連資料が出土している［加藤ほか2006］。

田伏遺跡（34）は、中期～後期の遺跡である。昭和45（1970）年に行われた発掘調査では、滑石製の臼玉・管玉・勾玉・子持勾玉や紡錘車の製作関連資料が多数出土しており、玉作遺跡であることが明らかにされている［関1972］。また、祭祀系土器の出土や滑石製模造品の大量出土から、玉作に伴う祭祀が行われた可能性が指摘されている［糸魚川市史編さん委員会1986］。

一の宮遺跡（18）は、天津神社境内に所在する。大正8（1919）年に高橋健自氏によって発掘調査されており、後期の土器とともに有孔円版・勾玉・臼玉等の祭祀遺物が多数出土している［糸魚川市史編さん委員会1986］。祭祀遺跡とみられる一の宮遺跡［椙山1972］から出土した玉類は、笛吹田・田伏・大角地など、近隣の製作遺跡との関連性が指摘されている［関1972］。なお、天津神社境内の奴奈川神社は、『延喜式』に掲載される「奴奈川神社」に比定されるものと考えられており、奴奈川姫が祀られている。

このように糸魚川地域では、滑石製の玉作が盛んに行われた遺跡の存在が特筆される。また、北陸新幹線建設に伴い発掘調査された姫御前遺跡（21）、横マクリ遺跡（前期）（29）、六反田南遺跡（前期）（27）においても玉作の存在が確認されている。小規模な集落においても、数は多くないものの未製品を含む玉類がほぼ例外なく出土しており、玉作が行われていたと考えられる。ヒスイ・滑石等の石材原産地を控える当地域においては、縄文時代以来、伝統的に玉作りが盛んに行われた。

古　　代

古代には、新潟県一帯は越国の一部であった。『日本書紀』持統6（692）年9月の条に「越前国司」の記述があることから、越国は越前・越中・越後に分割されていたとみられている。この頃の越後国は阿賀野川以北を指しており、頸城郡は越中国に属したものと考えられている。『続日本紀』大宝2（702）年の3月の条に越中国の4郡を越後国に分割したことが記されているが、この4郡は、頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡を指すものと考えられ、さらに和銅元（708）年に越後国に設置された出羽郡が、和銅5（712）年に出羽国として分立された。これにより、佐渡を除く現在の新潟県の領域が定まったと考えられている。なお、『和名類聚抄』（以下、『和名抄』とする）には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

頸城郡は越後国の南西端に位置し、天平勝宝4年（752）10月造東大寺司牒（正倉院文書）に頸城郡の郡名がはじめて見えるが、『和名抄』（東急本）には「久比支」の訓を付している。頸城郡の郷は10郷が記されており、田伏山崎遺跡は頸城郡沼川郷に含まれる。天平勝宝年中（749～756）の東大寺正倉院御物の庸布墨書には「久疋郡」と記されている。『和名抄』では高山寺本とも「奴乃加波」の訓を付しており、吉田東伍の『大日本地名辞書』（1907年）では沼川郷を現在の市振から早川谷までの地と推定し、室町時代の「沼河保」とほぼ同じ地域と考えている。

『延喜式』には越後の駅・伝馬として、「滄海8疋、鶉石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各5疋、伊神2疋、渡戸船2艘、伝馬頸城・古志郡各8疋」と記されている。滄海駅は青海に比定できる。北陸道越後国駅馬の越後国最初の駅として「滄海馬8疋」とあり、他駅が5疋に対して越中国佐味駅と並んで8疋と多い。海岸沿いは急崖をなす親不知・子不知の難所であり、古代では上路を通る山道が使われて

いたと推定される。また、海路も重要な交通路として利用されていたと考えられる。

青海地区（旧青海町域）における古代の遺跡は、集落跡と窯跡がある。姫川河口近くに位置する須沢角地遺跡（7）は、昭和62（1987）年・平成17（2005）年に発掘調査が実施され、7世紀末～9世紀前半の集落跡であることが明らかにされている［土田ほか1988、辻2006］。また、須沢角地遺跡の西南西1kmの丘陵裾には西角地古窯跡（6）が所在する。窯体の一部・窯壁・焼土とともに多量の須恵器が出土しており［寺村・安藤ほか1979］、8世紀末～9世紀初頭前後の窯跡と考えられている［春日1998］。

糸魚川地区（旧糸魚川市域）の道者ハバ遺跡（10）では、掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の須恵器・土師器のほか、灰釉陶器・緑釉陶器が多く出土しており、当地方の中心的役割を担った遺跡と推定されている［糸魚川市史編さん委員会1986］。このほかに8世紀末～9世紀に土師器生産が行われた小出越遺跡（33）［鈴木ほか1988］、多数の製塩土器が出土した立ノ内遺跡（41）［高橋1988］、数百点に及ぶ土師器の廃棄土坑が注目される山崎Ａ・Ｂ遺跡（30・31）［木島2007］などの調査事例がある。

中　　世

青海地区では、山城跡や経塚の存在が知られている。勝山城跡は、標高328mの勝山山頂に築かれている。天正年間（1573～1582）頃、越中への前進基地として築城されたといわれており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であったと考えられている［平野・渡辺1968］。寺地の南方、松山の尾根上に南北500mにわたって築城された松山城跡（2）は、標高170mの地点に本丸跡があり、空堀や帯郭・裾郭で幾重にも固められている。石垣に所在する天神山経塚（1）は、1919（大正8）年に調査され、仁安2（1167）年の銘のある珠洲焼の経筒が発掘されている［金子1975］。

糸魚川地区では、御山遺跡（9）・中平遺跡（15）・古川遺跡（16）・水保観音堂境内（44）・北平遺跡（25）・クワノ町遺跡（24）・竹花遺跡（17）・山崎Ａ・Ｂ遺跡（30・31）等が知られており、観音菩薩立像（重要文化財）を安置する水保観音堂境内からは中世陶磁器類が出土していることから、水穂寺跡との関係が考えられている［山岸・田村2004］。また、段丘～丘陵上には、中世後期～近世初期の原山十三塚（14）［木島1989］や山崎三十三塚（26）［木島1989］が分布する。

当地域の中世遺跡については調査事例が少なく、その実態は必ずしも明らかでなかったものの、近年の北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって、平野部に多数の遺跡が存在することが明らかになりつつある。特に、多量の木製品が出土する実態が、山岸遺跡（37）［渡邊2007］、寺地遺跡（4）［相羽2002］、本遺跡の調査事例によって明らかになっている。木製品が特定の範囲から多量に出土する上、箸状・棒状の製品が地面に突き刺された状態で出土している。この特異な出土状況の解釈については多角的な検討を要するが、特徴的な祭祀行為が行われていたことを窺い知ることができる。今後の調査の進展によって、糸魚川地域における中世社会の一端が明らかにされていくものと期待される。[1)]

1）地理的環境・歴史的環境は『姫御前遺跡』［加藤2008］を一部加筆修正して転載した。

第Ⅲ章　遺　　跡

1　グリッドの設定（第４図）

田伏山崎遺跡の周辺では、４遺跡の発掘調査が同時並行で進められた。一般国道８号糸魚川東バイパス関係では横マクリ遺跡・山岸遺跡・本遺跡、北陸新幹線関係では山岸遺跡・深谷遺跡および本遺跡である。これらの遺跡は樹枝状に入り組む谷底と尾根上に立地し、今後この地区の試掘確認調査が進むに従い、さらに多くの遺跡が発見されると想定されたことから、遺跡間の位置関係を正確に把握するため、全遺跡をカバーするようなグリッドを設定した。そこで田伏地区で最も早く調査を開始した山岸遺跡の基準線を活用した。北陸新幹線のセンター杭の210K000杭（第４図、世界測地系Ｘ：116576.868、Ｙ：－52790.894）と210K140杭（世界測地系Ｘ：116555.410、Ｙ：－52929.240）を結んだラインを主軸として、それに直交するように南北方向のグリッド線を設定した。主軸は真北から７°30′西偏している。

グリッドは大小２種類あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割したものである。大グリッドは東から１・２・３・４、南からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄと呼称し、両者の組み合わせで表示した。小グリッドは１～25の算用数字で示し、南東隅が1、北東隅が25となる。なお、グリッド設定の基準点である210K000杭は9D1グリッド、210K140杭は23D1グリッドとなる。田伏山崎遺跡は25～35・Ｂ～Ｎグリッド列の範囲に入る。調査区は３地区に分かれるが、尾根地区の26F1グリッドは世界測地系Ｘ：116570.491、世界測地系Ｙ：－52961.948、沢地区南の34C1グリッドはＸ：116528.547、Ｙ：－53036.364、沢地区北の33L1グリッドはＸ：116619.015、Ｙ：－53040.341となる。

2　基 本 層 序（第５・６図）

既述のように、調査区は尾根地区、沢地区南、北の３か所である。尾根地区は、日本海へ向って舌状に張り出した細尾根上に所在する。尾根の幅は約6m、標高は約24mである。現況は、舌状に張り出した部分は畑である。このほかには杉の植林がみられる。この尾根の西側は沢地形となり、現況は水田である。沢地区南は標高10～11mの地点に所在し、調査区西側には西谷川が北西方向に流れている。沢地区北はさらに海岸へ向かって、尾根の先端部に最も近づく標高８～9mの地点にある（図版1）。

以下、地区ごとに基本層序を説明する。

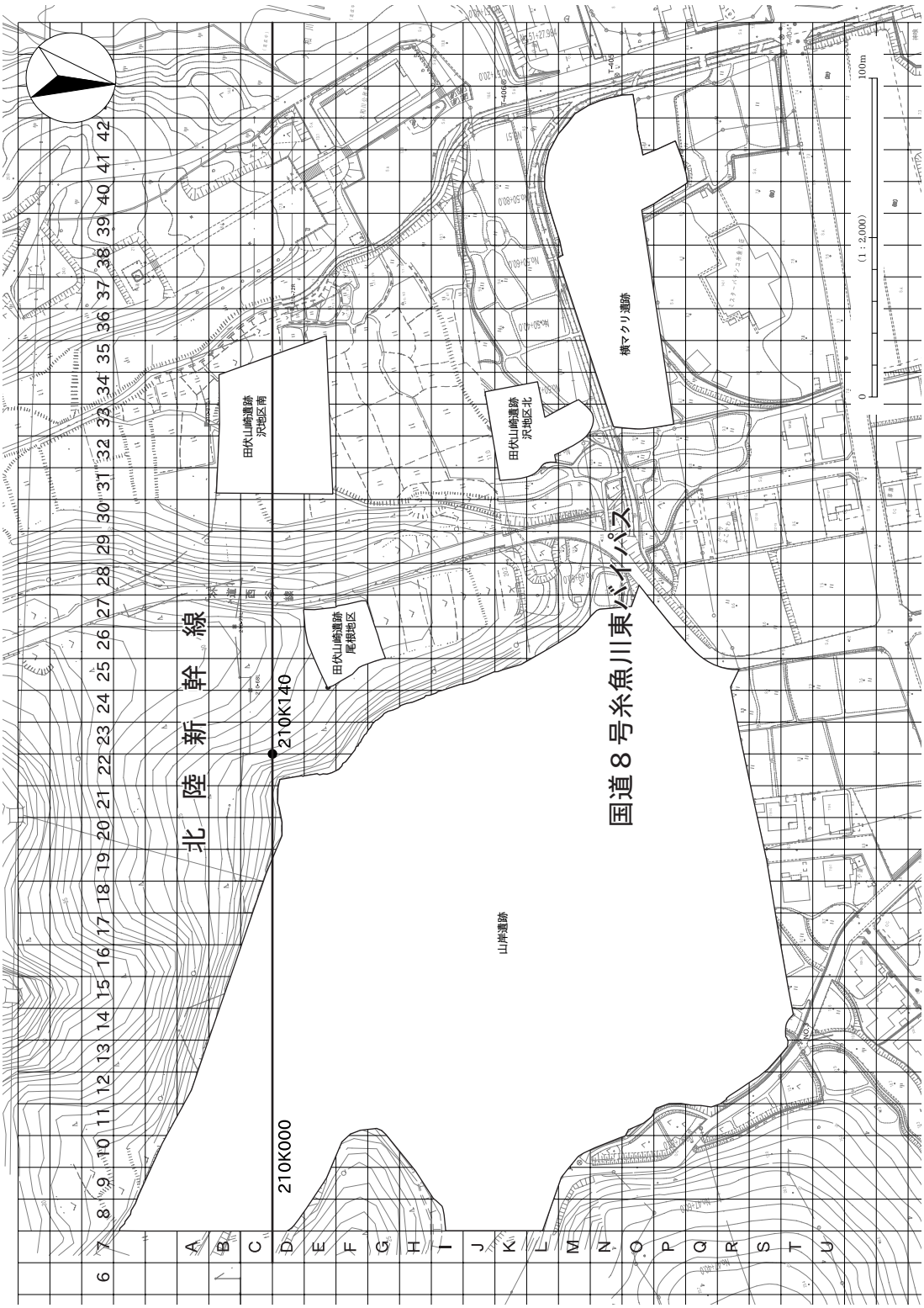
A　尾 根 地 区

尾根地区は、畑の造成により遺物包含層が削平されている。遺構確認面はⅢ層で、土坑・ピットを確認した。

Ⅰ　層：表土

Ⅱ　層：黄褐色粘質土（10YR5/6）　ブロック状にⅢ層を含む。粘性あり、しまりややあり。

Ⅲ　層：明黄褐色粘質土（10YR6/8）　径１～5cm大の礫をまばらに含む。粘性ややあり、しまりややあり。遺構確認面である。


北陸新幹線
210K000
210K140
国道８号糸魚川東バイパス
田伏山崎遺跡
沢地区南
田伏山崎遺跡
尾根地区
田伏山崎遺跡
沢地区北
横マクリ遺跡
山岸遺跡
100m
0
(1：2,000)

第４図　グリッド設定図

Ⅲ’層：浅黄色粘質土（2.5YR7/4）　明黄褐色粘質土（2.5YR6/8）を帯状に含む。粘性あり、しまりあり。

B 沢 地 区

沢地区は南・北の調査区で若干の堆積の違いを示すものの、おおむね対比できるため層番号を統一した。基本土層はⅠ～XI層に識別された。Ⅱ層上面・Ⅴ・Ⅸ層では砂礫層が堆積し、出水や土石流が繰り返されたことが確認される。Ⅶ層からは近世の遺物が出土しており、これより上位の層は近世以降の堆積層と考えられる。Ⅷ層は沢地区南ではⅧａ・Ⅷｂ層、北ではⅧａ～ｅ層に分けることができた。Ⅷａ層は中世の遺物包含層で、沢地区南では下位からの出土が顕著である。沢地区北では遺物がほとんど出土しなかった。Ⅷｂ層は沢地区南では中世、北では古代～中世の遺物を包含する。Ⅷｃ～ｅ層は沢地区北に堆積し、古代の遺物包含層である。遺物は主にⅧｃ層から出土し、Ⅷｄ・Ⅷｅ 層からの出土は少ない。Ⅸ層は沢地区南の中世と古墳を分ける層である。砂・礫混じりのシルト層で、土石流の可能性もある。Ⅹ層は弥生時代後期～古墳時代後期の遺物を包含する。沢地区南ではⅩａ・Ⅹｂ・Ⅹｃ層の３層に識別されたが、Ⅹｂ・Ⅹｃ層は部分的に堆積する傾向が認められた。Ⅹａ・Ⅹｂ層は古墳時代後期、Ⅹｂ・Ⅹｃ層は弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が主に出土した。沢地区北ではⅩ層上位の暗緑灰シルトから古墳時代前期の遺物が出土した。なお、沢地区北では南のように分層できなかったため、Ⅹ層上位の遺物包含層をⅩ層、これ以外をⅩ’層とした。

Ⅰ　層：表土

Ⅱ　層：オリーブ灰色粘質土（2.5GY3/1）　粘性・しまりあり。

Ⅲ　層：黄褐色シルト（10YR5/6）　明黄褐色砂（10YR7/6）をブロック状に含む。粘性ややあり、しまりあり。

Ⅳａ層：暗オリーブ灰色粘質土（5GY4/1）　粘性ややあり、しまりあり。

Ⅳｂ層：暗黄灰粘質土（2.5Y4/2）　径5mmほどの炭化物をまばらに少量含む。粘性・しまりややあり。

Ⅴ　層：明黄褐色砂礫（2.5Y6/6）　暗オリーブ灰色粘質土（5GY4/1）をブロック状に含む。

Ⅵａ層：オリーブ灰色粘質土（2.5GY6/1）　明黄褐色砂（10YR7/6）をブロック状に含む。粘性あり、しまりややあり。

Ⅵｂ層：オリーブ灰色粘質土（5GY5/1）　径5mmほどの炭化物をまばらに少量含む。粘性・しまりあり。

Ⅶ　層：青灰色シルト（5BG6/1）　径3mmほどの炭化物をまばらに少量含む。粘性なし、しまりあり。

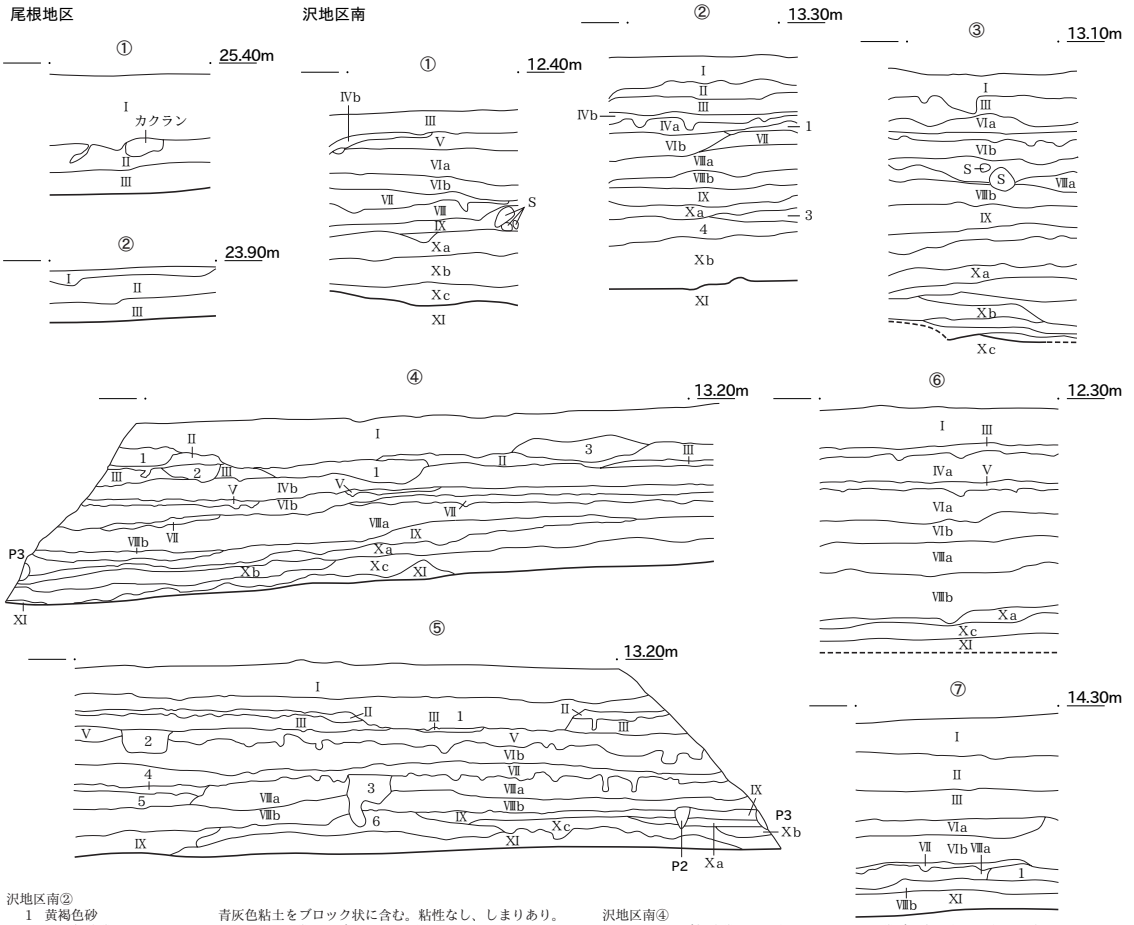
Ⅷａ層：黒褐色粘質土（2.5Y2/2）　径５～10mmほどの炭化物をまばらに少量含む。粘性・しまりあり。沢地区南では中世の遺物包含層である。

Ⅷｂ層：青黒色粘質土（5GY1.7/1）　径５～10cm大の礫を多量に含む。粘性ややあり、しまりあり。沢地区南では中世の遺物包含層・遺構確認面である。沢地区北では古代・中世の遺物包含層であり、Ⅷ層下位では、古代・中世の遺構が確認された。

Ⅷｃ層：黒色シルト（2.5Y2/1）　沢地区北に堆積する。炭化粒を多量含む。径10～50mm大の礫を微量含む。粘性あり、しまりなし。古代の遺物包含層である。

Ⅷｄ層：オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）　沢地区北に堆積する。炭化粒と径10cm台の礫を微量含む。粘性あり、しまりなし。古代の遺物包含層・遺構確認面である。

Ⅷｅ層：灰色砂（10Y4/1）　沢地区北に堆積する。黒褐色シルト（2.5Y3/2）を少量含む。炭化粒を微量含む。粘性・しまりなし。古代の遺物包含層である。



沢地区南②

1	黄褐色砂	青灰色粘土をブロック状に含む。粘性なし、しまりあり。
3	灰黄色砂礫	径10cm大の礫をまばらに含む。粘性なし、しまりなし。
4	灰オリーブ色粘質シルト	炭化物をまばらに含む。径2cm大の小礫をまばらに含む。植物遺体を多量に含む。Xa層に比べて粘性が高く、黒味が強い。粘性ややあり、しまりあり。

沢地区南③

1	黄褐色砂	粘性なし、しまりあり。
2	黄褐色砂	水流による砂の動きあり。粘性なし、しまりあり。
3	灰黄色砂礫	径10cm大の礫をまばらに含む。粘性なし、しまりなし。
4	灰オリーブ色粘質シルト	炭化物をまばらに含む。径2cm大の小礫をまばらに含む。植物遺体を多量に含む。Xa層に比べて粘性が高く、黒味が強い。粘性ややあり、しまりあり。
5	緑灰色粘質土	植物遺体を少量含む。硬化しやすく、6に比べ黒味が強い。粘性ややあり、しまりあり。
6	緑灰色砂	植物遺体を多量に含む。粘性なし、しまりなし。
7	緑灰色砂礫	6に比べ黒味が強い。径1cm大の礫を多量に含む。粘性なし、しまりなし。
8	暗オリーブ灰色粘質シルト	炭化物を少量含む。Xb層に比べ暗い色調である。粘性あり、しまりなし。
9	緑灰色砂	植物や木片を多量に含む。均一な砂層でXb層に類似する。粘性なし、しまりなし。

沢地区南④

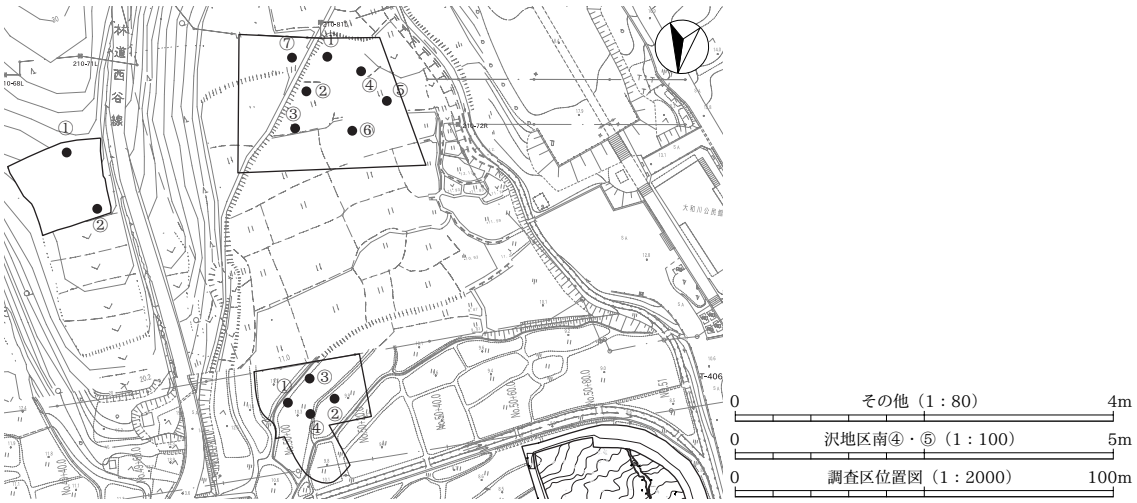
1	オリーブ色砂礫	径1～10cm大の礫が、本層全面に密に堆積する。粘性なし、しまりなし。
2	灰オリーブ色砂礫	粘性なし、しまりなし。
3	褐色砂礫	径1～10cm大の礫が、本層全面に密に堆積する。粘性なし、しまりなし。

沢地区南⑤

1	褐色砂礫	径1～10cm大の礫が、本層全面に密に堆積する。粘性なし、しまりなし。
2	オリーブ灰色砂	径5cm大の礫を本層下部に含む。粘性なし、しまりなし。
3	灰色粘質土	白色砂粒をまばらに少量含む。粘性あり、しまりややあり。
4	緑灰色砂	黄褐色砂粒ブロックをまばらに含む。
5	オリーブ黒色粘質土	火山灰ブロック（?）をまばらに少量含む。粘性あり、しまりややあり。
6	緑灰色砂礫土	粘性なし、しまりなし。

沢地区南⑦

1	オリーブ黒色粘質土	粘性あり、しまりややあり。



第５図　土層断面図（尾根地区・沢地区南）

Ⅸ　層：青灰色シルト（10BG5/1）　径10cm大の礫をまばらに含む。粘性なし、しまりあり。土石流か。

Ⅹａ層：緑灰色シルト（10G5/1）～灰オリーブ色シルト（7.5Y5/1）　炭化物と径5mm大の小礫をまばらに含む。鉄分の沈着が多くみられる。粘性ややあり、しまりあり。古墳時代後期の遺物包含層である。Ⅹａ層上位では中世、下位では古墳時代の遺構が確認された。。

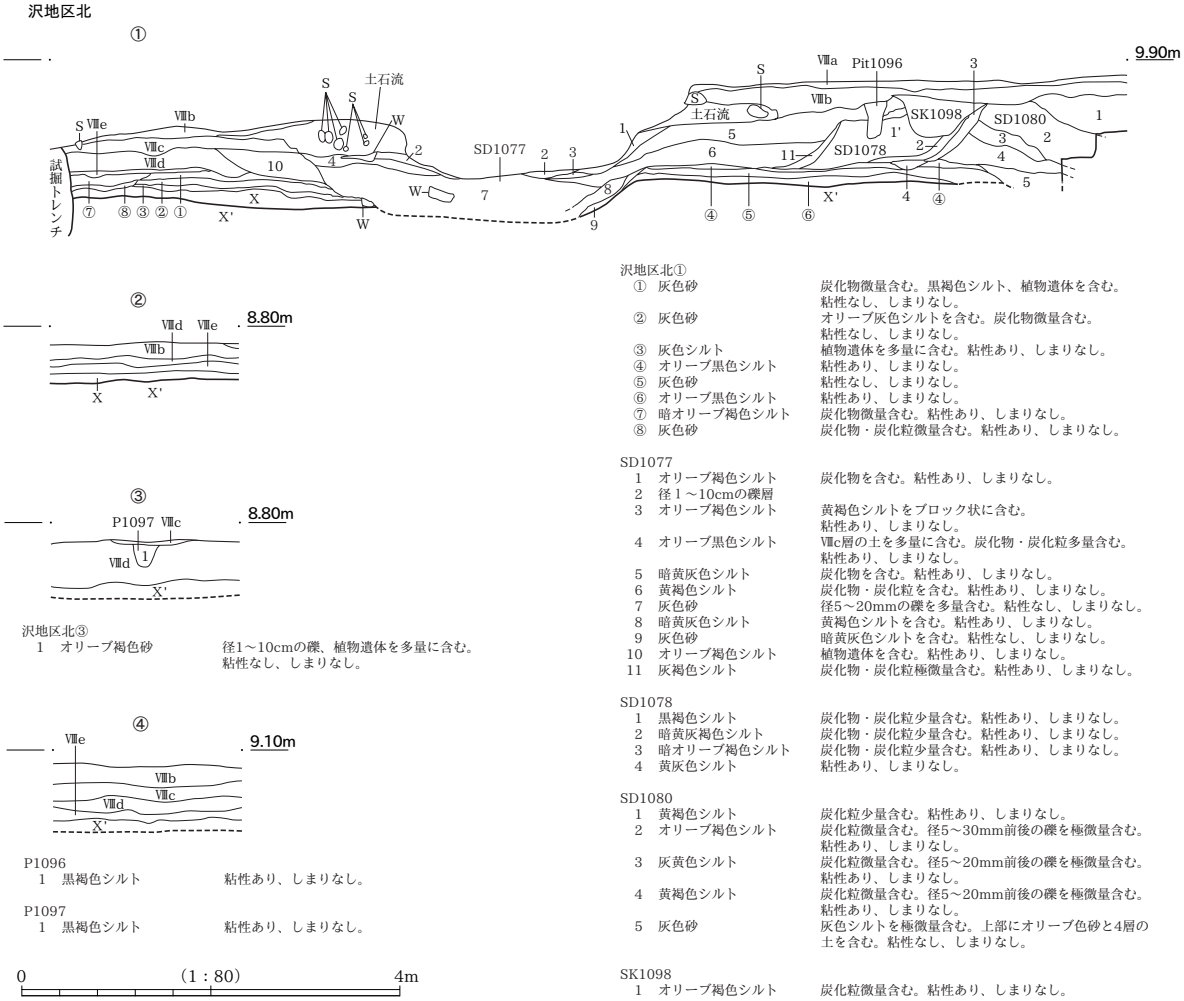
Ⅹｂ層：緑灰砂（10G5/1）～オリーブ灰色細砂（2.5GY5/1）　炭化物を含む。上位はシルト質で粘性が強く、下位は砂質となる。しまりややあり。弥生時代後期～古墳時代前期・後期の遺物包含層、古墳時代の遺構確認面である。

Ⅹｃ層：オリーブ灰色粘質土（5GY5/1）～オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）　粘性あり、しまりややあり。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層・遺構確認面である。

Ⅹ　層：暗緑灰色シルト（10GY4/1）　沢地区北に堆積する。古墳時代前期の遺物包含層、古代の遺構確認面である。炭化物・炭化粒を微量含む。粘性あり、しまりなし。

Ⅹ’層：灰色シルト（10Y5/1）　沢地区北に堆積する。粘性あり、しまりなし。古墳時代の遺構確認面である。

Ⅺ　層：灰オリーブ色砂礫（7.5Y4/2）粘性なし、しまりなし。



沢地区北③
1　オリーブ褐色砂　径1～10cmの礫、植物遺体を多量に含む。粘性なし、しまりなし。

P1096
1　黒褐色シルト　粘性あり、しまりなし。

P1097
1　黒褐色シルト　粘性あり、しまりなし。

沢地区北①
① 灰色砂　炭化物微量含む。黒褐色シルト、植物遺体を含む。粘性なし、しまりなし。
② 灰色砂　オリーブ灰色シルトを含む。炭化物微量含む。粘性なし、しまりなし。
③ 灰色シルト　植物遺体を多量に含む。粘性あり、しまりなし。
④ オリーブ黒色シルト　粘性あり、しまりなし。
⑤ 灰色砂　粘性なし、しまりなし。
⑥ オリーブ黒色シルト　粘性あり、しまりなし。
⑦ 暗オリーブ褐色シルト　炭化物微量含む。粘性あり、しまりなし。
⑧ 灰色砂　炭化物・炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。

SD1077
1 オリーブ褐色シルト　炭化物を含む。粘性あり、しまりなし。
2 径1～10cmの礫層
3 オリーブ褐色シルト　黄褐色シルトをブロック状に含む。粘性あり、しまりなし。
4 オリーブ黒色シルト　Ⅷc層の土を多量に含む。炭化物・炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。
5 暗黄灰色シルト　炭化物を含む。粘性あり、しまりなし。
6 黄褐色シルト　炭化物・炭化粒を含む。粘性あり、しまりなし。
7 灰色砂　径5～20mmの礫を多量含む。粘性なし、しまりなし。
8 暗黄灰色シルト　黄褐色シルトを含む。粘性あり、しまりなし。
9 灰色砂　暗黄灰色シルトを含む。粘性なし、しまりなし。
10 オリーブ褐色シルト　植物遺体を含む。粘性あり、しまりなし。
11 灰褐色シルト　炭化物・炭化粒極微量含む。粘性あり、しまりなし。

SD1078
1 黒褐色シルト　炭化物・炭化粒少量含む。粘性あり、しまりなし。
2 暗黄灰褐色シルト　炭化物・炭化粒少量含む。粘性あり、しまりなし。
3 暗オリーブ褐色シルト　炭化物・炭化粒少量含む。粘性あり、しまりなし。
4 黄灰色シルト　粘性あり、しまりなし。

SD1080
1 黄褐色シルト　炭化粒少量含む。粘性あり、しまりなし。
2 オリーブ褐色シルト　炭化粒微量含む。径5～30mm前後の礫を極微量含む。粘性あり、しまりなし。
3 灰黄色シルト　炭化粒微量含む。径5～20mm前後の礫を極微量含む。粘性あり、しまりなし。
4 黄褐色シルト　炭化粒微量含む。径5～20mm前後の礫を極微量含む。粘性あり、しまりなし。
5 灰色砂　灰色シルトを極微量含む。上部にオリーブ色砂と4層の土を含む。粘性なし、しまりなし。

SK1098
1 オリーブ褐色シルト　炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。

第6図　土層断面図（沢地区北）

3　遺　　構

A　尾根地区

(1) 概　　要

前述のとおり、尾根地区は畑の造成により遺物包含層が削平されている。遺構確認面は基本層序Ⅲ層で、検出した遺構は土坑２基、ピット５基の計７基である。

遺構は主に調査区北側の26Fグリッドを中心に分布し、覆土はSK11を除き黄褐色粘質土が堆積する。遺物はSK11で縄文時代の土器、平成18年度の試掘調査で古墳時代の土器片が数点出土しているが、遺構の所属時期を特定するには至らなかった。しかし、これらの遺構は、分布状況、覆土の堆積状況から比較的近い時期に構築されたものと考えられる。遺構の略号は、土坑：SK、ピット：Ｐである。

(2) 遺構各説

SK11（図版２・33）

26F16・17・21・22グリッドに所在する。平面形は不整な楕円形、規模は長径130cm、短径110cm、深さ36cm、長軸方向はＮ－37°－Ｗである。側壁は緩やかな段を持ちながら立ち上がり、断面形は階段状である。遺物は縄文時代中期の土器片（図版30-20）１点が出土した。

SK12（図版２・34）

26F19グリッドに所在する。平面形は円形、規模は長径76cm、短径69cm、深さ11cmである。底面はほぼ平坦で、側壁は急角度で立ち上がる。

ピット（図版２・34）

P6・8・9は26Fグリッド、P7・10は27Fグリッドに所在する。平面形は円形・楕円形、規模は径24～54cm、深さ12～35cmである。

遺構名	グリッド	検出層位	平面形	長径	短径	深さ	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	
P6	26F24	Ⅲ	楕円形	42	38	20	
P7	27F13	Ⅲ	円形	28	26	35	
P8	26F23	Ⅲ	楕円形	54	44	22	
P9	26F20・25	Ⅲ	円形	42	36	31	
P10	27F6	Ⅲ	円形	24	20	12	

第２表　尾根地区　遺構観察表（ピット）

B　沢地区南

(1) Ⅷb層（中世）

a　概　　要

中世の遺物包含層はⅧa・Ⅷb層で、珠洲焼・天目茶椀・青磁・白磁などの陶磁器類、中世土師器、木製品、銭貨が出土している。遺構確認面はⅧb～Ｘ層で、土坑１基、ピット４基、杭列10か所、杭９本を検出した。遺構総数は24である。これらの遺構は検出層位、遺物の出土状況などから中世（12～15世紀）に所属するものと推定される。

遺構は杭列が主体で、調査区の北、北西、南東の３か所に分布する。調査区は南から北へ向かって緩や

かに傾斜し、南北の比高は約2mである。ほとんどの杭列が地形の傾斜に沿って構築されている。これらは全体的に列状をなしているものの、規則性が把握し難い点から、複数の時期にわたって構築された可能性が考えられる。遺構の略号は、土坑：SK、ピット：P、杭列：SAである。

b 遺構各説

SK23（図版3・5・6・36）

33B19グリッドに所在する。平面形は不整な円形、規模は長径75cm、短径73cm、深さ41cmである。確認面はⅩａ層である。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱状である。覆土は2層に識別され、いずれもⅩａ層の緑灰色シルトをブロック状に少量含む。覆土1層からは箸状木製品が出土した。

ピット（図版3・4・6・36）

33・34Dグリッドに所在し、確認面はⅨ層である。平面形は円形・楕円形・不整形など多様である。規模は径20～28cm、深さ22～36cmである。P15・16の覆土1層には炭化物が含まれる。

遺構名	グリッド	検出層位	平面形	長径	短径	深さ	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	
P2	34D4	Ⅸ	楕円形	20	12	29	
P3	34D4	Ⅸ	不整形	22	16	36	
P15	33D10	Ⅸ	円形	28	26	22	
P16	33D24	Ⅸ	円形	24	20	34	

第3表　沢地区南　中世遺構観察表（ピット）

SA14（図版3・4・6・36）

33・34D、33Eグリッドに所在し、確認面はⅧｂ層である。杭列はやや北西方向に膨らみながら、北東－南西方向に71本打設され、杭の先端は深いものでⅩａ層に到達する。長さ14.12m、長軸方向はN－35°－Eである。杭は径2.1～4.7cmの芯持丸木材が主に使われており、このほかにはミカン割り材、柾目材、板目材などが少数ある。杭の先端は1方向から斜めに断ち割り、先端が切り出し状を呈するものと、2～4方向から断ち割り、先端がⅤ字状となるものが認められる。

SA17（図版3・4・6・36）

34・35D、34Eグリッドに所在し、確認面はⅧｂ層である。杭列はNo.11～14、24～26付近で大きく間隔を開けながら、北東－南西方向に29本打設されている。長さ11.42m、長軸方向はN－40°－Eで、杭の先端は深いものでⅩａ層に到達する。杭は径2.3～4.5cmの芯持丸木材が使われており、このほかにはミカン割り材、板目材がある。杭の先端は、切り出し状やⅤ字状を呈するものが認められる。

SA18（図版3・4・6）

35Eグリッドに所在し、確認面はⅧｂ層である。SA17の北側に近接し、長さ116cm、長軸方向はN－16°－Eである。22～46cmの間隔で4本打設されている。

SA19（図版3・4）

34Eグリッドに所在し、確認面はⅧｂ層である。SA17の北東延長上にあることから、この杭列の一部である可能性がある。長さ146cm、長軸方向はN－59°－E、杭の総本数は9本である。杭は確認できるものに関しては板目材が使われており、杭の先端は切り出し状を呈する。

SA20（図版3）

34Cグリッドに所在し、確認面はⅧｂ層である。調査区の西端にあることから全容は不明である。杭

の総本数は２本である。杭は確認できるものに関しては板目材が使われており、杭の先端はＶ字状を呈する。

SA22（図版３・６・36）

33B・Ｃグリッドに所在し、確認面はⅧｂ層である。杭列は、ほぼ直線状に北東－南西方向に10本打設されている。長さ6.78m、長軸方向はＮ－９°－Ｅ、杭の先端は深いものでＸｂ層に到達する。杭は径4.5～5.5cmの芯持丸木材、ミカン割り材が使われている。杭の先端は４方向から断ち割り、Ｖ字状を呈するものが多い。

SA30（図版３）

33Cグリッドに所在し、確認面はＸａ層である。付近に杭26・27が確認されており、これらも杭列を構成するものと考えられる。長さは65cm、長軸方向はＮ－67°－Ｅである。杭は2.5cm程度の芯持ち丸木が使われ、先端は１方向から断ち割り、切り出し状を呈するものが認められる。

SA34（図版３・６・36）

33Bグリッドに所在し、確認面はＸａ層である。長さ144cm、長軸方向はＮ－45°－Ｅである。杭は北東－南西方向にやや蛇行しながら12本打設され、杭の先端は深いものでＸｃ層に到達する。杭は径1.6～3.3cmの芯持ち丸木材が使われており、先端は切り出し状、Ｖ字状を呈するものが認められる。

SA35（図版３）

33B・Ｃグリッドに所在し、確認面はＸａ層である。位置関係からSA34に含まれるものと考えられる。長さ44cm、長軸方向はＮ－26°－Ｅ、杭の総本数は４本である。

SA53（図版３）

33Cグリッドに所在し、確認面はＸｂ層である。長さ86cm、長軸方向はＮ－63°－Ｅ、杭の総本数は５本である。

（2）Ｘ層（弥生時代～古墳時代）

a　概　　要

Ｘ層では竪穴建物１軒、土器集中11か所、土坑２基、溝２条、炭化物集中域１か所、ピット８基、性格不明遺構１基を検出した。遺構総数は26である。遺構は33～35Dグリッドよりも南側に集中し、これより北側は希薄となる。遺構確認面はＸａ～Ｘｃ層で、Ｘｂ・Ｘｃ層で確認されるものが多い。

遺構では土器集中が多く確認されており、弥生時代後期、古墳時代前期・後期の遺物がまとまって出土した。遺物は古墳時代後期が主体である。古墳時代後期の遺物が出土した遺構にはSI13がある。これ以外の遺構は土器の集中域付近に分布し、時期は覆土の堆積状況、周辺の遺物の出土状況から弥生時代後期～古墳時代後期に所属すると考えられる。遺構の略号は、竪穴建物：SI、土坑：SK、ピット：P、溝：SD、性格不明遺構：SXである。

b　遺 構 各 説

SI13（図版７・８・37）

33・34B・Ｃグリッドに所在し、平成18年度から継続して調査した遺構である。平成18年度の調査では、石組と土師器高杯を主体とした古墳時代後期の遺物が多数出土した。遺物は石組の内部および周辺から出土し、石組の周辺から出土した遺物については、出土状況を記録して取り上げた。また、この年は

排水が充分でなく、遺構の掘り込みが確認できなかった。このため、平成19年度の調査では排水対策を行った。しかし、石組の周辺は、雨水等の影響による土砂の崩壊、撹乱などにより、掘り込み等の確認はできなかった。

SI13の確認面はＸａ層で、440cm×313cmの範囲に遺物が集中する。中央付近からは大型の扁平礫が6個まとまって出土した。礫は28～47cmで、Ｖ字状に直立して3個据えられている。この内側にも同様に1個据え、さらにこの上に礫を寝かせた状態で2個並べている。外側の礫は内側、内側の礫は両面に被熱痕が観察される。以上のことから、石組は炉跡またはカマドの芯材の可能性が高いと考えられる。

遺物は標高10.90～11.35mの間で出土し、上下で約45cmのレベル差をもっている。最上面は標高約11.30mにピークがあり、杯・高杯が主体を占める。次のピークは標高約11.20mで、甕が主体を占める。両者の間に接合関係が認められるものもあることから、これらはほぼ同時期のものと考えられる。また、上面で杯・高杯、下面で甕が出土し、器種により出土レベルが異なることから、下面の深さまで掘り込みがあったものと推定される。

遺物は弥生時代後期・古墳時代後期に属するもので、主体は古墳時代後期である。遺物の出土状況、接合関係などから、石組は古墳時代後期に伴うものと考えられる。

土器集中

33Dグリッドに所在する土器集中58以外は、調査区南側の33B・Cグリッドに分布する。分布域は東側と西側に分かれ、東側には土器集中45・46・52・56・57、西側には土器集中44・47～50がある。これらは纏りをもって出土するものの、集中域内や周辺において掘り込みや焼土・炭化物などは認められなかった。したがって、遺構として捉えることができない可能性も考えられるが、ここでは遺物の出土状況および分布状況を考慮して、遺構に準じて報告する。

土器集中44（図版7・38）

34C14グリッドに所在し、南東には土器集中50が近接する。確認面はＸｃ層である。遺物は約64×50cmの範囲に集中して出土した。

土器集中45（図版7・38）

33B20グリッドに所在し、確認面はＸｃ層である。遺物は約89×62cmの範囲に集中して出土した。

土器集中46（図版7・38）

33C6・11グリッドに所在し、北西には土器集中57が近接する。確認面はＸｃ層である。遺物は約79×48cmの範囲に集中し、弥生時代後期の壺（図版23-35）が出土した。

土器集中47（図版7・38）

34C3グリッドに所在し、確認面はＸｃ層である。遺物は約28×17cmの狭い範囲に集中し、弥生時代後期の高杯あるいは器台の脚部と思われる土器（図版23-36）が横に倒したような状態で出土した。

土器集中48（図版7・38）

34C3・4グリッドに所在し、確認面はＸｃ層である。遺物は約60×47cmの範囲に集中し、弥生時代後期の甕（図版23-37）がその場で潰れたような状態で出土した。

土器集中49（図版7・38）

34C4・9グリッドに所在し、確認面はＸｃ層である。遺物は約60×49cmの範囲に集中し、弥生時代後期の甕（図版23-38・39）が出土した。

土器集中50（図版7・38）

34C9グリッドに所在し、土器集中49の北側に隣接する。確認面はＸｃ層である。遺物は約42×34cmの範囲に集中し、土器集中49との接合関係が認められる。

土器集中52（図版7・9・38・39）

33C18～20・23・24グリッドに所在し、確認面はＸｂ層である。土器集中とした中では最も広い324×226cmの範囲で検出された。遺物は標高約10.60～10.90mの間で出土し、約30cmのレベル差をもっている。接合関係は、上面の標高約10.80～10.90m間で接合するものと、下面の標高約10.65m前後で接合するものがある。遺物は古墳時代後期の高杯（図版23-40・41）、壺（図版23-42）、甕（図版23-43～45・図版24－46）が出土した。土器が古墳時代後期のものに限定されることから、近接するSI13との関連が想定されるが、SI13と比べると完形率が低い。

土器集中56（図版7・39）

33C3・4・8・9グリッドに所在し、北側には土器集中52・57が近接する。確認面はＸｃ層である。遺物は約219×127cmの範囲に集中し、弥生時代後期の器台（図版24-47・48）、壺（図版24-49）、甕（図版24-50・51）が出土した。古墳時代前期の甕（図版24-52）が1点のみ出土している。

土器集中57（図版7・39・40）

33C12・13・17・18グリッドに所在し、確認面はＸｃ層である。遺物は約258×239cmの範囲に集中し、弥生時代後期の鉢（図版24-53・54）、壺（図版24-55～57）、甕（図版24-58）が出土した。

土器集中58（図版7・40）

33D9・14グリッドに所在し、確認面はＸｂ層である。遺物は約99×42cmの範囲に集中し、弥生時代後期の甕（図版25-59）が出土した。

SK51（図版7・10・40）

33C21・22グリッドに所在する。平面形は不整形、規模は長径124cm、短径60cm、深さ26cm、長軸方向はＮ－75°－Ｅである。確認面はＸｂ層である。覆土は単層で、黄褐色砂が堆積する。側壁は緩やかな段を持ちながら立ち上がり、断面形はＶ字状である。

SK59（図版7・10）

33C4・9グリッドに所在する。土器集中56と重複し、これより古い。確認面はＸｂ層である。平面形は楕円形、規模は長径92cm、短径65cm、深さ28cm、長軸方向はＮ－53°－Ｗである。底面はやや凹凸があり、側壁は緩やかに立ち上がる。断面形は弧状を呈する。

ピット（図版7・10・40）

主に調査区南側の34Bグリッドと中央部の34Cグリッドに分布域をもつ。平面形は円形・楕円形のものが認められる。規模は径16～40cm、深さ11～26cmである。

遺構名	グリッド	検出層位	平面形	長径	短径	深さ	備考
				（cm）	（cm）	（cm）	
P1	34B11	Ｘｂ	楕円形	34	18	17	
P4	34B11・16	Ｘｃ	円形	40	40	26	
P5	34B16	Ｘｃ	楕円形	24	18	24	
P37	34B16	Ｘｂ	円形	18	16	11	
P39	34B12	Ｘｂ	円形	28	28	24	
P40	34C24	Ｘｂ	円形	20	19	20	
P41	34C24	Ｘｂ	円形	16	14	16	
P61	33B25・34B21	Ｘｂ	円形	24	（21）	22	

第4表　沢地区南　弥生時代～古墳時代遺構観察表（ピット）

SD32（図版７・10）

33B19・20・24グリッドに所在し、北東－南西方向に延びる。確認面はⅩｂ層である。規模は長さ344cm、幅36～78cm、深さ24cmである。覆土は単層で黄灰色シルトが堆積する。底面付近には径3～5cm大の礫が多く含まれる。

SD43（図版７・10）

33B24・33C4グリッドに所在する。SD32の北側に近接し、北西－南東方向に延びる。確認面はⅩｂ層である。規模は長さ360cm、幅60cm、深さ10cmである。覆土は単層で灰色砂が堆積し、径1cmの小礫を多量に含む。

炭化物集中54（図版７）

33C10・15、34C6・11グリッドに所在する。確認面はⅩｂ層である。SI13の北側に近接する。炭化物の集積範囲は166cm×110cmである。

SX55（図版７・10）

33D8・9グリッドに所在する。平面形は不整形、規模は長径146cm、短径65cm、深さ16cm、長軸方向はＮ－48°－Ｅである。確認面はⅩｃ層である。側壁は緩やかに立ち上がり、断面形は弧状である。

C　沢地区北

（1）Ⅷ層（古代～中世）

a　概　　要

Ⅷｂ層からは、中世土師器・珠洲焼・青磁・白磁・天目茶椀などの中世に所属する遺物のほか、土師器・須恵器などの古代に所属する遺物が出土した。検出した遺構は、土坑４基、焼土１基、土器集中１か所、溝跡１条、ピット60基、杭４本、性格不明遺構１基がある。調査区は東から北西方向へ傾斜し、比高1.1mである。遺構は尾根の裾野に近い東側の31・32K・Ｌグリッドに集中する。

調査区東側ではⅧｂ層とⅧｃ層の間に土石流が認められ、Ⅷｃ層からは、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器など古代に所属する遺物が出土した。また、同層では八稜鏡が出土している。このほか、自然流路を３条検出し、土師器・須恵器・灰釉陶器などが出土した。Ⅷｄ～Ⅹ層上面からはピット２基、杭３本を検出したが、遺物はほとんど出土しなかった。Ⅷ層の遺構総数は79である。遺構の略号は、土坑：SK、ピット：P、溝・自然流路：SD、性格不明遺構：SXである。

b　遺構各説

SK1003（図版11・12・41・42）

32L23グリッドに所在し、Ⅷｂ層の下層で確認した。平面形は円形、規模は長径96cm、短径67cm、深さ48cmである。側壁は急角度で立ち上がり、断面形は逆台形状である。覆土は水平に堆積し、５層に識別される。遺物は中世土師器（図版16-1）、不明金属製品（図版30-10）が出土した。時期は出土遺物から中世（12世紀）に所属するものと推定される。

SK1004（図版11・12・42）

32L18グリッドに所在し、Ⅷｂ層の下層で確認した。平面形は楕円形、規模は長径196cm、短径86cm、深さ46cm、長軸方向はＮ－34°－Ｗである。底面は凹凸があり、側壁は急角度で立ち上がる。断面形は逆台形状である。覆土は５層に識別され、１・２層は焼土粒を含む。遺物は中世土師器（図版16-

2)、灰釉陶器が出土した。時期は出土遺物から古代～中世に所属するものと推定される。

SK1006（図版11・12・42）

31L5グリッドに所在し、Ⅷｂ層の下層で確認した。平面形は円形、規模は長径102cm、短径82cm、深さ30cmである。側壁は急角度で立ち上がり、断面形は逆台形状である。覆土は3層に識別され、炭化粒を含む黒褐色シルトが堆積する。遺物は製塩土器、土錘（図版30-2)、砥石（図版27-2）が出土した。時期は遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から古代に所属するものと推定される。

土器集中1001（図版11・12・42）

32L1・6グリッドに所在し、遺物は322cm×92cmの範囲に集中する。Ⅷｂ層の下層で確認した。出土遺物の大半が製塩土器（図版17-2～5）で、このほか土師器（図版17-1)、須恵器が少量出土した。出土遺物は古代に所属する。

焼土1002（図版11・12・42）

31K19・20グリッドに所在し、Ⅷｂ層の下層で確認した。焼土範囲の平面形は楕円形、規模は長径122 cm、短径64cm、厚さ8cm、長軸方向はＮ－11°－Ｗである。遺物は製塩土器、土錘（図版30-1）が出土した。時期は遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から古代に属すると推定される。

ピット（図版11・12・42）

Ⅷｂ層からは61基出土した。これらはP1008・1009・1022・1042など柱材、柱痕を残すものが認められることから、掘立柱建物の柱穴と考えられる。分布は、調査区東側の31・32K・Ｌグリッドの狭い範囲に集中する。平面形は円形・楕円形などで、規模は長径11～56cm、深さ4～58cmである。掘立柱建物として捉えることができなかったが、規模・分布状況から仮小屋的な建物が想定される。

SD1051（図版11）

33K9グリッドに所在する。SX1052の南側に隣接し、南北方向に延びる。確認面はＸ層上面で、長さ174cm、幅25cm、深さ3cmである。覆土は単層で、黒褐色粘質土が堆積する。

SD1077（図版13・42・43）

31・32K、32L、32・33Mグリッドに所在する。33Mグリッド付近でやや蛇行しながら、北西－南東方向に延びる川跡で、幅340～915cm、深さ89～156cmである。土層断面の観察から、流路の移動・川幅の増減を繰り返したことが推定される。土層の堆積は地点によって異なるが、川跡の中央から最深部にかけては砂礫層、川岸側の下層は黄灰色シルト、川岸側の上層はⅧｃ層の土を含むオリーブ黒～黒褐色シルトが堆積する。遺物は中央部上位の砂礫層（覆土1・2層）からの出土が多く、また、この層にはⅧｃ層起源と思われる土が含まれる。このことから、SD1077はⅧｃ層の時期には流路として存在したことが推定され、この後、土石流の堆積により埋没したものと考えられる。

遺物は製塩土器が主体で、このほかには土師器（図版17・18-12～14・25)、須恵器（図版17・18-15～24)、木製品がある。流路が蛇行する32・33Mグリッドでは、土師器無台椀（図版17-14)、須恵器瓶（図版17-16)、棒状木製品（図版29-20)、檜扇（図版29-21）が覆土1層から出土した。覆土の堆積状況から、Ⅷｃ層の時期の川底に近い地点と推定される。また、左岸に位置する32K・Ｌグリッドからは、八稜鏡（図版30-11)、腰帯石銙（図版27-9)、墨書土器（図版18-35）が出土した。

SD1078（図版14・43・44）

31・32K・Ｌグリッドに所在する。SD1077・1079と重複し、これより古い。幅380cm、深さ56～126cmである。遺物は覆土上層～下層から出土した。特に覆土4層、7層、12層では遺物の集中する

地点が認められ、それぞれ土器集中1081・1082・1083として調査した。いずれも、製塩土器が主体で、土器集中1081では土師器椀（図版20-76）、土器集中1082では鍋（図版20-77）・木槌（図版29-22）が伴っている。覆土からは製塩土器（図版19-68～72）、土師器（図版19-62～64）、須恵器（図版19-65・66）、灰釉陶器（図版19-60・61）のほか、斎串（図版29-23）などの木製品が出土した。斎串は土器集中1083の西側に近接して出土し、覆土の堆積状況から川底に近い地点と推定される。

SD1079（図版14・43・44）

32L・Mグリッドに所在する。SD1077・1078と重複し、SD1078より新しく、SD1077より古い。幅268cm、深さ130cmである。底面付近の覆土3・4層には、黒～黒褐色シルトの堆積が認められ、出土遺物のほとんどがこの層から出土している。32Lグリッドの2m×2mの範囲では製塩土器（図版19-59）、樋状木製品、箱状木製品（図版29-25）、曲物などの木製品、トチノキの実がまとまりをもって出土した（図版14）。また、トチノキの実の多くは殻が割られた状態で出土している。このほかの出土遺物には、土師器（図版19-53～56・58）、製塩土器（図版19-59）、須恵器（図版19-57）、火鑽臼（図版29-24）がある。

（2）X層（古墳時代）

a 概　　要

X層で検出した遺構は、土器集中4か所、ピット1基、杭3本があり、遺構総数は8である。遺構は調査区中央部の32・33K・Lグリッドに点在する。遺物は土器集中を除き、ほとんど出土していない。土器集中から出土した遺物は古墳時代前期に所属するもので、ほかの遺構も確認層位などから、おおむねこの時期に所属するものと推定される。

b 遺 構 各 説

土器集中（図版15・42）

32・33K・Lグリッドで出土した。土器集中1087・1088が近接するほかは単独で分布する。遺物の集中する範囲は狭く、規模は60～80cm×27～60cmで出土量も少ない。このうち、土器集中1084付近からは管玉（図版27-11）が出土した。この時点で、33K・Lグリッドの掘削土を全て採取し水洗したが、管玉未成品（図版27-12）が1点出土したほかは、出土遺物はなかった。

ピット（図版15）

1基確認した。P1090は32Lグリッドに所在し、土器集中1087の南側に近接する。平面形は円形、規模は長径18cm、短径14cm、深さ16cmである。ピットからは柱材が確認され、径は9cmを測る。

遺構名	グリッド	出土層位	平面形	長径	短径	深さ	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	
P1007	31L10	Ⅷb下	円形	52	47	23	
P1008	31K20	Ⅷb下	円形	56	50	58	柱痕あり
P1009	31K19	Ⅷb下	円形	44	42	48	
P1010	31K19	Ⅷb下	楕円形	40	30	32	
P1011	31K20	Ⅷb下	円形	25	23	22	
P1012	31K19	Ⅷb下	円形	24	23	24	焼土1002（新）→P1012（古）
P1013	31K20	Ⅷb下	楕円形	31	24	22	
P1014	32L12	Ⅷb下	楕円形	40	32	12	
P1015	31L15	Ⅷb下	円形	39	34	16	
P1016	31K20	Ⅷb下	円形	20	20	8	
P1017	31K19	Ⅷb下	楕円形	20	14	4	
P1018	31K24	Ⅷb下	円形	30	28	26	
P1019	31K24・25	Ⅷb下	円形	23	20	14	焼土1002（新）→P1019→P1022（古）
P1020	31K20	Ⅷb下	楕円形	24	18	8	焼土1002（新）→P1020（古）
P1021	31K20	Ⅷb下	円形	15	14	4	焼土1002（新）→P1021（古）
P1022	31K24	Ⅷb下	楕円形	36	24	51	焼土1002・P1019（新）→P1022（古）、柱根あり
P1023	31K19	Ⅷb下	楕円形	24	18	8	
P1024	31L5	Ⅷb下	円形	24	23	12	
P1025	31K25	Ⅷb下	円形	20	19	13	
P1026	31K25	Ⅷb下	円形	25	23	18	
P1027	31K25	Ⅷb下	楕円形	20	18	8	
P1028	31K20	Ⅷb下	円形	14	14	13	
P1029	31K20	Ⅷb下	円形	18	16	6	P1029（新）→P1063（古）
P1030	31L4	Ⅷb下	円形	30	30	20	
P1031	31L4	Ⅷb下	円形	30	30	24	
P1034	31L5	Ⅷb下	円形	28	28	16	
P1035	31L10	Ⅷb下	円形	26	25	8	
P1036	31L10	Ⅷb下	円形	20	20	16	
P1037	31L10	Ⅷb下	円形	24	20	17	
P1038	31L15	Ⅷb下	円形	28	28	22	
P1039	31L15	Ⅷb下	楕円形	25	20	11	
P1040	32L6・7	Ⅷb下	楕円形	28	24	20	
P1041	32L12	Ⅷb下	円形	20	19	14	
P1042	32L12	Ⅷb下	楕円形	23	19	10	
P1043	32L12	Ⅷb下	楕円形	18	12	12	
P1046	31K20	Ⅷb下	円形	18	16	5	
P1048	31L5	Ⅷb下	円形	11	10	4	
P1050	31K19	Ⅷb下	楕円形	14	10	10	
P1053	33K11	X	楕円形	28	22	20	覆土の堆積状況から古代に所属すると考えられる
P1054	32L21	Ⅷb	円形	37	34	28	
P1055	32L21	Ⅷb	楕円形	16	12	7	
P1056	31K20	Ⅷb	楕円形	20	15	10	
P1057	31K20	Ⅷb	円形	20	19	8	
P1058	31K24	Ⅷb	円形	20	18	18	
P1059	31K15	Ⅷb	楕円形	40	29	26	
P1060	31K15	Ⅷb	円形	20	20	12	
P1063	31K20	Ⅷb	円形	25	26	13	P1029（新）→P1063（古）
P1064	31L5	Ⅷb	不整楕円形	16	12	10	
P1065	32L1	Ⅷb	楕円形	16	14	7	
P1066	32L1	Ⅷb	楕円形	19	14	9	
P1067	32L6	Ⅷb	円形	15	12	8	
P1068	32L1	Ⅷb	楕円形	28	24	16	
P1069	32L1	Ⅷb	円形	28	28	14	土器集中1001（新）→P1069（古）
P1070	32L6	Ⅷb	楕円形	26	22	16	
P1071	32L6	Ⅷb	円形	25	25	12	
P1072	32L・7	Ⅷb	円形	36	36	38	
P1073	32L7	Ⅷb	楕円形	36	30	56	
P1074	31K5・32L1	Ⅷb	不整形	(47)	(34)	10	
P1075	32L10	Ⅷb	楕円形	24	20	29	
P1076	32L12	Ⅷb	円形	20	18	7	
P1092	31K15	Ⅷb	(円形)	(30)	(24)	28	柱根あり
P1096	32K5	Ⅷb下	不明	(28)	(18)	41	柱根あり
P1097	32K20	Ⅷd	不明	(20)	(30)	26	南北ベルト②内

第5表　沢地区北　古代～中世遺構観察表（ピット）

第Ⅳ章　遺　　物

出土遺物には、中世以降の土器、古代の土器、弥生時代～古墳時代の土器、石製品、木製品、土製品、金属製品、縄文時代の土器・石器がある。土器は量的には古代の土器、弥生時代～古墳時代の土器、中世の土器の順に多い。また、中世の木製品が大量に出土している。

1　土　　器

A　中世以降の土器（図版16・45）

本遺跡では青磁、白磁、珠洲焼・珠洲系陶器、越前焼、古瀬戸天目茶椀、中世土師器が出土している。

時期は12世紀～15世紀に属するが、近世初頭とされる瀬戸大窯Ⅲ・Ⅳ期に属する天目茶椀（28）が1点出土している。以下、中世土師器、青磁、白磁、珠洲焼、越前焼、古瀬戸の順で報告する。

中世土師器（1～5）

いずれも口径10.0cm以下の小皿である。ロクロ成形のものと手づくね成形のものがある。器形には底部から口縁部が長く直線的に開くもの（1～3・5）と口縁部が短く底径が口径に比して大きいもの（4）がある。1はSK1003の1層から出土しており、内面底部はロクロナデによる盛り上がりが見られる。12世紀半ば～後半に属する。口径は8.6cm、底径4.0cm、器高2.3cmである。2はSK1004の覆土から出土している。1と同様に底部内面にはロクロナデによる盛り上がりが見られる。器面は摩滅しているが、底部には回転糸切り痕がわずかに認められる。12世紀に属するもので、底径5.1cmである。3～5はいずれもⅧb層から出土しており、12世紀に属するものである。3は34C1グリッド、4は34K11グリッドから、5は33D22グリッドから出土している。3のみ手づくね成形である。4の口縁部は横方向のナデによる面取りがなされている。3は口径8.0cm、底径4.0cm、器高1.8cm、4は口径9.0cm、底径7.6cm、器高1.0cm、5は口径8.8cm、底径6.0cm、器高1.9cm、5は口径8.8cm、底径6.0cm、器高1.9cmである。

青磁（6～9）

6～9は椀である。6は34C14グリッドⅧb層から出土しており、内面には劃花文が施されている。12世紀末に属する。7は34B23グリッドの撹乱層より出土している。全体に釉が厚く重ねられているが、畳付けから高台裏には施釉されていない。底径は4.0cmである。8は表面に三本単位の櫛描が縦位に施されている。口径は13.0cmである。9は33Lグリッドの表土層出土のものであり、口径は20.6cmである。7～9はいずれも15世紀前半に属する。

白磁（10・11）

10は34C1グリッドから出土した12世紀に属する輪花皿であり、口縁部上端が外反し口唇部は直立している。体部外面には縦位のケズリが入る。また白色の釉薬は底部外面では掻き取られている。口径は14.4cmである。11は椀であり、34B19グリッドⅧb層から出土している。15世紀前半に属するものであり、口径は16.4cmである。

珠洲焼（12～24）

12～24は珠洲焼及び珠洲系陶器（22）であり、12～17は甕である。12、13は口縁部が直立しており、12は吉岡編年［吉岡1994］のⅠ期前半、13はⅠ期中頃に属する。13には漆接ぎの痕跡が認められる。12は34C2グリッド、13は32E6グリッドのいずれもⅧb層から出土している。12は口径21.2cm、13は46.0cmである。14は31Cグリッド、15は34C10グリッドⅧb層、16は33Jグリッド表土層、17は33Lグリッド表土層から出土している。14は吉岡編年Ⅲ期末～Ⅳ期に属し、15～17はⅤ期に属する。15は口径37.0cmである。18～21は片口鉢である。18は33D7グリッドⅧb層から出土している。内湾気味に立ち上がる口縁部片であり、Ⅰ期に属する。19は32L19グリッド、21は32K11グリッドのいずれもⅧb層から出土しており、共にⅢ期に属する。19の口縁端部は外傾する面を持ち、口径は16.6cm程と思われる。21は底径10.8cmである。20は32Kグリッド表土層から出土している。口縁端部は水平であり口径は20.8cmである。Ⅳ期に属する。22・23は壺である。22は33C1グリッドから出土している。ほかの珠洲焼と比較すると胎土や焼成が悪く、体部下半に波状の櫛目文が施される。底部は回転糸切り痕が認められる。Ⅰ～Ⅱ期に相当する。底径は9.4cmである。23は北区のⅧb層から出土している。Ⅳ期に属するもので、底部には静止糸切り痕が認められる。底径は8.0cmである。24は32L18グリッドⅧb層から出土している片口鉢の口縁部破片である。断面三角形状の口縁端部には波状の櫛描きが施される。Ⅴ期に属する。

越前焼（25）

25は33Lグリッド表土層出土の越前焼の壺である。口縁部が角張っており、15世紀に属する。

古瀬戸（26～28）

26～28は天目茶椀である。いずれも鉄釉が施されている。26は33D22グリッドⅧb層、27は33D12グリッドⅧb層から出土している。28は33D21グリッドⅧa層出土のものである。26は藤澤編年［藤澤2005］の古瀬戸後Ⅰ期、27は古瀬戸後Ⅱ期に属する。28は1590年前後にあたる大窯Ⅲ期末～Ⅳ期初めに属するものである。26、28は口径12.4cm、27は12.0cmである。

B　古代の土器（図版17～20・45～48）

（1）概　　要

古代の土器には土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器、製塩土器がある。時期は10世紀前葉～11世紀前葉に所属し、春日編年［春日1999］のⅦ・Ⅷ期の段階に位置付けられる。第7図には、自然流路が主体となるⅧc層の時期までと、これ以降のⅧb層の時期に分けた出土分布を示した。Ⅷc層の段階までは主にⅦ期に所属する遺物が出土し、流路内とその左岸に分布域を持つ。左岸では32K・L、33Kグリッドの比較的狭い範囲に集中して遺物が分布する。この後、土石流により自然流路が埋没し、Ⅷb層が堆積する。Ⅷb層からは、主にⅧ期に所属する遺物が出土した。この時期は、調査区西側まで分布域が広がり、東側では遺構の集中する31・32K・Lグリッドで出土量が多くなる。また、調査区の北側では分布が希薄となる。

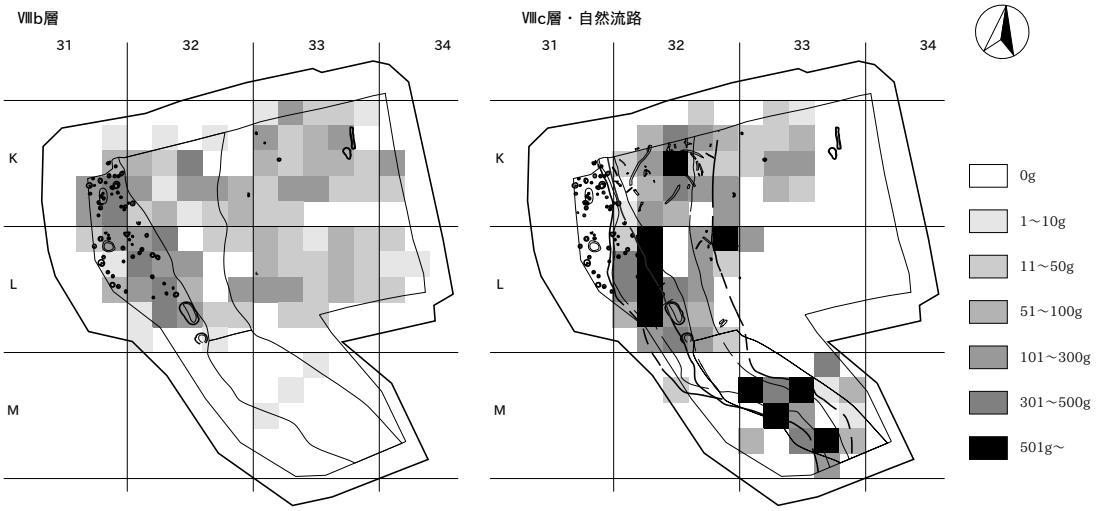
（2）分　　類

a　食　膳　具

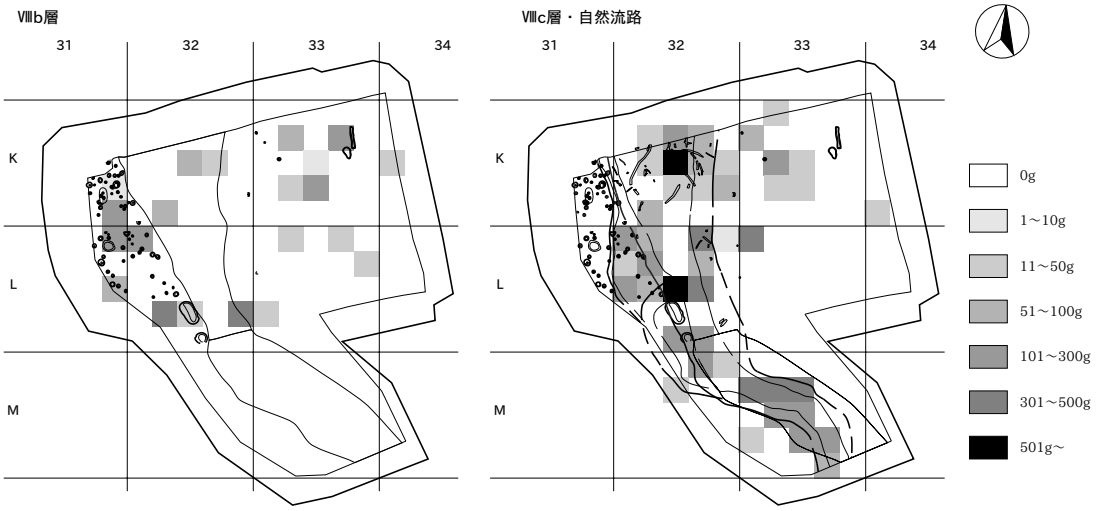
緑釉陶器・灰釉陶器：椀・有台椀が出土している。出土点数は少ない。

須恵器無台杯：全て破片資料で、出土点数は少ない。

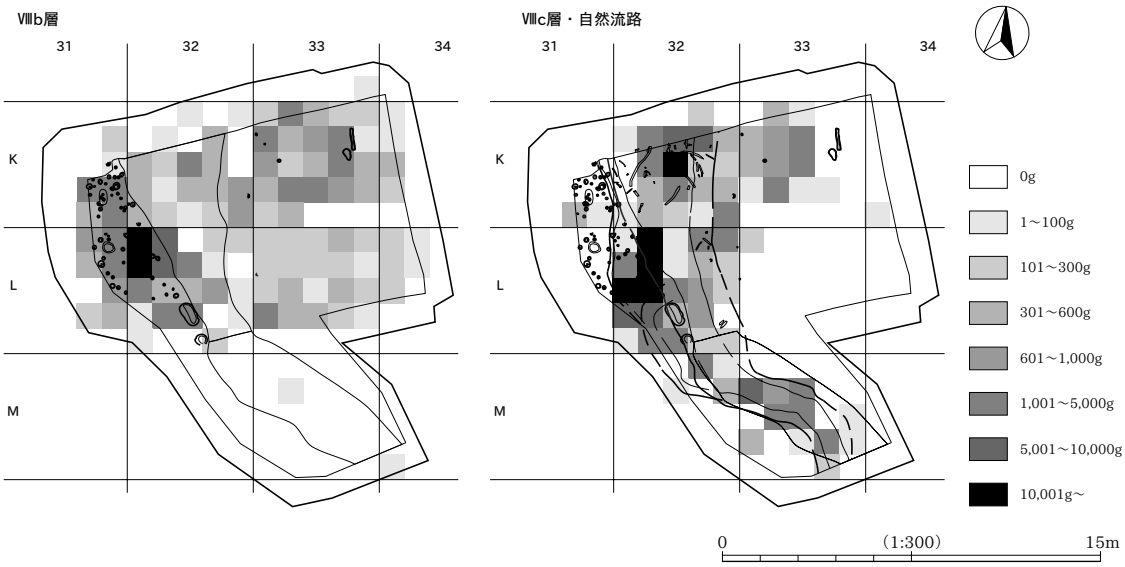
土師器出土状況



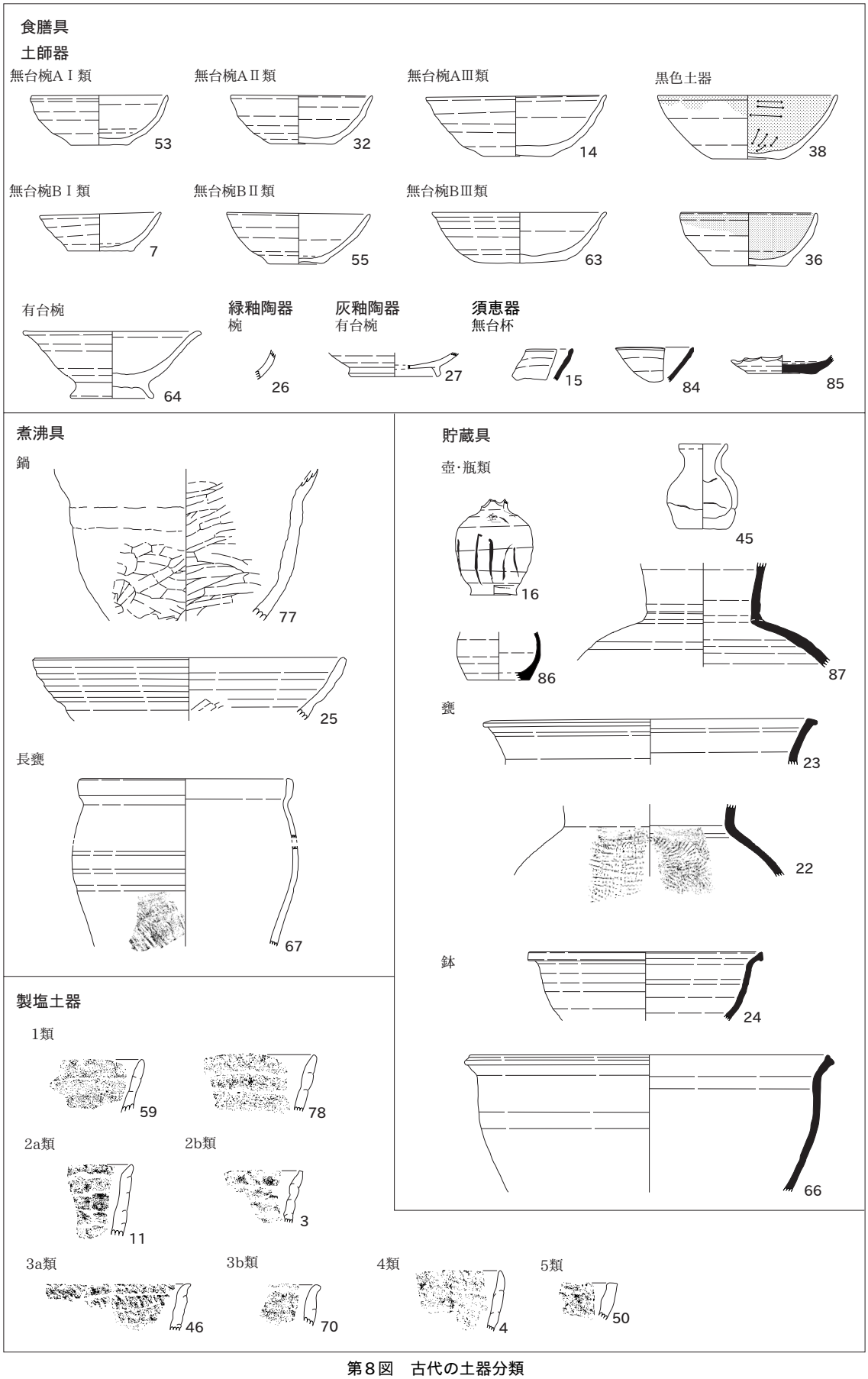
須恵器出土状況



製塩土器出土状況



第7図　沢地区北　土器出土分布


食膳具
土師器
無台椀AⅠ類
53
無台椀AⅡ類
32
無台椀AⅢ類
14
黒色土器
38
無台椀BⅠ類
7
無台椀BⅡ類
55
無台椀BⅢ類
63
36
有台椀
64
緑釉陶器
椀
26
灰釉陶器
有台椀
27
須恵器
無台杯
15
84
85
煮沸具
鍋
77
25
長甕
67
貯蔵具
壺･瓶類
45
16
86
87
甕
23
22
鉢
24
66
製塩土器
1類
59
78
2a類
11
2b類
3
3a類
46
3b類
70
4類
4
5類
50

第８図　古代の土器分類

土師器無台椀：椀のうち高台のつかないもの。器形と法量で分類した。法量は口径の小さいものからⅠ～Ⅲに細分した。

A類：底部から口縁にかけて内湾気味に立ち上がるもの

B類：底部から口縁にかけて直線的に立ち上がるもの

Ⅰ類：口径９～12cm未満

Ⅱ類：口径12～14cm未満

Ⅲ類：口径14cm以上

黒色土器無台椀：内面に黒色処理が施されるものである。内面はミガキ調整されるものと、ナデ調整のままのものがある。出土点数は少ないので細分はしていない。

b 貯 蔵 具

須恵器壺・瓶類：破片資料のため全体形をつかめるものが少ないことから、壺・瓶を一括した。

須恵器甕：破片資料のため全体形をつかめるものが少ないので細分はしていない。

須恵器鉢：法量は２種類確認できるが、破片資料のため全体形を掴めるものが少ないので細分はしていない。

c 煮 沸 具

土師器長甕：全体形をつかめる資料は少ないので細分はしていない。

土師器鍋：体部から口縁まで直線的に開くものと口縁が屈曲するものがある。出土点数は少ないので細分はしていない。

d 製 塩 土 器

古代に所属する遺物の主体を占めるもので、小破片が多量に出土している。口縁部形態により分類した。

１類：口唇断面が丸状ないしは尖り気味となるもの

２類：口唇部内縁を強くナデることにより、稜を形成するもの

ａ類： ナデの浅いもの

ｂ類：ナデの深いものがある

３類：口唇部が外反するもの

ａ類：口唇断面が尖るもの

ｂ類：口唇断面が丸状のもの

４類：口唇端部が内傾するもの

５類：口唇部先端が平坦となるもの

(3) 各　　説

土器集中1001（図版17-1～5）

１はＢⅡ類の土師器無台椀で、内面には漆が付着する。漆は内面の広範囲にわたり緊密に付着することから、漆容器としての可能性がある。２～５は製塩土器で、２は１類、３は2b類、４は４類である。２は内外面にナデ調整が加えられ、外面は縦、内面は横方向の調整痕が認められる。３・４の内面は、横方向

のナデにより調整される。5は口縁部を欠損する。非ロクロ成形の小型品で、本遺跡ではこれ1点のみの出土である。外面には指頭圧痕が観察される。

Ⅷb層出土土器（図版17-6～11）

6～9は土師器無台椀で、6はＡⅠ類、7・9はＢⅠ類、8はＢⅡ類である。6・8は器面の摩耗が著しい。7は二次焼成を受け、器面が赤変している。9は身の深いもので、体部外面にロクロナデ痕の稜を残す。10は須恵器瓶類の口縁部片で、内外面はロクロナデにより調整される。11は2a類の製塩土器で、口唇部内縁に強いナデ調整が施された結果、稜が形成されている。

SD1077（図版17-12～23、図版18-24～25）

12～14は土師器無台椀で、12はＢⅠ類、14はＡⅢ類である。12は口縁端部が上方につまみ上げられる。13は底部片である。内面には漆の付着が認められ、緊密であることから漆容器の可能性もある。14は体部内外面にロクロナデ痕の稜を強く残す。いずれも底部の切り離し技法は、回転糸切りである。15～24は須恵器で、15は杯、16～21は壺・瓶類、22・23は甕、24は鉢である。15・17は口縁部片で、内外面はロクロナデにより調整される。16は墨書土器である。これについては別項で述べる。18は体部片である。外面上半部はロクロナデ、下半部はロクロケズリ、内面はロクロナデにより調整される。19～21は底部片で、いずれも外面下半部はロクロケズリにより調整される。19・21は高台部の底面に、ヘラ状工具による刻みが施される。20の底部内面には緑色の自然釉が広範囲にかかることから、広口の口縁部が付くと推測される。21の高台は外端部が接地する。22は体部片で、外面は格子目叩き、内面は放射状当て具痕が観察される。23は口縁部片、24は口縁～体部片である。いずれも内外面はロクロナデにより調整される。25は土師器鍋である。内外面はロクロナデにより調整され、内面下半部はロクロナデの後、斜め方向のナデが施される。

Ⅷc層出土土器（図版18-26～52）

26は緑釉陶器、27は灰釉陶器である。26は椀の体部片で、軟質である。産地は不明である。27は有台椀の底部片で、高台は内端部が接地する。28～35は土師器無台椀である。28はＡⅠ類で、体部外面にはロクロナデ痕の稜を強く残す。29～32はＡⅡ類で、身の浅いもの（29・31）と深いもの（30・32）がある。30の内面にはタール状の付着物が観察される。33はＢⅡ類で口縁が外反する。33・34は器面の摩耗が著しい。35はＡⅢ類で、口縁部に「田」と墨書されている。36～38は黒色土器である。体部はいずれも内湾ぎみに立ち上がる。38の内面は、上半部は横・斜め、底面付近では放射状にミガキが施される。28～38の底部切り離し技法は、回転糸切りである。39は有台椀の底部片である。40～43は須恵器で、40～42は甕の口縁部片、43は体部片である。40・42の内外面はロクロナデにより調整される。41は器面の摩耗が著しい。43の外面は格子目叩き、内面は平行当て具痕が観察される。44は土師器甕の底部片で、器面が摩耗している。45は土師器の小型壺で、二次焼成を受け外面が赤変している。46～51は製塩土器の口縁部片である。46・48は3a類、47・49～51は5類である。いずれも内面はナデにより調整され、46・47・50は横、48・49・51は横・斜め方向の調整痕が観察される。52は土師器甕の底部片と思われる。形状から、転用された可能性も考えられるが、詳細は不明である。

SD1079（図版19-53～59）

53～56は土師器無台椀で、53はＡⅠ類、54・55はＢⅡ類、56はＡⅢ類である。53は口縁端部が上方につまみ上げられる。54は体部内外面にロクロナデ痕を強く残す。55・56の体部外面は比較的平滑に仕上がっている。いずれも底部の切り離し技法は、回転糸切りである。57は須恵器壺あるいは瓶の

口縁部片で、内外面はロクロナデにより調整される。58は土師器甕の底部片である。外面下端部はケズリ、内面はロクロナデによる調整が施される。底部の切り離し技法は回転糸切りで、外面には木葉状の刻線が観察される。59は製塩土器である。1類の口縁部片で、内面は横方向のナデにより調整される。

SD1078（図版19-60～75）

60・61は灰釉陶器である。いずれも有台椀の底部片で、60の高台は内端部が接地する。62・63はBⅢ類の土師器無台椀である。62は器面の剥落が著しい。63は底径が大きく、身の浅いものである。64は土師器有台椀で、内面は器面の剥落が著しい。65・66は須恵器で、65は瓶、66は鉢である。65は耳の付く瓶の体部片で、耳の部分には緑色の自然釉がかかる。66は口縁～体部片で、器面が摩耗している。67は土師器長甕で、下半部は平行叩きにより成形される。器面は摩耗が著しい。68～75は製塩土器である。いずれも外面に明瞭な粘土紐の接合痕を残す。68～72は口縁部片で、68・72は4類、69は1類、70は3b類、71は2a類である。器面はナデにより調整される。68の内面は横・斜め、69の外面は縦・横、内面は横・斜め、70～72は横方向の調整痕が観察される。73～75は底部片で、74は外面に横・斜め方向のナデにより調整される。

土器集中1081（図版20-76）

76は土器集中1081の4層から出土したBⅡ類の土師器椀である。口縁部の内外面、体部内面にタール状の付着物が観察される。器面は二次焼成を受け、口縁部外面・体部内面が赤変している。灯明皿として利用された可能性がある。

土器集中1082（図版20-77～80）

77～79は土器集中1082の7層から出土した。77は土師器鍋の体部片で、外面はケズリ・ナデ、内面は横・斜め方向のナデにより調整される。78～80は製塩土器で、78は1類の口縁部片、79・80は底部片である。78の内面は横方向、79の外面下半部は横・斜め方向のナデにより調整される。80の外面は幅4mm 程の工具により横方向の調整が加えられる。粘土紐の接合部付近に当たることから、接合部分を押さえるための調整と思われる。内面は二次焼成の影響による器面の剥落が著しい。

土器集中1083（図版20-81・82）

81・82は土器集中1083・12層の出土遺物である。81は須恵器瓶の肩部片で突帯をもつ。外面には緑色の自然釉がかかる。82は製塩土器である。1類の口縁部片で、内面は横・斜め方向のナデにより調整される。

調査区一括（図版20-83～92）

出土地点、層位が不明なものを一括した。

83はAⅡ類の土師器無台椀である。焼成は堅緻で、体部は平滑に調整される。底部の切り離し技法は回転糸切りである。84～90は須恵器である。84・85は杯、86は壺・瓶類、87は壺、88～90は甕である。84は口縁部片、85は底部片である。85は底部外面にヘラ記号が観察される。周縁を意図的に打ち欠いたと思われ、縁辺が鋸歯状となる。86は体部～底部片である。底部の切り離し技法は回転糸切りで、体部下半はロクロケズリにより調整される。87は頸部～体部片である。内外面はロクロナデにより調整され、断面では頸部と体部の接合痕が観察される。88・89は口縁部片で、88の内面には緑色の自然釉がかかる。90は胴部片である。外面は格子目叩き、内面は放射状当て具痕が観察される。91・92は製塩土器の底部片である。91は外面下端部に指頭圧痕が観察され、底部側縁は丸みを持って立ち上がる。92の底部内面には、成形時の指紋が認められる。

C　弥生時代～古墳時代の土器（図版21～26・48～53）

（1）概　　要

弥生時代の土器は後期～終末の時期で、ほとんどが沢地区南からの出土である。ある程度の纏りをもってＸｃ層から出土する傾向が見られ、土器集中として取り上げたことから、遺構に準じて報告する。弥生時代後期の土器はいわゆる「法仏式」といわれるもので、後期～終末の土器は法仏式に後続する「月影式」といわれるものである。法仏式は新潟シンポジウム［滝沢ほか2005］編年（以下、新潟シンポとする）２期、月影式は同３・４期並行と考えられる。

古墳時代の土器は前期と後期の土器がある。古墳時代前期の土器は少量で、沢地区南と北で半々程度である。沢地区北の土器は前期末ころの時期であることから、用水路を挟んで北西に隣接する横マクリ遺跡［渡邊2008］（古墳時代前期末）との関係が深いと考えられる。古墳時代前期の土器は同シンポ７～10期ころと考えられる。古墳時代後期の土器は、沢地区南の竪穴建物SI13と約8m北に離れた土器集中55から主に出土した。層位はＸｂ層からの出土が大半で、Ｘｃ層からも少量出土している。土師器の甑や須恵器は出土していない。時期は相田編年［相田2004］のⅢ期、６世紀後半ころの時期と想定される。

土器分類は古墳時代後期の土器と、弥生時代後期～古墳時代前期の土器とに分けて行っている。

（2）古墳時代後期の土器分類（第９図）

古墳時代後期の土器は器種ごとに大分類し、器形による分類をA、B、C…、口縁部の形態で1、2、3…、法量で大きいものからⅠ、Ⅱ、Ⅲと細分した。器種ごとの分類は以下のようにした。

杯

A類：底部が丸底のものである。体部は全体的に丸みを持って立ち上がる。すべて内面を黒色処理されている。口縁部の形状で細分した。

１：口縁部は体部と一体に丸みを持って立ち上がり、端部は丸められている。

２：口縁部は体部から直線的に立ち上がり、端部は細く尖る。

B類：底部が平底のものである。すべて内面を黒色処理されている。

１：体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部が外反するため体部と口縁部の境には稜ができる。口縁端部は丸められている。

高杯：杯部と脚部それぞれで分類した。１点を除きすべて内面は黒色処理されている。

杯部A類：体部と口縁部に境を持たないもの。A1類のみ法量で二分した。

１：口縁部は体部から丸みを持って立ち上がる。口縁端部は丸められている。

Ⅰ：口径17.0cm以上、高さ12.0cm以上のもの。１個体のみである。

Ⅱ：口径14.0cm以下、高さ14.0cm以下のもの。ほとんどがこの法量内である。

２：口縁部は体部から直線的に立ち上がる。口縁端部は細く尖る。

杯部B類：体部と口縁部に境を持つものである。

１：口縁部は体部から大きく外反するため、体部と口縁部の境に稜ができる。口縁端部は丸められている。

２：口縁部は体部から短く外反するため、体部と口縁部の境の稜はわずかで、口縁端部は丸められている。

脚部A類：脚端部に向かい緩やかに開く。脚の高さは3.6～5.3cmである。

脚部B類：脚端部は水平に開き接地面が広い。脚の高さは5.5cmである。

鉢：形態で二分した。

A類：体部は内湾して立ち上がり、外反する口縁部が付く。

B類：平底の底部から内湾しながら立ち上がる体部が付く。法量で二分した。

Ⅰ：口径17.0cm、高さ16.0cm以上のもの

Ⅱ：口径14.0cm、高さ9.0cm以下のもの

壺：全体の器形が分かるものが少ないため口縁部の形状で細分した。

A類：口縁部が「く」の字になるもの

B類：口縁部は外反し、端部が上方につままれるもの

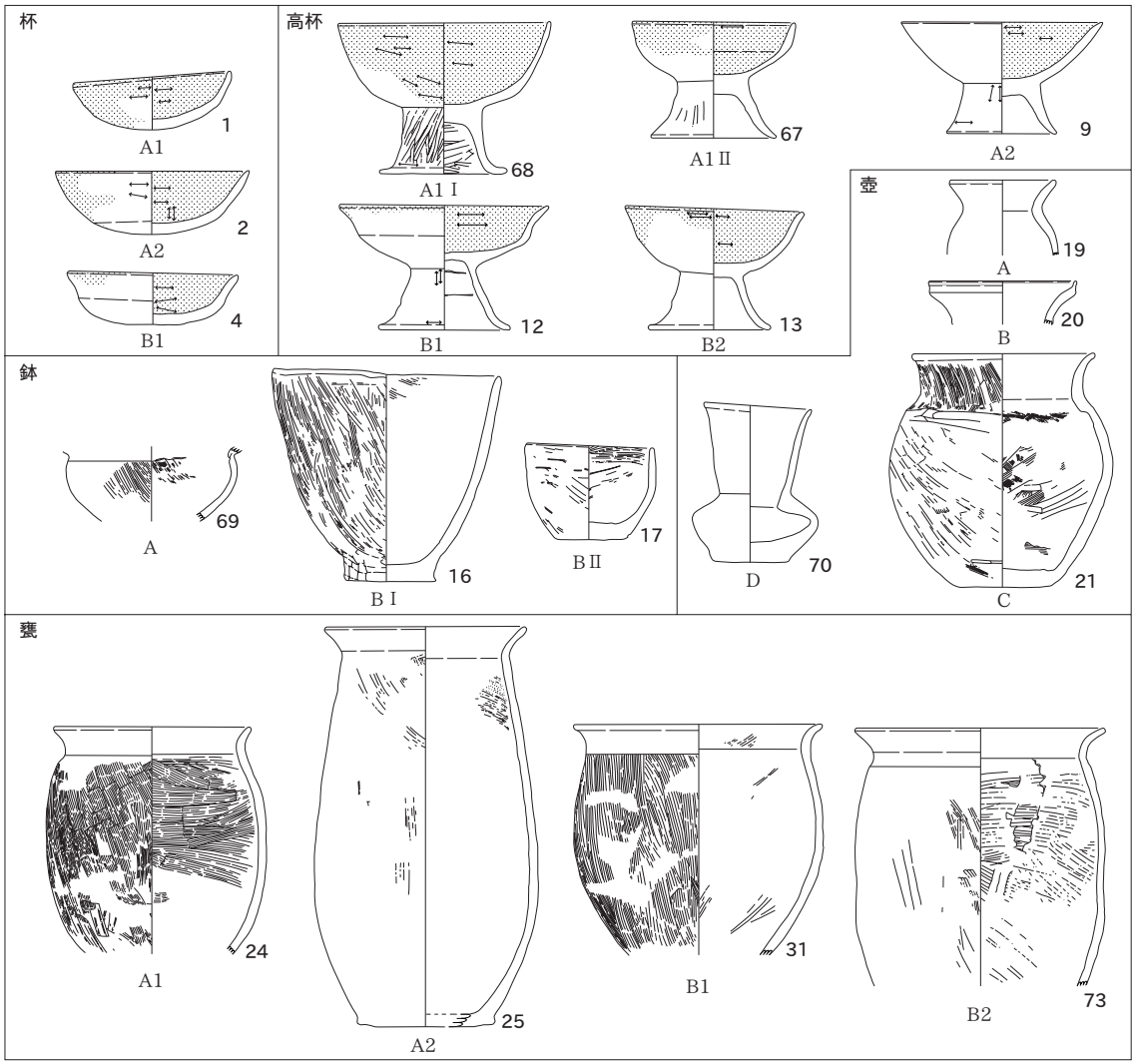
C類：口縁部が外反するもの

D類：厚い平底で扁平な算盤玉状の体部に長く外傾する口縁部が付く

甕：全体の器形がわかるものが少ないため口縁部の形状で細分した。体部外面は縦方向、内面は横位、斜位方向にハケメ調整されるものが多い。

A類：長胴の体部に直線的に開く口縁部が付くもの

1：短い口縁部が付くもの



第9図　古墳時代後期の土器分類

２：長い口縁部が付くもの

Ｂ類：長胴の体部に外反する口縁部が付くもの

１：短い口縁部が付くもの

２：長い口縁部が付くもの

（3）弥生時代後期～古墳時代前期の土器分類（第10図）

器種は以下のように分類した。

高杯：全体の器形の分かるものはなく細分は行わない。

器台：全体の器形の分かるものはなく細分は行わない。

鉢

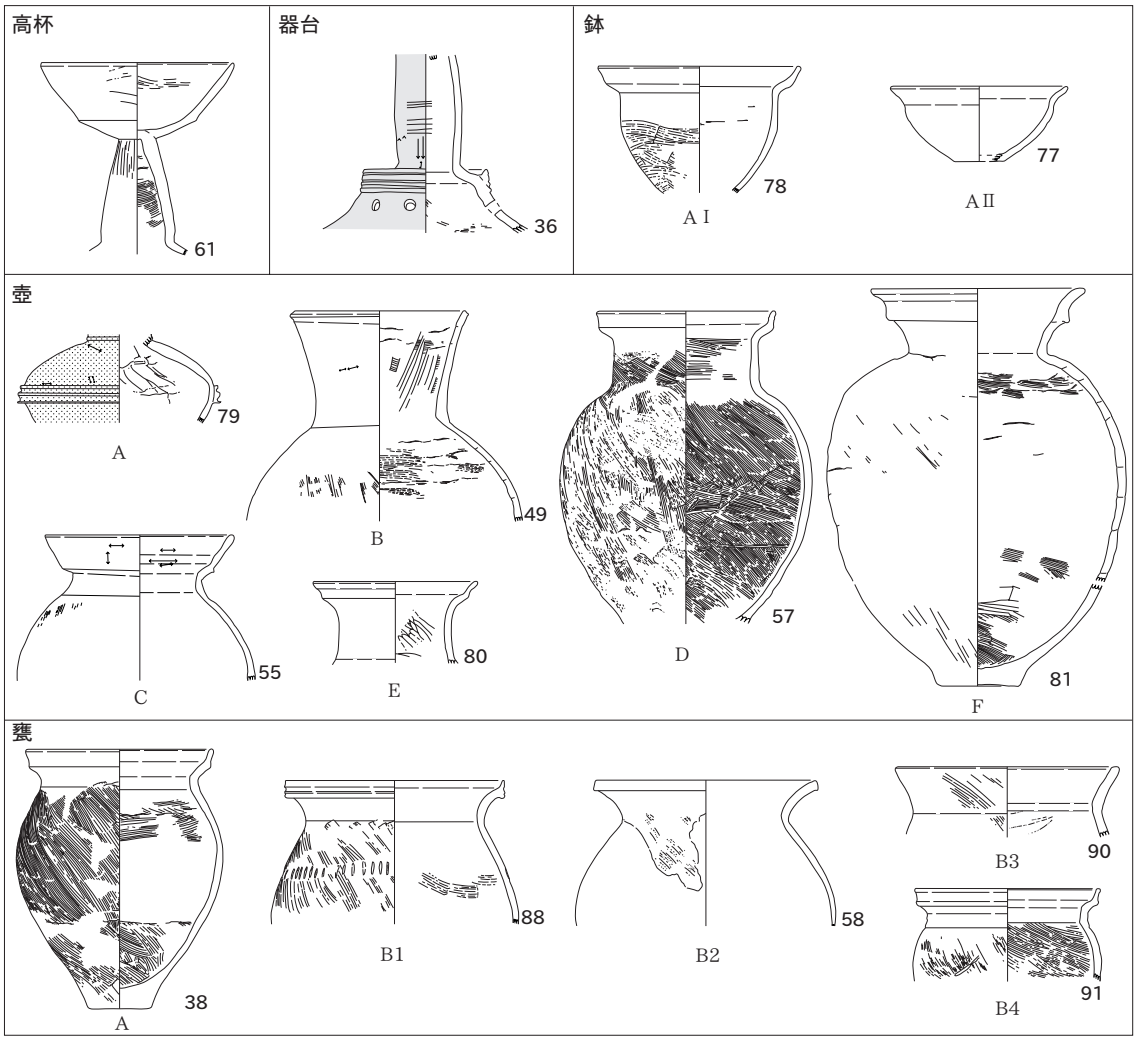
Ａ類：体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反するものと内湾するものがある。器高で細分した。

Ⅰ：器高が10.0cm以上のもの

Ⅱ：器高が10.0cm未満のもの

壺：器形、法量ともバラエティーがあるが、器形と口縁部の形態でＡ～Ｆに細分した。

Ａ類：体部は算盤玉状で中央に凸帯がめぐる。口縁部は出土していないが、細い口頸部が付くと想定さ



第10図　弥生時代後期～古墳時代前期の土器分類

れ、体部と口縁部の境にも凸帯が巡る。

B類：口縁部が長く直線的に開くもの

C類：短く外反する頸部から直線的に伸びる口縁部がつくもの

D類：長い筒状の頸部から口縁部が直線的に開き、端部が上につままれるもの

E類：長い筒状の頸部から口縁部が外反し、端部が上につままれるもの

F類：口縁部が二段に外反するいわゆる二重口縁壺といわれるもの。底部は平底である。

甕：最も多く出土している器種であるが、全体の器形がわかるものが少ないので、口縁部の形態で細分した。

A類：有段口縁無文甕で底部は平底である。

B類：いわゆる「く字甕」、「コ字甕」といわれるものである。端部の調整で細分した。

1：端部を上に摘むもの

2：端部を面取りするもの

3：端部を丸く仕上げるもの

4：いわゆる付加状口縁といわれるもの

(4) 各　　説

弥生時代～古墳時代の土器は遺構出土土器、X層の包含層出土土器の順に報告する。出土地点・層位・法量・調整等の詳細については、別表2の観察表に記載した。

SI13（1～34）　1～33は古墳時代後期の土器で、34のみ弥生時代後期の土器である。1～4は杯ですべて内面を黒色処理され、丁寧にミガキがかけられている。1・2の底部は丸底のA類、3・4は平底のB類としたものである。5～15は高杯である。15以外はすべて内面が黒色処理され、ミガキがかけられている。杯部と脚部それぞれで分類しており、5～8の杯部はA1Ⅱ類、脚部A類である。6は杯部の器厚が非常に厚い作りである。9の杯部はA2類、脚部はA類である。10～12の杯部はB1類、12の脚部はA類である。13・14の杯部はB2類、脚部はA類である。15は脚部が欠損しているが、杯部はB2類である。16～18は鉢である。16の鉢の底部は低い柱状高台のようなつくりで面取りされている。体部外面はハケメ調整される。18の鉢は底部内外面にハケメ調整される。19～22は壺である。19は小型の壺で口縁部は「く」の字に外傾する。20は口縁端部が上に摘まれる。21は広口の壺C類である。頸部は縦方向のハケメ、体部は斜め方向にハケメ調整される。23～33は甕である。25は長胴の甕で体部中央から下に最大径がくる下膨れのもので、東北南部の影響を受けているとみられる。26は口縁部にまでハケメ調整される。27は長胴の甕で体部のほぼ中央に最大径がくる。34は弥生時代後期の器台である。脚部の裾のみが残っており、外面は赤彩されている。SI13は古墳時代後期の竪穴建物であることから、34は混入と考えられる。

土器集中46（35）　弥生時代後期の壺D類で、体部内外面はハケメ調整される。

土器集中47（36）　弥生時代後期の高杯または器台の棒状脚から裾部である。外面は赤彩され、ミガキがかけられる。裾部には2個1単位の円形の透孔が入る。また、1本描きの3条の擬凹線がめぐる。

土器集中48（37）　弥生時代後期の甕A類である。全体の器形がわかる数少ない資料である。体部外面は斜め方向、内面は横方向にハケメ調整される。口縁部～体部にかけてススが付着する。

土器集中49（38・39）　38は弥生時代後期の甕A類で、土器集中50出土の破片と接合している。体

部外面は斜め方向、内面は横方向にハケメ調整される。39も弥生時代後期の甕B1類で体部外面は縦方向、内面は横方向にハケメ調整される。

土器集中52（40～46）　出土土器はすべて古墳時代後期のもので、SI13との関連が考えられる。40・41は高杯B1類である。40は脚部が欠損しているが、杯部と脚部の接合部はなだらかである。41は杯部の内面が黒色処理されミガキがかけられている。42はD類の小型の壺である。厚い平底の算盤玉状の体部のみ残存している。長く外傾する口縁部が付く壺である。43～46は甕である。43はA2類で口縁部が直線的に開く。44はB1類で口縁部は短く外反が弱い。口径と体部径がほぼ同じ大きさで、凹凸の少ない器形である。45・46はB2類で体部径が最大値となる器形である。45の口縁端部は玉縁状となる。

土器集中56（47～52）　47～51は弥生時代後期、52は古墳時代前期の土器である。47・48は器台である。47は器台の受け部である。胎土が精良で外面が赤彩される。48も器台の受け部で端部が上につままれる。49はB類の壺で、口縁部は直線的に長く開く。体部外面は縦方向、内面は横方向にハケメ調整される。

土器集中57（53～58）　53・54は台付鉢の把手と見られるが、類例は不明である。ほかの土器集中57出土土器が弥生時代後期であったことから、弥生時代後期としたが、誤認している可能性もある。53は薄く横に張り出す形状である。54の口縁部は内傾し、端部はわずかに外側につままれる。把手はいずれも孔が上下に貫通する。紐通しの孔か装飾とみられる。55～57は弥生時代後期の壺である。55はC類、56・57はD類の壺である。56は外面に化粧土のような痕跡が残る。57は最も長い筒状の頸部が付き、頸部の内外面からハケメ調整される。58は弥生時代後期のB2類の甕で口縁端部は肥厚し、面が作られる。胎土は粗雑で、3～8mm程度の大きめの長石・石英を多く含む。

土器集中58（59）　1点のみの出土である。弥生時代後期の甕A類である。内面は横方向のヘラケズリとハケメ調整される。外面は縦・横方向のハケメとヘラケズリ調整される。

土器集中1085（60）　沢地区北出土の古墳時代前期の甕である。S字状口縁台付甕が退化したものである。

土器集中1087（61・62）　61は沢地区北出土の古墳時代前期末ころの高杯で、杯部は稜を持って屈曲し、横方向のミガキがかけられる。脚部は畿内系屈折脚で、中空で外面は縦方向のミガキがかけられる。62も古墳時代前期末ころの甕である。内外ともにハケメ調整である。

SD1078（63）　沢地区北出土の弥生時代後期の器台の脚で段を有するものである。

X層出土土器（64～91）　64～73は古墳時代後期の土器である。64はB1類の平底の杯で、内面は黒色処理され、ミガキがかけられる。65～68は高杯である。すべての杯部内面が黒色処理され、ミガキがかけられている。68は口径、杯部の深さともに出土した高杯の中で最大の法量のものである。脚部は内外ともに丁寧にミガキがかけられる。69はA類の鉢である。底部と口縁部を欠く。内外面ともにハケメ調整で、外面は黒変する。70・71は壺である。70はD類とした厚い平底で、扁平な算盤玉状の長く外傾する口縁部が付くものである。71は口縁部が外反し、体部は倒卵形になると推定される。外面は縦方向にハケメ調整される。72はA1類の小型の甕である。73はB2類の甕で、体部は長胴で口縁部は外反する。

74は古墳時代前期の甕である。口縁端部が内側へ折り返され、布留甕の要素を意識しているようにも見えるが、詳細は不明である。

75は弥生時代後期、法仏式の高杯の脚部である。内外ともに赤彩されミガキがかけられる。

76～91は弥生時代後期～終末の土器で、いわゆる月影式といわれるものである。76は器台の受け部の一部で、胎土は精良である。77はＡⅡ類とした身の浅い鉢で、78はＡⅠ類とした身の深い鉢で、外面はハケメ調整される。79～82は壺である。79はＡ類の壺の頸部から体部で頸部に１条、体部中央に３条の幅広の凸帯が巡る。外面は黒色処理される。長頸の口縁部が付くと推定される。80はＥ類の壺の頸部から口縁部である。内面にミガキがかけられる。81はＦ類の二重口縁を持つ壺である。体部内面は横方向のハケメ調整である。83～91は甕である。83・84はＡ類の甕である。85～88はB1類の甕である。88は体部上部にハケメ調整の後、刺突が巡る。89はB2類の甕で、体部外面は斜方向のハケメ調整である。90はB3類の甕で口縁部にもハケメ調整される。91はB4類の甕で、体部は内外ともに斜め方向にハケメ調整される。

2 石 製 品（図版27・53・54）

石製品には古墳時代、古代、中世のものがある。以下、器種ごとに述べる。

A 砥 石

１～８は砥石である。出土層位や形態から２は古代に属し、１・３は中世、４～７は中世から古代に属すると思われる。１はⅨ層、３はⅧａ層、２・４～８はⅧｂ層から出土している。１は沢地区南の32D1グリッドⅨ層から出土しており、５面が磨面として用いられている。凝灰岩製であり、裏面は欠損により大きく剥落している。長さ6.5cm、幅4.7cmである。２は沢地区北のSK1006から出土したもので砂岩製である。幅2.6cm、厚さ1.7cmである。３は32D18グリッドⅧａ層から出土の扁平な泥岩製のものである。４面が磨面として使用されている。幅3.3cm、厚さ1.3cmである。４は32L2グリッドⅧｂ層出土の凝灰岩製のものであり、４面が使用されている。幅4.5cm、厚さ3.1cmである。５は32L17グリッドⅧｂ層出土の凝灰岩製のものである。４面が使用され、側面には線条痕が多く認められる。幅3.8cm、厚さ2.0cmである。６は32L1グリッドⅧｂ層から出土した砂岩製のものである。磨面のほか、両端に敲打痕が見られる。長さ19.8cm、幅6.3cm、厚さ4.9cm、重量979.0gの棒状の自然礫を素材とする。７は31K25グリッドⅧｂ層出土で、凝灰岩製である。４面が使用され、側面上端には深い線条痕が認められる。長さ9.6cm、幅2.0cm、厚さ2.3cm、重量58.0gである。８は32KグリッドⅧｂ層出土の砂岩製のものである。４面が使用されている。稜には短軸方向に深い敲打痕が認められ、紐状のものを巻いた可能性がある。幅5.1cm、厚さ5.0cmである。

B 腰帯石銙

９は平安時代の腰帯石銙で32K25グリッドⅧｃ層からの出土である。花崗岩製で縦4.1cm、横3.9cm、厚さ0.65cmで一部欠損している。垂孔はない。無孔のものは10世紀第Ⅱ四半期に出土例が多いという［田中2002］。Ⅷｃ層出土土器はⅦ２－３期（10C前葉～11C前葉）頃であることから、土器の年代観と一致する。表面・側面は丁寧に研磨されている。裏面は平らにする程度の磨きである。潜り穴が３か所残っている。西頸城地域からは初の出土例である。

C　石製紡錘車

10～14は古墳時代に属する。10はＸｃ層に属する土器集中46（33C11グリッド）出土の滑石製紡錘車で、半分が欠損している。全面に成形時の磨痕が認められる。円錐形をしており直径4.3cm、高さ2.0cmである。

D　管　　玉

11・12は碧玉製の管玉である。11は33K17グリッドＸ層から出土のものである。直径0.7cm、長さ2.65cm、重量3.0gである。12は33K18グリッドＸ層出土のものであり直径0.8cm、長さ2.0cm、重量3.0gである。未成品であり穴が貫通していない。また稜が残存しているため横断面は多角形をなしている。

E　翡翠原石

13・14は翡翠の原石で搬入したものである。いずれも34B17グリッドＸｂ層より出土している。13は長さ2.7cm、幅1.7cm、厚さ0.9cm、重量7.0g、14は大きく欠損しており厚さ1.9cmである。

3　木　製　品（図版28・29・54・55）

古墳時代、古代・中世の木製品が出土している。第６表に地区別・時期別の集計表を掲載したが、表中の数量は個体数ではなく破片数である。層位と遺物の形態などからこれらの属する時期を区分したが、古代と中世いずれに属するか判然としないもの（11～18）が含まれる。

A　中　　世

１～10は中世に属するものである。１・２は箸状木製品であり、共にSK23の１層から出土している。全体が後世の影響で弓状に湾曲しており、両端が鋭利に作出されている。１は長さ23.9cm、幅0.6cm、厚さ0.4cm、２は長さ22.9cm、幅0.7cm、厚さ0.4cmである。３は南区東壁Ⅷｂ層から出土したヘラである。板目材を使用している。長さ22.9cm、幅4.7cm、厚さ0.8cmである。４は33D20グリッドⅧｂ層から出土した板目材を用いた祭祀具の馬形である。長さ12.4cm、幅3cm、厚さ0.4cmである。５は33C17グリッドⅧｂ層から出土した板目材の祭祀具の鳥形である。長さ7.5cm、幅3.3cm、厚さ0.4cmである。６は32E15グリッドⅧｂ層から出土した横櫛である。板目材が用いられ、歯は刻み出されている。歯の目が細かいことから梳櫛である。幅2.5cm、厚さ0.7cmである。７は33E12グリッドⅧａ層から出土した浮子である。板目材を用いており、頭部は角状に加工されている。幅1.8cm、厚さ0.9cmである。８は34E5グリッドⅨ層出土の漆器皿である。内外に黒漆が塗られている。器面はロクロによって調整されているが、表面には器形を粗く整えた加工痕がみられる。12世紀末に属する。口径10.4cm、底径８.0cm、器高1.6cmである。９は32E13グリッドⅧａ層から出土した漆器椀である。ロクロによって整形されている。内外面に黒漆が塗布され底部中央と外面に径5mm前後のうず状の朱模様が（一単位５個？）環状に描かれる。14世紀後半～15世紀前半に属する。底径7.0cmである。10は34B21グリッドⅧｂ層出土の柾目材を用いた差し歯下駄である。歯との結合部が見える露卯下駄であり表面には使用痕と思われる浅い窪みが見られる。幅11.6cm、厚さ2cmである。

B 古　　代

19～28は古代に属するものである。19はSD1077（32M4グリッド）の1層出土の連歯下駄である。板目材が用いられている。表面先端部に使用痕と思われる窪みがみられる。長さ20.5cm、幅10cm、厚さ2.6cmである。20はSD1077（33M7グリッド）の1層出土の板目材を使用した棒状木製品である。幅1.7cm、厚さ1.2cmである。21はSD1077（33M19グリッド）の1層出土の板目材を用いた扇の骨である。幅1.5cm、厚さ0.3cmである。22はSD1078（32L16グリッド）の12層出土の小槌である。芯持丸木材が用いられた頭部の側面には柄を差し込む溝が作られている。溝が浅いため柄は頭部の中心からずれた位置に固定されたと推測されるが判然としない。頭部の断面径は14.4cm、柄は断面径3.6cm長さ60cmである。23はSD1078（32L16）の12層出土の板目材を用いた斎串である。上端部は山形をなし、切り込みがなされている。長さ15.1cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmである。24はSD1079（33L23）の3層出土の火鑽臼である。板目材の縁辺に鋸歯状の刻みがなされている。幅1.5cm、厚さ0.6cmである。25はSD1079（32L17）の3層出土の木製品である。薄い板目材が用いられており、曲物の側板と思われるが判然としない。幅7.7cm、厚さ0.5cmである。26は32L7グリッドⅧc層出土の薄い板目材を用いた扇の骨である。幅1.8cm、厚さ0.2cmである。27は32L17グリッドⅧc層出土の板目材を用いた火鑽臼である。火鑽皿は摩擦により黒色に変化している。長さ18.9cm、幅3.9cm、厚さ2.7cmである。28は33K21グリッドⅧb層出土の板目材を用いた木簡である。木簡については後述する。

沢地区北　中世・古代（Ⅷb層）

木簡	木簡・木簡？	6
祭祀具	箸状木製品	80
	斎串	2
	形代	1
食膳具	漆塗椀	2
	杓　子（篦）	1
容器	曲物側板	3
	曲物底板	4
	樺　皮	4
	円形板	2
服飾具	連歯下駄	1
紡織具	糸　巻	5
建築材等	材	71
	板　材	472
	角　材	9
	部　材	5
	割　材	13
	方形材	55
	炭化材	32
	杭	123
工具	楔	1
漁労具	浮子？	1
その他	棒状木製品	207
	燃えさし	25
	削り屑・切り屑	132
	用途不明	22
合計		1279

沢地区南　中世（Ⅷa・Ⅷb・Ⅸ層）

木簡	木簡・木簡？	2
祭祀具	箸状木製品	653
	刀子形	4
	斎串	6
	形代	4
食膳具	漆塗椀	20
	漆塗皿	29
	漆塗製品（椀皿不明）	27
	折　敷	7
	盤？	2
容器	曲物側板	6
	曲物底板	11
	樺　皮	10
	円形板	9
服飾具	扇	1
	連歯下駄	2
	差歯下駄	2
	櫛	3
紡織具	糸　巻	3
建築材等	材	307
	板　材	1565
	角　材	24
	竹　材	8
	部　材	43
	割　材	52
	方形材	134
	炭化材	91
	杭	258
その他	柄	4
	棒状木製品	940
	燃えさし	128
	削り屑・切り屑	585
	用途不明	31
合計		4971

沢地区北古代（Ⅷc～Ⅷe層）

祭祀具	箸状木製品	17
	斎串	4
発火具	火鑽臼	2
食膳具	杓　子（篦）	4
容器	曲物側板	99
	曲物底板	25
	樺　皮	3
	円形板	3
	蓋	1
	刳物	1
	箱物	1
服飾具	扇	7
	連歯下駄	1
建築材等	材	41
	板　材	323
	角　材	6
	部　材	1
	割　材	6
	方形材	25
	炭化材	11
	杭	58
	とい？	11
工具	楔	2
農具	小　槌	1
その他	柄	3
	棒状木製品	130
	燃えさし	32
	削り屑・切り屑	79
	用途不明	15
合計		912

沢地区南　弥生～古墳時代（Ⅹ・Ⅹa・Ⅹb・Ⅹc層）

祭祀具	箸状木製品	12
	刀子形	1
容　器	曲物底板	6
建築材等	材	12
	板　材	134
	部　材	2
	割　材	3
	方形材	17
	炭化材	2
	杭	25
その他	柄	2
	棒状木製品	37
	燃えさし	1
	削り屑・切り屑	12
	用途不明	2
合計		268

沢地区北古墳時代（Ⅹ層）

祭祀具	箸状木製品	1
建築材等	材	2
	板　材	7
	方形材	1
	炭化材	1
	杭	5
その他	棒状木製品	3
	燃えさし	1
	削り屑・切り屑	2
合計		23

第6表　沢地区木製品集計表

C 古墳時代

29・30は古墳時代に属するものである。29は試掘第7トレンチ出土の板目材を用いた連歯下駄である。側縁には半円状の鼻緒を通す穴が作られている。長さ23cm、幅10.6cm、厚さ2.1cmである。30は35D16グリッドⅩa層出土の柾目材を用いた不明木製品である。長さ11.7cm、幅4.0cm、厚さ

0.7cmである。

D　そ　の　他

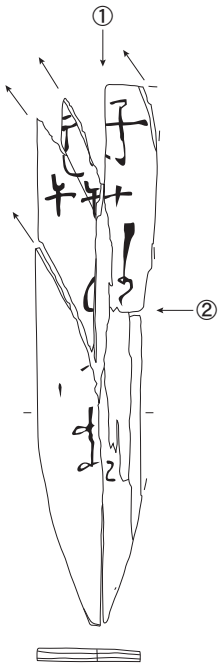
11は32K16グリッドⅧａ層出土の曲物底板である。目釘穴が五か所確認される。長さ13.3cm、幅12.6cm、厚さ0.8cmである。12は34KグリッドⅧｂ層出土の板目材を用いた鳥形である。長さ22.9cm、幅2.5cm、厚さ1.6cmである。13は33L2グリッドⅧｂ層出土の糸巻の枠木である。腹部に軸を差し込む二か所の穴が作られている。側面には刃物による傷が認められる。長さ25.1cm、幅1.7cm、厚さ2.3cmである。14は沢地区排水のための暗渠掘削の際に出土した斎串である。板目材が用いられている。長さ17.0cm、幅2.1cm、厚さ0.8cmである。15は北拡張区Ⅷｂ層出土の鏃形である。板目材が用いられている。柄には切込みが入れられている。長さ9.8cm、幅2.0cm、厚さ0.9cmである。16は暗渠掘削の際に出土した柾目材の斎串である。上端部は山形をなしている。体部には刃物による斜め・横方向の傷がみられる。斎串は左下から右上方向の切り込みによって下半が切断されている。幅2.4cm、厚さ0.4cmである。17は32L19出土の板目材を用いた木製品である。ヘラと思われる。幅1.9cm、厚さ0.9cmである。18は箱の一部である。柾目材が用いられ三辺に枘および枘穴が確認される。長さ13.4cm、幅2.8cm、厚さ0.4cmである。

4　木　　簡（図版29・32）

28は沢地区北の33K21グリッドⅧｂ層出土である。Ⅷｂ層からは平安時代と少量の中世の遺物が出土していることから、木簡についても平安時代から中世のものと考えられる。Ⅷｂ層の上限は出土土器の年代から春日編年Ⅶ新～Ⅷ期（10C前葉～11C前葉）ころである。樹種はスギである（第Ⅴ章１参照）。長さ21.5cm、幅4.7cm、厚さ0.5cmで板目材を使用している。長方形の材の下部を尖らせたもの（051型式）である。この木簡は中央で縦に半割し、さらに左右の板を細かく切断してから廃棄している（第11図）。廃棄時に文字が読まれては不都合、あるいは悪用を避ける目的と考えられる。墨書は１面のみに見られる。３行書きである。釈文は以下のようである。／は改行を示す。

「□〔子カ〕十〔午カ〕□／□午 ＿＿ ＿＿ ／午」

子あるいは午という文字が複数見られるが、中央が切られ文字が欠けるため全体の文章の意味は不明である。呪符の類であろうか。子は方位では北、時刻では午前12時をあらわす。午は方位では南、時刻は午後12時をあらわす。子と午の組合せで干支を現す可能性もある。



第11図　木簡切断方法
（丸数字は順序、矢印は方向を示す）

5　土　製　品（図版30・55）

１～９は管状土錘である。１～８は出土層位から古代に属し、９は近世に属するものである。１は焼土1002の２層から出土しており、幅4.7cmである。２はSK1006（32K5グリッド）出土のもので長さ6.55cm、幅4.2cm、重量98gである。３は33KグリッドⅧｂ層出土で、長さ5.4cm、幅5.4cm、重量

106gである。4は31L19グリッドⅧb層から出土している。長さ6.5cm、幅4.9cm、重量129gである。5は32K13グリッドⅧc層出土で、長さ5.5cm、幅3.2cm、重量49gである。6は34B15グリッドⅧ層出土で、長さ6.6cm、幅3.5cm、63gである。7は沢地区北出土のもので長さ5cm、幅3.9cm、重量68gである。正面に径約4mmの貫通していない孔が1か所穿たれている。8は32Kグリッド出土で長さ7.15cm、幅4.85cm、重量147gである。9は33C6グリッドⅦ層から出土している。長さ4cm、幅4.9cm、重量26gと古代のものに比べ小型である。短軸方向に平行した4本の刻みが施されている。

6 金属製品（図版30・55）

10～19は金属製品および鉄滓である。10はSK1003の覆土から出土しており、長さ4.3cm、幅7.9cmの台形状の金属板である。厚さは2mm前後の薄いもので裏面からと思われる穿孔がなされている。古代に属すると思われる。素材の分析は行っていないが、銅色が残る。用途は不明である。11の八稜鏡については次項で詳述する。12・13は鉄滓である。それぞれ32L11グリッドと33D11グリッドのⅧb層から出土している。12は長さ3.1cm、幅3.9cm、重量41g、13は長さ5.5cm、幅8cm、重量176gで、いずれもやや湾曲している。椀形鍛冶滓の可能性があるが判然としない。

14は32C25グリッドⅦ層出土の天秤用の分銅である。長さ2.5cm、幅・厚さ1.2cmの立方体の上面

番号	形体・文様	所在地・出土地点	直径 cm	厚さ cm	時代・時期	出典	備考
1	瑞花八稜鏡	糸魚川市大字田伏字山崎・田伏山崎遺跡	7.60	0.40	10世紀後半～11世紀前半	本報告	
2	草花双雀鏡	糸魚川市石垣桜が丘・天神山姫塚経塚	11.00		仁安2（1167）	糸魚川市史1	県指定文化財
3	不明（草花文の一部残存）	糸魚川市石垣桜が丘・天神山経塚	9.73		仁安2（1167）	糸魚川市史1	県指定文化財
4	不明（縁の輪のみ残存）	糸魚川市石垣桜が丘・天神山経塚	11.00		仁安2（1167）	糸魚川市史1	県指定文化財
5	八稜鏡・瑞花双鳥鏡	糸魚川市能生白山神社	8.50		11世紀後半	糸魚川市史1	市指定文化財・伝世品
6	海獣葡萄鏡	上越市子安新田・子安遺跡SD309（大溝）（市教委発掘分）	14.20	1.10	9世紀中葉（伝世品か奈良時代に盛行）	市史資料編2	市指定文化財、二彩陶器
7	円鏡・山吹双鳥鏡	上越市板倉区米増字横田226ほか五反田遺跡SD435	（9.3）		12世紀第2四半期	五反田遺跡	被熱変形
8	八稜鏡	上越市頸城区石神字澤田413番地ほか・石神澤田遺跡	9.50	2.00	9世紀から11世紀		
9	八稜鏡						
10	円鏡				鏡面に墨書・梵字		
11	円鏡・蝶鳥山吹鏡	見附市小栗山町小栗山不動院経塚	11.00	2.00	平安後期～鎌倉前半		県指定文化財
12	円鏡・藤双鶴鏡	加茂市青海神社経塚	10.80	3.50	治承2（1178）		県指定文化財
13	円鏡	新潟市竹野町菖蒲塚古墳経塚	17.00	2.00	嘉応2（1170） 正応3（1290）		国指定重要文化財
14					嘉応2（1170） 正応3（1290）		国指定重要文化財
15					嘉応2（1170） 正応3（1290）		国指定重要文化財
16					嘉応2（1170） 正応3（1290）		国指定重要文化財
17					嘉応2（1170） 正応3（1290）		国指定重要文化財
18	素文鏡	新潟市大字福島字上浦290ほか・上浦遺跡SD3	4.00	0.15	8世紀から9世紀初頭	上浦遺跡	
19	円鏡	阿賀野市寺社横峰経塚・1号塚	11.00	2.00	平安後期～鎌倉前期		県指定文化財・墨書礫に「長□（茂カ）」
20	円鏡	阿賀野市寺社横峰経塚・1号塚			平安後期～鎌倉前期		
21	円鏡・山吹双鳥鏡	阿賀野市寺社横峰経塚・2号塚	10.30		平安後期～鎌倉前期		「仁□（安カ）□（年カ）□」
22	円鏡・藤花松鶴鏡	阿賀野市寺社横峰経塚・2号塚			平安後期～鎌倉前期		県指定文化財

第7表　新潟県内古代鏡一覧

に摘みが作出される。重量は30.8gであり８匁に相当する。摘みには横方向に抜ける孔が作られている。「天下一」の銘が表裏二面に刻まれている。出土層位や銘から織豊期以降～近世に属すると思われる。

15～19は輸入銭貨である。15は沢地区南、16は32Dグリッド出土の開元通寶（唐621年初鋳）である。15は径2.4cm、厚さ0.11cm、重量1.0g、16は直径2.4cm、厚さ0.1cm、重量1.0gである。17は32Dグリッド出土の熙寧元寶（北宋1068年初鋳）で文字は篆書である。直径2.48cm、厚さ0.12cm、重量1.0gである。18・19はいずれも32Dグリッド出土の紹聖元寶（北宋1094年初鋳）である。18の文字は行書で、直径2.38cm、厚さ0.1cm、重量1.0gであり、19の文字は篆書で、直径2.4cm、厚さ0.1cmである。

7　八　稜　鏡（図版30・32）

沢地区北の自然流路SD1077の縁のⅧc層から平安時代の八稜鏡（11）が１点出土している。法量は直径7.6cm、厚さ0.4cmで一部欠損している。青銅製である。周縁幅6mm、界圏幅3mm、紐幅7mmである。蛍光X線分析を行った（第Ⅴ章２参照）結果、銅、ヒ素、鉛という組成であった。紐は２方向から孔が開けられているが貫通していない。背面の文様は明確ではないが、界圏と花は確認できるので「瑞花八稜鏡」とする。８つの稜の内、11時の位置の稜の先端がきれいに鋳出されていないが、湯口に近い可能性もある。鏡の時期は10世紀後半から11世紀前半頃と見られ、土器の年代観と一致する。この時期の八稜鏡の直径は8.5～9.5cm程度のものが多く、これに比べるとやや小さい。

県内には古墳時代から近世までの鏡が発掘調査で出土しているが、古代の鏡は少なく、経塚出土や寺社の伝世品が多い。奈良・平安時代に限って県内の鏡を一覧（第７表）にしたが、なお漏れがある可能性もある。11地点22面を数えるが、八稜鏡は本遺跡例と糸魚川市能生白山神社例、上越市石神澤田遺跡[1)]出土の４面に限られ、いずれも古代の国府がおかれた頸城郡内からの出土である

8　縄文時代の遺物（図版30・55）

20～26は縄文時代に属する遺物である。20以外はいずれも流れ込みなど縄文期の遺物包含層から移動し混入したものと思われる。20～22は縄文中期前葉に属する土器片である。北陸系の新崎式とみられる。20はSK11の１層出土の口縁部片で、横方向の半隆線文が施される。21は32L24グリッドⅧb層出土の胴部片である。横方向の沈線文が施される。22はキャリパー状の口縁部に蓮華文が施されている。23は31K19グリッドⅧb層出土の頁岩製の石鏃である。長さ2.4cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重量1gである。無茎凹基で腹面に主要剥離面を残す。24・25は安山岩製の礫石錘である。扁平な楕円礫の上下二方向からの打撃により、抉りを作り出している。24は27G4グリッドⅡ層から出土している。25は沢地区の表採である。24は長さ9cm、幅7.7cm、厚さ2.1cm、重量207gである。25は長さ12.5cm、幅9.6cm、厚さ3.1cm、重量520gである。26は蛇紋岩製の石斧未成品である。32LグリッドⅧb層出土である。刃部は磨きがなされている。長さ12.9cm、幅5.55cm、厚さ2.7cmである。形態などから縄文時代早期末～前期初頭ころのものである。

1）北沢卓哉氏（上越市埋蔵文化財センター）ご教示。

第Ⅴ章　自然科学分析

1　木製品の樹種同定

藤根　久・佐々木由香（パレオ・ラボ）

A　はじめに

田伏山崎遺跡は新潟県糸魚川市に位置する弥生時代後期から鎌倉時代にかけての遺跡である。調査では、竪穴住居や自然流路あるいは土坑などの遺構が検出され、珠洲焼などの土器のほか、漆器類や木簡などの木製品が出土した。ここでは、古墳時代から中世までの木製品30点の樹種の同定を行った。なお、切片作製と同定は藤根が、本文は藤根・佐々木が担当した。

B　試料と方法

木製品から直接、材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）について、剃刀を用いて薄い切片を剥ぎ取り、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。各プレパラートは、光学顕微鏡で40～400倍を用いて観察・同定した。材組織標本は、新潟県埋蔵文化財センターで保管している。

C　結　　果

樹種同定を行った結果、常緑針葉樹のスギとサワラ、落葉広葉樹のヤナギ属とケヤキおよびブナ属、常緑広葉樹のイスノキが見いだされた（第８表）。

スギは、斉串と、曲物底板、火鑽臼、部材（箱）、扇と思われる骨材、ヘラ、鳥形木製品、箸、浮子、鏃形木製品、馬形木製品、下駄、木槌の柄など多くの器種に用いられていた。

一方、糸巻枠木はサワラであった。漆器椀は、ブナ属、ケヤキであり、いずれもブナ帯の樹木であった。櫛は、イスノキであった。木槌は、柄はスギであったが、槌の頭部はヤナギ属であった。

以下に、材組織の特徴や図版に１分類群の光学顕微鏡写真を示し（第13図）、同定の根拠とする。そのほか、生態・分布・材質を記載する。

（1）スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　第12図1a-1c（No.5）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量が多く晩材の仮道管の壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大きく、孔口が水平に大きい開いたスギ型で１分野にふつう２個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。天然分布は降水量の多い地域に限られて点在し、特に東日本の日本海側に多い。縄文時代には低地部にもスギ林が成立していたことが知られている。材は木理通直で割裂性がよく、やや軽軟で加工は容易である。

（2）サワラ　*Chamaecyparis pisifera*（Sieb. et Zucc.）Emdl.　ヒノキ科　第12図2a-2c（No.15）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。放射組織は、単列１～17細胞高である。分野壁孔はヒノキ型で、孔口は楕円形、１分野に２個見られる。

サワラは、東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育する常緑針葉樹である。材は、ヒノキよりやや

軽軟で劣るといわれる。

（3）ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科　第12図3a-3c（No.30）

小型の管孔が単独または2～4個が複合し、晩材部に向いゆるやかに径を減じる散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織はね単列異性、道管との壁孔は大きく交互状に密在にする。

ヤナギ属は、暖帯から温帯の水湿地や丘陵地の日当りのよい所に生育する落葉高木または低木で、多くの種類がある。材質は、軽軟で切削は容易だが耐朽性は低い。

（4）ブナ属　*Fagus*　ブナ科　第12図4a-4c（No.27）

丸みをおびた小型の管孔が密在し除々に径を減じてゆき、晩材では極めて小型となり分布数も減る散孔材。道管の壁孔は交互状で孔口がレンズ状で水平に大きく開く部分もあり、穿孔は階段数が10～20本の階段穿孔で単穿孔も混じる。放射組織は異性、1～3細胞幅のものと幅が広く背の高い広放射組織が混合し、上下端に方形細胞が見られ、道管との壁孔は大きなレンズ状である。

ブナ属は、温帯上部に分布する落葉高木である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南の主に太平洋側に分布し、ブナより低地から生育しているイヌブナの2種がある。材は、やや重硬で均質、強度もあるが、保存性は低い。建築材から漆器まで用途が広い。

（5）ケヤキ　*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino　ニレ科　第12図5a-5c（No.29）

年輪のはじめに大型の管孔が単独で1～2列配列し、晩材部では小型の薄壁で角張った管孔が集合して接線状・斜状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一であり、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は、上下端のみ直立細胞からなる異性で1～7細胞幅、細胞高は非常に高い。また、放射組織の上下端や縁に結晶細胞がある。

ケヤキは、暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅く、建築材や容器などに用いられる。

（6）イスノキ　*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.　マンサク科　第12図6a-6c（No.28）

小型で多角形の管孔が一様に分布し、軸方向柔細胞が1列で接線状に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔である。放射組織は、異性1～3細胞幅、3～23細胞高であり、単列および多列端部は直立細胞からなる。

イスノキは、関東以西の暖帯から亜熱帯に分布し、暖地の山地に成育する常緑高木である。材は緻密で堅く、櫛やソロバン球、心材は黒いので紫檀・黒檀の模擬材として利用される。

D　考　　察

古代の木製品では、斉串や扇骨、曲物？、火鑽臼など、中世の木製品では曲物、木簡など板材を利用した器種にはスギが用いられている。スギは大径材が得やすく、木理が通直で割裂性に優れる軟質の針葉樹材であり、板を得るのに適している。北陸地方では縄文時代以降中世までスギ材が多用される傾向があるが、本遺跡でも30点中25点にスギが用いられており、同じ傾向であった。現在のスギの天然分布は白山や北アルプスの亜高山帯の下部から冷温帯上部にかけてであるが、埋没林や海底林の存在から、かつては平野部にも普通にスギが生育していたことが考えられている［鈴木2003など］。

古代の木槌は柄がスギで頭部がヤナギ属であった。ヤナギ属は軽軟で切削は容易だが耐朽性は低いので、木槌には一般的に使用されにくい樹種と考えられる。使用方法や加工対象に特定なものがあるのかもしれない。

報告番号	試料番号	出土地点	層位	種別	時期	樹種
1	13	SK23	1層	箸状木製品	中世	スギ
2	14	SK23	1層	箸状木製品	中世	スギ
3	16	南区東壁一括	Ⅷb層	ヘラ	中世	スギ
4	12	33D20	Ⅷb層	馬形	中世	スギ
5	20	33C17	Ⅷb層	馬形	中世	スギ
6	28	32E15	Ⅷb層	櫛	中世	イスノキ
7	18	33E12	Ⅷa層	浮子	中世	スギ
8	29	34E05	Ⅸ層	漆器皿	中世	ケヤキ
9	27	32E13	Ⅷa層	漆器椀	中世	ブナ属
10	24	34B21	Ⅷb層	下駄	中世	スギ
11	4	32K16	Ⅷa層	曲物底板	古代～中世	スギ
12	11	東西トレンチ(34K)	Ⅷb層	鳥形	古代～中世	スギ
13	15	33L02	Ⅷb層	糸巻	中世～古代	サワラ
14	17	沢地区暗渠一括	不明	斎串	古代～中世	スギ
15	19	北拡張区	Ⅷb層	鏃形	古代～中世	スギ
16	1	暗渠一括	不明	斎串	中世～古代	スギ
17	10	32L19	不明	ヘラ	中世～古代	スギ
18	6	不明	不明	部材（箱）	中世～古代	スギ
19	22	SD1077	1層	下駄	古代	スギ
20	25	SD1077	1層	棒状木製品	古代	スギ
21	8	SD1077	1層	扇骨	古代	スギ
22	30	SD1078	12層	木槌	古代	柄:スギ,頭部:ヤナギ属
23	2	SD1078	12層	斎串	古代	スギ
24	21	SD1079	3層	火鑽臼	古代	スギ
25	9	SD1079	3層	曲物？	古代	スギ
26	7	32L07	Ⅷc層	扇骨	中世	スギ
27	5	32L17	Ⅷc層	火鑽臼	古代	スギ
28	26	33K21	Ⅷb層	木簡	古代～中世	スギ
29	23	試掘第7トレンチ	不明	下駄	古墳	スギ
30	3	35D16	Ⅹa層	不明木製品	古墳	スギ

第8表　木製品と樹種同定結果

中世の椀や皿などの容器には、全国的にみてブナや、トチノキ、ケヤキ、トネリコ属などの材がよく用いられることが知られている。本遺跡では漆塗椀にブナ属が、漆塗皿にケヤキが見いだされた。ブナ属やケヤキは均質な広葉樹材で、回転成形に適している。古代の当地域においても皿にケヤキは普通に用いられており、材質にみあった樹種選択が行われていたと考えられる。

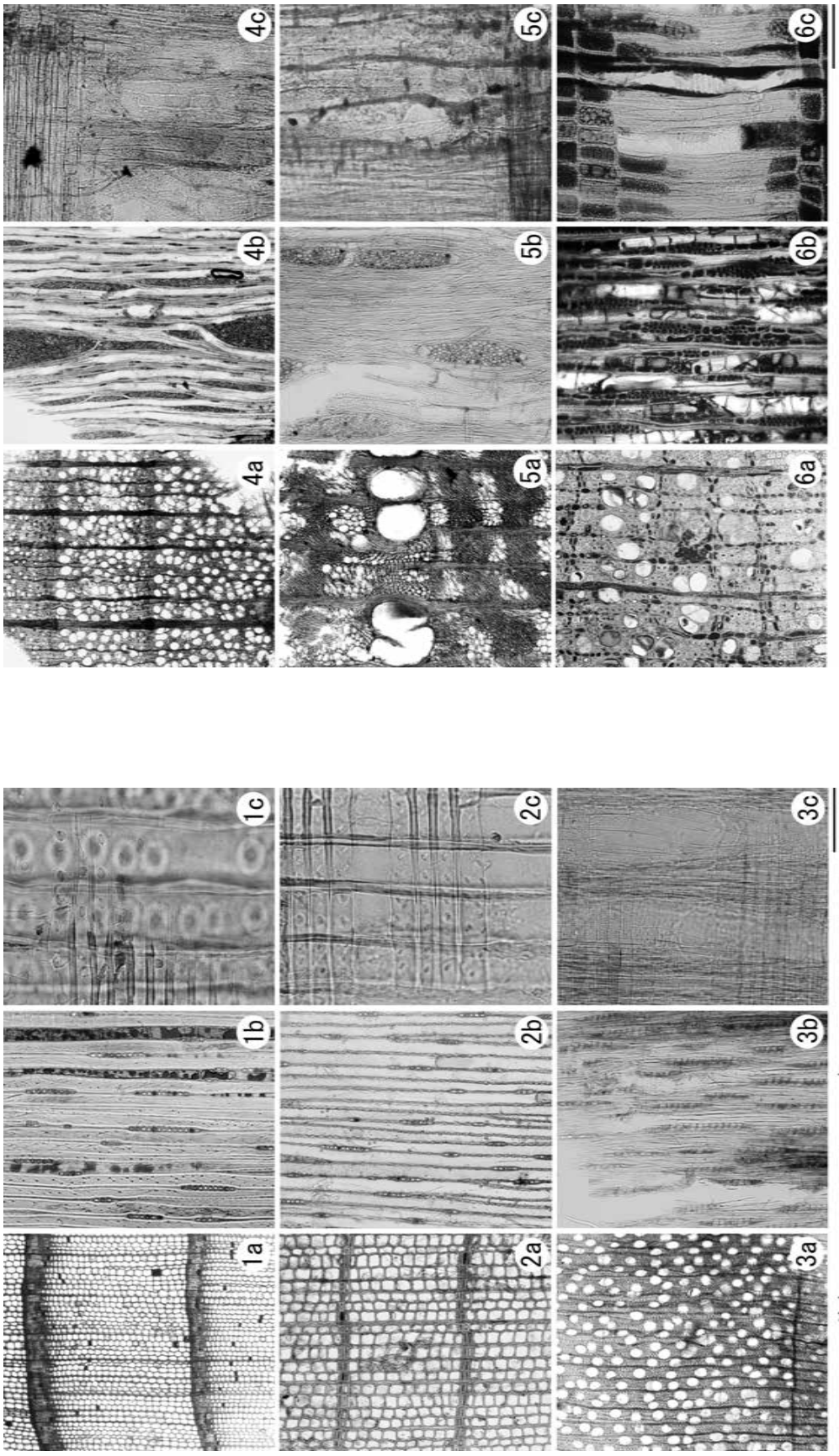
また中世の櫛にはイスノキが用いられていた。イスノキは大変緻密で割れにくい材質であり、そのため櫛歯を引くのに適しているため、中世では全国各地で出土例がある。イスノキは南方系の樹種で新潟県には自生しないため、この櫛は搬入品である可能性がある。

E　おわりに

以上のように、各器種の使用法・製作法などに応じて、それぞれ適材が使い分けられていたことが考えられた。今回同定を行った範囲で広葉樹材は容器と櫛、木槌の頭部に用いられているのみであり、スギが板材状の製品に幅広く利用されているのが特徴的であった。スギの多用は県内の諸遺跡でも確認されるように北陸地方における木材利用の特色のひとつであり、周辺の木材資源を反映した結果であると推察される。

《引用文献》

鈴木三男　　2003「石川県珠洲市南黒丸遺跡出土木材の樹種」『南黒丸遺跡・南黒丸Ｂ遺跡』 石川県教育委員会・
（財）石川県埋蔵文化財センター　18-171



1a–1c．スギ（No.5, a：500μm, b：200μm, c：50μm）
2a–2c．サワラ（No.15, a：200μm, b：200μm, c：50μm）
3a–3c．ヤナギ属（No.30, a：500μm, b：200μm, c：100μm）
4a–4c．ブナ属（No.27, a：500μm, b：500μm, c：100μm）
5a–5c．：ケヤキ（No.29, a：500μm, b：200μm, c：100μm）
6a–6c．イスノキ（No.28, a：200μm, b：200μm, c：100μm）

第12図　木製品材組織の光学顕微鏡写真（a：横断面，b：接線断面，c：放射断面）

2　八稜鏡の成分分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

A　はじめに

本遺跡から出土した八稜鏡について蛍光X線分析を行い、その材質を検討した。

B　試料と方法

分析対象資料は、本遺跡から出土した八稜鏡で、時期は10世紀後半から11世紀前半と見られる（図版30-11）。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000TypeⅡを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのRhターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）で、試料室の大きさは350×400×40mmである。検出可能元素はNa～Uであるが、Na、Mgといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。また、試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析での測定条件は、ポイント分析では50kV、0.10～0.58mA、ビーム径100μm、測定時間1500～10000s、パルス処理時間P3～P4に、元素マッピング分析では、50kV、1.00mA、ビーム径100μm、測定時間7000sを3回走査、パルス処理時間P3に設定した。マッピング分析の際には、分析試料中の含有が想定されるヒ素Asと鉛Pbの測定に用いる特性X線のピーク（AsKαとPbLα）が近接しており、そのままでは両元素を分離した画像を得られないため、AsのKβとPbのLβのピークを基に画像を得るように設定することにより、ヒ素と鉛それぞれの元素マッピング画像を得られるようにした。定量分析は標準試料を用いないFP（ファンダメンタル・パラメーター）法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値は誤差を大きめに見積もっておく必要がある。

C　結　　果

任意の点5か所をポイント分析した半定量値とその平均値を第9表に示す。また、元素マッピング分析により得られた画像、さらにその画像を基に特徴的なか所のポイント分析により得られたスペクトルおよび半定量分析結果を第13図に示す。元素マッピング分析画像を基に行ったポイント分析では、銅Cuが最も多く検出され、次いでヒ素As、鉛Pbが検出された。ほかに、鉄Fe、銀Ag、スズSn、アンチモンSbが少量検出された。

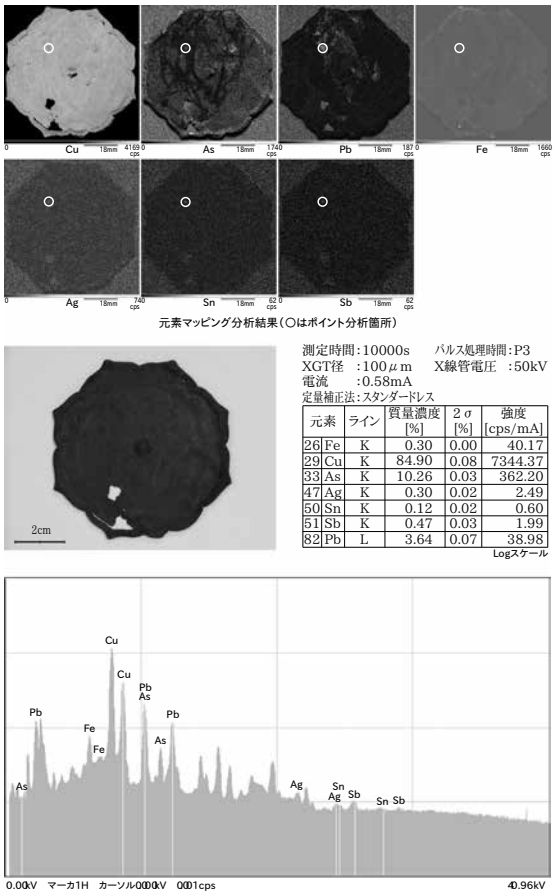
	Fe	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Pb
A	0.35	91.28	7.38	0.39	0.08	0.38	0.15
B	0.53	92.84	6.00	0.31	0.06	0.26	0.00
C	0.67	91.38	7.06	0.38	0.08	0.43	0.00
D	0.92	91.83	6.57	0.21	0.10	0.38	0.00
E	0.80	92.61	6.03	0.24	0.04	0.29	0.00
平均	0.65	91.99	6.61	0.31	0.07	0.35	0.03

第9表　半定量分析結果

D　考　　察

任意の点５か所のポイント分析結果および元素マッピング分析結果を見れば明らかなように、部位によって組成にはバラツキがあった。基本的に出土銅製品は埋蔵中に地金の腐食が進行し、非破壊で表面を分析しても本来の地金の化学組成とは異なるため、また今回の分析値は上述のとおり半定量値であることも併せて考慮すると、得られた値から厳密な組成比は検討するべきではないということをまず留意しておく必要がある。

当資料は､銅に次いで多く検出されたのはヒ素､鉛であり、材質はCu-As-Pbの銅合金と考えられる。一般に青銅は銅とスズの合金を指すが、スズはポイント分析、元素マッピング分析双方の結果から極少量しか含まれていないと考えられ、不純物と考えるのが妥当であろう。また、ヒ素についても合金材料として意識的に添加された可能性もあるが、分離しきれなかった不純物として存在している可能性も考慮するべきである。



元素	ライン	質量濃度[%]	2σ[%]	強度[cps/mA]
26 Fe	K	0.30	0.00	40.17
29 Cu	K	84.90	0.08	7344.37
33 As	K	10.26	0.03	362.20
47 Ag	K	0.30	0.02	2.49
50 Sn	K	0.12	0.02	0.60
51 Sb	K	0.47	0.03	1.99
82 Pb	L	3.64	0.07	38.98

第13図　八稜鏡の成分分析結果

これまでの分析例を見ると、奈良～平安時代の国産品と考えられる銅製品にはヒ素が含まれており、国産銅とヒ素との関わりが指摘されている［成瀬1999］。今回のような銅、ヒ素、鉛を中心とした組成は、先に述べたように単純にほかの分析例とは比較はできないものの、皇朝十二銭の分析［齋藤ほか2002］や淳和院跡遺跡出土未製品、金属粒の分析［長谷川ほか2002」において似たような組成が見られる。また、東北地方の出土青銅製品でヒ素含有率が高いものが存在することも指摘されている［松井・手代木2003］。

E　おわりに

田伏山崎遺跡から出土した八稜鏡について非破壊分析した結果、銅 - ヒ素 - 鉛を中心とした化学組成であった。

《引用・参考文献》

長谷川雅啓・河野益近・西山文隆・内田俊秀　2002　「9世紀前半の平安京で使用されたヒ素を含む銅材料について―淳和院跡出土遺物を中心として―」『日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集』244-245

松井敏也・手代木美穂　2003　「東北地方における中世の青銅製品の材質調査」『日本文化財科学会第20回大会研究発表要旨集』122-123

成瀬正和　　1999　「正倉院鏡を中心とした唐式鏡の化学的調査」『古代の鏡』日本の美術39号　至文堂　87-98

齋藤努・高橋照彦・西川裕一　2002　「古代銭貨に関する理化学的研究―「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析―」『IMES Discussion Paper J-Series 2002-J-30』　日本銀行金融研究所

3　大型植物遺体

佐々木由香・米田恭子（パレオ・ラボ）

A　はじめに

本遺跡は海岸線から約500mの内陸の谷部に立地する。ここでは平安時代の河川跡から取り上げられた大型植物遺体14試料を同定し、食用などに利用された植物あるいは植生について検討する。

B　試料と方法

試料は現場で取り上げられた種実14点である。大型植物遺体の同定は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。また、形状観察を行い、分類・計測（長さ・幅共に計測可能な個体のみ）を行った。同定された試料は新潟県埋蔵文化財センターで保管している。

C　結　　果

現場取り上げ試料14点の同定の結果、木本植物のオニグルミ核破片3点、コブシ種子1点、モモ核1点、トチノキ果実破片3点、未熟果完形2点・破片2点、種子2点の4分類群14点が見いだされた。同定結果および試料の詳細は第10表に示す。

遺構別に産出した種実を記載する。

SD1077：トチノキ果実破片2点と種子1点が出土した。種子はほぼ完形だが、平坦に潰れていた。

SD1079：オニグルミ核破片1点と、コブシ種子完形1点、トチノキ種子完形1点が出土した。

Ⅷb層：オニグルミ核破片1点、トチノキ果実破片1点、未熟果完形2点破片2点、モモ核完形1点が出土した。

Ⅷc層：オニグルミ核破片1点が出土した。

以下に、各試料の種実遺体を記載する。また1分類群につき最低1点の写真を示して同定の根拠とする。

(1) オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.　核　クルミ科

核が出土した。いずれも半割で、長さ28.1～32.9mm、幅23.1～27.7mm。側面観は広卵形。緻密で硬い。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。

試料番号	グリッド	遺構名	層位	分類群名	部位	産出数	形状	大きさ（mm）	備考
1	22L-22	SD1077	-	トチノキ	種子	1	完形	-	潰れ計測不可
2	32L-13	SD1077	-	トチノキ	果実	(1)	1/3	-	
3	33M-18	SD1077	1層	トチノキ	果実	(1)	1/3	-	
4	32L-17	SD1079	3層	オニグルミ	核	(1)	1/2	32.9×23.1	
5	32L-23	SD1079	3層	コブシ	種子	1	完形	8.4×10.2	
6	-	SD1079	-	トチノキ	種子	1	完形	27.6×36.0	
7	32K-12	-	Ⅷc層	オニグルミ	核	(1)	1/2	28.1×27.7	
8	33E-7	-	Ⅷb層	トチノキ	未熟果	1	完形	27.4×27.1	
9	33L-7	-	Ⅷb層	トチノキ	未熟果	(1)	2/3	-	
10	33L-13	-	Ⅷb層	トチノキ	果実	(1)	1/3	-	
11	33L-16	-	Ⅷb層	トチノキ	未熟果	1	完形	28.8×30.7	
12	33L-17	-	Ⅷb層	トチノキ	未熟果	(1)	2/3	19.3×21.5	
13	34E-5	-	Ⅷb層	モモ	核	1	完形	27.8×18.8	
14	35D-16	-	Ⅷb層	オニグルミ	核	(1)	1/2	31.5×24.8	

第10表　大型植物遺体の同定結果（表中の（　）は破片を示す）

(2) コブシ　*Magnolia praecocissima* DC.　種子　モクレン科

種子が出土した。黄褐色から茶褐色で、上面観は腎形、側面観は広卵形。長さ8.4mm、幅10.2mm。基部に大きな着点を持つ。着点は周辺がへこみ中央部が突出する。壁は硬い。

(3) モモ　*Prunus persica* Batsch　核　バラ科

核が出土した。淡褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。長さ27.8mm、幅18.8mm。

(4) トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　果実・未熟果・種子　トチノキ科

果実と未熟果、種子が出土した。果実は灰褐色で、上面観はいびつな円形、側面観は円形～倒卵形。表面はざらつく。表面に皮目状の斑点がある。3片に分かれる構造で、その単位で破片になりやすい。壁は厚くやや弾力があるが、柔らかい。未熟果は内部に不成熟の種子がある。種子の完形の長さは27.6mm、幅36.0mm。種子の下半部は褐色で光沢がなく、上半部は黒褐色～黒色で光沢がある。ゆがんだ楕円形。上下の境目に下に少し突出した着点がある。種皮は薄くやや硬い。

D 考　　察

(1) 河川周辺の植生

大型植物遺体の堆積状況や産出状況が不明のため、ここでは同定された種のみから考えられる植生について考察する。トチノキは利用する部位の子葉が含まれる種子以外に、未熟果が入った果実や果実片が出土していることから、遺構の近くに生育していたものが堆積したことが推定される。このほか、コブシはやや海抜の高い場所から谷沿いの斜面に生育する落葉高木、オニグルミも川沿いに生育する落葉高木であるため、本遺跡周辺に生育していたことが推定される。同定した種実の状態は良いため、堆積物中にこれら以外の微小な種実が遺存していることが想定される。遺跡周辺の詳細な植生復元には堆積物自体を水洗洗浄して大型植物遺体を検討する必要があろう。

(2) 利用された植物

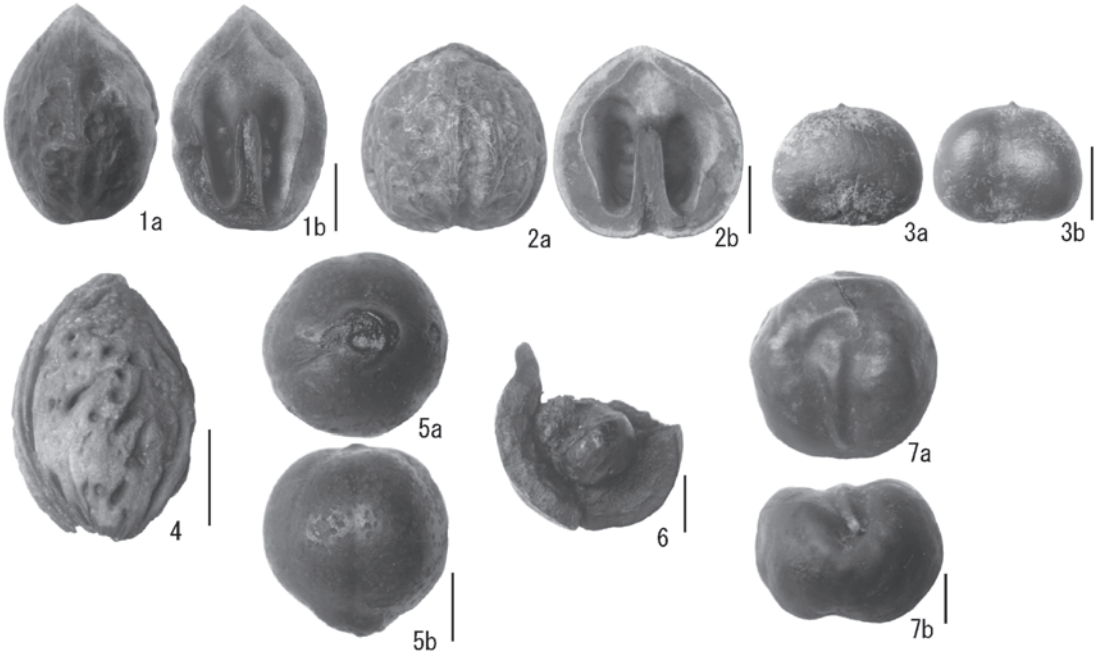
利用された植物として栽培植物であるモモがあげられる。人間によって利用後あるいは河川での祭祀などに伴って堆積した可能性がある。また形状からは明確に利用された痕跡を見いだせなかったが、オニグルミやトチノキは食用可能な種である。オニグルミはすべて半割の破片であった。古代においても道具を用いてオニグルミを割った場合、オニグルミ核の上下端が欠け、打撃痕が残ることが多い［佐々木2006］。ただし、道具を用いずに手で半分に割ることも可能で、その場合、打撃痕は残らない。そのため半割の状態が自然か人為による割れかは判断できなかった。試料番号1のトチノキは土圧または食用に剥かれた後、潰れた可能性がある。ただし、1点のみの出土であるため、人間による利用は類似した形態や微細な種子破片があるかなどを検討する必要がある。

E おわりに

田伏山崎遺跡の平安時代の河川跡から出土した14点の種実の同定を行った結果、木本植物のオニグルミとコブシ、モモ、トチノキが見いだされた。

《引用文献》

佐々木由香　2006　「種実同定」下宅部遺跡調査団編『下宅部遺跡Ⅱ』東村山遺跡調査会



（スケール1・2, 4–7：10mm, 3：5mm）

1. オニグルミ核（試料番号 4）　2. オニグルミ核（試料番号 7）　3. コブシ種子（試料番号 5）
4. モモ核（試料番号 13）　5. トチノキ未熟果（試料番号 8）　6. トチノキ未熟果（試料番号 9）
7. トチノキ未熟果（試料番号 6）

第 14 図　大型植物遺体

第Ⅵ章　ま　と　め

本遺跡では、複数の時期の遺構・遺物を検出し、これまで事実記載を行ってきたが、ここでは、中世、古代、古墳時代後期について、その後の調査成果も含め若干の検討を行い、まとめとする。

1　中　　世（沢地区南）

沢地区北では、少量の遺物が出土したが、明確な遺構は存在しなかった。したがってここでは、沢地区南について検討する。

遺構は箸状木製品が多数出土した土坑１基、柱根の残るピット２基と複数の杭列等を検出した。遺物は少量の陶磁器（12～15世紀）と大量の木製品（祭祀遺物を含む）である。遺物の出土状況と地形等の検討から、中世の集落は調査区外の南、通称西谷の上流部にあり、土石流や出水で流された遺物が下流の調査区内から出土したのであろうと考えられた。

本調査終了後、平成20年１月～２月に沢地区南の南東側で、北陸新幹線関連の道路建設に伴う立会い調査を行った。調査範囲は平成18年に行った試掘調査で発掘した５トレンチ（土師器１点、黒漆器椀１点出土）の北側、平成18年度の本発掘調査でＢトレンチが入っていた位置に当る（第２図・図版１）。この範囲は２か年のトレンチ調査で本発掘調査の対象外、遺跡は広がらないと判断されていたところである。立会い調査によって、掘立柱建物の柱穴が多数見つかり、方形・円形の柱も残存し、少量の陶磁器や下駄等の木製品も出土した。出土遺物の年代から12世紀の建物と判明した。旧地形をみると建物が検出されたところは、周辺の水田より一段高く（標高14.8m）、平坦になっており（第15図）、東側の細尾根の裾に沿って集落が形成されていたことが判明した。この立会い調査の結果は、調査者や支援業者が異なることから、本書に反映できないが、隣接する山岸遺跡の報告書で報告することになった。

これらの経緯から西谷全体が遺跡と考えられるが、尾根際の低地に集落を営むという選地は、尾根の東側に所在する山岸遺跡も同様で、標高の低いところには傾斜に沿って水田が作られていた。本遺跡の存続期間は山岸遺跡とも重複するので関係が深いと考えられるが、山岸遺跡の発掘調査は継続中であり、今後の調査の進展を待って、田伏地区全体の遺跡の総合的な評価が必要となろう。

2　古　　代（沢地区北）

A　遺構と遺物の変遷

沢地区北では10世紀前葉前後～11世紀前葉前後の遺構・遺物が出土した。春日編年［春日前掲］のⅦ期・Ⅷ期の段階に位置付けられる（第16図）。

Ⅶ１期：SD1078が流路として存在した時期で、このほかの遺構は確認されていない。出土遺物には、土師器無台椀・有台椀、灰釉陶器、須恵器瓶、鉢、土師器長甕、鍋、製塩土器等がある。主体は製塩土器で、そのほかは少量の出土である。

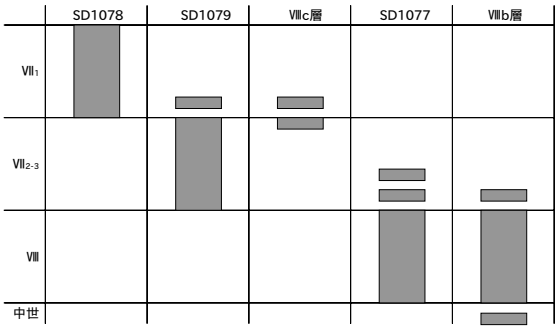
Ⅶ２－３期：SD1077・1079が流路として存在した時期で、このほかの遺構は確認されていない。出

第15図　古代～中世集落想定範囲

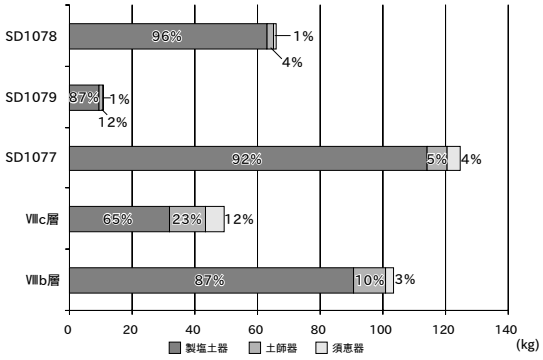
土遺物には、土師器無台椀、須恵器壺・瓶類、土師器甕、製塩土器等がある。また、Ⅷc層の出土遺物もこの時期に相当し、土師器無台椀・有台椀、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、須恵器甕、土師器甕、製塩土器等からなる。主体は製塩土器で、そのほかは少量の出土である。SD1077はⅧ期の遺物も出土したが、土層断面の観察からこの時期には流路として存在していたことを確認した。

Ⅶ2－3～Ⅷ期：SD1077が継続して存在した時期である。この後、土石流によりSD1077が埋没し、Ⅷb層が堆積する。この一連の動きは遺物の出土状況から、比較的短期間であったものと考えられる。Ⅷb層で検出した遺構には、土坑・焼土・土器集中・ピット等がある。遺物はSD1077からは、土師器無台椀、須恵器杯、須恵器壺・瓶類、甕、鉢、土師器鍋、Ⅷb層では、土師器無台椀、須恵器甕、製塩土器等が出土した。主体は製塩土器で、そのほかの出土量は少量である。

古代に所属する土器の出土量は第17図に示した。全体の個体数が不明なため単純な比較はできないが、製塩土器の占める割合が非常に高いことが確認できる。製塩土器は各時期を通して約6～9割を占め、土師器は約1～2割程度で推移する。須恵器はⅧc層・SD1077でやや多くなるが、出土量は1割に満たない。



第16図　遺構の変遷



第17図　土器重量分布

B　製 塩 土 器

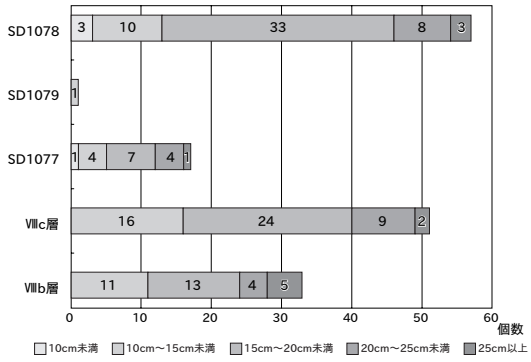
最初に成形および器形について述べる。成形は内面にナデ調整を施すものが基本である。外面は無調整で粘土紐の接合痕を残すものが多いが、底部外面では指頭圧痕が認められるもの（図版20-92）、ナデ調整が加えられるもの（図版19-74・図版20-79）を認めた。

器形については、完形もしくは完形に近い資料がないため全体形を知ることができない。口径は遺物が小破片であることから、計測は不可能であった。底部はいずれも平底である。底径は各時期とも15～20cm未満が最も多く、10～15cm未満、20～25cm未満と続く（第18図）。底部からの立ち上がりは、ほぼ垂直となるもの（図版19-75）と外傾するものがある（図版20-80）。これらの破片資料から、本遺跡出土の製塩土器は所謂バケツ形を呈し、体部から口縁にかけて外反気味に開く器形であったと推定される。類例としては、糸魚川市立ノ内遺跡［高橋ほか1988］、新潟市大藪遺跡［甘粕ほか1994］出土の製塩土器が挙げられる。

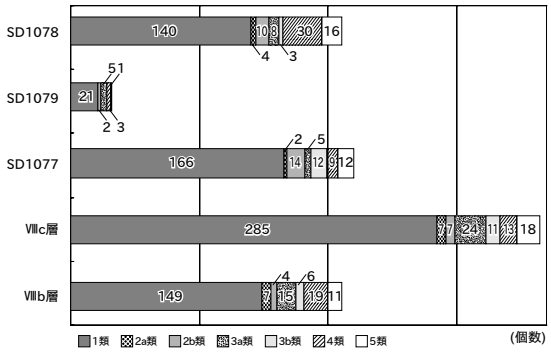
口縁部の形態は1～5類に細分され、各分類の出土量は第19図に示した。数量が最も多いのは1類である。1類は各時期の主体を占め、2～5類も点数は少ないながらも存続する。底部外面の調整についても、指頭圧痕が付くものなどは各時期で認められる。以上のことから、本遺跡における製塩土器は、時期ごとに器形・法量・成形技法が変化するという傾向は見出せなかった。

次に製塩土器の出土状況を各遺構・層位毎に述べる。既述のとおり製塩土器は、各時期において多量に出土している。その多くは小破片で出土するが、集中域を形成するものもある。沢地区北で最も古い自然流路はSD1078である。川底に近い12層では製塩土器の集中（土器集中1083）が認められ、付近で斎串が出土している。また7層では、木槌を覆い被せるように製塩土器が集中して出土した（土器集中1082）。自然流路SD1079では、曲物・火鑽臼などの木製品と共に製塩土器が集中して出土した。この地点ではトチノキの実の集中域も認められた。自然流路SD1077では集中域が認められなかったが、川底付近からは墨書土器、左岸のⅧc層からは八稜鏡、腰帯石銙等が出土した。最上層のⅧb層では製塩土器の集中域（土器集中1001）と製塩土器の小破片が多量に出土した土坑（SK1006）を確認した。このほか、焼土（焼土1002）が1基検出され、焼土面から製塩土器の小破片が出土した。

沢地区北においては、製塩関連の遺構は確認していない。Ⅷb層検出の焼土（焼土1002）は被熱も弱く、炉壁の構築などが認められないことから、製塩炉として機能した可能性が低い。県内の製塩土器が出土した遺跡については高橋保［1988・1999など］が集成している。このうち、製塩関連の遺構が出土した遺



第18図　製塩土器の底径



第19図　製塩土器口縁部数量分布

跡には、新潟市大藪遺跡［甘粕ほか前掲］、糸魚川市立ノ内遺跡［高橋ほか前掲］等がある。近年では、胎内市沢田遺跡［熊崎ほか2005、小村ほか2006］等が調査されている。時期は大藪遺跡・立ノ内遺跡が９世紀後半～10世紀前半、沢田遺跡は10世紀前葉に所属する。いずれも、製塩炉と考えられる遺構が検出されている。これに対し、製塩遺構が伴わず、出土数も数個体という遺跡がある。立地は海岸線から比較的近い位置にあり、製塩関連の遺跡と同様の傾向を示す。平安時代に属するものでは、新潟市小丸山遺跡［藤塚ほか1987］、柏崎市戸口遺跡［品田1987・1988］、柏崎市京田遺跡［品田1988］、上越市名立区東カナクソ谷遺跡［戸根ほか1987］、糸魚川市小出越遺跡［鈴木ほか1988］等がある。これらは、「製塩を行わなかった遺跡と断定することは出来ないが仮に製塩を行ったとしても一般消費のためのものではなかったと考えられる」［高橋保1999］。したがって、小規模な製塩作業や、これ以外の性格も想定される。

本遺跡は遺構・遺物の出土状況等で上記の遺跡とは内容を異にする。沢地区北においては、遺構の配置から、Ⅷｂ層の堆積以前は自然流路のみが存在する状況にあったと推定される。製塩土器は上述したように、自然流路および川岸にあたるⅧｃ層から多量に出土した。このほか流路内では、斎串・墨書土器、川岸からは八稜鏡、腰帯石銙等が出土した。以上のことから、調査区は作業場、居住域以外の性格が考慮され、出土遺物の内容から後述するように祭祀の場としての可能性が考えられる。製塩土器については、出土状況から廃棄あるいは祭祀行為との関連が想定されるが、現時点では判断できない。今後の資料の増加を待って評価すべきであろう。

C　墨書土器

本遺跡では土師器無台椀に書かれた墨書土器が１点、須恵器の小瓶に描かれた墨書土器が１点ある。墨書土器は８世紀から９世紀にかけて、官衙関連遺跡や集落遺跡から出土することが多いが、10世紀に入ると減少する。本遺跡からも出土数が少ないことから全国的な傾向と一致する。

35はⅧｃ層出土で春日編年Ⅶ2-3期（10世紀前葉～11世紀前葉）頃のもので体部外面に倒位に「田」と書かれる。「田」は墨書される文字としてよく見られるもので県内でも16遺跡、頸城地方では上越市今池遺跡［坂井1984］で出土例がある。遺跡の所在地は大字「田伏」であるが、「田伏」の地名は『西頸城郡誌』［西頸城郡教育会編1972］によれば寛文４（1665）年以前「田布施」と書いたという。奴奈川神社明細帳［大和川ふるさと会　年不詳］には「田布勢」とあり、成務天皇の時代に奴奈川社を建て、神田神戸を寄付したとされる。このことから田伏地区は奴奈川神社の神田と社を守る神戸が所在する場所と考えられる。布施は仏教用語（僧に施し与える金銭または品物の意）であるから、神仏習合が顕著になった時期

以降にこの布施の文字が使われたと考えられる。同明細帳には平安時代の貞観５（863）年の地震[1]により山が崩れ、谷が埋まり、弘安４年（1282）年の蒙古襲来時に異族退治祈願の奉幣があるという記載もあり、９世紀後半には社が鎮座していた可能性を補足する。以上のことから推測ではあるが、「田」墨書は地名の「田布施（布勢）」を省略したものである可能性が高い。

16は須恵器小瓶に描かれた墨書土器である。SD1077の川底から横になった状態で出土した。時期は春日編年Ⅷ期（11世紀前葉前後）頃のものである。須恵器の産地は不明である。このころすでに県内では、最後まで残っていた佐渡小泊窯の須恵器生産が、これ以前に終息していることから、越後以外から搬入されたものである。底部は高台が付かず、切り離しは糸切りである。口縁部は５回故意に打ち欠いている。わずかに残った頸部にも墨痕が残り、頸部近くの体部にはわずかな漆の痕跡もある。正面の６本の縦線が髭を表していると考えられ、人面墨書土器の可能性がある。人面とした場合、縦線３・４本目の上に文字（「奉之」カ）とも鼻・口を描いたとも取れるような墨書があり、一部重なるように目・眉が「八」の字を書くように表現されている。人面のような墨書の右に「大大有」の文字があり、さらに右に「〆」のような墨書がある。左には縦線の間から「大」の字が７回書かれる。文字の意味するところは不明である。墨書の範囲は器面の約２／３に書かれる。本資料については人面墨書土器とは決めかねる。

人面墨書土器は北陸では福井県には出土例が無く、石川県で３遺跡３点、富山県で５遺跡12点、県内では新潟市緒立Ｃ遺跡［渡邊1994］で２点、胎内市船戸桜田遺跡［水澤2001］で１点出土している。北陸出土のものはすべて９世紀代までのもので10世紀に降るものは無い。緒立Ｃ遺跡では水際での祭祀が想定されている。船戸桜田遺跡では川底から出土している。本遺跡出土分も川底という点では共通する。人面墨書土器は須恵器に描かれた例は少ない。2004年時点、東国で土師器以外に描かれたものは、須恵器無台杯、有台杯、灰釉陶器椀、皿、山茶碗、カマドの土製支脚、須恵器甕があるが、瓶は無い［株式会社盤古堂編2004］。

D　祭祀遺構・遺物について

沢地区北で検出した遺構からは、自然流路（SD1077、SD1078、SD1079）と岸辺で行われたと想定される平安時代の祭祀遺物が出土した。斎串、八稜鏡、墨書土器（人面墨書土器とは断定できず）等である。

斎串は律令祭祀具で最も一般的なもので祭場（祓所）の結界に使用するものである。県内でも出土例は多く、中世にも残る。八稜鏡は前述したが紐の孔が貫通しておらず、実用品ではなく祭祀用に作られた鏡（儀鏡）である可能性が高い。祭場浄化の機能があった［小林2004］とされる。歴史時代の鏡は、水霊が金物を好むという信仰とも関連して、古銭等ともに沼池に投入する風習に盛んに使用された［小野1982］。八稜鏡がどこで製作されたものかは不明であるが、福島県いわき市番匠地遺跡［樫村ほか1989］等地方でも鏡の鋳型が出土していることから、越後国内で生産されていた可能性もある。人面墨書土器も各地の出土状況を見ると、自然流路や水に関係する遺構から出土することが多い祭祀遺物である。今回出土した墨書土器は人面を書いたものとは判別できなかったが、単なる文字・記号を墨書したものではなく、小壺に書くという特殊性もあり、何らかの祭祀に使用されたことは間違いないであろう。腰帯石銙も１点出土しているが、これまで腰帯が出土すると官人の位階との関係で説明されることが多かったが、石川県寺家遺

1）『日本三代実録』に記録のある貞観５（863）年６月17日に起きた地震の記録であろう。新潟市釈迦堂遺跡［江口2000］などで同時期の噴砂などが検出されている。

跡［小島1988］のように祭祀遺構から出土することもあり、祭祀遺物とみなしてよいであろう。但し、官人が祭祀に関わったことは容易に推測できる。製塩土器も大量に出土しているが、焼土はわずか1基で、製塩を生業としていたとはいえない状況である。前述の寺家遺跡では祭祀に使用する塩を作っていたとされている。このように祭祀と塩は切り離せないもので、これは現在も変わりない。このように沢地区北は遺構・遺物の内容、出土状況等から祭祀を行う場であったと考えられる。しかし、これらの祭祀を司った人々が住居する集落跡は調査区内には存在しなかった。

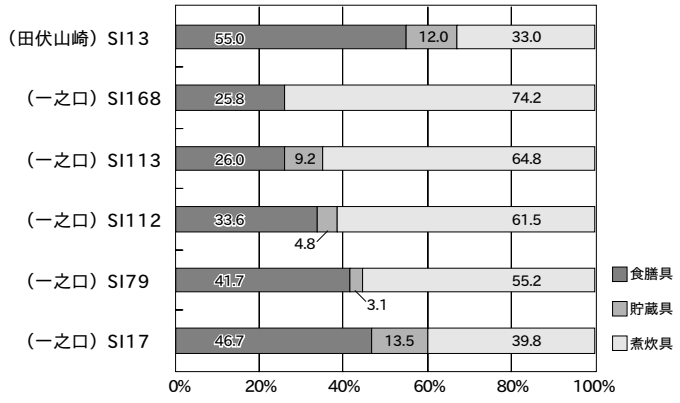
3　古墳時代後期の遺物

本遺跡からは、古墳時代後期の竪穴建物SI13一軒とその周辺から6世紀後半（相田編年Ⅲ期）［相田2004］の土師器が出土した。須恵器は全く出土していない。石器類は紡錘車1点と管玉未成品が2点である。

SI13の器種構成比率は、第11表のようである。報告個体数から構成比を算出した。杯の比率は12.12％、高杯は33.33％、鉢は9.1％、壺12.12％、甕33.33％である。次に食膳具を杯・高杯・鉢、貯蔵具を壺、煮沸具を甕として、機能別構成比率を求めたものが第20図である。食膳具は55％、貯蔵具は12％、煮沸具は33％であった。糸魚川市内のこの時期の様相が不明な部分もあることから、上越市一之口遺跡東地区［春日前掲1994］のSI168（相田編年Ⅲ期）、SI113（相田編年Ⅲ期）、SI112（相田編年Ⅲ期）、SI79（相田編年Ⅳ期）、SI17（相田編年Ⅴ期）と比較した。ただ、一之口遺跡は口縁部残存率による計測である。比率のみで比較すると、同じ相田編年Ⅲ期とされるSI168・SI113・SI112より新しいⅤ期のSI17と近い数値であるということが明らかとなった。このような一之口遺跡東地区との違いが、計測法の違いで生じたのか遺跡の特徴が現れているのか現段階では判断し得ない。今後の同時期、同地域の事例の増加を待って再検討したい。

器種	実測個体数	比率（％）
杯	4	12.12
高杯	11	33.33
鉢	3	9.1
壺	4	12.12
甕	11	33.33
合計	33	100

第11表　SI13器種構成



第20図　古墳時代後期の土器機能別構成比

要　　約

1　田伏山崎遺跡は新潟県糸魚川市大字田伏字山崎777番地ほかに所在する。

2　遺跡は日本海へ向って舌状に張り出した丘陵の末端部に位置する。調査区は尾根地区、沢地区南・北の３か所に分かれる。尾根地区は標高約24mの細尾根上、沢地区南・北は、この細尾根の西側下方の沖積地に立地し、沢地区南は標高約11m、沢地区北は約9mの地点にある。

3　発掘調査は、北陸新幹線・一般国道８号糸魚川東バイパスの建設事業に伴うもので、試掘調査は平成18年９月１日～12月６日、本発掘調査は平成19年４月２日～８月31日にかけて実施した。調査面積は3,515m^2（北陸新幹線2,365m^2、糸魚川東バイパス1,150m^2）である。

4　調査の結果、沢地区南・北では上下２層（Ⅷ層・Ⅹ層）で遺構・遺物が検出された。沢地区南では上層（Ⅷ層）で中世、下層（Ⅹ層）で弥生時代後期、古墳時代前期・後期、沢地区北では上層（Ⅷ層）で古代～中世、下層（Ⅹ層）で古墳時代前期の遺構・遺物が検出された。また、尾根地区では遺構・遺物が検出されたが、調査前に遺物包含層が削平を受けており、遺跡の詳細な内容は確認できなかった。

5　沢地区南上層では、土坑１基、ピット４基、杭列10か所、杭９本が確認された。中世の遺物には珠洲焼、天目茶碗、青磁、白磁などの陶磁器類、中世土師器、木製品、銭貨などがある。

6　沢地区南の下層では竪穴建物１軒、土器集中10か所、土坑２基、溝２条、炭化物集中域１か所、ピット８基、性格不明遺構１基が確認された。弥生時代後期の遺物には、高杯、器台、甕、鉢、壺があり、法仏式や月影式に相当する甕、壺も認められる。古墳時代前期の遺物には甕、壺、古墳時代後期には、杯、高杯、甕、鉢、壺がある。

7　沢地区北上層では、土坑４基、焼土１基、土器集中１か所、溝１条、ピット63基、杭７本、性格不明遺構１基、自然流路３条が確認された。中世の遺物には珠洲焼、青磁、中世土師器、木製品、銭貨、古代の遺物には土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器、製塩土器がある。このほか、八稜鏡、腰帯石銙、木製品などが出土した。

8　沢地区北の下層では、土器集中４か所、ピット１基、杭３本が確認された。古墳時代前期の遺物には甕のほか畿内系屈折脚の高杯がある。石製品では管玉、管玉未製品がある。

9　沢地区北の上層では、製塩土器が多量に出土したが、製塩関連の遺構は確認されていない。

10　沢地区北の古代の自然流路から、墨書土器や斎串、川岸から八稜鏡・腰帯石銙などの遺物が出土したことから、祭祀を行っていたと考えられる。

引用・参考文献

相田泰臣　2004「越後における古墳時代後期を中心とした土器の一様相」『新潟考古第15号』　新潟県考古学会

相羽重徳　2002「第Ⅳ章遺構2D自然流路」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集　寺地遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

青木重孝監修　1976　『糸魚川市史1　自然・古代・中世』　新潟県糸魚川市役所

甘粕　健ほか 1994「大藪遺跡」『新潟市史資料編1　原始古代中世』　新潟市

荒川隆史ほか 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第153集　大坪遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

安藤文一ほか 1978『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会

糸魚川市史編さん委員会　1986　『糸魚川市史資料集1　考古編』　糸魚川市役所

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号　日本貿易陶磁研究会

宇野隆夫　1991『律令社会の考古学的研究　北陸を舞台として』　桂書房

江口友子ほか 2000『新潟県埋蔵文化財調査報告書第100集　釈迦堂遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小野真一　1982『祭祀遺跡』考古学ライブラリー10　ニュー・サイエンス社

景山春樹　1974「御正体と曼荼羅　御正体と懸仏　鏡の信仰」『神道考古学講座4　歴史神道期』　雄山閣

樫村友延ほか 1989「番匠地遺跡」『番匠地遺跡　久世原館跡ー古代鋳造遺跡・中世城館跡の調査ー』　福島県（財）いわき市教育文化事業団

春日真実ほか 1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　一之口遺跡東地区』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1998「西頸城地域における古代の土器様相」『研究紀要』2　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1999「第4章古代第2節　土器編年と地域性」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会編　高志書院

加藤学ほか　2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第173集　大角地遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤学ほか　2008『新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集　姫御前遺跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子拓男　1975「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1　信濃史学会

株式会社盤古堂編　2004　『シンポジウム古代の祈り　人面墨書土器からみた東国の祭祀発表要旨・東国人面墨書土器集成』　（株）盤古堂

木島　勉　1989『糸魚川市埋蔵文化財調査報告書16　立ノ内遺跡・山崎三十三塚』　糸魚川市教育委員会

木島　勉　2007「山崎A・B遺跡ー台地に営まれた平安・鎌倉時代の集落ー」『第14回遺跡発掘調査報告会』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

久保智康　1999『中世・近世の鏡』日本の美術　第394号　至文堂

熊崎　保ほか 2005『新潟県埋蔵文化財調査報告書第144集　沢田遺跡・一杯田遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小村正之ほか 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第161集　沢田遺跡Ⅱ・桜林遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小島芳孝ほか 1988『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ　寺家遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　石川県立埋蔵文化財センター

小林謙一　2004「Ⅳ-3祭祀具」『古代の官衙遺跡Ⅱ　遺物・遺跡編』　奈良文化財研究所

小林昌二・相沢　央編　2004　『新潟県内出土古代文字資料集成』新潟大学大域プロジェクト研究資料叢刊Ⅰ

坂井秀弥　1984『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』　新潟県教育委員会

坂井秀弥・高橋保　1994　「新潟県」『日本土器製塩研究』　株式会社青木書店

坂上有紀　2003『新潟県埋蔵文化財調査報告書第118集　上浦遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
笹澤正史　2003「13子安遺跡」『上越市史資料編2　考古』上越市史編さん委員会編　上越市
佐藤友子　2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第164集　野中土手付遺跡・砂山中道下遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
品田高志　1985『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5　刈羽大平・小丸山』　柏崎市教育委員会
品田高志　1987『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第8　試掘確認調査報告・吉井水上Ⅰ遺跡・戸口遺跡』　柏崎市教育委員会
品田高志　1988「柏崎・刈羽の古代土器製塩」『柏崎市立博物館館報』No.3　柏崎市立博物館
品田高志　1997「越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸ー考古学が語る社会史ー』　北陸中世土器研究会　桂書房
椙山林継　1972「神坂峠」『神道考古学講座5　祭祀遺跡特説』　雄山閣
鈴木郁夫　1982「Ⅰ地形分類図1　地形概説」『新潟県上越地域土地分類基本調査　糸魚川』　新潟県農地部総合整備課
鈴木郁夫　2000「Ⅰ概説1地形概説」『新潟県地質図説明書（2000年度版）』　新潟県商工労働部商工振興課
鈴木俊成　1988『新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集　小出越遺跡』　新潟県教育委員会
関　雅之　1972『田伏玉作遺跡』　糸魚川市教育委員会
相馬御風　1938「身辺雑記」『相馬御風一人雑誌　野を歩む者』46　野を歩む者の会
高橋　保　1999「第Ⅳ章第4節生産と流通第4項　製塩」『新潟県の考古学』　高志書院
高橋　保ほか　1988『新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集　立ノ内遺跡』　新潟県教育委員会
髙橋保雄ほか　2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第172集　鴨深甲遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗ほか　2005「土器の分類と変遷」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊　新潟県考古学会
田中広明　2002「腰帯具の変遷と諸問題」『銙帯をめぐる諸問題』　奈良文化財研究所
辻　範朗　2006「須沢角地遺跡」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報平成16年度』　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
土田孝雄　1978「第2章調査の経過1　発掘調査に至るまで」『笛吹田遺跡』　糸魚川市教育委員会
土田孝雄ほか　1988『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』　新潟県青海町教育委員会
鶴巻康志　2004「土師器からみた中世の小地域圏　新潟県阿賀北地方を中心に」『中近世土器の基礎研究』ⅩⅦ　日本中世土器研究会
寺﨑裕助　1988「第Ⅰ章遺跡の立地と周辺の遺跡1．位置と地形」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集　原山遺跡　大塚遺跡』　新潟県教育委員会
出越茂和　2002「北陸地方の銙帯」『銙帯をめぐる諸問題』　奈良文化財研究所
寺村光晴　1966『古代玉作の研究』　吉川弘文館
寺村光晴･安藤文一ほか　1979　『大角地遺跡ー飾玉とヒスイの工房址ー』　新潟県青海町教育委員会
戸根与八郎ほか　1987　「東カナクソ谷遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第47集　宮の平ほか9遺跡』　新潟県教育委員会
戸根与八郎ほか　2006　『中世人の生活と信仰　越後・佐渡の神と仏』　新潟県立歴史博物館
永井久美男　2002『中世出土銭の分類図版』　高志書院
中澤　毅　1997「箕輪遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報平成8年度』　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
中野政樹　1969『和鏡』日本の美術　第42号　至文堂
新潟県西頸城郡教育会編　1972　『西頸城郡誌』　名著出版
平川　南　2004「人面墨書土器と海上の道」『シンポジウム古代の祈り　人面墨書土器からみた東国の祭祀発表要旨・東国人面墨書土器集成』　（株）盤古堂
平川　南　2008『全集日本の歴史第2巻　日本の原像』　小学館

平野団三・渡辺秀雄　1968　「西頸城郡」『日本歴史地名大系15　新潟県の地名』　平凡社
藤澤良祐　　2005「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表資料集』　実行委員会
藤塚　明ほか 1987『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』　新潟市教育委員会
水澤幸一　　2001『船戸桜田遺跡２次調査』　新潟県中条町教育委員会
水澤幸一・鶴巻康志　2003　「至徳寺遺跡」『上越市史叢書８　考古一中近世資料一』　上越市史専門委員会考古部会　新潟県上越市
水澤幸一　　2005「越後の中世土器」『新潟考古』第16号　新潟県考古学会
山岸洋一・田村公一　2004　『糸魚川市埋蔵文化財調査報告書47　水穂寺跡発掘調査報告書』　糸魚川市教育委員会
山崎忠良ほか 2005『新潟県埋蔵文化財調査報告書第140集　東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
大和川ふるさと会　年不詳　『麗しの里　やまとがわ』
吉岡康暢　　1994『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
渡邊裕之ほか 2005「第Ⅵ章五反田遺跡４　遺物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第138集　台の上遺跡・峪ノ上遺跡・五反田遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
渡邊裕之　　2007「山岸遺跡一平安時代末～鎌倉時代の祭祀・信仰の場一」『第14回遺跡発掘調査報告会』　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
渡邊裕之ほか 2008『新潟県埋蔵文化財調査報告書第188集　横マクリ遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
渡邊ますみ　1994『緒立Ｃ遺跡発掘調査報告書』　新潟県黒埼町教育委員会

別表１　古代土器観察表

報告NO.	調査区	遺構名・出土地点	層位	種類	器種	分類	法量（cm）			残存率	器高/	焼成	胎土	ロクロ	色調	調整	備考
							口径	現器高	底径	x/36	口径	良・並・不良		回転			
1	沢地区北	土器集中1001・32L6	Ⅷb	土師器	無台椀	BⅡ	13.4	3.5	6.4	12.0	0.26	良	石英		5YR8/4淡橙 5YR7/6橙	内外面：ロクロナデ	内面に漆付着 器面摩耗
2	沢地区北	土器集中1001-P64	Ⅷb	製塩土器		11	—	(10.6)	—	—	—	良	砂粒・小礫		7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR7/4にぶい橙	内外面：ナデ	
3	沢地区北	土器集中1001・32L6	Ⅷb	製塩土器		2b	—	(5.5)	—	—	—	良	砂粒・小礫		5YR7/6橙 7.5YR4/1褐灰	内面：ナデ	
4	沢地区北	土器集中1001・ 32L1・6	Ⅷb	製塩土器		4	—	(6.4)	—	—	—	良	砂粒・小礫		10YR7/3にぶい黄橙 10YR6/2灰黄褐	内面：ナデ	
5	沢地区北	土器集中1001	Ⅷb	製塩土器			—	(4.4)	2.5	—	—	良	砂粒・小礫		2.5YR5/6明赤褐 2.5YR6/6橙	外面：指頭圧痕	手づくね成形
6	沢地区北	33L11	Ⅷb	土師器	無台椀	AⅠ	10.4	3.6	5.6	31,5	0.34	良	石英・ 海綿骨針	—	10YR7/2にぶい橙 10YR8/2灰白	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	器面摩耗
7	沢地区北	32L6・15	Ⅷb	土師器	無台椀	BⅠ	10.4	3.4	5.6	24.5	0.32	良	石英	—	7.5YR6/3にぶい褐 10YR7/3にぶい橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	
8	沢地区北	32L2	Ⅷb	土師器	無台椀	BⅡ	12.0	3.2	5.6	9.0	0.26	良	石英	—	10YR8/4浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	器面摩耗
9	沢地区北	32L12	Ⅷb	土師器	無台椀	BⅠ	11.8	3.6	6.1	36.0	0.30	良	石英・長石 海綿骨針	右？	5YR7/6橙 5YR6/6橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	
10	沢地区北	31L5	Ⅷb	須恵器	瓶類		22.0	(3.3)	—	2.7	—	良	長石		5Y5/1灰 N5/灰	内外面：ロクロナデ	小泊窯
11	沢地区北	32L11	Ⅷb	土師器	製塩土器	2a	—	(7.7)	—	—	—	良	砂粒・小礫		5YR7/6橙 5YR7/4にぶい橙	内面：ナデ？	
12	沢地区北	SD1077・32M8	1	土師器	無台椀	BⅠ	9.4	2.9	4.4	10.4	0.30	良	石英	右	10YR7/2にぶい黄橙 7.5YR8/2灰白	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	
13	沢地区北	SD1077・33M	2	土師器	無台椀		—	(1.9)	4.8	—	—	良	石英	右？	5RP1,7/1柴黒 10YR8/3浅黄橙	内外面：ロクロナデ底部：回転糸切り	内面に漆付着 器面摩耗
14	沢地区北	SD1077・33M7	3	土師器	無台椀	AⅢ	15.6	5.3	5.6	4.5	0.33	良	石英・長石・ 砂粒	—	2.5YR5/2暗褐黄 2.5Y5/2暗灰黄	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	
15	沢地区北	SD1077	覆土	須恵器	無台杯		—	(2.8)	—	—	—	良	石英		5Y6/1灰 5Y6/1灰	内外面：ロクロナデ	小泊窯
16	沢地区北	SD1077・32L24	1	須恵器	瓶類		—	(9,8)	5.0	—	—	良			N6/灰 N6/灰	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	体部外面に墨書「大人」「大有」 底部外面にヘラ記号「×」
17	沢地区北	SD1077	1	須恵器	瓶類		14.2	3.4	—	6.5	—	良	長石		N4/灰 N5/灰	内外面：ロクロナデ	
18	沢地区北	SD1077・33M7	1	須恵器	瓶類		—	(8.3)	—	—	—	良	長石		N6/灰 N5/灰	外面：上半部ロクロナデ、下半部ロクロケズリ、内面：ロクロナデ	小泊窯
19	沢地区北	SD1077・33L2	1	須恵器	瓶類		—	(2.9)	7.4	—	—	良	長石・小礫		N6/1灰白 N6/1灰白	外面：ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	
20	沢地区北	SD1077・33M6	1	須恵器	瓶類		—	(4.3)	13.0	—	—	良	長石		N7/1灰白 N6/灰	外面：ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	小泊窯 底部内面：自然釉
21	沢地区北	SD1077	覆土	須恵器	瓶類		—	(7.1)	18.0	—	—	良	砂粒		2.5Y6/2灰黄 2.5Y6/1灰黄	外面：ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	小泊窯
22	沢地区北	SD1077	覆土	須恵器	甕		—	(7.4)	—	—	—	良	長石		N7/灰白 7.5Y5/1灰	外面：格子目叩き 内面：放射状当て具	小泊窯
23	沢地区北	SD1077・33M6	1	須恵器	甕		32.8	(4.9)	—	5.1	—	良	長石		N6/灰 N6/灰	内外面：ロクロナデ	
24	沢地区北	SD1077・32M8	3	須恵器	鉢		24.0	7.8	—	1.0	—	良	長石		7.5Y6/1灰 5Y6/1灰	内外面：ロクロナデ	小泊窯
25	沢地区北	SD1077	覆土	土師器	鍋		32,4	(8.0)	—	2.6	—	良	石英		2.5Y3/1黒褐 7.5YR6/4にぶい橙	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ、ヘラナデ	
26	沢地区北	33K7	Ⅷc	緑釉陶器	椀		—	(2.6)	—	—	—	良	砂粒		10Y4/2オリーブ灰 10Y4/2オリーブ灰	内外面：ロクロナデ	軟質
27	沢地区北	32K20	Ⅷc	灰釉陶器	有台椀		—	(2.1)	7.6	—	—	良	緻密		N8/灰白 N8/灰白	内外面：ロクロナデ	
28	沢地区北	33K13	Ⅷc	土師器	無台椀	AⅠ	11.6	4.0	4.8	24.5	0.34	良	石英・砂粒・ 小礫	右	7.5YR6/4にぶい橙 5YR6/4にぶい橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	32K-Ⅷbと接合
29	沢地区北	32L5	Ⅷc	土師器	無台椀		12.2	3.7	5.4	9.0	0.30	良	石英	右？	7.5YR7/3にぶい橙 7.5YR7/3にぶい橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	
30	沢地区北	32K13	Ⅷc	土師器	無台椀	AⅡ	12.0	4.4	5.0	27.0	0.36	良	砂粒	—	10YR3/1黒褐色 7.5YR5/3にぶい褐色	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	内面にタール状の付着物有り
31	沢地区北	32K13	Ⅷc	土師器	無台椀	AⅡ	12.3	3,8	6.3	22.0	0.30	良	石英・砂粒	—	10YR7/3にぶい黄橙 10YR6/4にぶい黄橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	器面剥落
32	沢地区北	32K12	Ⅷc	土師器	無台椀	AⅡ	12.2	4,2	5.4	9.0	0.34	良	石英・砂粒	左	7.5YR7/3にぶい橙 7.5YR7/4にぶい橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	器面摩耗
33	沢地区北	沢地区北	Ⅷc	土師器	無台椀	BⅡ	13.3	4.3	5,5	12.0	0.32	良	砂粒	—	5YR7/6橙 5YR7/6橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	器面磨耗

報告NO.	調査区	遺構名・出土地点	層位	種類	器種	分類	法量（cm）			残存率 x/36	器高/口径	焼成 良・並・不良	胎土	ロクロ回転	色調	調整	備考
							口径	現器高	底径								
34	沢地区北	32L9	Ⅶc	土師器	無台椀		—	(2.2)	.3.8	—	—	良	石英	—	7.5YR7/3にぶい橙 7.5YR7/3にぶい橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	器面磨耗
35	沢地区北	32K25	Ⅶc	土師器	無台椀	AⅢ	16.4	4.5	7.0	3.4	0.27	良	石英	—	10YR8/3浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	体部外面に墨書「田」
36	沢地区北	33K13	Ⅶc	土師器	無台椀		11.8	4.6	6.5	4.5	0.38	良	砂粒	—	5PB1.7/1青黒 7.5YR4/3褐	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り 内面：黒色処理	
37	沢地区北	32K8・12・13	Ⅶc	土師器	無台椀		15.2	5.0	4.2	14.0	0.32	良	石英	—	N黒2/ 7.5YR6/4にぶい橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り 内面：黒色処理	
38	沢地区北	33L9	Ⅶc	土師器	無台椀		15.6	5.5	6.0	18.0	0.35	良	砂粒		10YR2/1黒 7.5YR7/3にぶい橙	外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り 内面：黒色処理、ミガキ	
39	沢地区北	33L12	Ⅶc	土師器	有台椀		—	(2.3)	8.0	—	—	良	砂粒		7.5YR8/3浅黄橙 7.5YR6/3にぶい褐色	外面：ロクロナデ	
40	沢地区北	32K13	Ⅶc	須恵器	瓶類		—	(3.6)	—	—	—	良	砂粒		10YR6/1褐灰 2.5Y6/1黄灰	内外面：ロクロナデ	小泊窯
41	沢地区北	33K13	Ⅶc	須恵器	甕		—	(3.5)	—	—	—	良	砂粒		5Y7/1灰白 5Y7/1灰白		小泊窯 器面磨耗
42	沢地区北	32L	Ⅶc	須恵器	甕		—	(5.6)	—	—	—	良	長石		2.5Y6/1黄灰 N6/灰	内外面：ロクロナデ	
43	沢地区北	32K13	Ⅶc	須恵器	甕		—	(23.2)	—	—	—	良	長石		N7/灰白 N6/灰	外面：格子目叩き 内面：平行当て具	小泊窯
44	沢地区北	32L12	Ⅶc	土師器	長甕		—	(2.2)	7.6	—	—	良	砂粒		2.5Y7/1灰白 2.5Y7/1灰白		器面磨耗
45	沢地区北	32K13	Ⅶc	土師器	壷		4.0	7.4	4.2	11.0	—	良	石英		10YR5/3にぶい黄橙 10YR6/3にぶい黄橙	内面：ナデ	手づくね成形
46	沢地区北	32L7	Ⅶc	製塩土器		3a	—	(5.2)	—	—	—	良	砂粒・小礫		10YR6/2灰黄褐 10YR5/2灰黄褐	内面：ナデ	
47	沢地区北	32L7	Ⅶc	製塩土器		1	—	(5.3)	—	—	—	良	砂粒・小礫		7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR7/6橙	内面：ナデ	
48	沢地区北	32L7	Ⅶc	製塩土器		3a	—	(4.1)	—	—	—	良	砂粒・小礫		10YR7/3にぶい黄橙 10YR6/2灰黄褐	内面：ナデ	
49	沢地区北	32L7	Ⅶc	製塩土器		5	—	(5.1)	—	—	—	良	砂粒		10YR6/2灰黄褐 10YR6/2灰黄褐	内面：ナデ	
50	沢地区北	32K7	Ⅶc	製塩土器		5	—	(3.9)	—	—	—	良	砂粒		5YR7/4にぶい橙 5YR6/4にぶい橙	内面：ナデ	
51	沢地区北	32L11	Ⅶd	製塩土器		5	—	(4.1)	—	—	—	良	砂粒・小礫		2.5Y6/3にぶい黄 2.5Y6/3にぶい黄	内面：ナデ	
52	沢地区北	32L7	Ⅶc	土師器	—		5.8	1.4	3.9	36.0	0.24	良	砂粒		2.5YR6/4にぶい橙 2.5YR6/4にぶい橙		器面磨耗
53	沢地区北	SD1079・32L23	3	土師器	無台椀	AⅠ	11.6	4.3	5.0	17.2	0.37	良	石英・ 海綿骨針	右	10YR7/3にぶい黄橙 10YR8/2灰白	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	
54	沢地区北	SD 1079P-3・33L17	4	土師器	無台椀	BⅠ	12.0	4.1	5.8	10.7	0.34	良	石英・ 海綿骨針	右	7.5YR7/3にぶい橙 7.5YR7/3にぶい橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	
55	沢地区北	SD1079・32L17	3・Ⅶb	土師器	無台椀	BⅡ	12.4	4,5	5.0	19.8	0.36	良	石英・小礫	右	10YR3/2黒褐 10YR5/2灰黄褐	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	
56	沢地区北	SD 1079・33L17	3・Ⅶb	土師器	無台椀	AⅢ	14.7	5.3	4.8	10.6	0.36	良	石英・小礫	—	10YR6/3にぶい黄橙 10YR7/2にぶい黄橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	器面摩耗
57	沢地区北	SD1079・32L17	3	須恵器	瓶類		29.6	(8.0)	—	5.0	—	良	長石		2.5Y5/1黄灰 2.5Y4/1黄灰	内外面：ロクロナデ	
58	沢地区北	SD1079・32L18	3	土師器	甕		—	(1.7)	6.8	—	—	良	長石・小礫	右	10YR5/4にぶい黄褐 10YR1.7/1黒	外面下端：ヘラケズリ、内面：ロクロナデ 底部：回転糸切り	底部外面に木葉状の刻線有り
59	沢地区北	SD1079・32L12	4	製塩土器		1	—	(5.5)	—	—	—	良	砂粒・小礫		7.5YR7/6橙 7.5YR7/6橙	内面：ナデ	
60	沢地区北	SD1078・32L7	12	灰釉陶器	有台椀		—	(3.1)	7.2	—	—	良	緻密		2.5Y7/1灰白 2.5Y7/1灰白	内外面：ロクロナデ	
61	沢地区北	SD1078-P4・32L7	13	灰釉陶器	有台椀		—	(3.1)	8.0	—	—	良	緻密		N7/1灰白 5P7/1明紫灰	内外面：ロクロナデ	
62	沢地区北	SD1078・32L11・12	12	土師器	無台椀	BⅢ	14.2	5.6	6.2	14.0	0.39	良	小礫	—	10YR8/3浅黄橙 10YR8/2灰白	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	
63	沢地区北	SD1078・32L7	4	土師器	無台椀	BⅢ	15.0	4.4	8.0	.0.05	0.29	良	石英・小礫	右	10YR7/3浅黄橙 10YR7/3浅黄橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	
64	沢地区北	SD1078-P5・32L12	7	土師器	有台椀		15.4	5.8	7.0	79.0	0.37	良	石英・小礫		10YR7/3にぶい黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	内外面：ロクロナデ	器面剥落（内面）
65	沢地区北	SD1078・32L2	3	須恵器	瓶類		—	(7.8)	—	—	—	良	砂粒		N7/灰白 5GY6/1オリーブ灰	内外面：ロクロナデ	
66	沢地区北	SD1078・32L19	12	須恵器	鉢		37.0	(14.2)	—	5.2	—	良	砂粒		2.5Y8/1灰白 2.5Y8/1灰白	内外面：ロクロナデ	33K-Ⅶb・32K10-Ⅶc・ SD1077・32K19-覆土と接合
67	沢地区北	SD1078・32L2・6	4・12	土師器	長甕		—	(21.6)	6.3	—	—	良	砂粒・小礫		5YR6/8橙 5YR7/6橙	外面上半部：ロクロナデ 外面下半部：平行叩き	器面摩耗 覆土7層出土に同一個体有り

報告NO.	調査区	遺構名・出土地点	層位	種類	器種	分類	法量（cm）			残存率 x/36	器高/口径	焼成 良・並・不良	胎土	ロクロ回転	色調	調整	備考
							口径	現器高	底径								
68	沢地区北	SD1078	4	製塩土器		4	—	(5.1)	—	—	—	良	砂粒・小礫		10YR7/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	内面：ナデ	
69	沢地区北	SD1078 ・ 32L11	7	製塩土器		1	—	(11.3)	—	—	—	良	砂粒・小礫		10YR6/3 にぶい黄橙 7.5YR6/4 にぶい橙	内外面：ナデ	
70	沢地区北	SD1078	7	製塩土器		3b	—	(4.4)	—	—	—	良	砂粒・小礫		10YR7/2 にぶい黄橙 7.5YR6/6 橙	内面：ナデ	
71	沢地区北	SD1078 ・ 32L17	7	製塩土器		2a	—	(4.3)	—	—	—	良	砂粒・小礫		7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/6 橙	内面：ナデ	
72	沢地区北	SD1078 ・ 32L11	7	製塩土器		2b	—	(5.9)	—	—	—	良	砂粒・小礫		7.5YR6/2 灰褐 7.5YR4/1 褐灰	内面：ナデ	
73	沢地区北	SD1078 ・ 32L2	3	製塩土器			—	(4.5)	18.3	—	—	良	砂粒・小礫		10YR7/3 浅黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	外面：ナデ？	
74	沢地区北	SD1078 ・ 32L11	4	製塩土器			—	(6.9)	15.7	—	—	良	砂粒・小礫		7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	内外面：ナデ	32L12 土集 1082 と接合 器面剥落（内面）
75	沢地区北	SD1078 ・ 32L11	12	製塩土器			—	(7.8)	15.0	—	—	良	砂粒・小礫		2.5Y7/3 浅黄 10YR4/1 褐灰	外面：ナデ？	
76	沢地区北	土器集中 1081 ・ 32L11		土師器	無台椀	B Ⅱ	12.4	4.3	5.6	6.4	0.34	良	石英・長石	—	7.5YR7/6 橙 7.5YR8/3 浅黄橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	SD1078 覆土４層 口縁～体部内外面にタール状の付着物
77	沢地区北	土器集中 1082 ・ 32L12		土師器	鍋		—	(15.8)	—	—	—	良	砂粒		10YR4/1 褐灰 10YR1.7 黒	外面：ケズリ・ナデ 内面：ナデ	SD1078 覆土７層
78	沢地区北	土器集中 1082		製塩土器		1	—	(6.1)	—	—	—	良	砂粒・小礫		7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	内面：ナデ	SD1078 覆土７層
79	沢地区北	土器集中 1082 ・ 32L11		製塩土器			—	(8.3)	18.0	—	—	良	砂粒・小礫		2.5Y7/1 灰白 2.5Y5/2 暗灰黄	外面下半部：ナデ 底部外面：ナデ	SD1078 覆土７層
80	沢地区北	土器集中 1082 ・ 32L11 ・ 16		製塩土器			—	(14.2)	19.0	—	—	良	砂粒・小礫		10YR7/3 浅黄橙 7.5YR7/4 にぶい橙	外面・底部：ナデ	SD1078 覆土７層 器面剥落（内面）
81	沢地区北	SD1078 ・ 32L6	12	須恵器	瓶類		—	(2.2)	—	—	—	良	長石		N5/灰 2.5GY5/1 オリーブ灰	内外面：ロクロナデ	小泊窯 外面：自然釉
82	沢地区北	土器集中 1083 ・ 32L16		製塩土器		1	—	(6.8)	—	—	—	良	砂粒・小礫		7.5YR8/6 浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙	内面：ナデ	SD1078 覆土１２層
83	沢地区南	33D 1	X b	土師器	無台椀	A Ⅱ	13.1	4.2	6.2	6.5	0.32	良	石英	右	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	
84	沢地区南	沢地区南		須恵器	坏？		—	(3.8)	—	—	—	良	砂粒		7.5Y5/1 灰 N5/灰	内外面：ロクロナデ	基本層序④層、小泊窯
85	沢地区南	沢地区南	排土	須恵器	無台杯		—	(1.6)	6.0	—	—	良	長石・小礫	右	5GY6/1 オリーブ灰 5GY6/1 オリーブ灰	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	小泊窯、底部外面にヘラ記号「－」 下半部を意図的に打ち欠く
86	沢地区北	34M21	X	須恵器	平瓶・ 壺類		—	(5.0)	6.4	—	—	良	砂粒	—	2.5Y5/2 暗灰黄 2.5Y7/1 灰白	外面：ロクロナデ、下半部ロクロケズリ 内面：ロクロナデ、底部：回転糸切り	小泊窯
87	沢地区北	沢地区北拡張区一括		須恵器	壺類		—	(10.8)	—	—	—	良	砂粒		2.5Y7/1 灰 2/5YR5/1 黄灰	内外面：ロクロナデ	小泊窯
88	—	不明		須恵器	甕		—	(4.5)	—	3.3	—	良	長石		5Y5/1 灰 5Y4/1 灰	内外面：ロクロナデ	小泊窯
89	沢地区南	SD32 ・ 33B23	1	須恵器	甕		—	(3.1)	—	—	—	良	長石		N5/灰 N4/灰	内外面：ロクロナデ	小泊窯
90	沢地区北	沢地区北拡張区一括		須恵器	甕		—	(11.2)	—	—	—	良	砂粒		2.5Y6/1 黄灰 2.5Y6/1 黄灰	外面：格子目叩き 内面：放射状当て具	小泊窯
91	沢地区北	沢地区北暗渠一括		製塩土器			—	(3.0)	16.0	—	—	良	砂粒・小礫		10YR5/2 灰黄褐 7.5YR7/3 にぶい橙	底部内面：指頭圧痕	器面剥落（内面）
92	沢地区北	33L2		製塩土器			—	(3.9)	15.6	—	—	良	砂粒・小礫		10YR8/3 浅黄橙 10YR7/3 浅黄橙	外面下半：指頭圧痕 底部外面：ナデ	

別表２　弥生時代～古墳時代土器観察表

報告No.	調査区	遺構名・出土地点	層位	時代時期	種類	器種	分類	法量（cm）			残存率	器高	焼成	胎土	色調	調整	同一個体	備考
								口径	現器高	底径	X／36	／口径	良・並・不良					
1	沢地区南	SI13-58	Xc	古墳後期	土師器	杯	A1	12.5	4.2	2.2	21／36	34	普	長石	内：2.5GY2/1 外：10YR7/3	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	33B25・Xc	
2	沢地区南	SI13-101	Xb	古墳後期	土師器	杯	A2	15.4	5.1	3.0	23／36	33	普	長石	内：N1.5/0 外：10YR7/4	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	SI13-39	
3	沢地区南	SI13-34	X	古墳後期	土師器	杯	B1	12.8	4.7	7.0	27／36	37	普	長石、チャート	内：5Y3/1 外：10YR7/2	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	SI13-35	
4	沢地区南	SI13-32	X	古墳後期	土師器	杯	B1	13.4	4.3	4.1	21／36	32	普	長石	内：2.5Y3/1 外：7.5YR8/1	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ		
5	沢地区南	SI13-144	Xb	古墳後期	土師器	高杯	杯：A1Ⅱ 脚：A	12.0	9.5	8.0	12／36	79	普	長石	内：10YR1.7/1 外：7.5YR7/3	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ、脚内：ハケメ		
6	沢地区南	SI13-112	Xb	古墳後期	土師器	高杯	杯：A1Ⅱ 脚：A	12.4	8.4	8.2	1／36	68	普	長石	内：10YR2/1 外：10YR6/2	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	SI13-43・55、 33B25・Xc	
7	沢地区南	SI13-20	Xc	古墳後期	土師器	高杯	杯：A1Ⅱ 脚：A	12.5	8.2	9.3	31／36	66	普	長石	内：5PB1.7/1 外：10YR7/3	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	SI13-21～23、 33B25・Xc	
8	沢地区南	SI13-13	Xc	古墳後期	土師器	高杯	杯：A1Ⅱ 脚：A	12.8	(8.8)	10.0	9／36	69	普	長石	内：2.5Y2/1 外：10YR7/2	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	SI13-14・16・17・Xc、 33B25・Xc	
9	沢地区南	SI13-8	Xb	古墳後期	土師器	高杯	杯：A2 脚：A	16.0	8.9	8.6	11／36	56	普	長石	内：7.5Y3/1 外：10YR8/2	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	34C10・Xc	
10	沢地区南	SI13-141	Xb	古墳後期	土師器	高杯	杯：B1	14.1	(6.3)	—	26／36	—	普	長石	内：.5B2/1 外：10YR7/3	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	SI13-25・33・40・Xb	
11	沢地区南	SI13-128	Xb	古墳後期	土師器	高杯	杯：B1	14.2	15.5	—	30／36	—	良	長石	内：N3/ 外：5YR7/3	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	SI13-50・51・Xc 33B25・Xc	
12	沢地区南	SI13-19	Xc	古墳後期	土師器	高杯	杯：B1 脚：A	16.6	9.9	10.4	18／36	60	普	長石	内：2.5Y3/1 外：10YR7/4	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	SI13-27、 33B25・Xc	
13	沢地区南	SI13-111	Xb	古墳後期	土師器	高杯	杯：B2 脚：A	14.2	9.8	9.5	26／36	69	普	長石、チャート	内：5PB2/1 外：7.5YR7/6	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	SI13-5・43・54・55	
14	沢地区南	SI13-141	Xb	古墳後期	土師器	高杯	杯：B2 脚：A	15.0	8.9	9.1	21／36	59	普	長石	内：5PB2/1 外：10YR8/3	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ	SI13-36	
15	沢地区南	SI13-128	Xb	古墳後期	土師器	高杯	杯：B2	15.4	(6.3)	—	6／36	—	良	長石	内：7.5YR8/2 外：7.5YR6/3	内：ミガキ 外：ミガキ		
16	沢地区南	SI13-144	Xb	古墳後期	土師器	鉢	BⅠ	17.8	16.9	7.0	29／36	95	良	長石	内：10YR7/3 外：10YR7/3	内：ハケメ 外：ハケメ、ヘラケズリ	SI13-145・Xb	
17	沢地区南	SI13-150	Xb	古墳後期	土師器	鉢	BⅡ	10.0	7.7	5.5	31／36	77	普	長石	内：10YR7/4 外：10YR7/3	内：ハケメ、ヘラケズリ 外：ヘラケズリ		外：体部スス付着
18	沢地区南	SI13-59	X	古墳後期	土師器	鉢	BⅡ	14.0	8.9	6.6	17／36	64	普	長石	内：7.5YR7/4 外：7.5YR6/3	内：ハケメ 外底：ハケメ		
19	沢地区南	SI13-47	X	古墳後期	土師器	壺	A	8.4	(6.1)	—	5／36	—	普	長石、チャート	内：10YR7/3 外：7.5YR7/3	—		
20	沢地区南	SI13-355	Xc	古墳後期	土師器	壺	B	8.7	(3.9)	—	2／36	—	普	長石	内：10YR3/1 外：10YR4/1	—		
21	沢地区南	SI13-68	X	古墳後期	土師器	壺	C	14.0	18.6	7.4	14／36	133	普	長石	内：7.5YR7/4 外：10YR7/4	内：ハケメ、ヘラケズリ 外：ハケメ、ヘラケズリ		
22	沢地区南	SI13-102	Xb	古墳後期	土師器	壺	—	13.0	(4.9)	—	5／36	—	不良	長石、石英、チャート	内：7.5YR8/4 外：7.5YR8/4	—		
23	沢地区南	SI13-139	Xb	古墳後期	土師器	甕	A1	13.6	(7.5)	—	10／36	—	普	長石	内：10YR7/3 外：10YR6/3	内：ハケメ、ヘラケズリ 外：ヘラケズリ		
24	沢地区南	SI13-126	Xb	古墳後期	土師器	甕	A1	15.7	(18.1)	—	14／36	—	普	長石	内：10YR6/2 外：10YR4/1	内：ハケメ 外：ハケメ	SI13-62・64・66・69、 34C1・Xc	外：口縁部～体部スス付着
25	沢地区南	SI13-123	Xb	古墳後期	土師器	甕	A2	15.8	31.7	10.8	13／36	201	普	長石、チャート	内：10YR8/3 外：10YR6/3	内：ハケメ 外：ハケメ、ヘラケズリ	SI13-139	外：体部スス付着、東北南部系？
26	沢地区南	SI13-103	Xb	古墳後期	土師器	甕	A2	18.4	(3.4)	—	3／36	—	良	長石	内：10YR7/3 外：2.5Y3/1	外：ハケメ		口縁端部の調整粗雑
27	沢地区南	SI13-139	Xb	古墳後期	土師器	甕	B1	15.7	(20.8)	—	9／36	—	普	長石、チャート	内：7.5YR6/4 外：7.5YR7/58	内：ヘラケズリ 外：ハケメ、ヘラケズリ		
28	沢地区南	SI13-139	Xb	古墳後期	土師器	甕	B1	16.6	(4.9)	—	9／36	—	良	長石	内：10YR6/4 外：5YR6/6	内：ハケメ 外：ハケメ		
29	沢地区南	SI13-139	Xb	古墳後期	土師器	甕	B1	16.8	(14.2)	—	17／36	—	普	長石	内：7.5YR8/4 外：7.5YR8/5	内：ヘラケズリ 外：ハケメ	SI13-7	外：口縁部～体部スス付着
30	沢地区南	SI13-123	Xb	古墳後期	土師器	甕	B1	17.0	(15.9)	—	32／36	—	普	長石	内：10YR7/4 外：10YR7/4	内：ハケメ、ヘラケズリ 外：ハケメ、ヘラケズリ	SI13-124・139・Xb	外：口縁部～体部スス付着
31	沢地区南	SI13-144	Xb	古墳後期	土師器	甕	B1	19.8	(18.5)	—	17／36	—	普	長石、チャート	内：10YR6/3 外：10YR6/3	内：ハケメ、ヘラケズリ 外：ハケメ		外：体部スス付着
32	沢地区南	SI13-128	Xb	古墳後期	土師器	甕	B2	17.8	(10.7)	—	33／36	—	良	長石	内：7.5YR5/4 外：5YR6/6	内：ヘラケズリ 外：ハケメ	SI13-52・53、 33B25・34C7・Xc	
33	沢地区南	SI13-128	Xb	古墳後期	土師器	甕	B2	23.4	(8.7)	—	5／36	—	良	長石	内：7.5YR6/6 外：7.5YR7/6	内：ヘラケズリ 外：ハケメ、ヘラケズリ		

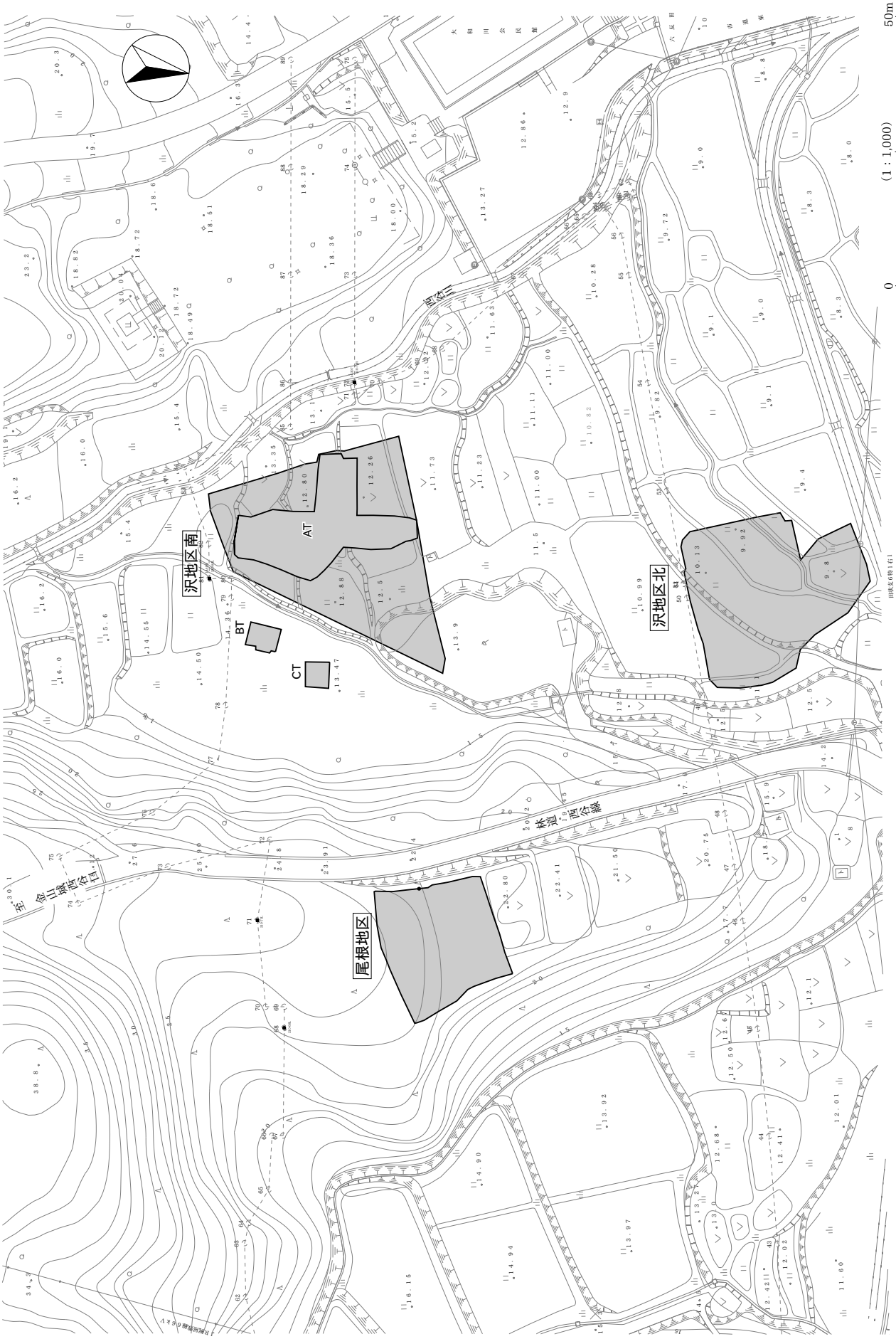
報告No.	調査区	遺構名・出土地点	層位	時代時期	種類	器種	分類	法量（cm）			残存率	器高	焼成	胎土	色調	調整	同一個体	備考
								口径	現器高	底径	X／36	／口径	良・並・不良					
34	沢地区南	SI13-206	Xc	弥生後期	弥生土器	脚（器台）	—	—	(2.0)	17.2	—	—	普	長石、チャート	内：10YR7/2 外：10YR7/2	外：赤彩	34B4・13・21・Xc	
35	沢地区南	土器集中46 (33C11)	Xc	弥生後期	弥生土器	壺	D	13.2	(10.9)	—	27／36	—	普	長石	内：10YR6/3 外：10YR5/2	内：ハケメ 外：ハケメ		外：体部スス付着
36	沢地区南	土器集中47 (34C3)	Xc	弥生後期	弥生土器	脚（高杯or器台）	—	—	(14.3)	—	—	—	良	金雲母、長石、石英	内：10YR7/2 外：7.5R4/8	擬凹線1本書き、 孔2個1単位、3か所 内：ハケメ 外：ミガキ、赤彩		棒状脚
37	沢地区南	土器集中48 (34C4)	Xc	弥生後期	弥生土器	甕	A	16.9	24.1	4.7	22／36	143	普	長石	内：10YR6/6 外：10YR5/3	内：ハケメ 外：ハケメ	34B1・Xc	外：口縁部～体部スス付着
38	沢地区南	土器集中49 (34c)	Xc	弥生後期	弥生土器	甕	A	14.8	20.6	5.0	30／36	139	普	石英	内：10YR7/2 外：10YR5/2	内：ハケメ 外：ハケメ	土器集中50（34C9・Xc）	外：口縁部～体部スス付着
39	沢地区南	土器集中49 (34c)	Xc	弥生後期	弥生土器	甕	B1	18.4	(8.2)	—	29／36	—	不良	長石、石英	内：10YR8/3 外：10YR8/3	内：ハケメ 外：ハケメ		
40	沢地区南	土器集中52－199 (33c)	Xb	古墳後期	土師器	高杯	杯：B1	12.0	(4.5)	—	8／36	—	普	長石	内：10YR8/2 外：10YR7/2	内：ミガキ 外：ミガキ	土器集中52-200・204・497・Xb	
41	沢地区南	土器集中52－153 (33c)	Xb	古墳後期	土師器	高杯	杯：B1 脚：A	14.0	8.6	9.2	36／36	61	普	長石	内：2.5Y3/1 外：7.5YR8/3	内：黒色処理、ミガキ	土器集中52-160・164・Xb	
42	沢地区南	土器集中52-396 (33c)	Xc	古墳後期	土師器	壺	D	体部径10.8	(5.9)	6.4	—	—	不良	長石、チャート	内：10YR7/4 外：10YR7/4	—	土器集中52-401～404・558・Xc、33C24・Xc	
43	沢地区南	土器集中52 (33C19)	Xb	古墳後期	土師器	甕	A2	19.2	(16.0)	—	19／36	—	普	長石	内：10YR7/3 外：10YR7/3	内：ハケメ、ヘラケズリ 外：ハケメ		外：体部スス付着
44	沢地区南	土器集中52-266 (33c)	Xb	古墳後期	土師器	甕	B1	16.8	(9.9)	—	33／36	—	普	長石	内：10YR8/1 外：10YR7/2	内：ヘラケズリ 外：ハケメ	土器集中52-268・272・520・523・525・Xb	
45	沢地区南	土器集中52-335 (33c)	Xb	古墳後期	土師器	甕	B2	16.4	(8.4)	—	7／36	—	普	長石	内：10YR6/3 外：7.5YR7/4	内：ハケメ	土器集中52-349～351・356・Xb	
46	沢地区南	土器集中52－342 (33c)	Xb	古墳後期	土師器	甕	B2	16.6	(10.2)	—	10／36	—	普	長石	内：10YR7/4 外：7.5YR7/4	内：ハケメ 外：ハケメ	土器集中52-343・346・544・Xb	
47	沢地区南	土器集中56 (33C8)	Xc	弥生後期	弥生土器	器台	—	—	(4.4)	—	—	—	良	精良	内：7.5YR6/4 外：7.5YR7/4	外：赤彩		
48	沢地区南	土器集中56D (33C9)	Xc	弥生後期	弥生土器	器台	—	—	(6.4)	—	—	—	不良	石英、チャート	内：10YR7/2 外：10YR7/2	—		
49	沢地区南	土器集中56 (33C8)	Xc	弥生後期	弥生土器	壺	B	13.4	(16.7)	—	30／36	—	普	長石、石英	内：7.5YR7/3 外：5YR7/4	内：ハケメ 外：ハケメ、ミガキ	33C4・Xb、33C8・13・Xc	
50	沢地区南	土器集中56-A (33C14)	Xc	弥生後期	弥生土器	甕	A	13.4	17.6	4.6	24／36	131	普	長石、石英	内：7.5YR7/3 外：7.5YR7/3	内：ハケメ 外：ハケメ		
51	沢地区南	土器集中56A (33C14)	Xc	弥生後期	弥生土器	甕	A	18.0	(8.4)	—	7／36	—	普	長石	内：10YR7/4 外：10YR7/4	内：ヘラケズリ 外：ハケメ、刺突？1周		
52	沢地区南	土器集中56 (33C9)	Xc	古墳前期	土師器	甕	—	16.8	(8.4)	—	36／36	—	普	長石、石英、チャート	内：10YR8/3 外：10YR7/2	内：ヘラケズリ 外：ハケメ	33C3・4・Xc	外：口縁部スス少量付着
53	沢地区南	土器集中57C-2 (33C17)	Xc	弥生後期?	弥生土器	鉢	—	—	—	—	—	—	普	長石	内：10YR8/2 外：10YR8/2	外：把手貼付け、赤彩？		台付鉢の把手か。孔貫通。
54	沢地区南	土器集中57C-2 (33C17)	Xc	弥生後期?	弥生土器	鉢	—	9.6	(5.6)	—	5／36	—	良	長石、石英、チャート	内：10YR6/3 外：10YR6/3	内：ケズリ 外：把手貼付け、赤彩？		台付鉢の把手か、上下に孔貫通。
55	沢地区南	土器集中57A-1 (33C18)	Xc	弥生後期	弥生土器	壺	C	15.0	(11.6)	—	25／36	—	不良	長石、石英	内：10YR8/3 外：10YR8/2	内：ミガキ 外：ハケメ、ミガキ	33C20・Xc	
56	沢地区南	土器集中57D-2 (33C17)	Xc	弥生後期	弥生土器	壺	D	6.2	(5.9)	—	4／36	—	不良	長石、石英、チャート	内：7.5YR8/4 外：7.5YR7/3	外：ハケメ、化粧土？		
57	沢地区南	土器集中57C-1 (33C17)	Xc	弥生後期	弥生土器	壺	D	14.0	(25.8)	—	5／36	—	普	長石	内：10YR7/3 外：10YR7/2	内：ハケメ 外：ハケメ		
58	沢地区南	土器集中57D-1 (33C17)	Xc	弥生後期	弥生土器	甕	B2	17.4	(10.4)	—	34／36	—	普	粗雑、3～8mm大の長石、石英、	内：10YR6/3 外：7.5YR8/4	内：ハケメ 外：ハケメ、ヘラケズリ		
59	沢地区南	土器集中58 (33D9)	Xb	弥生後期	弥生土器	甕	A	18.4	25.4	5.3	6／36	138	普	長石	内：2.5Y3/1 外：2.5Y7/4	内：ハケメ、ヘラケズリ 外：ハケメ、ヘラケズリ		内：黒変 外：体部中央スス少量付着
60	沢地区北	土器集中1085 (32L3・4)	X	古墳前期	土師器	甕	—	13.8	(6.0)	—	36／36	—	不良	長石	内：10YR7/2 外：10YR8/2	内：ヘラケズリ		外：口縁部スス付着、S字台付甕
61	沢地区北	土器集中1087 (32L15)	X	古墳前期末	土師器	高杯	—	15.2	(15.2)	(8.0)	12／36	—	普	長石	内：5YR7/8 外：5YR7/8	内：ハケメ 外：ミガキ、脚内：ハケメ		畿内系屈折脚高杯
62	沢地区北	土器集中1087 (32L15)	X	古墳前期末	土師器	甕	—	14.8	(4.3)	—	7／36	—	普	長石	内：10YR6/3 外：10YR2/1	内：ハケメ 外：ハケメ		外：口縁部スス付着
63	沢地区北	SD1078 (32L2)	2	弥生後期	弥生土器	脚（器台）	—	—	(5.3)	26.0	—	—	普	長石	内：7.5YR8/6 外：2.5Y5/1	孔1個有り		
64	沢地区南	34B12	Xc	古墳後期	土師器	杯	B1	14.0	4.4	6.0	6／36	31	普	長石	内：2.5Y3/1 外：10YR7/2	内：黒色処理、ミガキ	34B16・Xc	
65	沢地区南	33C25	Xa	古墳後期	土師器	高杯	杯：A1Ⅱ 脚：A	14.0	8.5	9.4	1／36	61	普	長石	内：2.5Y3/1 外：7.5YR5/3	内：黒色処理、ミガキ		
66	沢地区南	34B16	Xb	古墳後期	土師器	高杯	杯：A1Ⅱ 脚：A	13.8	8.5	8.4	7／36	62	普	長石、石英	内：5PB2/1 外：10YR7/3	内：黒色処理、ミガキ 脚内ナデ粗雑	34B21・Xb	

報告No.	調査区	遺構名・出土地点	層位	時代時期	種類	器種	分類	法量（cm）			残存率	器高	焼成	胎土	色調	調整	同一個体	備考
								口径	現器高	底径	X／36	／口径	良・並・不良					
67	沢地区南	34B22	Xc	古墳後期	土師器	高杯	杯：A1Ⅱ 脚：A	13.0	9.3	9.8	19／36	72	普	長石	内：5PB1.7/1 外：10YR7/4	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ		
68	沢地区南	34C2	Xc	古墳後期	土師器	高杯	杯：A1Ⅰ 脚：B	17.0	12.2	10.1	12／36	72	普	精良、チャート	内：10YR2/1 外：10YR8/3	内：黒色処理、ミガキ 外：ミガキ、脚内：ミガキ		
69	沢地区南	34B13	Xb	古墳後期	土師器	鉢	A	体部径 13.5	(5.9)	—	—	—	普	長石、石英	内：10YR7/2 外：2.5Y2/1	内：ハケメ 外：ハケメ		外：黒変
70	沢地区南	34C2	Xc	古墳後期	土師器	壺	D	8.4	12.7	6.1	18／36	151	普	長石、チャート	内：7.5YR7/.4 外：10YR7/2			
71	沢地区南	34D2	Xa	古墳後期	土師器	壺	C	16.2	(8.5)	—	22／36	—	普	長石、石英	内：10YR6/3 外：7.5YR6/4	内：ハケメ 外：ケズリ		
72	沢地区南	33D9	Xb	古墳後期	土師器	甕	A1	12.4	(9.7)	—	9／36	—	普	長石	内：10YR8/3 外：2.5Y7/2	内：ヘラケズリ 外：ハケメ		外：口縁部～体部黒変
73	沢地区南	34D11	Xa	古墳後期	土師器	甕	B2	19.8	(20.5)	—	12／36	—	普	長石	内：10YR7/2 外：10YR7/2	内：ハケメ 外：ハケメ、ヘラケズリ		
74	沢地区南	34D1	Xa	古墳前期？	土師器	甕	—	13.6	(7.4)	—	13／36	—	普	長石	内：5YR1.7/1 外：10YR7/2	口縁部内側へ折り返し内：ハケメ、外：ハケメ		内：黒変、布留甕か？
75	沢地区南	34B2	Xb	弥生後期	弥生土器	脚（高杯）	—	—	(3.3)	23.0	—	—	良	長石、チャート	内：10YR6/1 外：10YR6/1	内：ミガキ、赤彩 内：ミガキ、赤彩		
76	沢地区南	33C15	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	器台	—	—	(4.3)	—	—	—	良	精良	内：2.5Y4/2 外：10YR5/2	—		
77	沢地区南	33C24	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	鉢	AⅡ	14.0	6.0	4.0	1／36	43	不良	長石	内：10YR8/2 外：10YR5/1	外：黒色処理？		
78	沢地区南	33C20	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	鉢	AⅠ	16.0	(10.1)	—	10／36	—	普	長石、石英	内：7.5YR8/3 外：5YR7/4	外：ハケメ		
79	沢地区南	34B13	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	壺	A	体部径 16.1	(6.8)	—	—	—	良	精良	内：10 YR7/3 外：2.5YR3/1	内：指頭圧痕 外：黒色処理、ミガキ		長頸壺、 頸部凸帯１条、体部凸帯３条
80	沢地区南	—	—	弥生後期～終末	弥生土器	壺	E	13.0	(6.5)	—	4／36	—	普	長石	内：10YR7/4 外：7.5YR7/4	内：ミガキ		
81	沢地区南	33C19	X	弥生後期～終末	弥生土器	壺	F	17.0	31.5	(6.3)	18／36	—	普	長石、石英、チャート	内：7.5YR8/3 外：7.5YR7/3	内：ハケメ、ヘラケズリ 外：ヘラケズリ		二重口縁壺
82	沢地区南	34B13	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	壺		—	(4.4)	—	—	—	普	石英、チャート	内：10YR7/3 外：10YR7/3	—		
83	沢地区南	34B21	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	甕	A	16.0	(3.0)	—	3／36	—	良	長石	内：10YR6/2 外：10YR4/1	外：ハケメ		内外：黒変
84	沢地区南	34B17	Xb	弥生後期～終末	弥生土器	甕	A	19.4	(4.8)	—	6／36	—	普	長石、チャート	内：10YR7/3 外：10YR6/3	内：ハケメ 外：ハケメ		
85	沢地区南	33D20	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	甕	B1	13.6	(11.9)	—	8／36	—	普	長石	内：10YR7/3 外：10YR0/2	外：ハケメ		外：体部下半スス付着
86	沢地区南	33C25	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	甕	B1	16.0	(3.5)	—	5／36	—	良	長石	内：10YR6/3 外：2.5Y4/1	内：ハケメ		
87	沢地区南	34C12	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	甕	B1	16.6	(4.1)	—	2／36	—	普	長石、石英	内：7.5YR6/6 外：7.5YR6/6	外：ハケメ		外：口縁部スス付着
88	沢地区南	34B16	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	甕	B1	17.4	(11.5)	—	1／36		不良	長石、石英	内：10YR8/2 外：10YR8/2	内：ハケメ 外：ハケメ、刺突１周		外：口縁部～体部スス付着
89	沢地区南	34C14	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	甕	B2	13.0	(6.0)	—	12／36	—	普	長石	内：10YR5/1 外：10YR5/2	内：ヘラケズリ 外：ハケメ		外：口縁部～体部スス付着
90	沢地区南	34B13	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	甕	B3	17.5	(5.6)	—	3／36	—	普	長石	内：10YR5/1 外：2.5Y7/3	内：ヘラケズリ 外：ハケメ		
91	沢地区南	34C17	Xc	弥生後期～終末	弥生土器	甕	B4	14.6	7.4	—	17／36	—	良	長石、石英	内：7.5YR5/4 外：7.5YR5/4	内：ハケメ 外：ハケメ		外：口縁部～体部スス付着

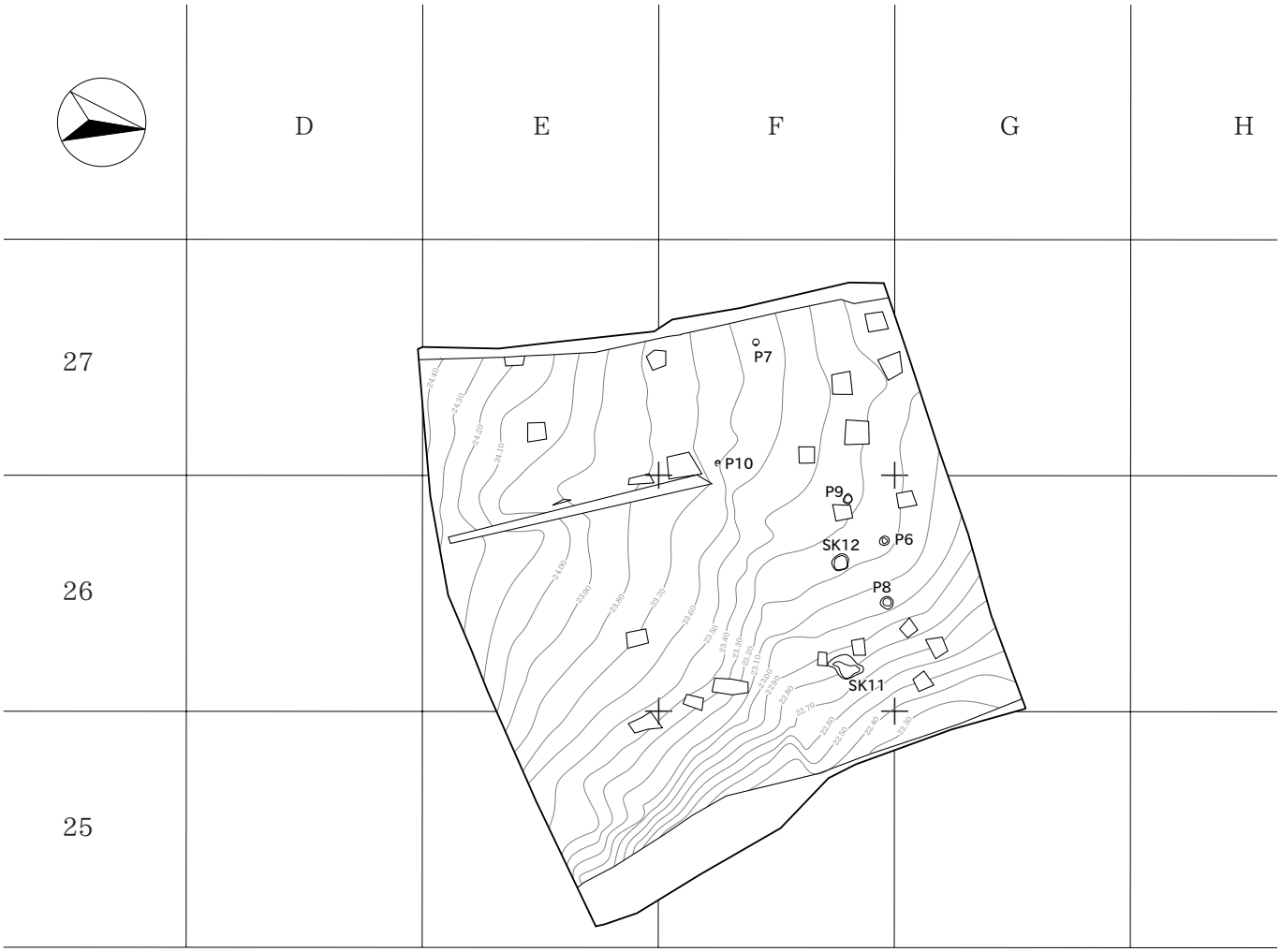
図　　版

調査範囲と周辺の地形

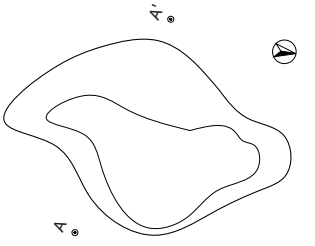
図 版 1



尾根地区　遺構配置図・遺構個別図

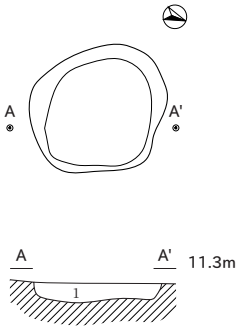


SK11



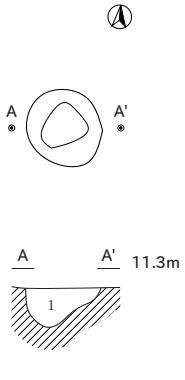
SK11
1 暗茶褐色粘質土　φ5mmほどの炭化物をまばらに少量含む。
粘性あり、しまりあり。

SK12



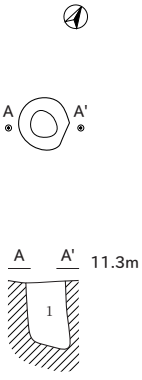
SK12
1 黄褐色粘質土　粘性あり、しまりややあり。

P6



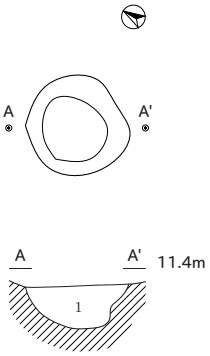
P6
1 黄褐色粘質土　粘性あり、しまりややあり。

P7



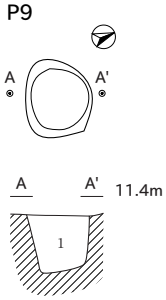
P7
1 黄褐色粘質土　粘性あり、しまりややあり。

P8



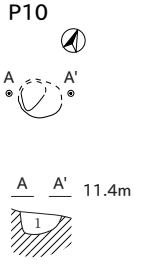
P8
1 黄褐色粘質土　粘性あり、しまりややあり。

P9

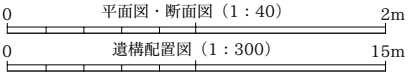


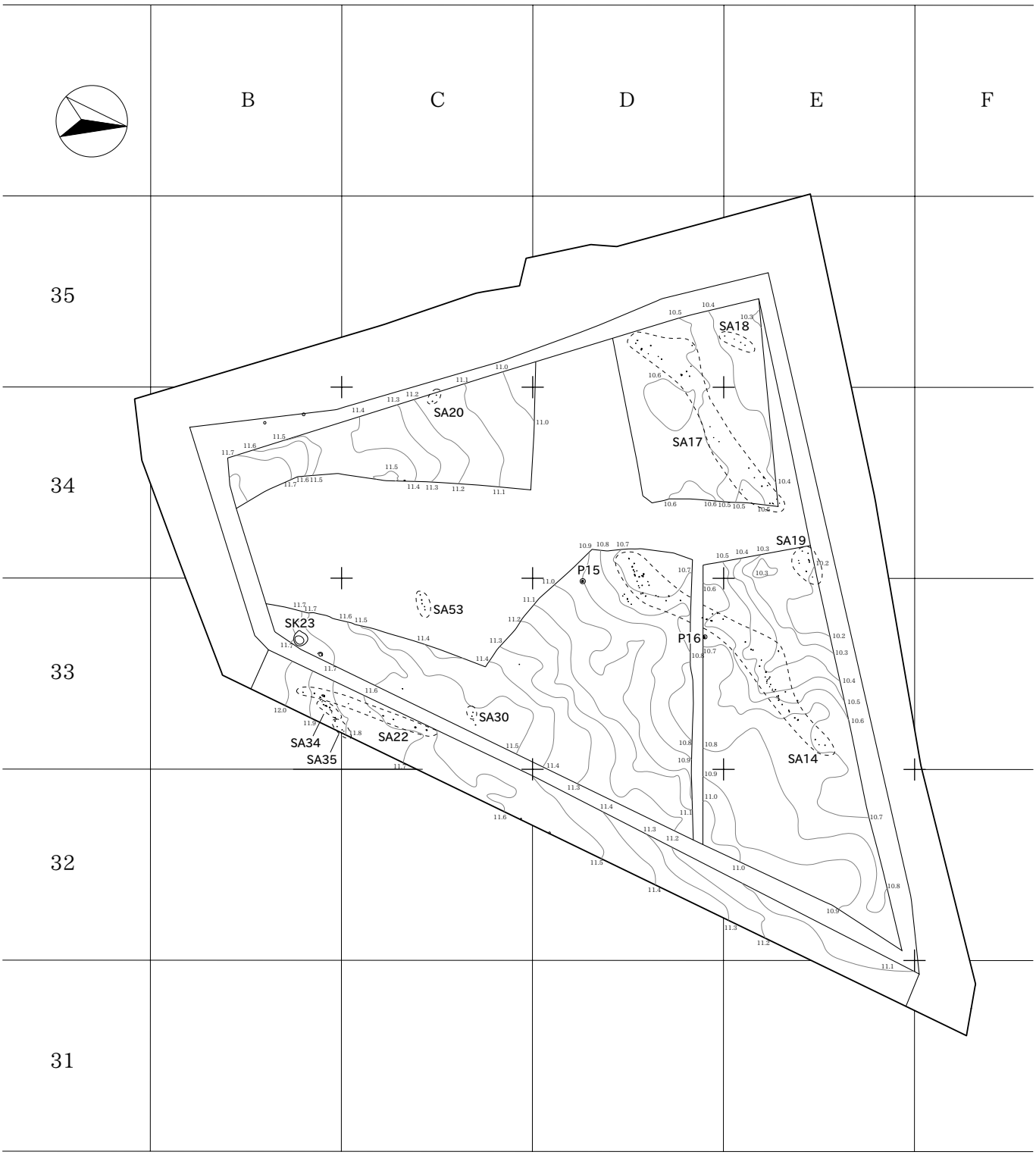
P9
1 黄褐色粘質土　粘性あり、しまりややあり。

P10



P10
1 黄褐色粘質土　粘性あり、しまりややあり。



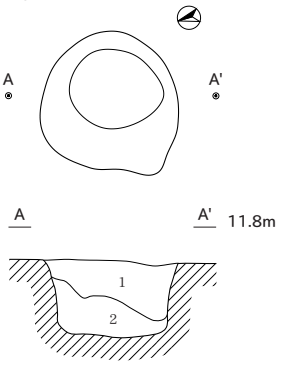

B
C
D
E
F
35
34
33
32
31
SA18
SA20
SA17
SA19
P15
P16
SA53
SK23
SA30
SA34
SA35
SA22
SA14

0　(1：300)　15m

SA14-44
SA14-43
SA14-41
SA14-42
SA14-40
SA14-39
SA14-55
SA14-53
SA14-52
SA14-51
SA14-54
SA14-46
SA14-71
SA14-70
SA14-45
SA14-26
SA14-38
SA14-58
SA14-57
SA14-37
SA14-56
SA14-49
SA14-50
SA14-36
SA14-48
SA14-47
SA14-35
SA14-69
SA14-34
SA14-33
SA14-32
10.7
10.8
10.8
10.7
SA14-31
10.6
P16
SA14-30
SA14-29
SA14-59
SA14-65
SA14-28
33D 34D
33E 34E
10.5
10.4
SA14-27
SA14-23
SA14-24
10.3
SA14-22
SA14-58
SA14-20
SA14-21
SA14-18
SA14-17
SA14-60
SA14-19
SA14-16
SA14-61
SA14-15
SA14-67
SA14-62
SA14-14
SA14-13
SA14-10
SA14-9
SA14-63
SA14-66
SA14-8
SA14-64
SA14-12
SA14-25
SA14-6
SA14-7
SA14-5
SA14-4
SA14-11
SA14-3
SA14-2
SA14-1
SA19-9
SA19-8
SA19-7
SA19-2
SA19-4
SA19-5
SA19-3
SA19-1
10.2
SA17-20
SA17-21
SA17-18
SA17-29
SA17-17
10.6
SA17-28
10.6
10.5
SA17-12
SA17-14
SA17-13
SA17-11
SA17-19
SA17-24
SA17-25
SA17-26
10.6
10.5
10.5
34D 35D
34E 35E
10.4
SA18-1
SA18-2
SA18-3
SA18-4
SA17-7
SA17-10
SA17-9
SA17-5
SA17-8
SA17-4
SA17-2
SA17-1
SA17-3
SA17-27
10.5
10.4
10.3
0
(1 : 40)
m

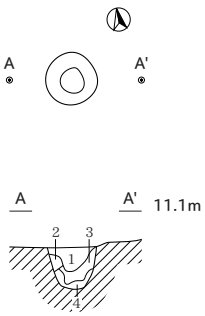
12.0
11.9
11.8
11.7
11.6
11.7
11.7
11.7
11.6
11.5
11.4
SA22-8
SA22-9
SA34-10
SA34-9
SA34-8
SA34-6
SA34-7
SA22-7
SA34-5
SA34-4
SA34-2
SA34-3
SA34-11
SA34-1
SA22-10
SA34-12
SA35-3
SA35-4
SA35-2
SA35-1
SA22-1
SA22-2
SA22-6
SA22-3
SA22-4
SA22-5
杭28
杭27
杭26
SA30-1
SA30-2
SK23
柱根21
SA53-5
SA53-3
SA53-4
SA53-1
SA53-2
A
A'
B
B'
33B | 34B
33C | 34C
0
(1 : 40)
2m

SK23



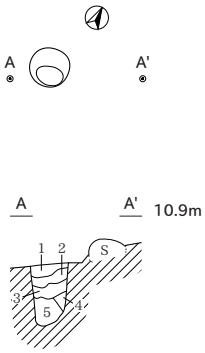
SK23
1 黒褐色シルト　炭化物多量含む。箸状木製品を多量含む。
Xa層の土をブロック状に含む。
鉄分の沈着がみられる。
粘性なし、しまりあり。
2 黒色粘質シルト　Xa層の土をブロック状に少量含む。
粘性あり、しまりあり。

P15



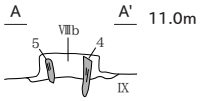
P15
1 暗褐色シルト　炭化物、鉄分含む。
粘性ややあり、しまりあり。
2 緑灰色シルト　粘性あり、しまりなし。
3 灰オリーブシルト　鉄分を多く含む。砂、
φ10mmの礫を含む。
粘性あり、しまりなし。
4 暗オリーブ褐色シルト　砂を含む。
粘性あり、しまりなし。

P16

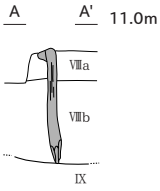


P16
1 オリーブ黒色シルト　炭化物微量含む。
粘性ややあり、しまりあり。
2 オリーブ黒色シルト　砂を含む。
粘性あり、しまりなし。
3 オリーブ黒色シルト　粘性あり、しまりなし。
4 黒色シルト　砂を微量含む。
粘性あり、しまりあり。
5 オリーブ黒色シルト　粘性あり、しまりあり。

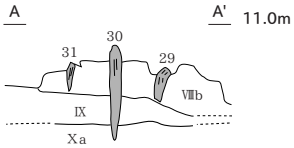
SA14-4・5



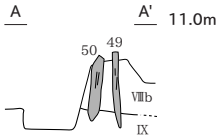
SA14-21



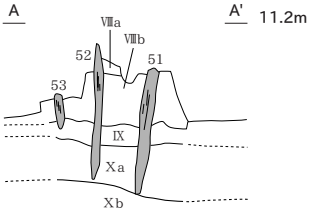
SA14-29・30・31



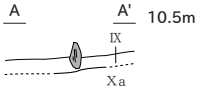
SA14-49・50



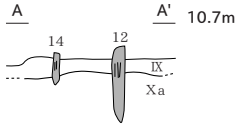
SA14-51・52・53



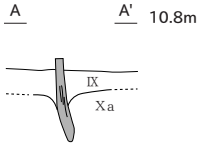
SA17-8



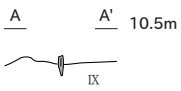
SA17-12・14



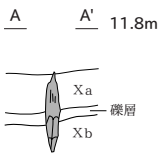
SA17-18



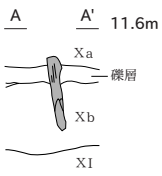
SA18-3



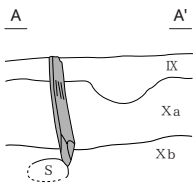
SA22-4



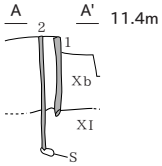
SA22-5



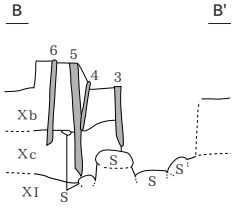
SA22-7



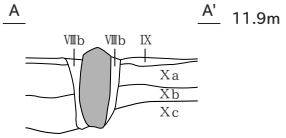
SA34-1・2



SA34-3～6

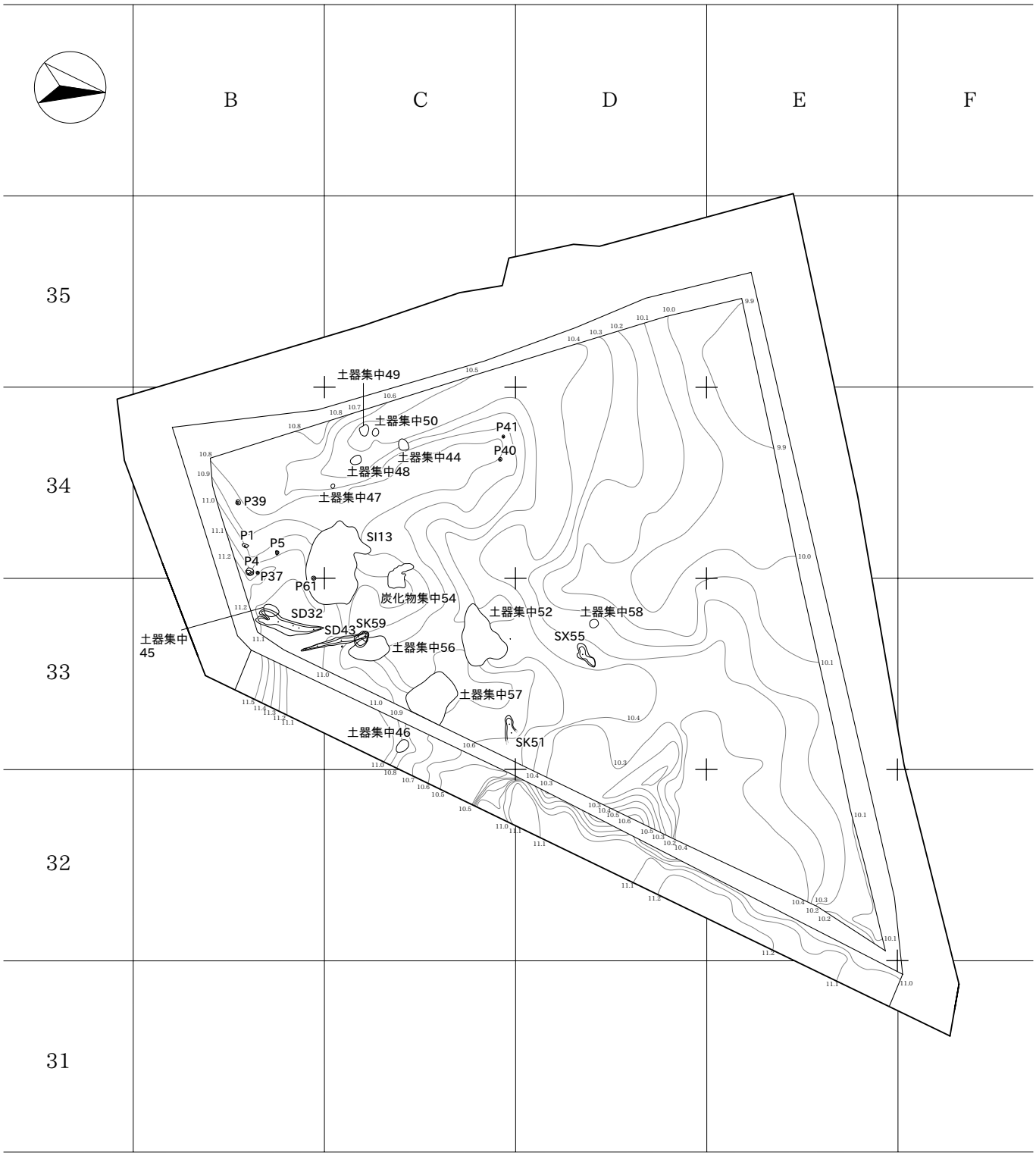


柱根21

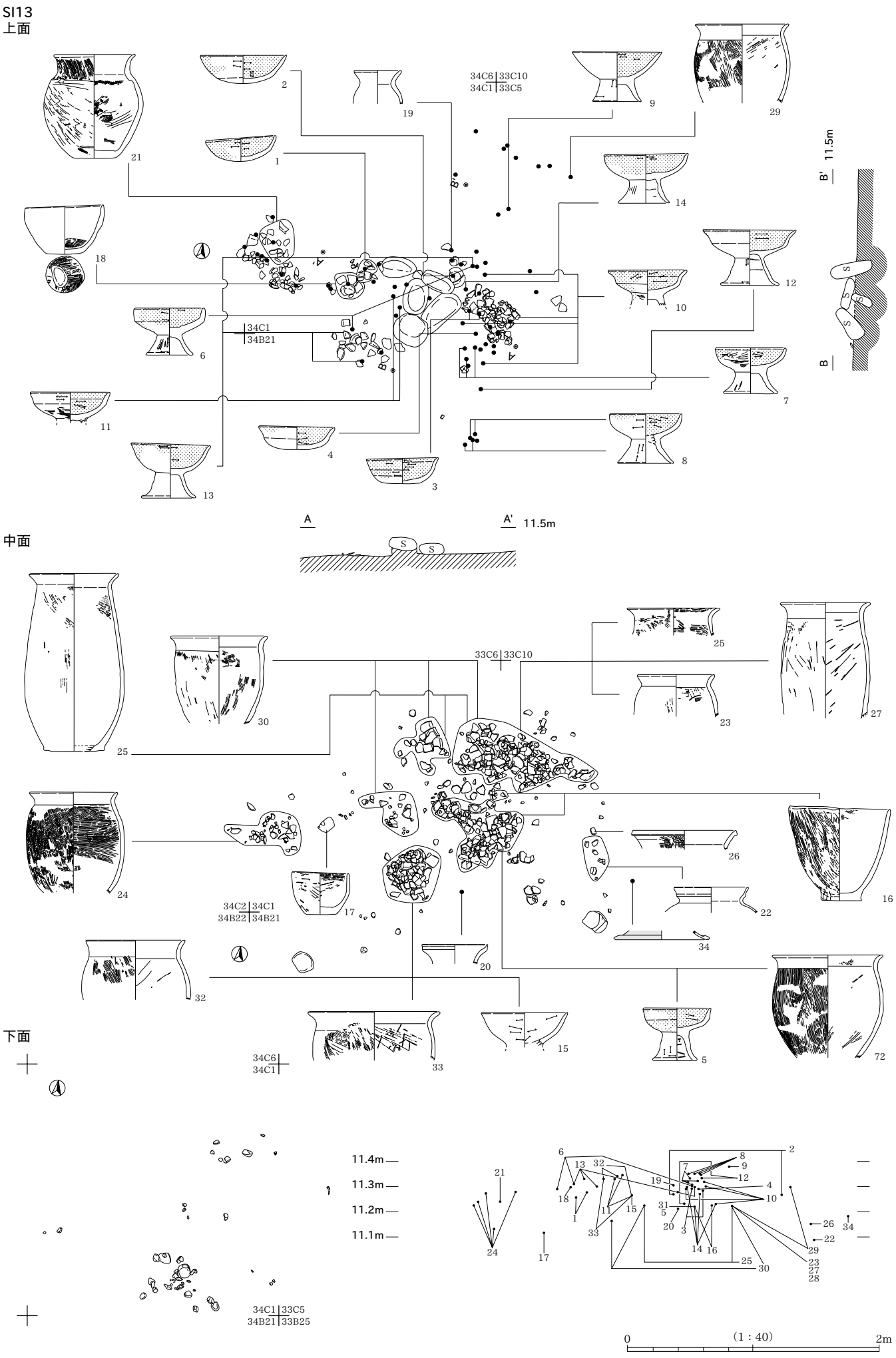


0　(1：40)　2m

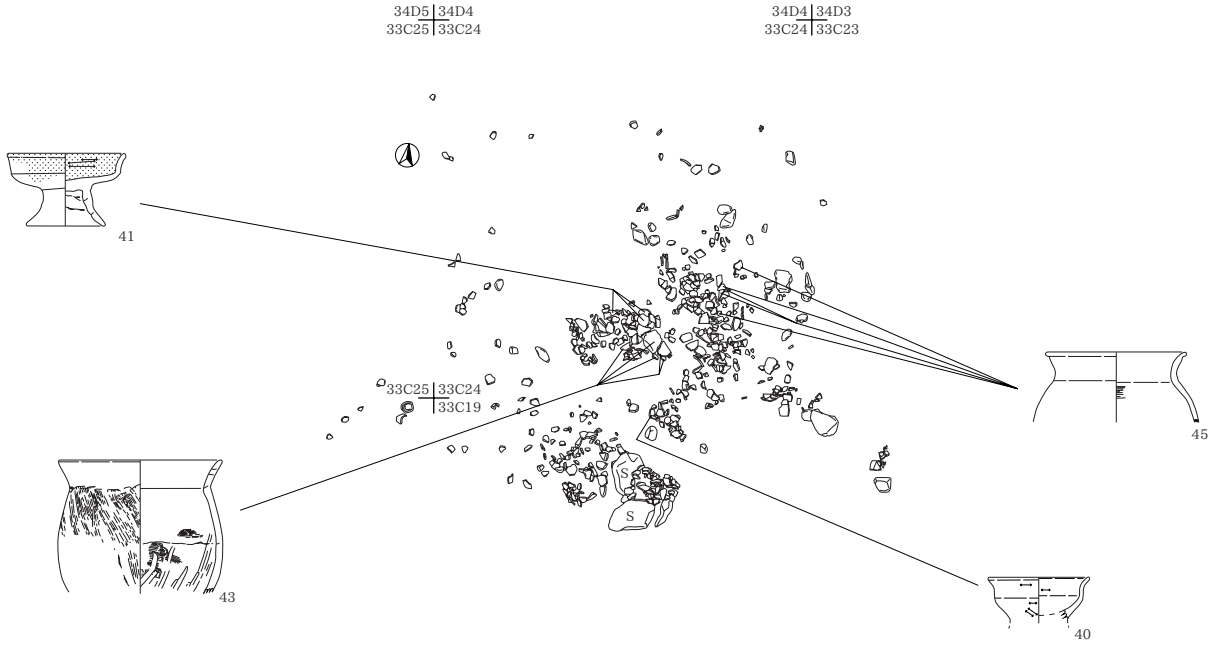
沢地区南　遺構配置図（X層・弥生時代～古墳時代）



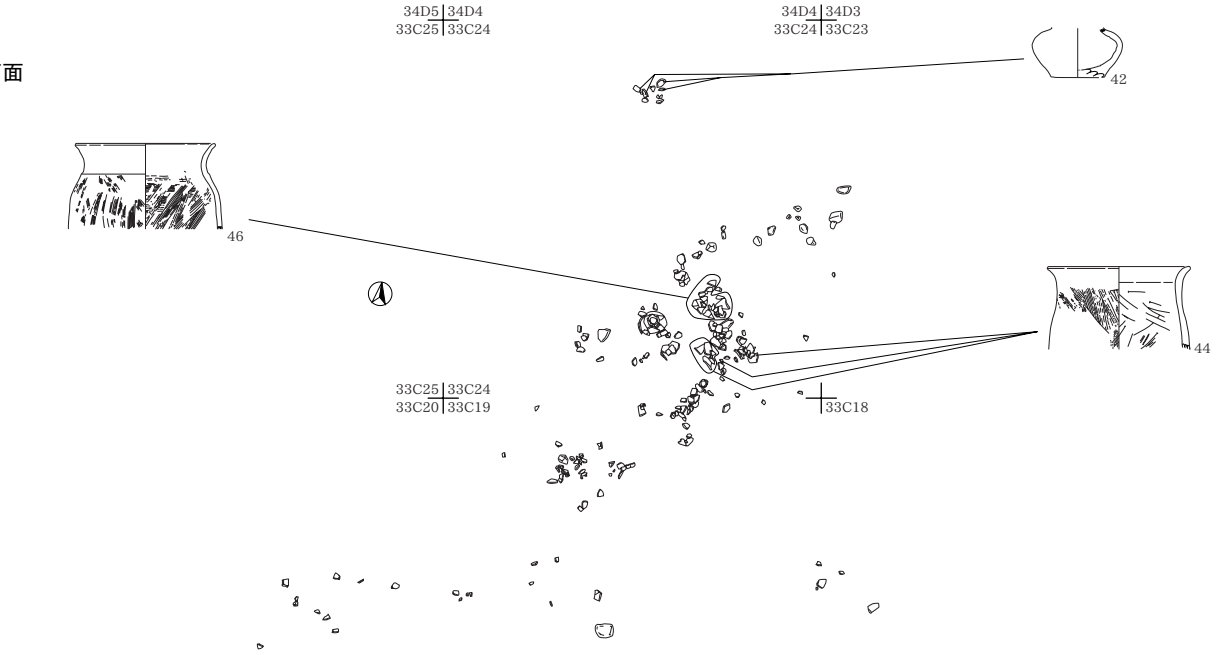
0　(1：300)　15m

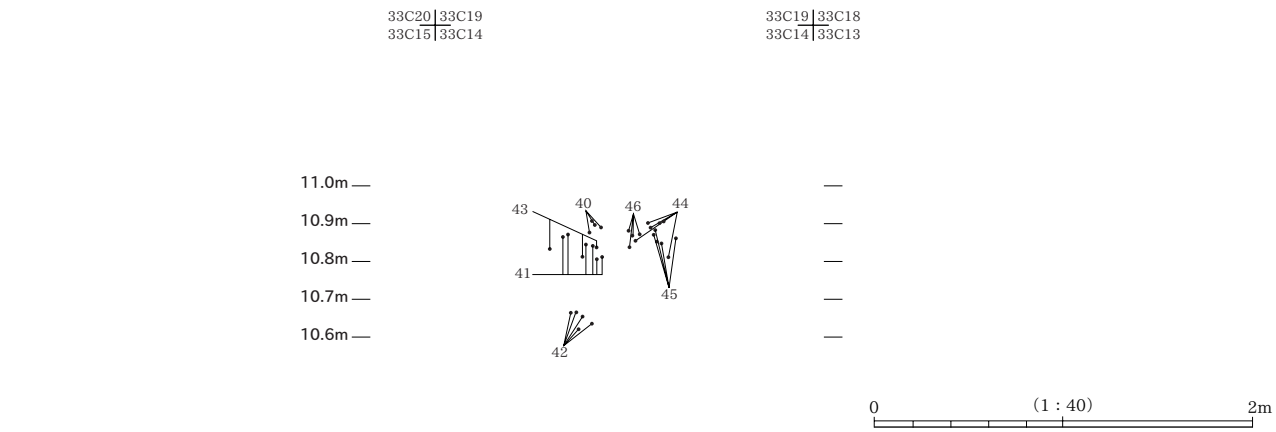

SI13
上面
34C6 | 33C10
34C1 | 33C5
34C1
34B21
B' 11.5m
B
A
A' 11.5m
S
中面
33C6 | 33C10
34C2 | 34C1
34B22 | 34B21
下面
34C6
34C1
34C1 | 33C5
34B21 | 33B25
11.4m
11.3m
11.2m
11.1m
0
(1 : 40)
2m

土器集中52
上面

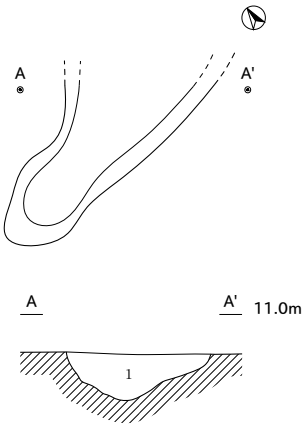

34D5 | 34D4
33C25 | 33C24
34D4 | 34D3
33C24 | 33C23
33C25 | 33C24
33C19
41
43
45
40
S
S

下面


34D5 | 34D4
33C25 | 33C24
34D4 | 34D3
33C24 | 33C23
42
46
44
33C25 | 33C24
33C20 | 33C19
33C18

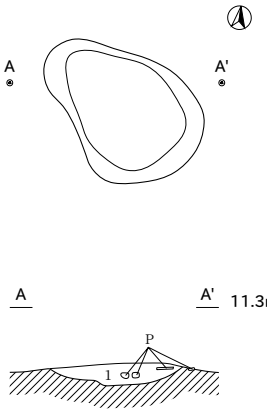

33C20 | 33C19
33C15 | 33C14
33C19 | 33C18
33C14 | 33C13
11.0m
10.9m
10.8m
10.7m
10.6m
43
40
46
44
41
45
42
0
(1 : 40)
2m

SK51



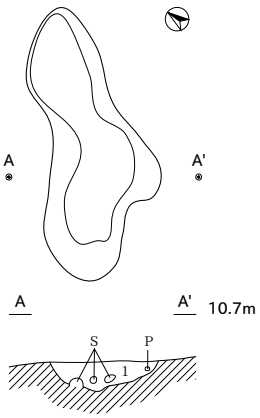
SK51
1 にぶい黄色砂　粘性なし、しまりなし。

SK59



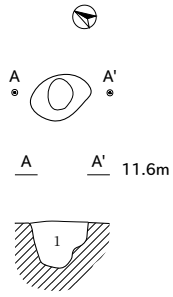
SK59
1 黒色シルト　炭化物多量含む。粘性あり、しまりなし。

SX55



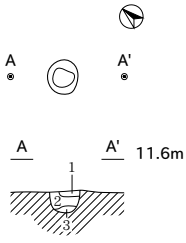
SX55
1 明褐色シルト　砂粒、φ5cm程度の礫、
灰褐色シルトが混じる。

P5



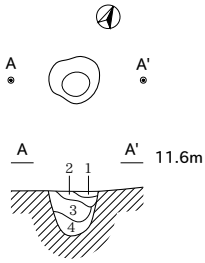
P5
1 黒色粘質土　粘性あり、しまりなし。

P37



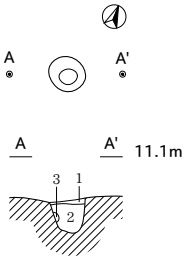
P37
1 黒褐色シルト　粘性あり、しまりなし。
2 黒色シルト　炭化物極微量含む。粘性あり、しまりなし。
3 暗オリーブ色シルト　砂含む。粘性ややあり、しまりなし。

P39



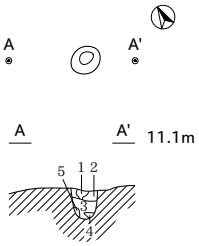
P39
1 黒褐色シルト　φ1～5mmの砂礫、炭化物含む。粘性なし、しまりなし。
2 灰褐色シルト　炭化物、砂粒含む。粘性なし、しまりあり。
3 褐色シルト　2層より炭化物を多く含む。粘性あり、しまりなし。
4 にぶい黄褐色シルト　砂礫含む。粘性なし、しまりなし。

P40



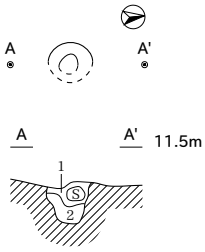
P40
1 暗灰黄色シルト　砂礫含む。粘性ややあり、しまりあり。
2 灰褐色シルト　砂礫多量含む。粘性あり、しまりなし。
3 オリーブ褐色シルト　砂礫含む。粘性あり、しまりなし。

P41



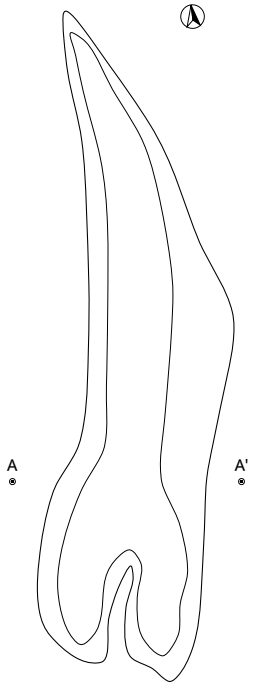
P41
1 灰オリーブ色シルト　砂礫少量含む。
粘性なし、しまりあり。
2 黒褐色シルト　粘性なし、しまりなし。
3 暗灰黄色シルト　砂礫少量含む。
粘性あり、しまりなし。
4 黄灰色シルト　3層より砂礫多く含む。
粘性あり、しまりなし。
5 にぶい黄褐色シルト　4層と同じ程度に砂粒含む。
粘性あり、しまりなし。

P61



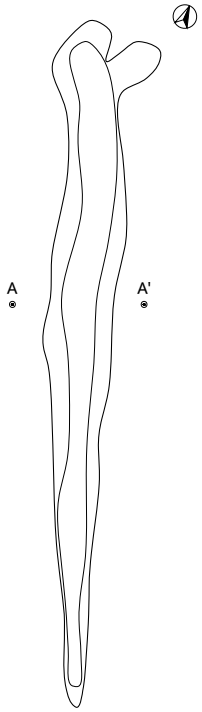
P61
1 黒褐色シルト　5mm大の礫を含む。
粘性なし、しまりあり。
2 黄灰色シルト　Xbより暗い色調。
粘性ややあり、しまりなし。

SD32



SD32
1 黄灰色シルト　炭化物をまばらに含む。底面に3～5cm大の礫を多く含む。
Xb層の土をブロック状に含む。粘性なし、しまりあり。

SD43



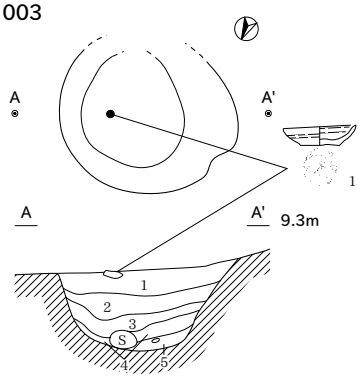
SD43
1 灰色砂　1cm大の小礫を多量に含む。粘性なし、しまりあり。

0　(1：40)　2m

図 版 11

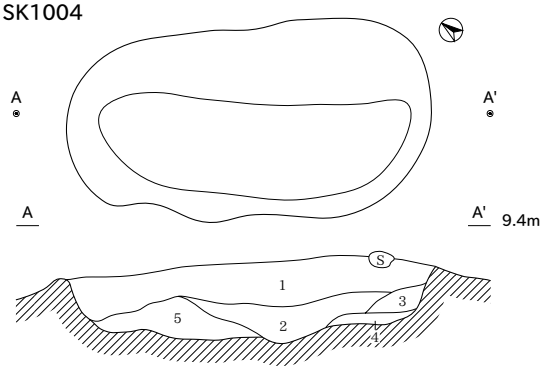
沢地区北　遺構配置図（Ⅷｂ層・古代）

SK1003



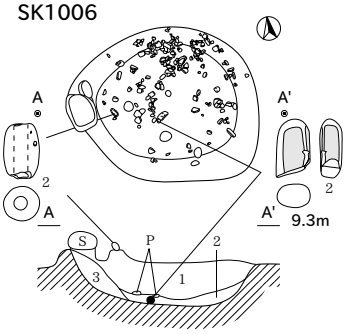
SK1003
1 黒褐色シルト　炭化粒少量含む。黄褐色シルト少量含む。粘性あり、しまりなし。
2 黄灰色シルト　炭化粒極微量含む。粘性あり、しまりなし。
3 暗灰黄色シルト　粘性あり、しまりなし。
4 黒褐色シルト　炭化粒極微量含む。粘性あり、しまりなし。
5 黄灰色砂　粘性なし、しまりなし。

SK1004



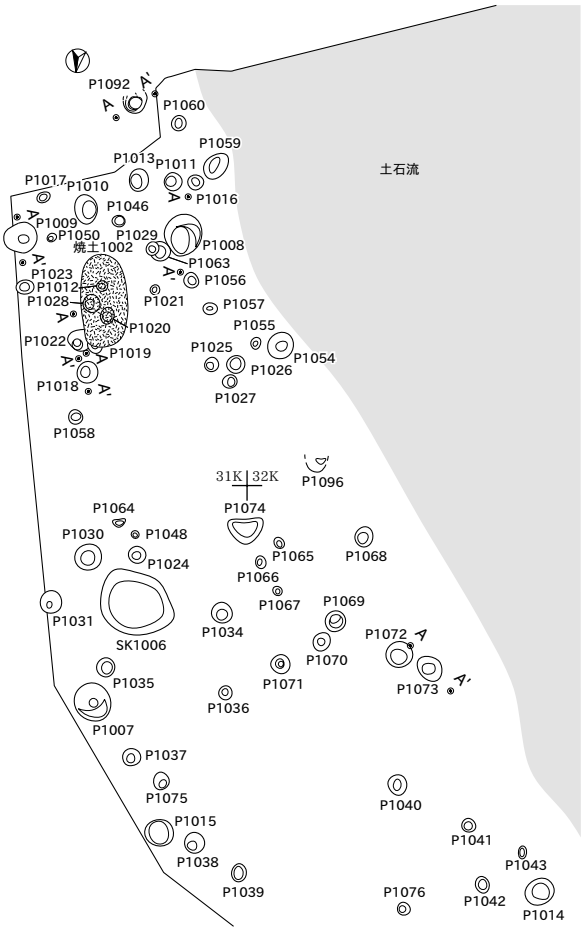
SK1004
1 黒色シルト　炭化粒多量含む。黄褐色シルト粒多量含む。焼土粒極微量含む。粘性あり、しまりなし。
2 黒褐色シルト　黄褐色シルト粒多量含む。焼土粒微量含む。粘性あり、しまりなし。
3 暗灰黄色シルト　炭化粒極微量含む。粘性あり、しまりなし。
4 オリーブ褐色シルト　粘性あり、しまりなし。
5 黒褐色シルト　黄褐色シルト粒多量含む。粘性あり、しまりなし。

SK1006

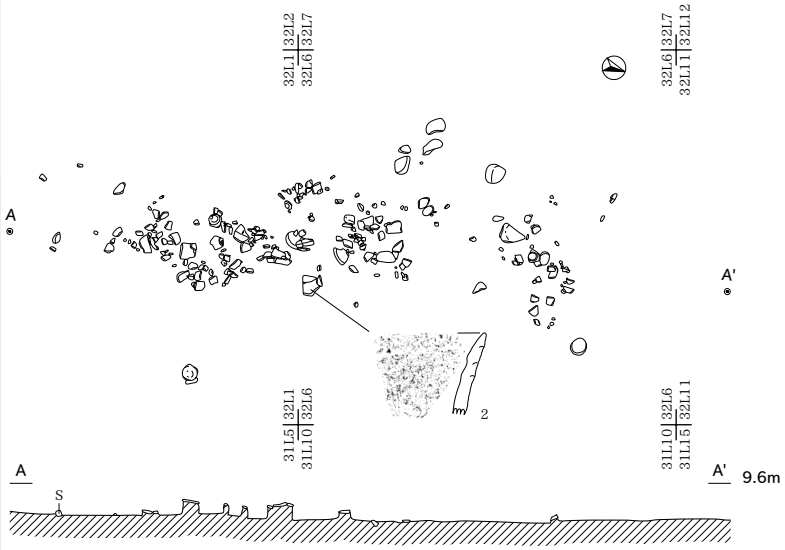


SK1006
1 黒褐色シルト　炭化粒オリーブ褐色シルトをブロック状に多量含む。粘性あり、しまりなし。
2 黒色シルト　炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。
3 黒褐色シルト　炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。

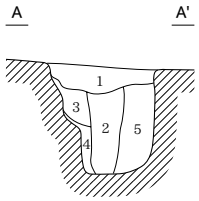
Pit平面図（31・32K・L）



土器集中1001

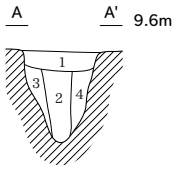


P1008



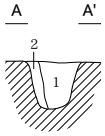
P1008
1 暗灰黄色シルト　炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。
2 黒褐色シルト　炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。
3 暗オリーブ褐色シルト　炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。
4 オリーブ褐色シルト　炭化粒極微量含む。粘性あり、しまりなし。
5 黒褐色シルト　黄褐色シルトをブロック状に多量含む。粘性あり、しまりなし。

P1009



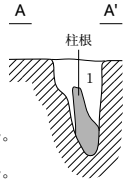
P1009
1 オリーブ褐色シルト　黄褐色シルト粒多量含む。炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。
2 暗オリーブ褐色シルト　黄褐色シルト粒多量含む。炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。
3 暗灰黄色シルト　黄褐色シルト粒多量含む。炭化粒少量含む。粘性あり、しまりなし。
4 暗オリーブ褐色シルト　黄褐色シルトブロック少量含む。粘性あり、しまりなし。

P1018



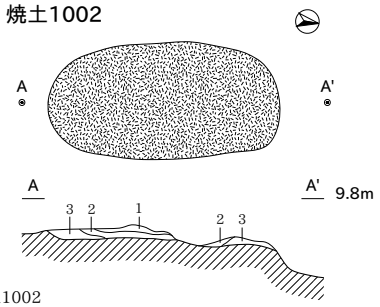
P1018
1 暗オリーブ褐色シルト　炭化粒少量含む。粘性あり、しまりなし。
2 オリーブ褐色シルト　炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。

P1022



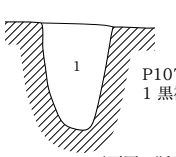
P1022
1 暗オリーブ褐色シルト　炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。

焼土1002



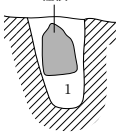
焼土1002
1 明褐色シルト　焼土。炭化粒微量含む。粘性あり、しまりあり。
2 暗赤褐色シルト　焼土ブロック、炭化粒少量含む。にぶい橙色シルトを粒状に少量含む。粘性あり、しまりあり。
3 黒褐色シルト　炭化粒微量含む。φ10～20mmの礫少量含む。粘性あり、しまりあり。

P1073



P1073
1 黒褐色シルト　炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。

P1092

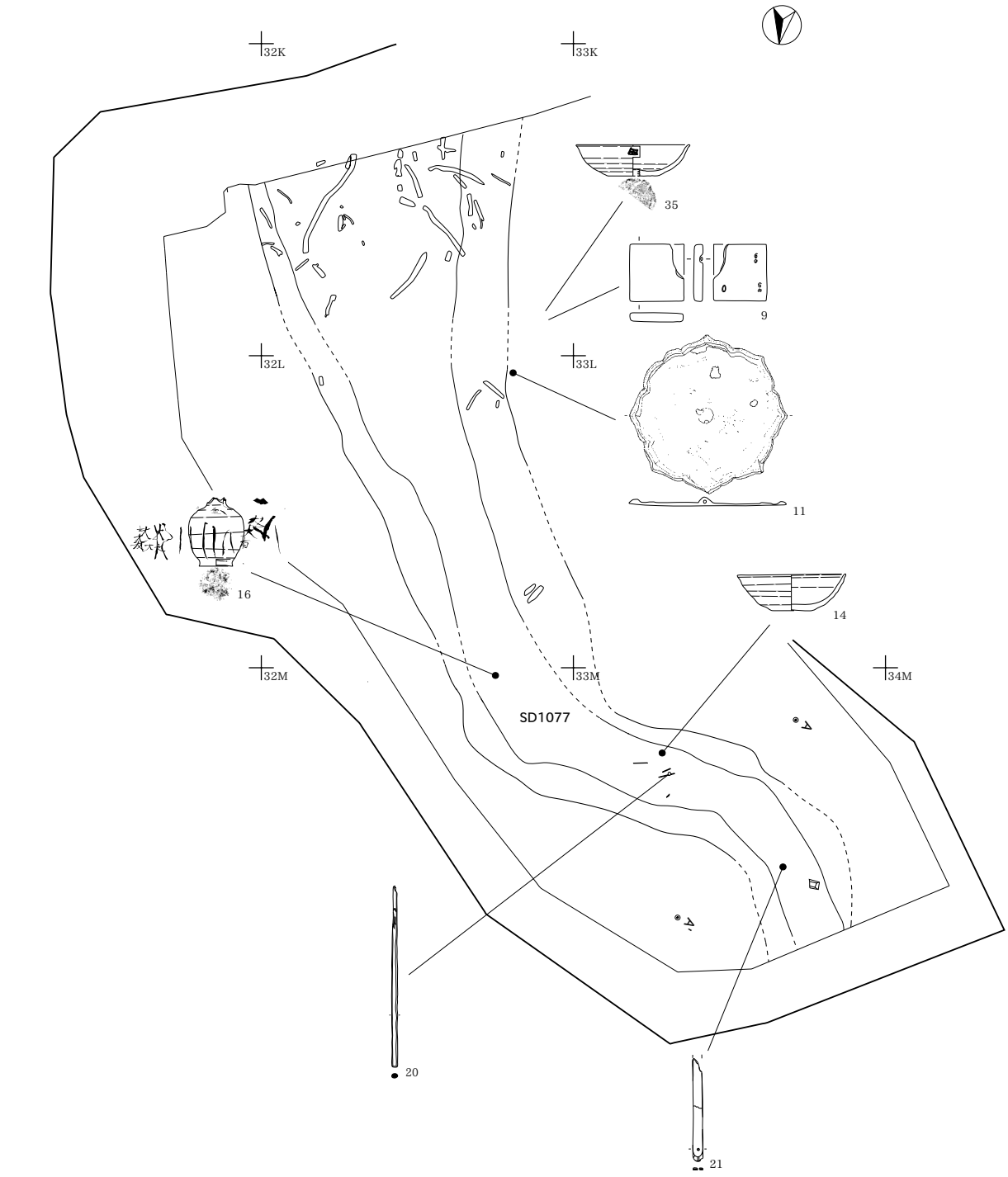


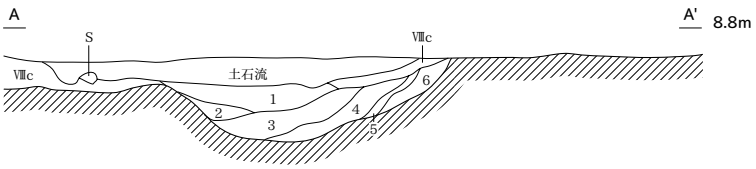
P1092
1 黄灰色シルト　炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。

0　平面図・断面図（1：40）　2m

0　Pit平面図（1：100）　5m

SD1077





SD1077
1 φ10cmの礫層　Ⅶc層の土を少量含む。粘性なし、しまりあり。
2 黒褐色シルト　炭化粒微量含む。Ⅶc層の土を多量含む。粘性あり、しまりなし。
3 φ1～7cmの礫層
4 黄灰色シルト　炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。
5 黄灰色シルト　炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。
6 黄灰色シルト　炭化粒極微量含む。粘性あり、しまりなし。

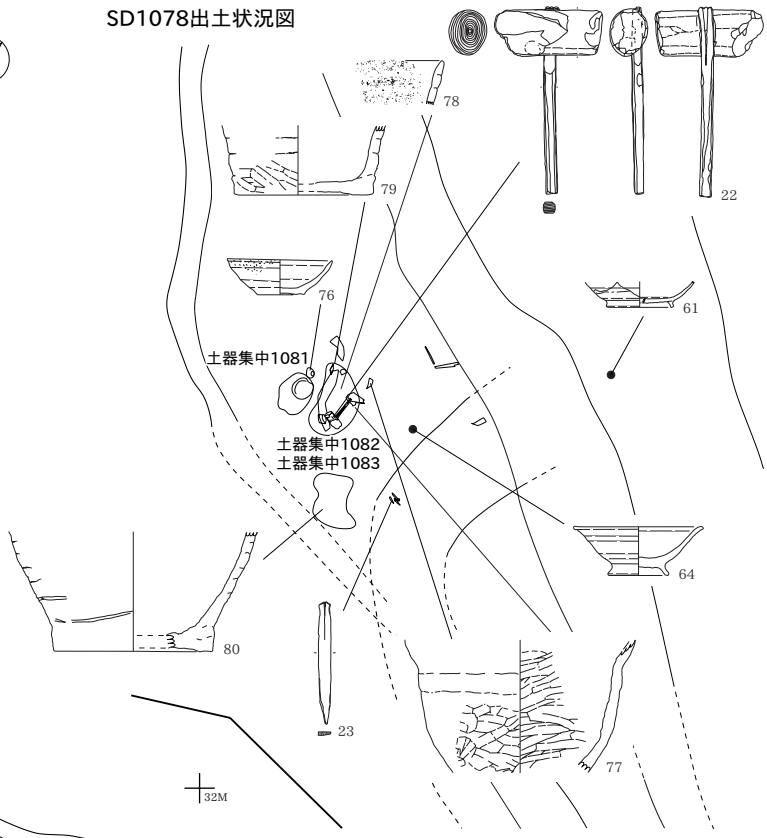
0　出土状況図（1：40）　2m

0　断面図（1：80）　4m

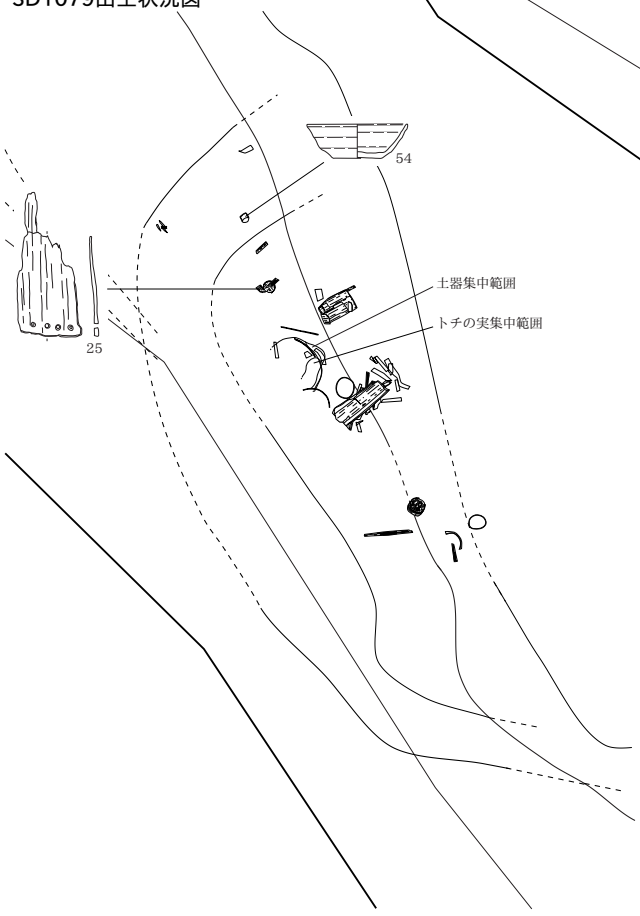
0　平面図（1：200）　10m

SD1078・1079

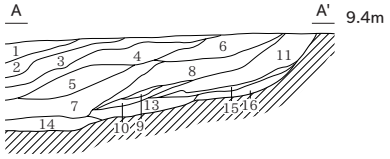
SD1078出土状況図



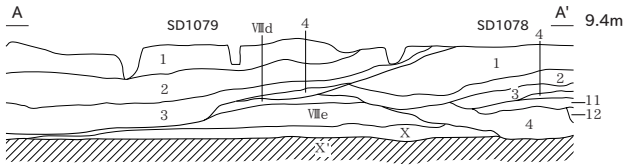
SD1079出土状況図



SD1078



SD1078・1079

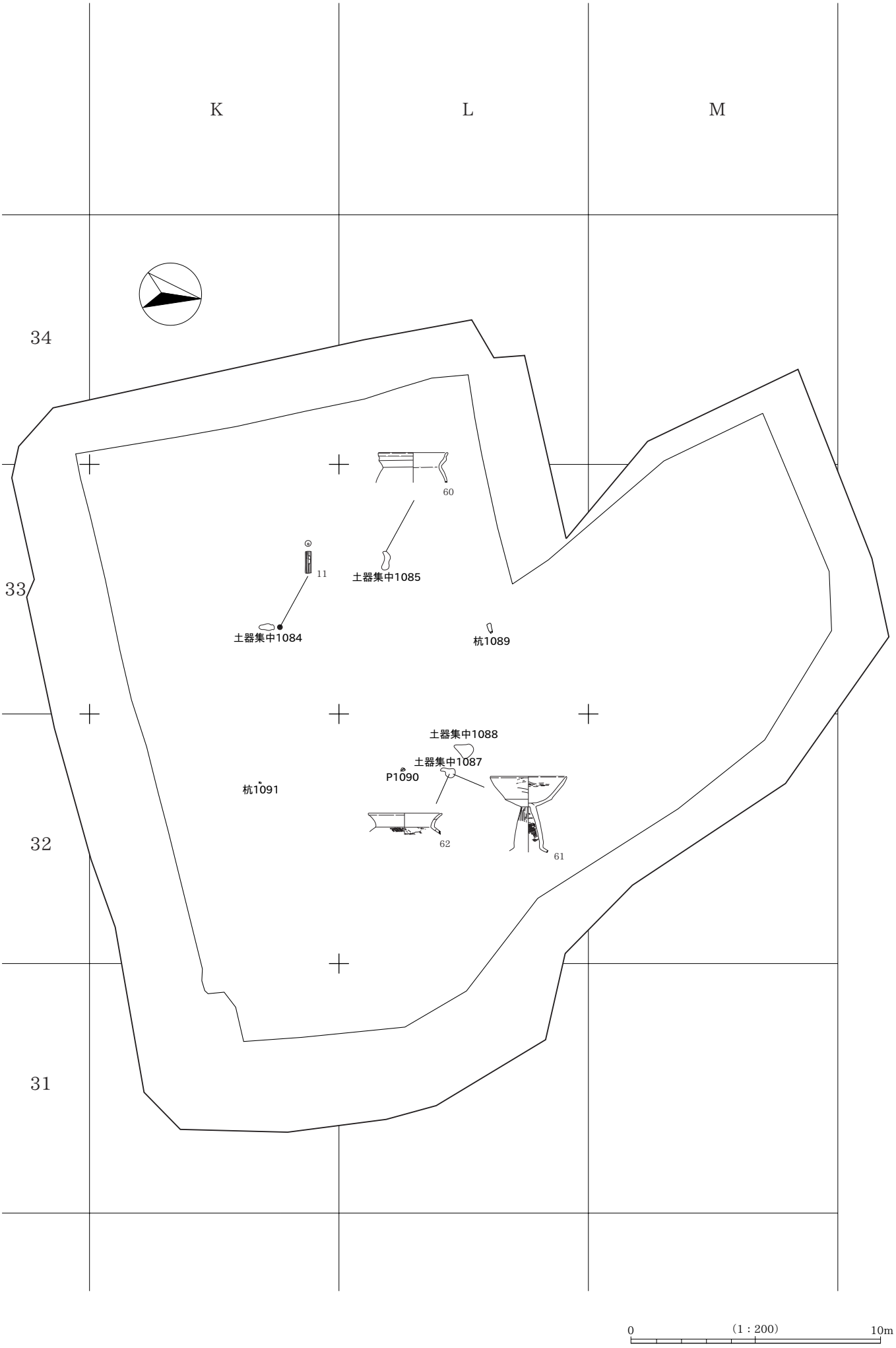


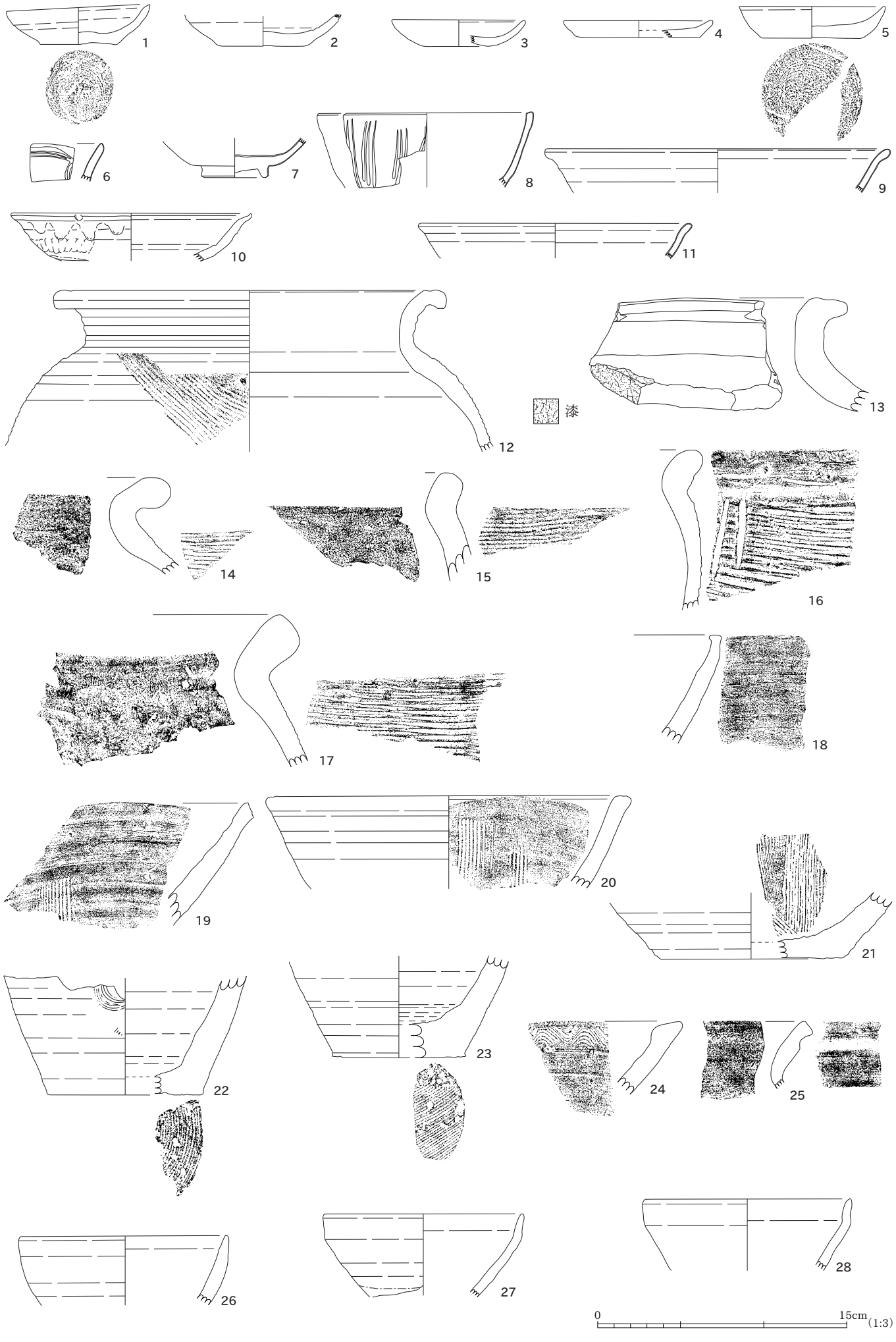
SD1078
1　オリーブ褐色シルト　　炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。
2　暗灰黄色シルト　　炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。
3　黄灰色シルトと黒褐色シルトの混合土　炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。
4　黒褐色シルト　　炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。
5　黄灰色シルト　　炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。
6　明黄褐色シルト　　炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。
7　黄褐色シルト　　炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。
8　暗灰黄色シルト　　炭化粒極微量含む。粘性あり、しまりなし。
9　明黄褐色シルト　　粘性あり、しまりなし。
10　黄灰色シルト　　粘性あり、しまりなし。
11　暗オリーブ褐色シルト　　粘性あり、しまりなし。
12　黄灰色シルト　　緑灰色シルト多量含む。炭化粒微量含む。粘性あり、しまりなし。
13　黒褐色シルト　　炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。
14　明黄褐色砂　　φ10～20cmの礫を多量含む。粘性なし、しまりあり。
15　黄褐色シルト　　暗オリーブ灰色砂少量含む。粘性あり、しまりなし。
16　黄褐色シルト　　粘性あり、しまりなし。

SD1079
1 緑灰色シルト　　粘性あり、しまりなし。
2 緑灰色シルトと黒褐色シルトの混合土　炭化物、炭化粒少量含む。粘性あり、しまりなし。
3 黒色シルト　　炭化物、炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。
4 黒褐色シルト　　炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。

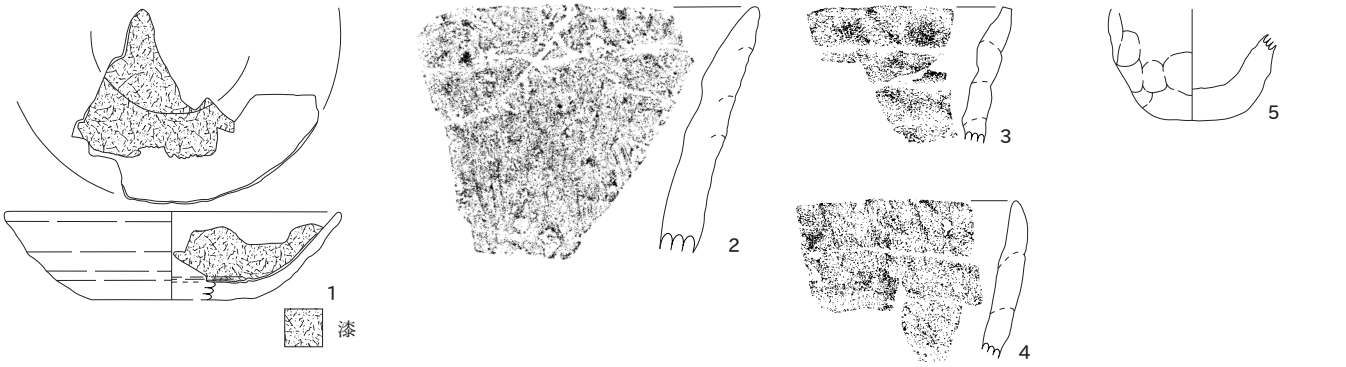
0　出土状況図（1：100）　5m
0　断面図（1：80）　4m
0　平面図（1：200）　10m

図 版 15　　沢地区北　遺構配置図・出土状況図（X層・古墳時代）

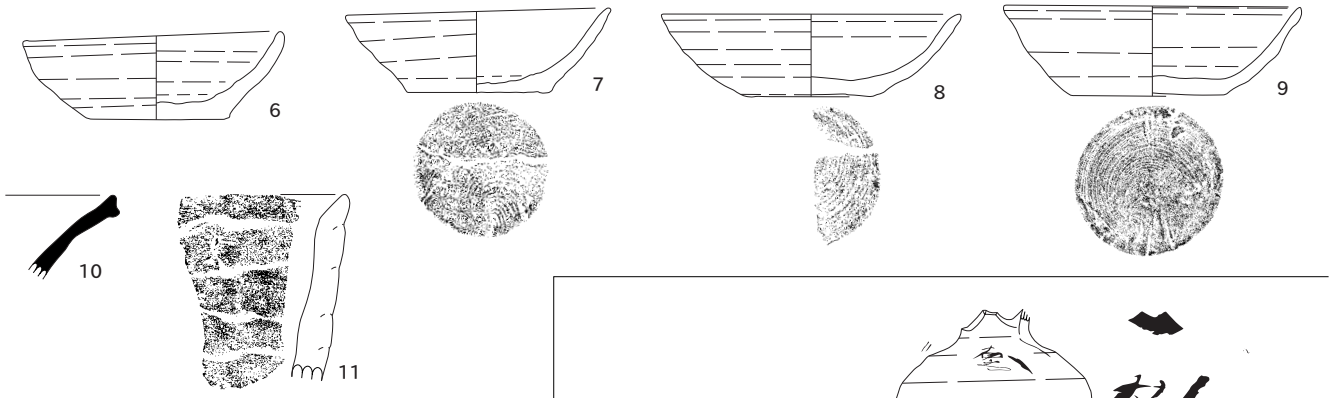



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
漆
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
15cm
(1:3)

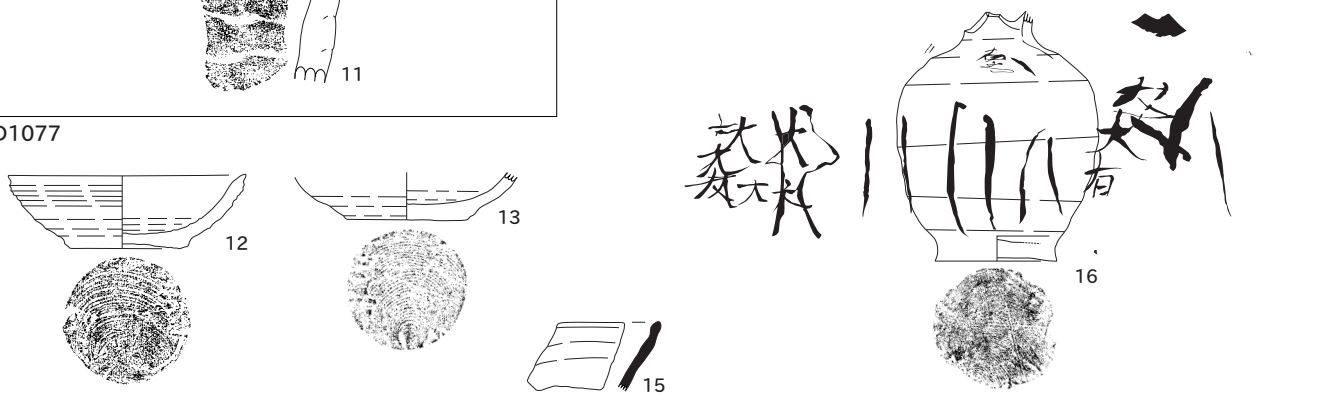
土器集中1001

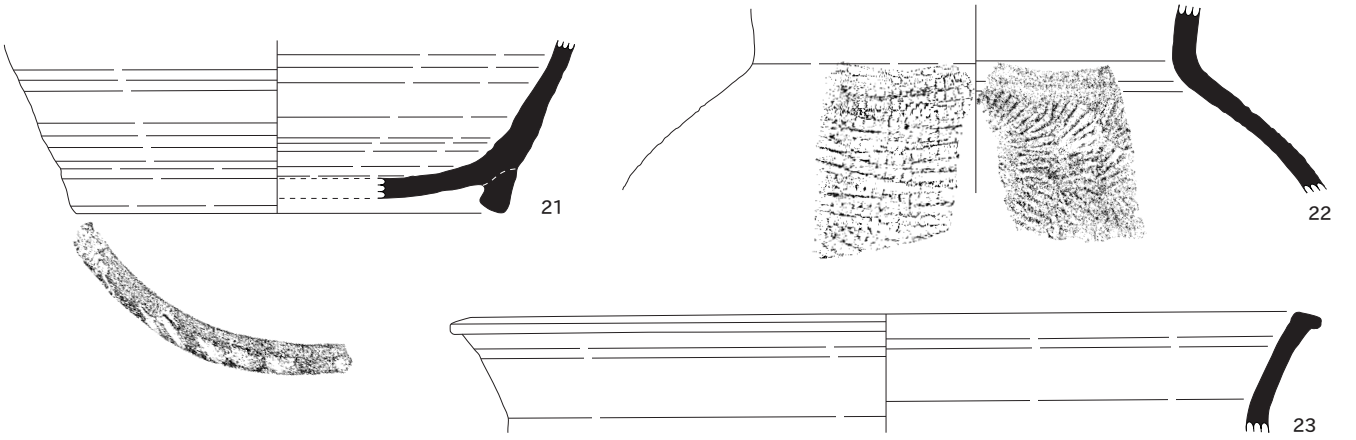


Ⅷb層

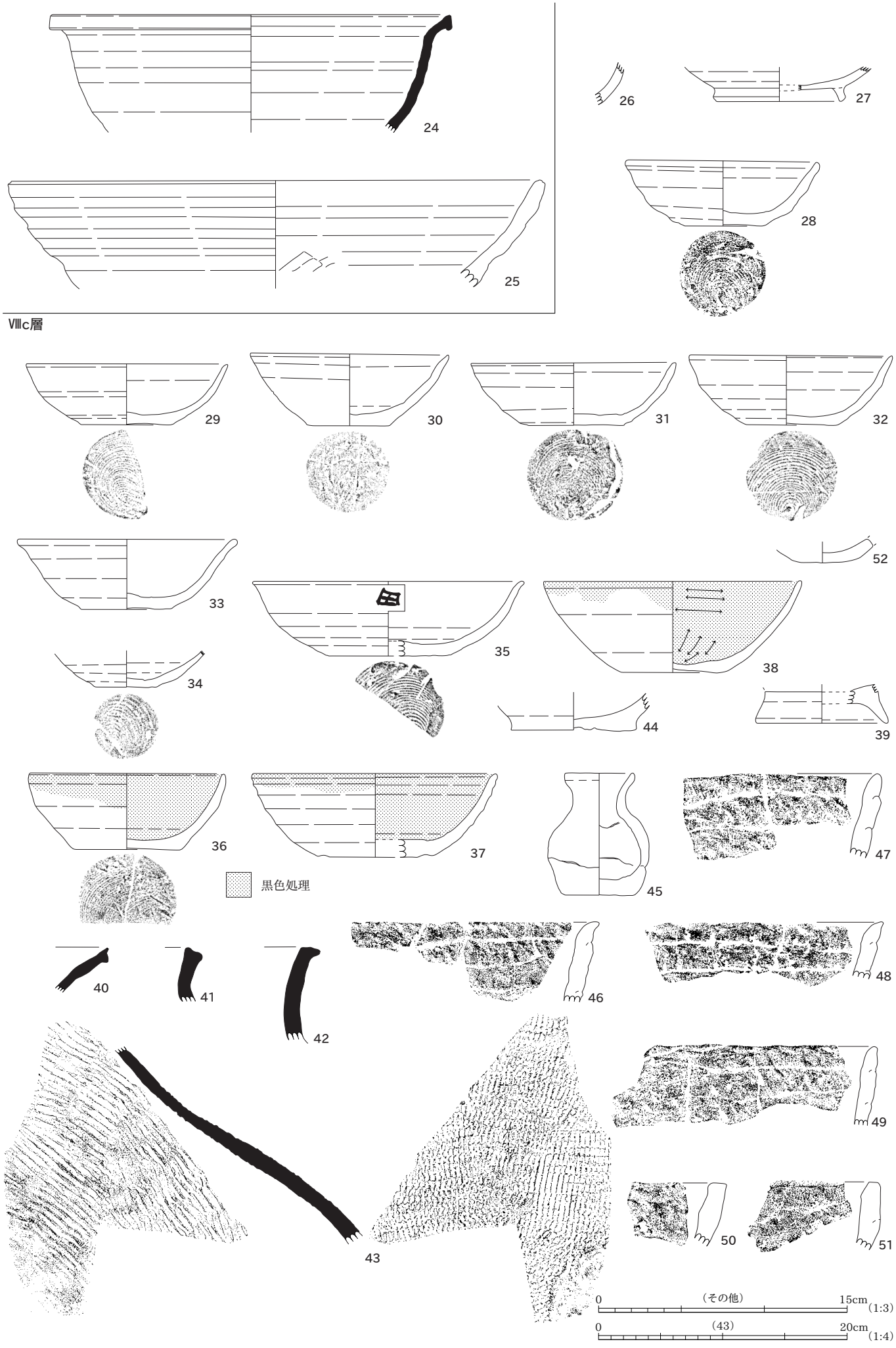


SD1077

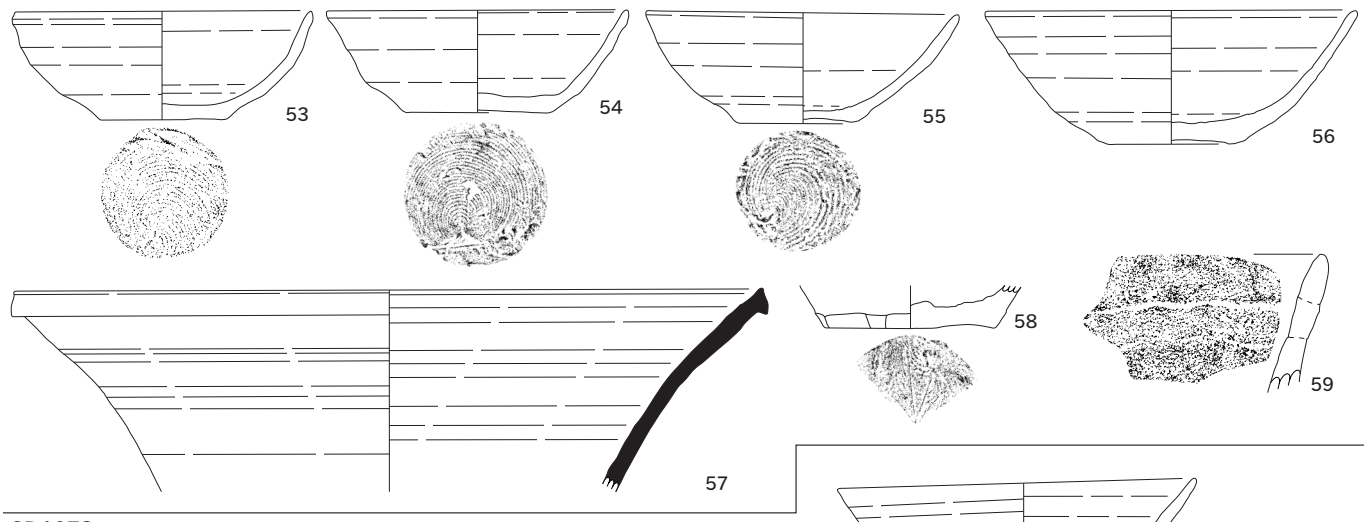




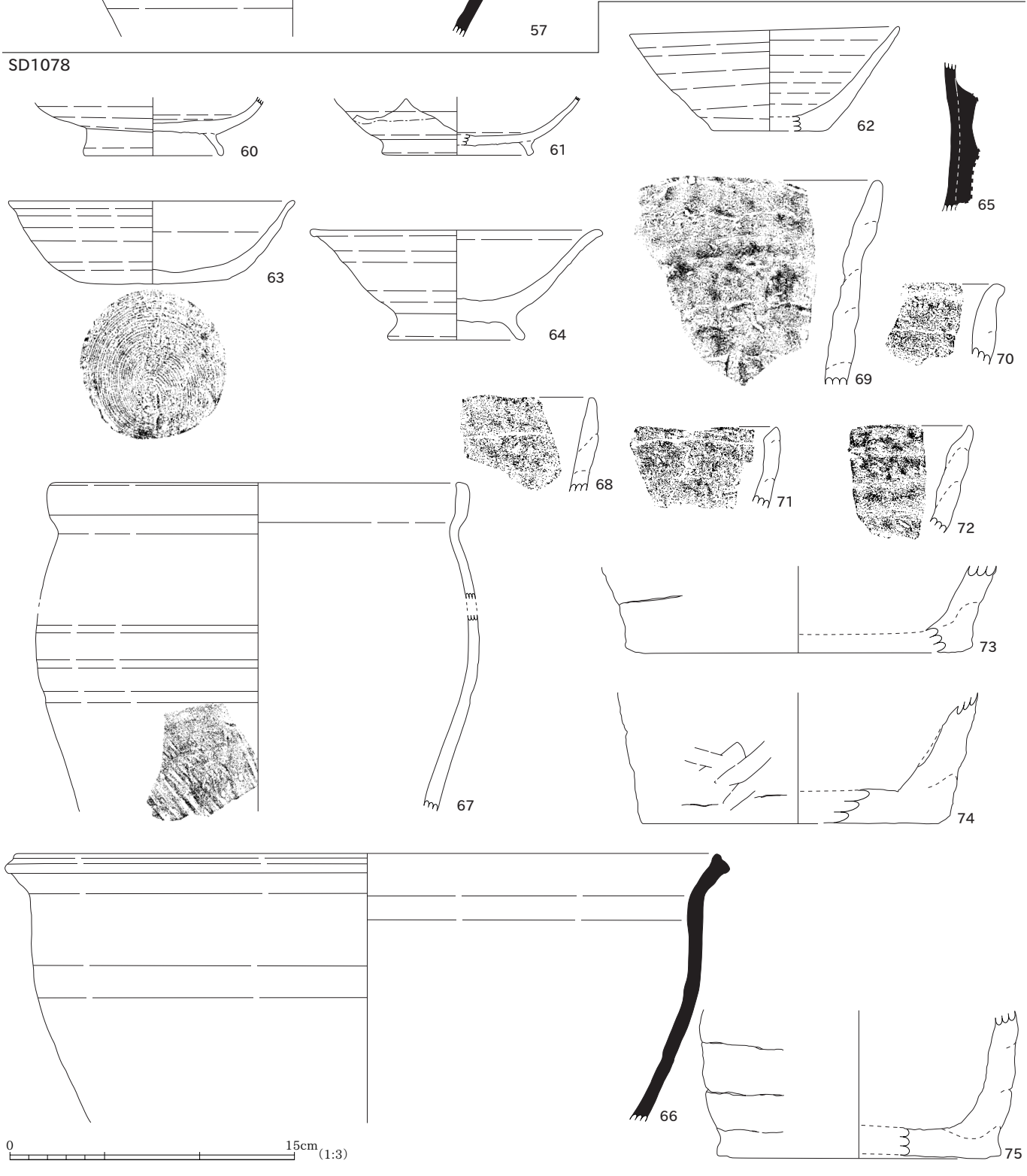
0　15cm (1:3)


24
25
26
27
28
Ⅷc層
29
30
31
32
33
34
35
38
52
39
44
36
37
45
47
黒色処理
40
41
42
46
48
43
49
50
51
0 (その他) 15cm (1:3)
0 (43) 20cm (1:4)

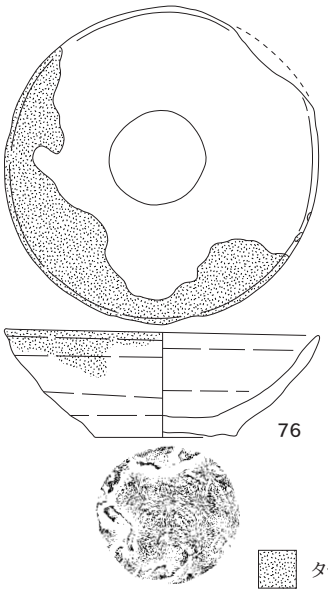
SD1079



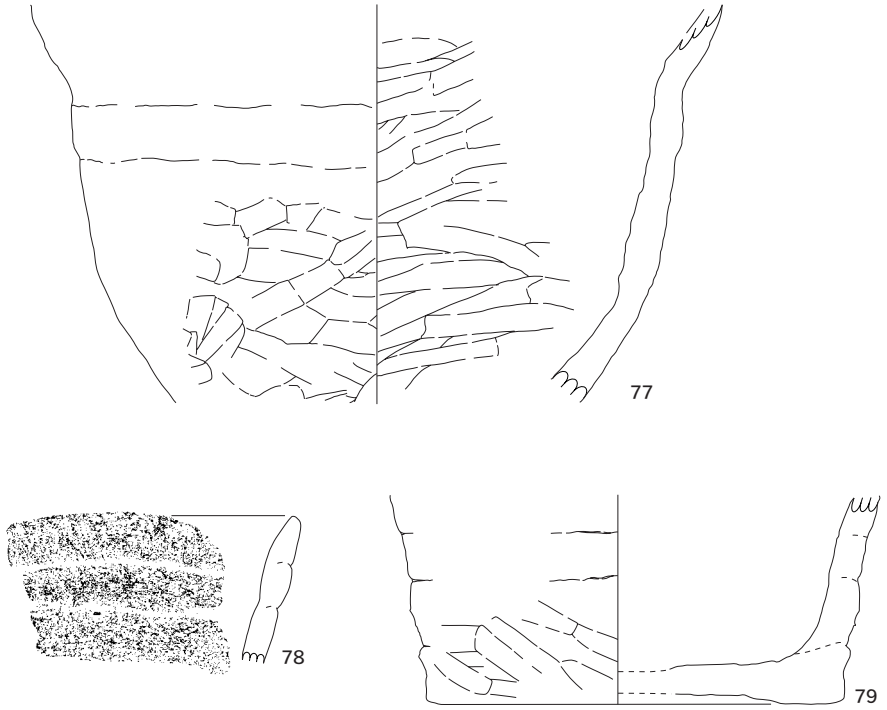
SD1078



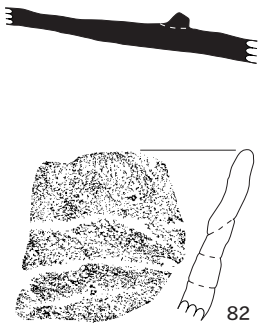
土器集中1081（SD1078・4層）

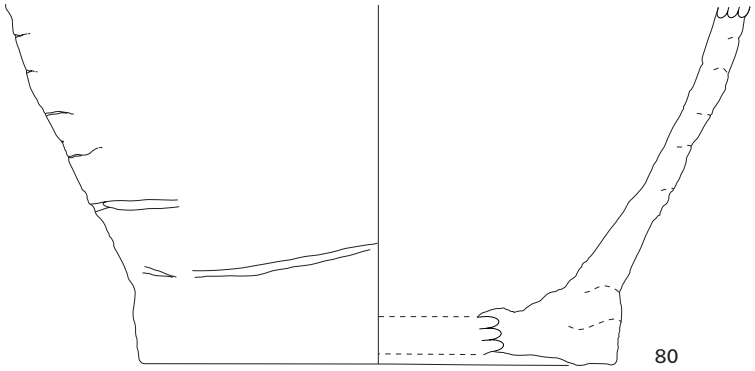


土器集中1082（SD1078・7層）

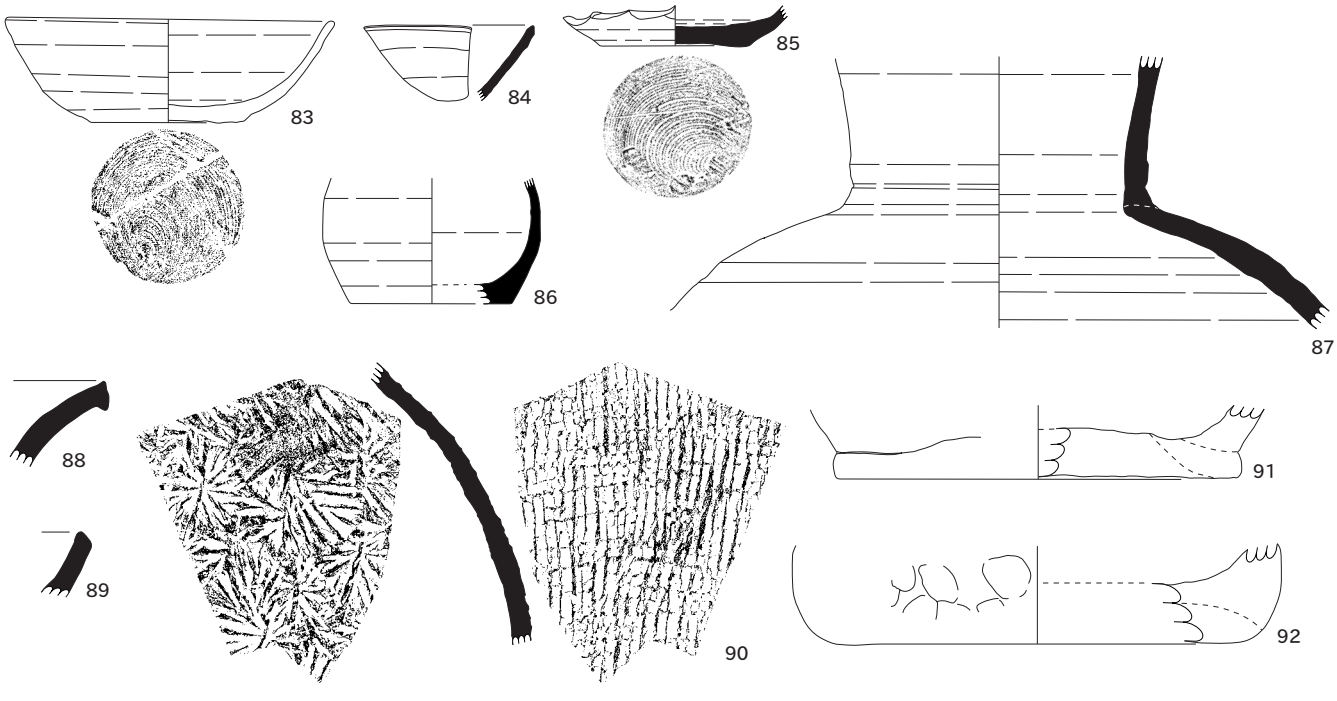


土器集中1083（SD1078・12層）



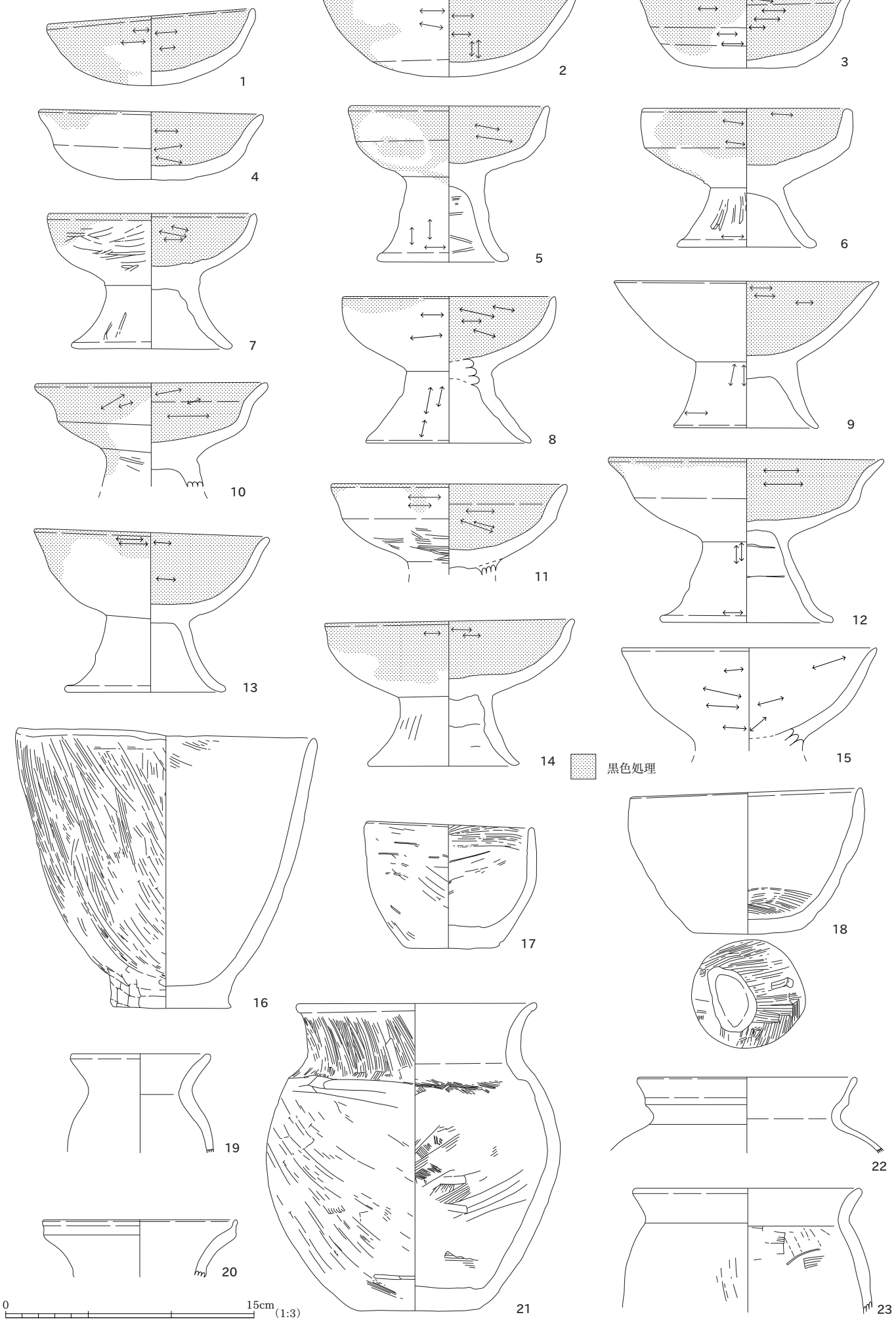


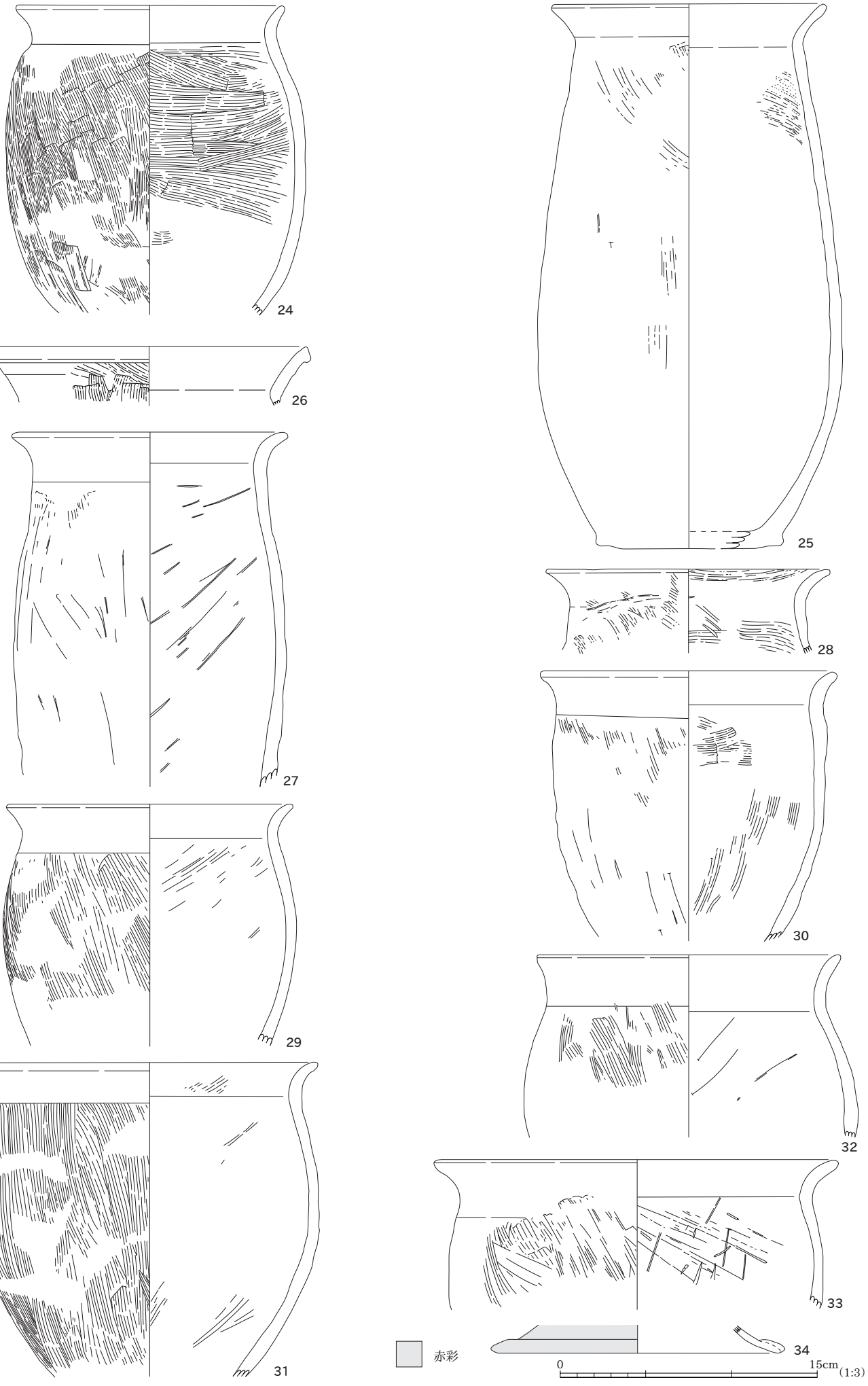
調査区一括



0　15cm（1:3）

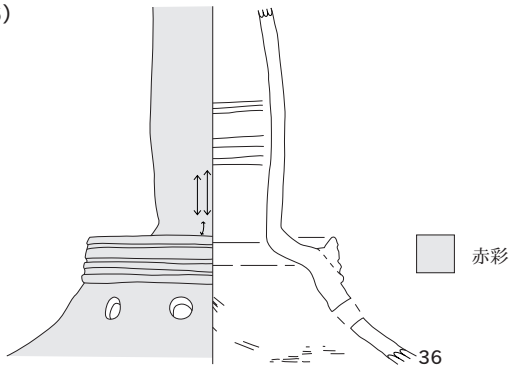
SI13（1～34）




24
26
27
29
31
25
28
30
32
33
34
赤彩
0
15cm
(1:3)

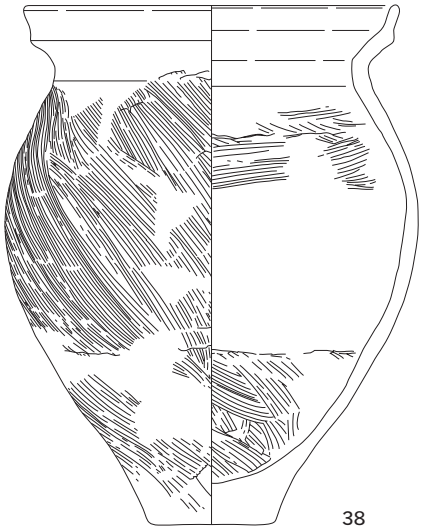
土器集中46（35）

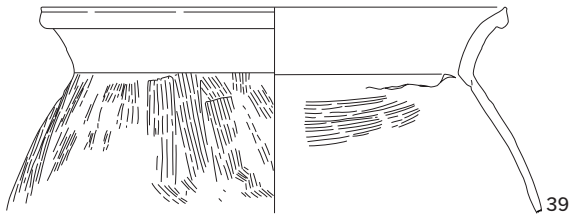
土器集中47（36）



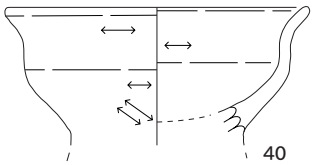
土器集中48（37）

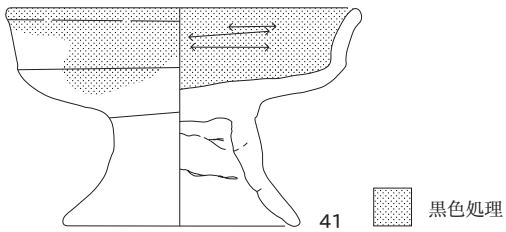
土器集中49（38・39）

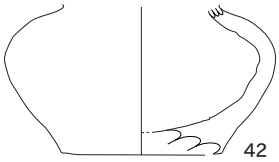


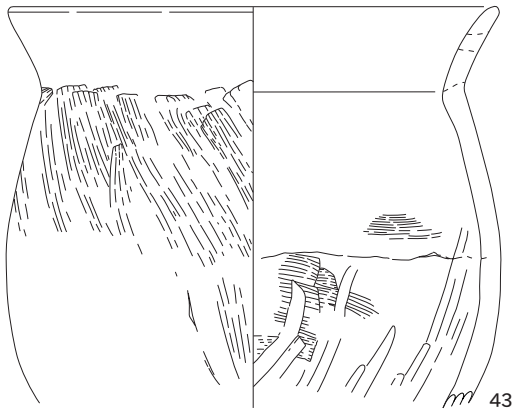


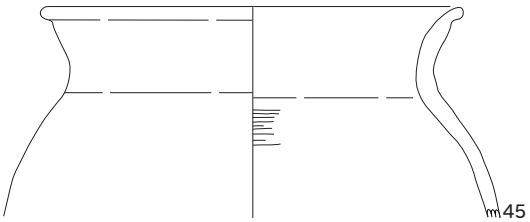
土器集中52（40～46）

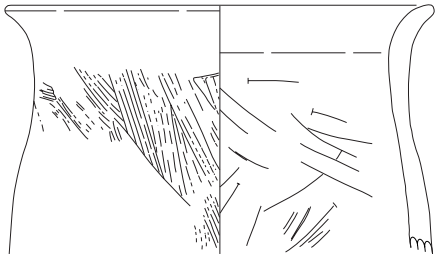


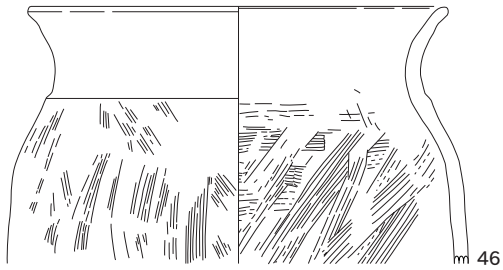


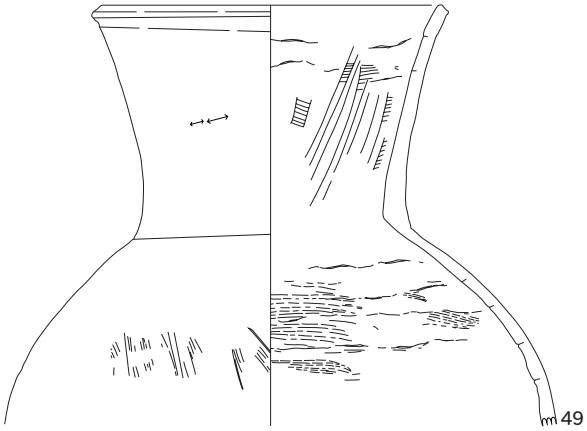


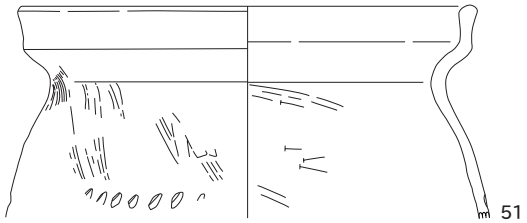




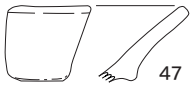


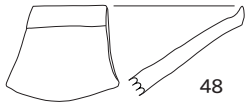


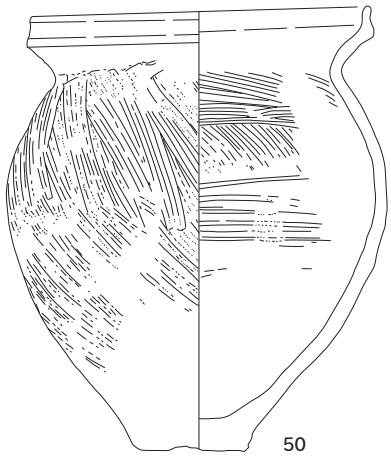


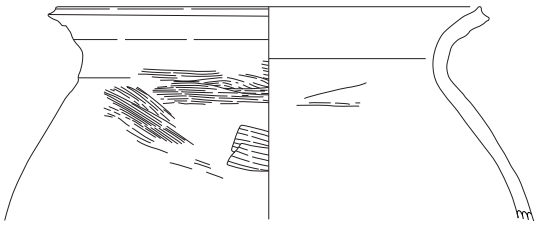


土器集中56（47～52）

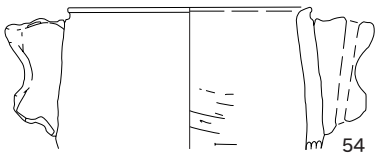


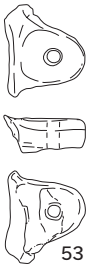


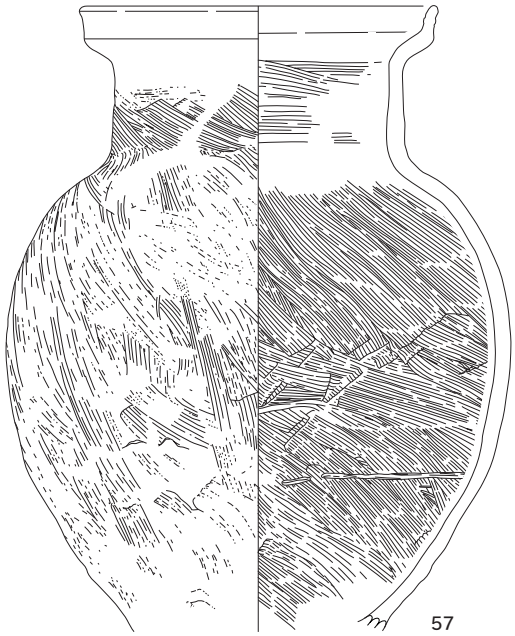


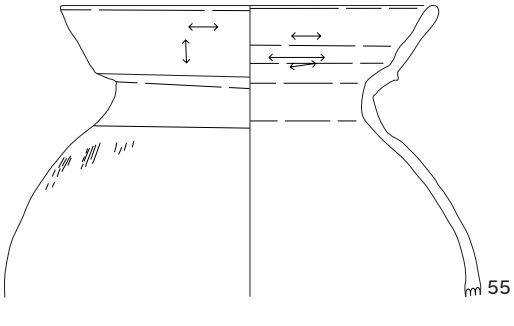


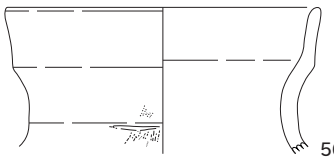
土器集中57（53～58）

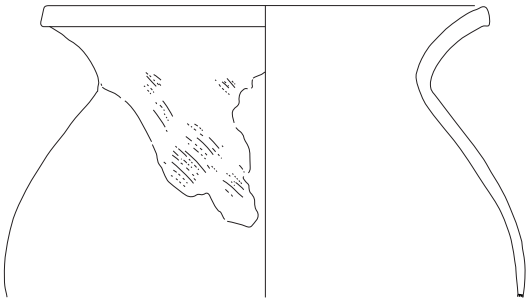






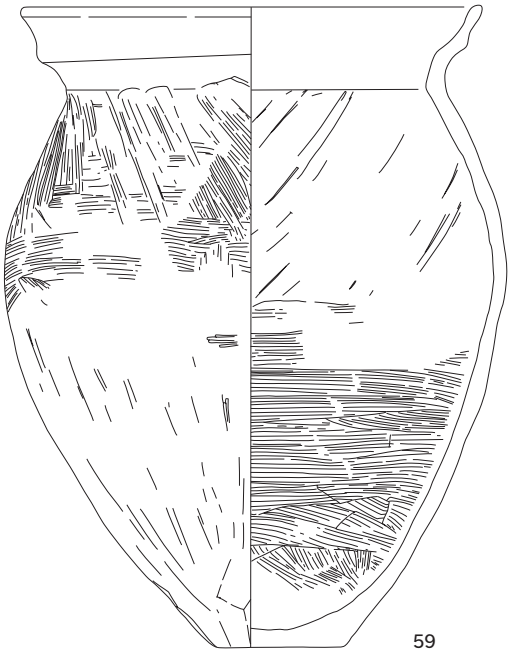




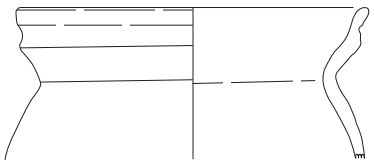


0　15cm（1:3）

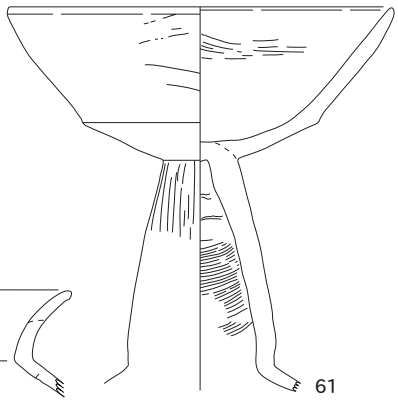
土器集中58（59）

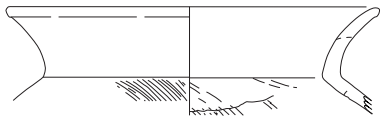


土器集中1085（60）

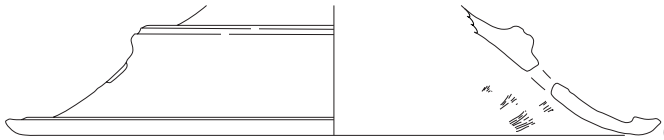


土器集中1087（61・62）

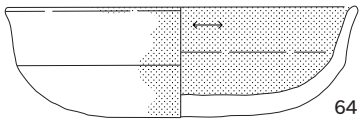


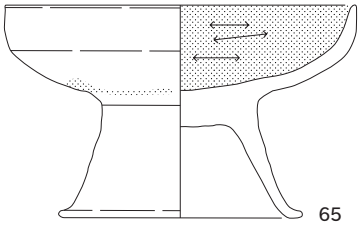


SD1078（63）

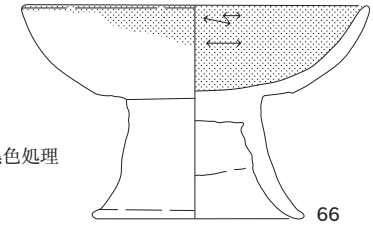


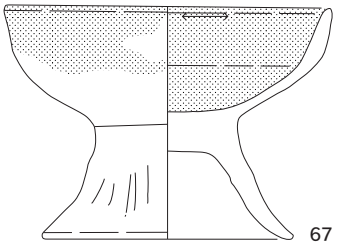
X層（64～91）

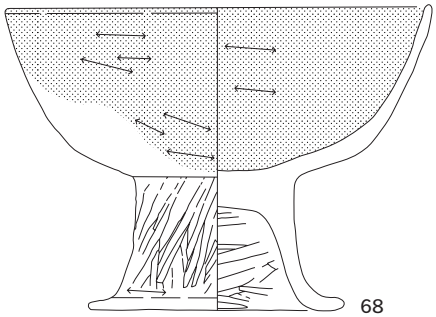


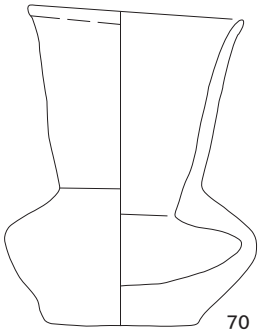


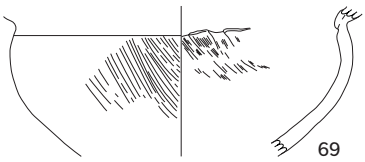
黒色処理

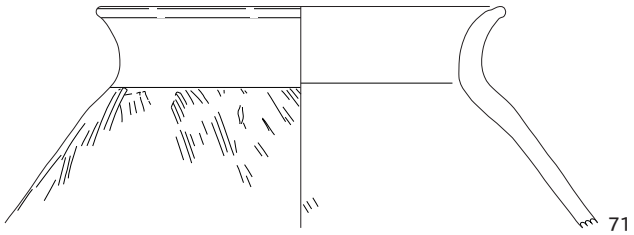


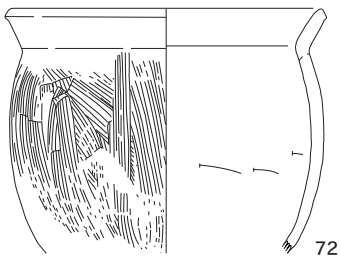


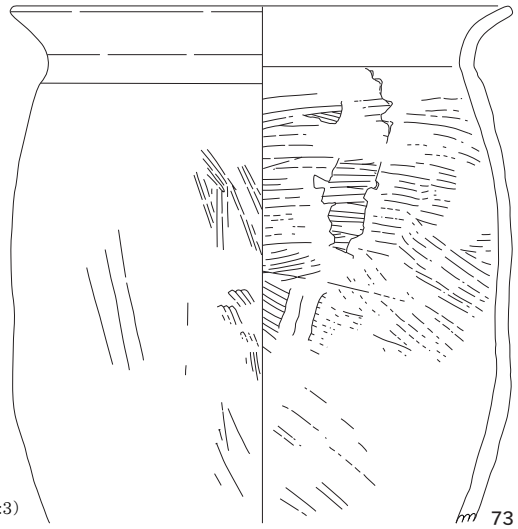




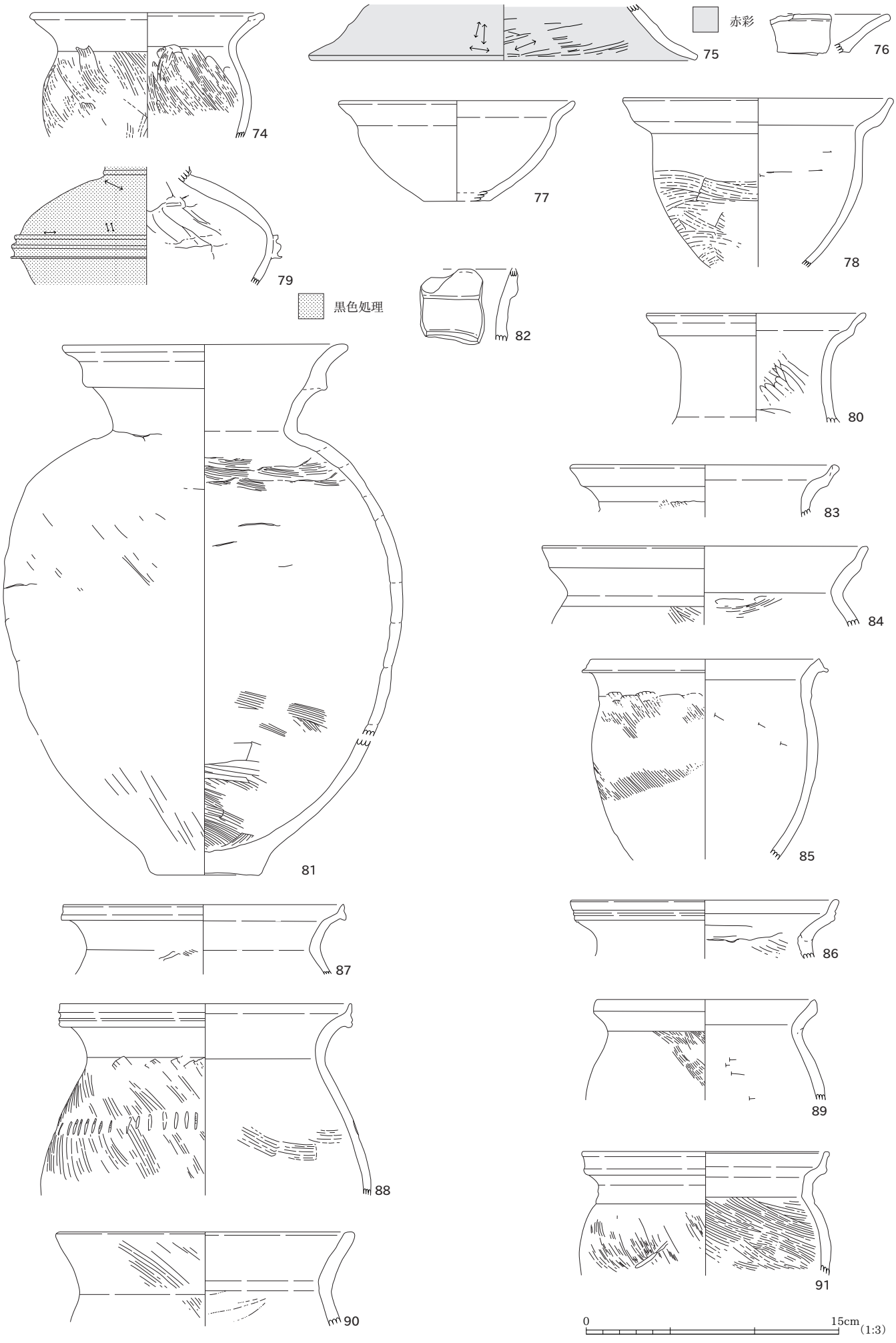


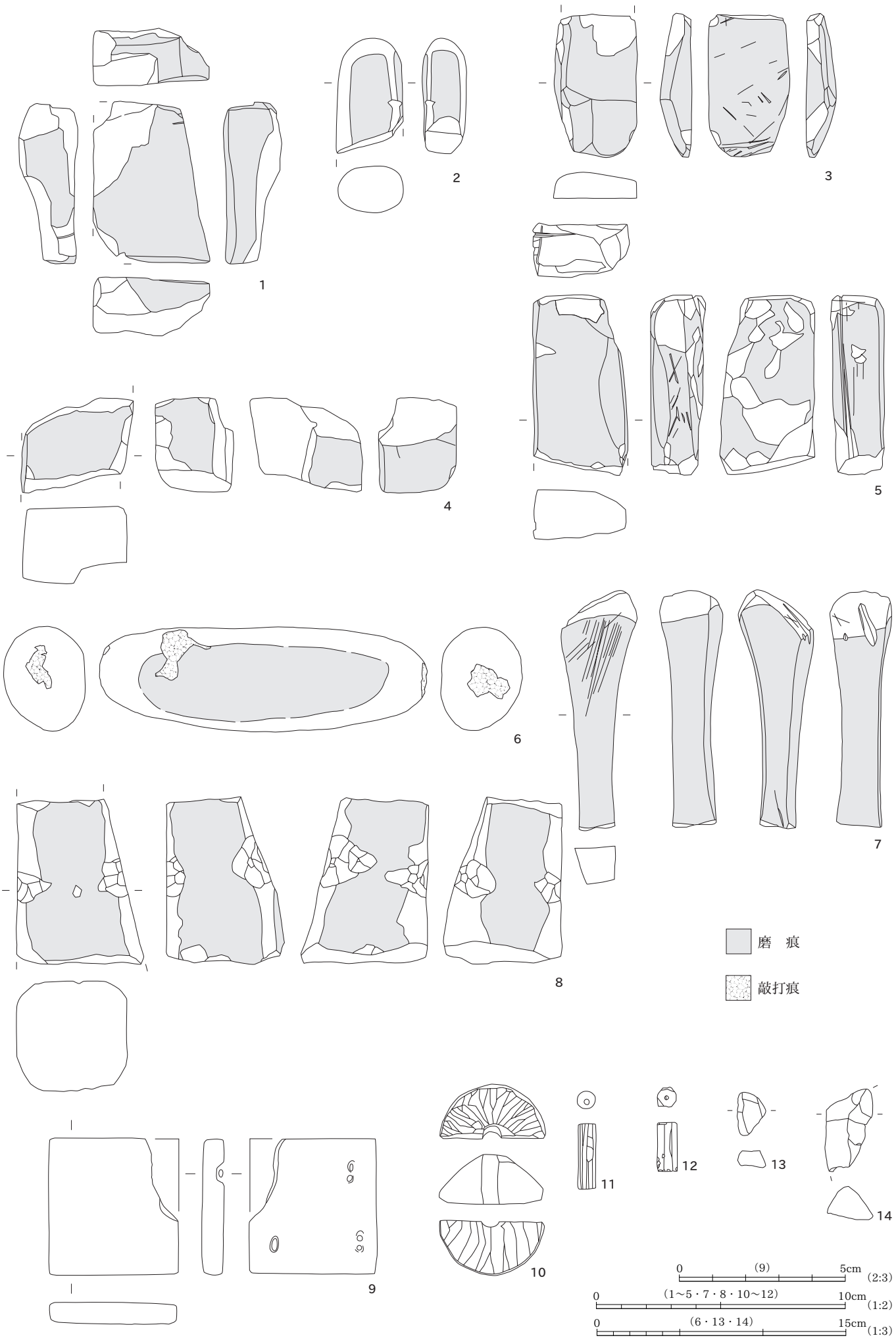


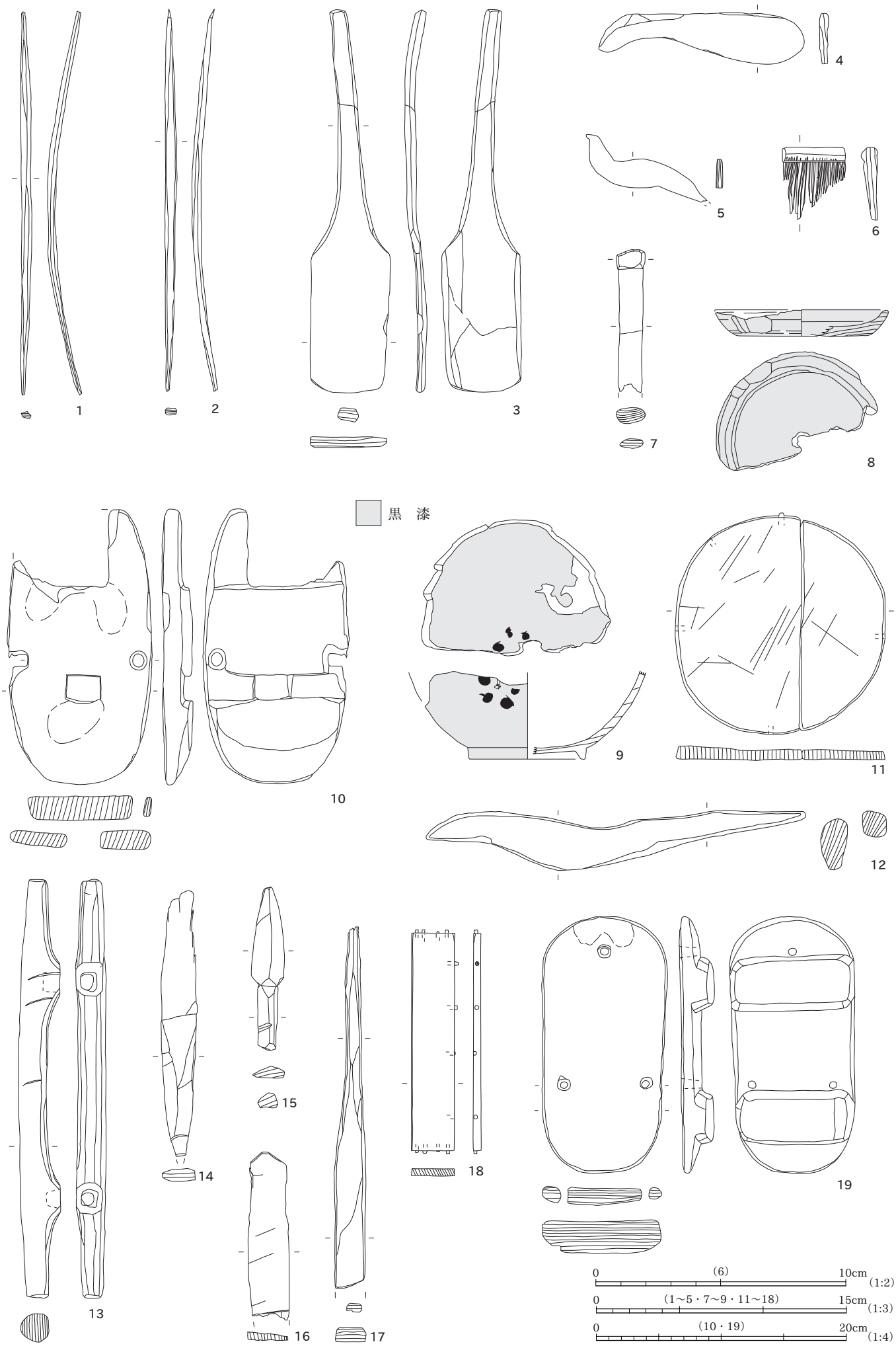


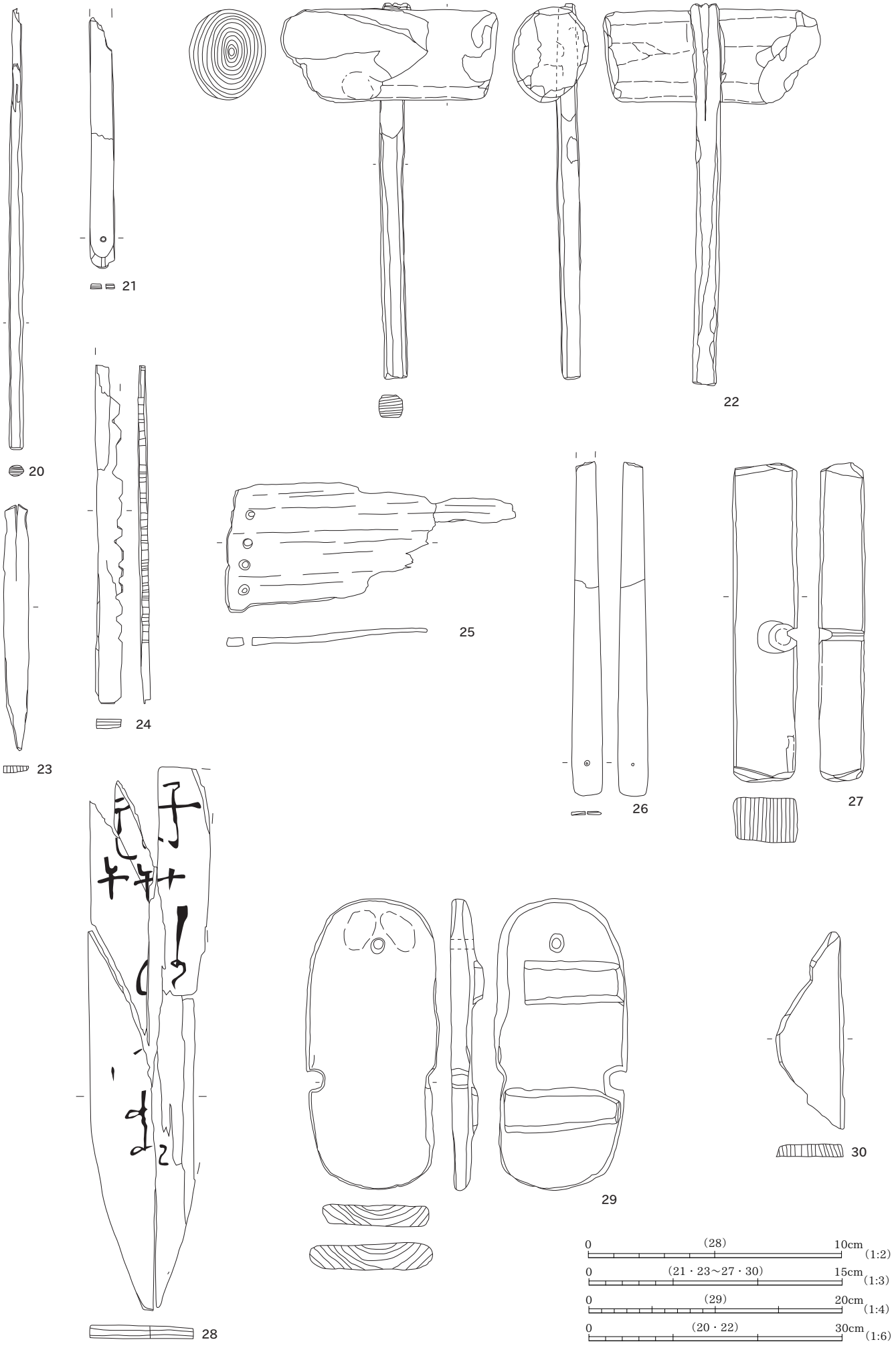


0　15cm（1:3）


赤彩
黒色処理
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
0
15cm
(1:3)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
磨　痕
敲打痕
0　(9)　5cm　(2:3)
0　(1～5・7・8・10～12)　10cm　(1:2)
0　(6・13・14)　15cm　(1:3)


1
2
3
4
5
6
7
8
黒 漆
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
0 (6) 10cm (1:2)
0 (1～5・7～9・11～18) 15cm (1:3)
0 (10・19) 20cm (1:4)

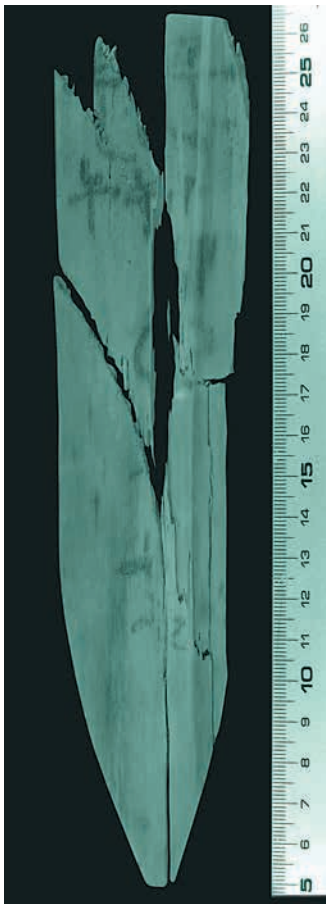

20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0 (28) 10cm (1:2)
0 (21・23～27・30) 15cm (1:3)
0 (29) 20cm (1:4)
0 (20・22) 30cm (1:6)

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0 (11・15～19・23) 5cm (2:3)
0 (10・20～22) 10cm (1:2)
0 (1～9・12・13・24～26) 15cm (1:3)
0 (14) 10cm (3:4)

遺跡　近景（南から）

沢地区南　SI13（古墳時代後期）出土土器

沢地区北　瑞花八稜鏡



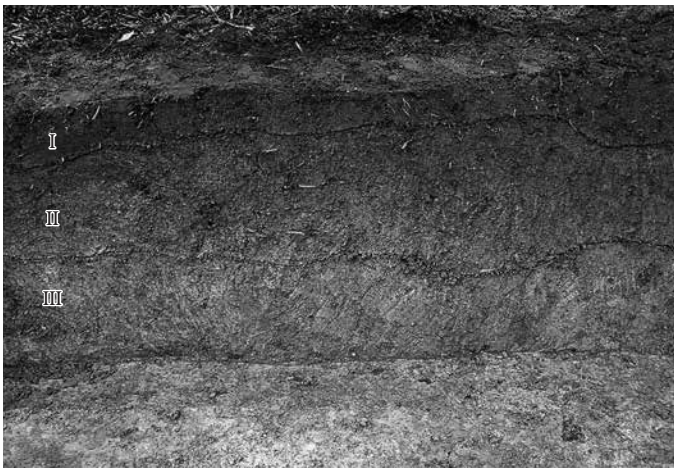
沢地区北　木簡

沢地区北　墨書土器

沢地区北　墨書土器

沢地区北　腰帯石銙

尾根地区　完掘（南から）



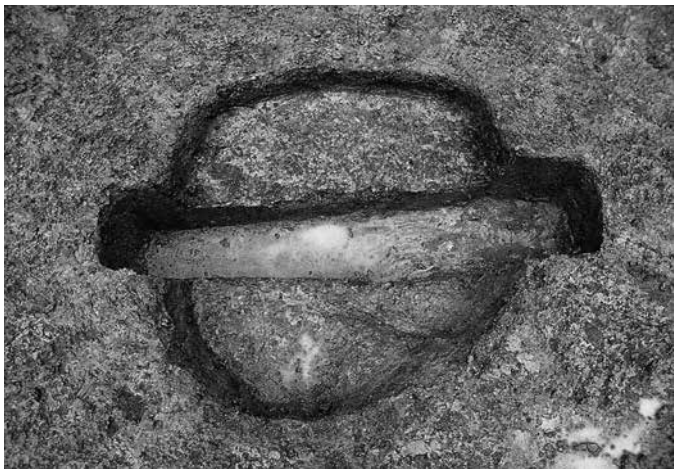
基本層序（東から）

基本層序（東から）

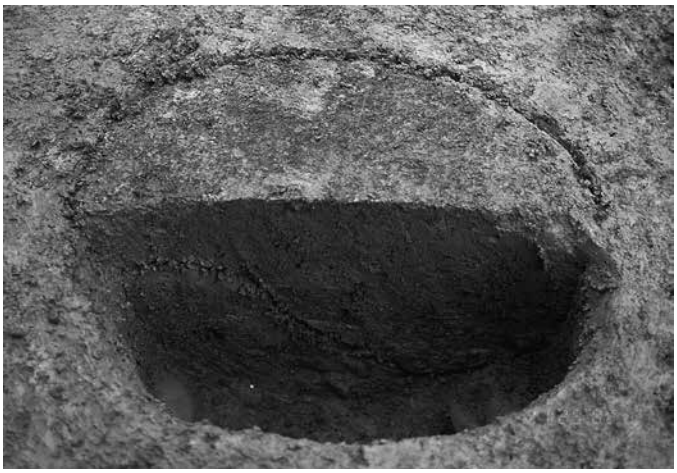
SK11　断面（北東から）

SK11　完掘（南東から）

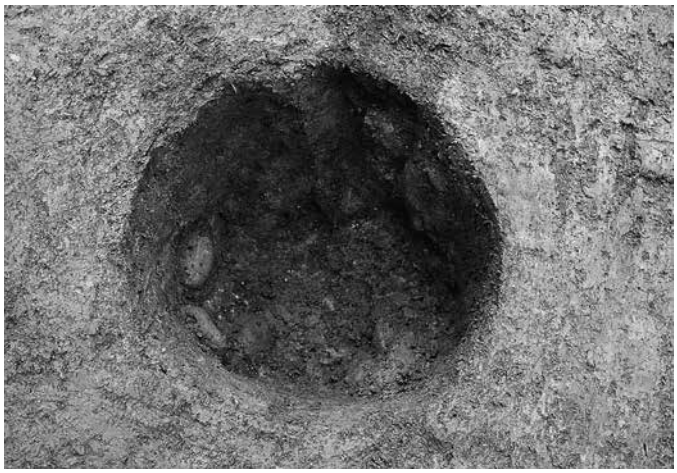
SK12　断面（西から）



SK12　完掘（西から）

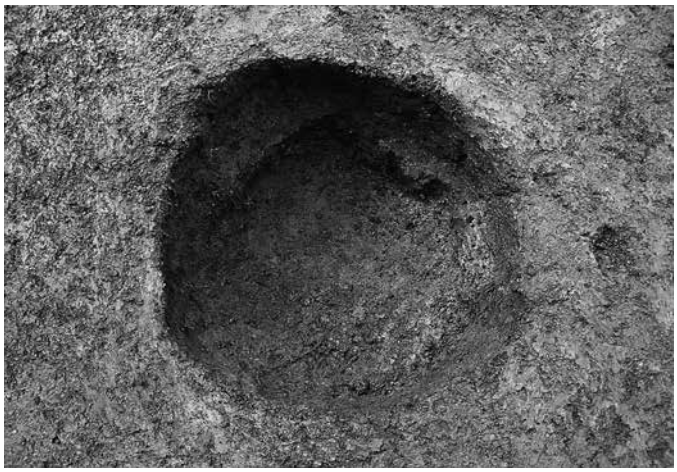


P6　断面（北から）



P6　完掘（北から）

P7　完掘（北から）

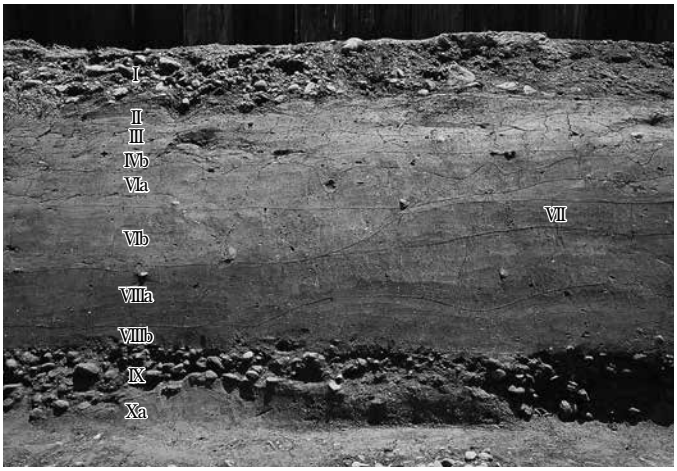


P8　完掘（北東から）

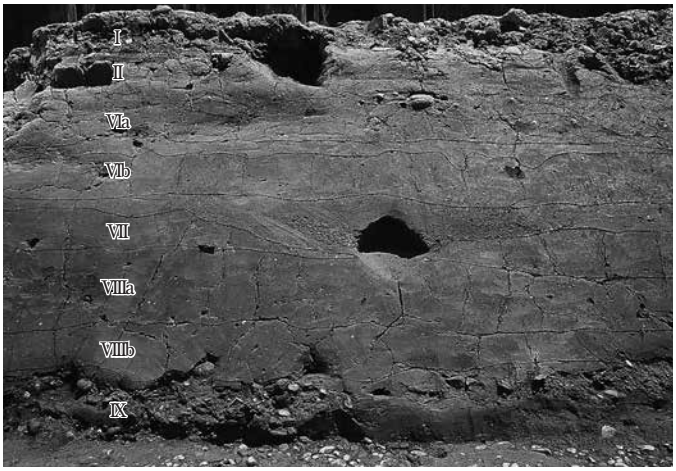
P9　完掘（北から）

P10　完掘（北から）

沢地区南　Ⅷb層（中世）　完掘（南から）



基本層序　Ⅰ～Ⅹ層（西から）



基本層序　Ⅰ～Ⅸ層（西から）

基本層序　Ⅸ～Ⅺ層（西から）

基本層序　Ⅸ～Ⅹ層（西から）

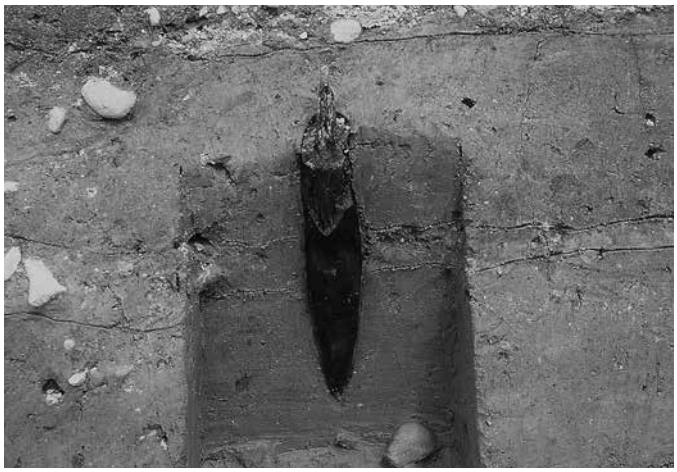
SK23　断面（西から）

P15　断面（北から）

SA14　検出状況（南西から）

SA14-51・52・53　断面（南から）

SA17-8　断面（南西から）



SA22-4　断面（西から）

SA22-7　断面（西から）

SA34　断面（西から）

沢地区南　X層（古墳時代）　完掘（南から）

SI13　出土状況（西から）

SI13　出土状況（西から）

SI13　出土状況（北から）

SI13　出土状況（南から）

土器集中44（西から）

土器集中45（東から）

土器集中46（北から）

土器集中47（西から）

土器集中48（西から）

土器集中49（西から）

土器集中50（北から）

土器集中52　上面（東から）

土器集中52　上面（北東から）

土器集中52　下面（北から）

土器集中52　下面（東から）

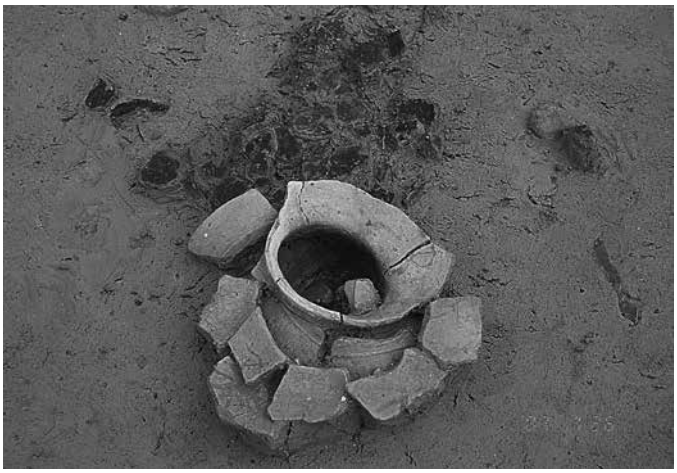
土器集中56（東から）

土器集中56（南東から）

土器集中57（北から）

土器集中57（北から）

土器集中57（北から）



土器集中57（北から）

土器集中58（東から）

SK51　断面（北から）

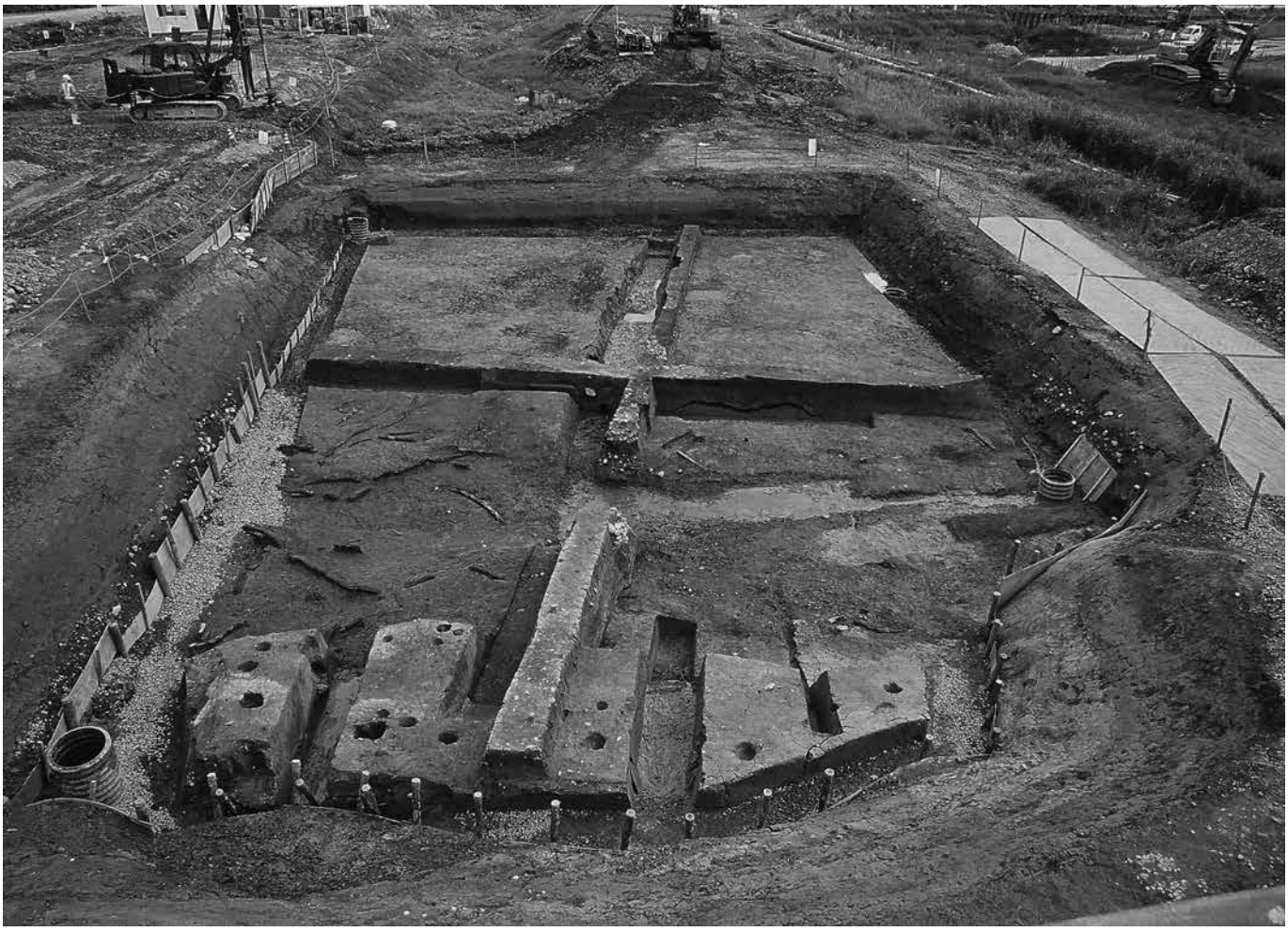
SK51　完掘（北から）

P39　断面（南から）

P39　完掘（南から）

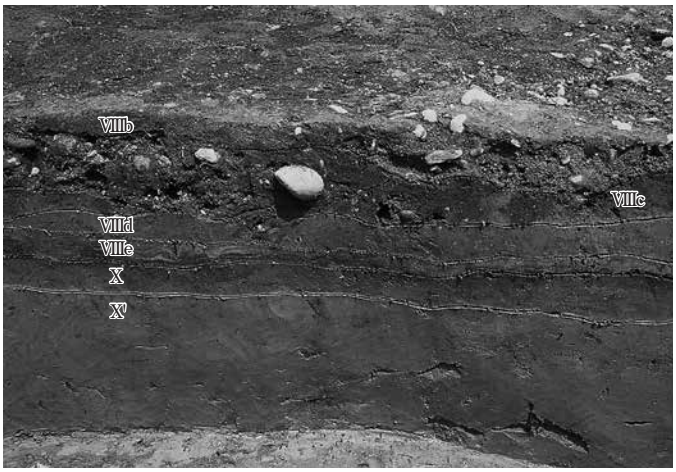
P40　断面（南から）

P40　完掘（北から）

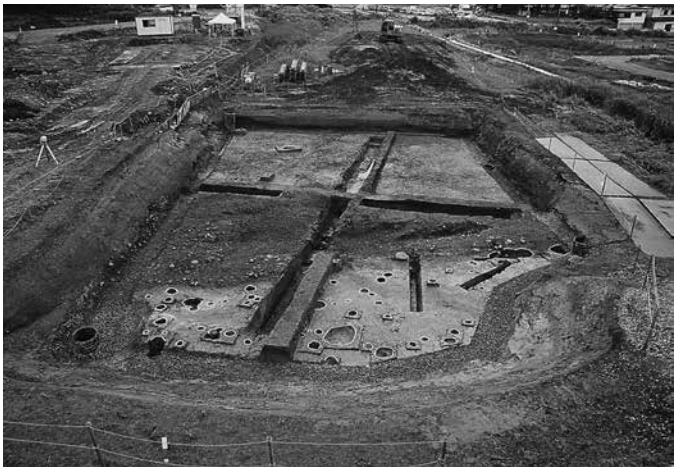


沢地区北　Ⅷ層（古代）　完掘（東から）

基本層序（北から）



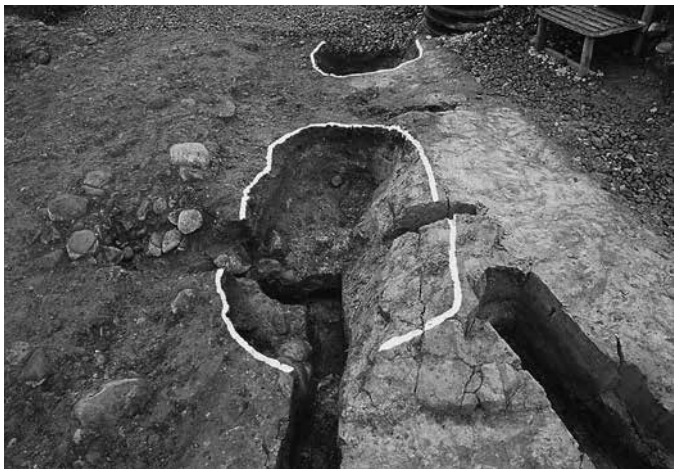
基本層序（南から）



Ⅷb層　完掘（東から）

SK1003　断面（南から）

SK1003　完掘（南東から）

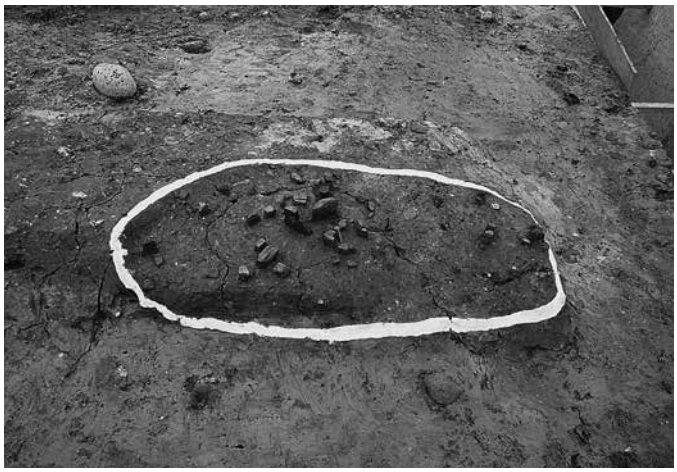


SK1004　完掘（南から）

SK1006　完掘（南から）

土器集中1001　出土状況（東から）

P1009　断面（東から）

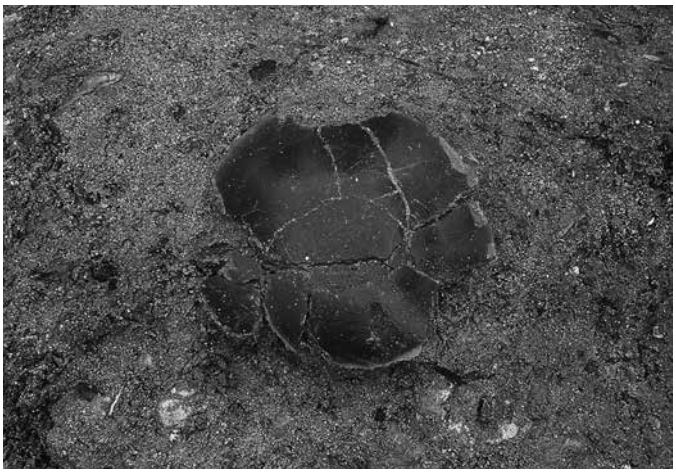


焼土1002　出土状況（東から）

SD1077　断面（南から）

SD1077　完掘（東から）

SD1077　出土状況（西から）



SD1077　出土状況（北から）

SD1077　出土状況（東から）

SD1077　出土状況（西から）

SD1078・1079　断面（西から）

SD1079　断面（南から）

SD1078　出土状況（西から）

SD1078　出土状況（西から）

SD1078　出土状況（西から）

SD1078　出土状況（西から）

SD1079　出土状況（南西から）

SD1079　出土状況（西から）

SD1079　出土状況（北から）

X層（古墳）　完掘（東から）

土器集中1087　出土状況（東から）

管玉出土状況（東から）

中世

1

2

3

4

5

6

7

8

9

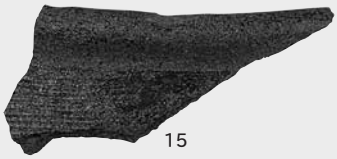
10

11

12

13

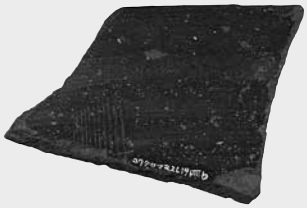
14


15

16

17

18


19

20

21

22

23

24

25

27

26

28

古代
土器集中1001

1

2

3

4

Ⅷb層

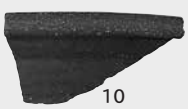
6

7

8

5

9


10

11

SD1077

12

13

15

全て　〔1:3〕

14

17

18

19

20

22

25

21

23

24

Ⅷc層

26

27

28

29

30

31

32

33

36

39

34

37

38

41

40

44

46

47

42

45

48

49

50

51

52

43

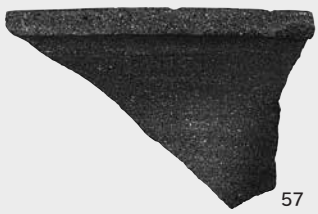
SD1079

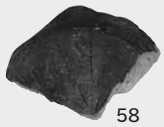
53

43　〔1:4〕
その他　〔1:3〕

54

55


57


58

56

59

SD1078

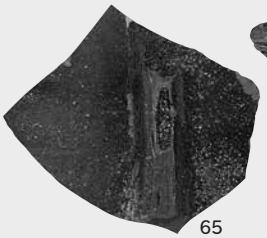
60

61

62

63

64


65

66

67

68

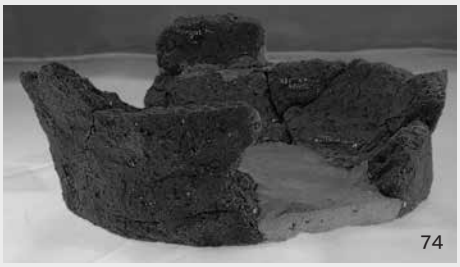
69

70

72

71

73


74

75

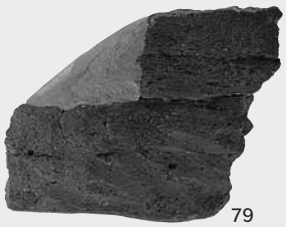
土器集中1081（SD1078・4層）

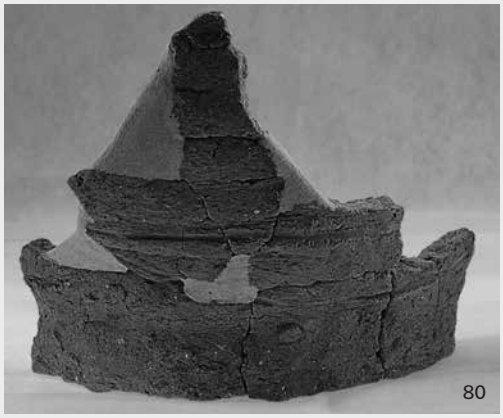
76

土器集中1082
（SD1078・7層）

77

78


79


80

全て　〔1:3〕

土器集中1083（SD1078覆土12層）

81

82

調査区一括

83

84

86

85

90

91

92

87

88

89

SI13（1～34）

1

4

7

10

13

2

5

8

11

14

3

6

9

12

15

全て　〔1:3〕

16

17

18

19

20

22

21

24

23

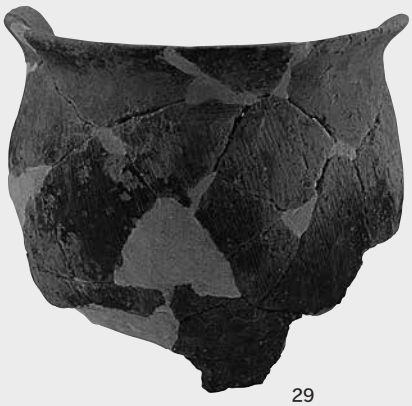
26

28

30

25

27


29

全て　〔1:3〕

31

32

33

34

土器集中46（35）

35

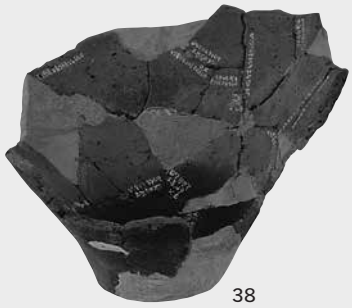
土器集中47（36）

36

土器集中48（37）

37

土器集中49（38・39）


38

39

土器集中52（40～46）

40

41

44

45

42

全て　〔1:3〕

43

46

土器集中56（47～52）

47

48

49

50

51

52

土器集中57（53～58）

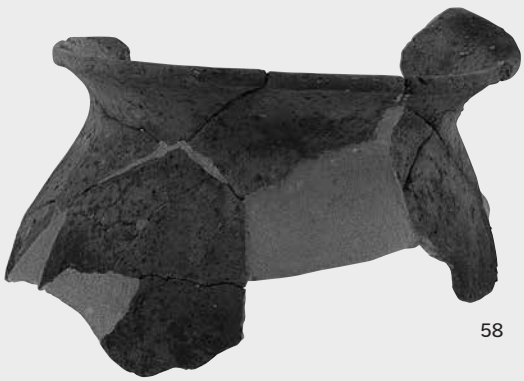
57

53

54

55

56


58

全て　〔1:3〕

土器集中58（59）

59

土器集中1085

60

土器集中1087（61・62）

62

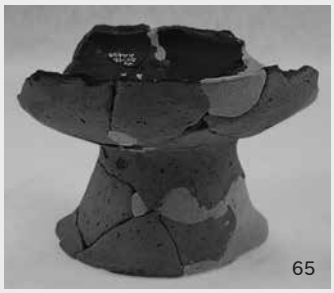
61

SD1078（63）

63

包含層（64～91）

64


65

66

69

67

68

71

70

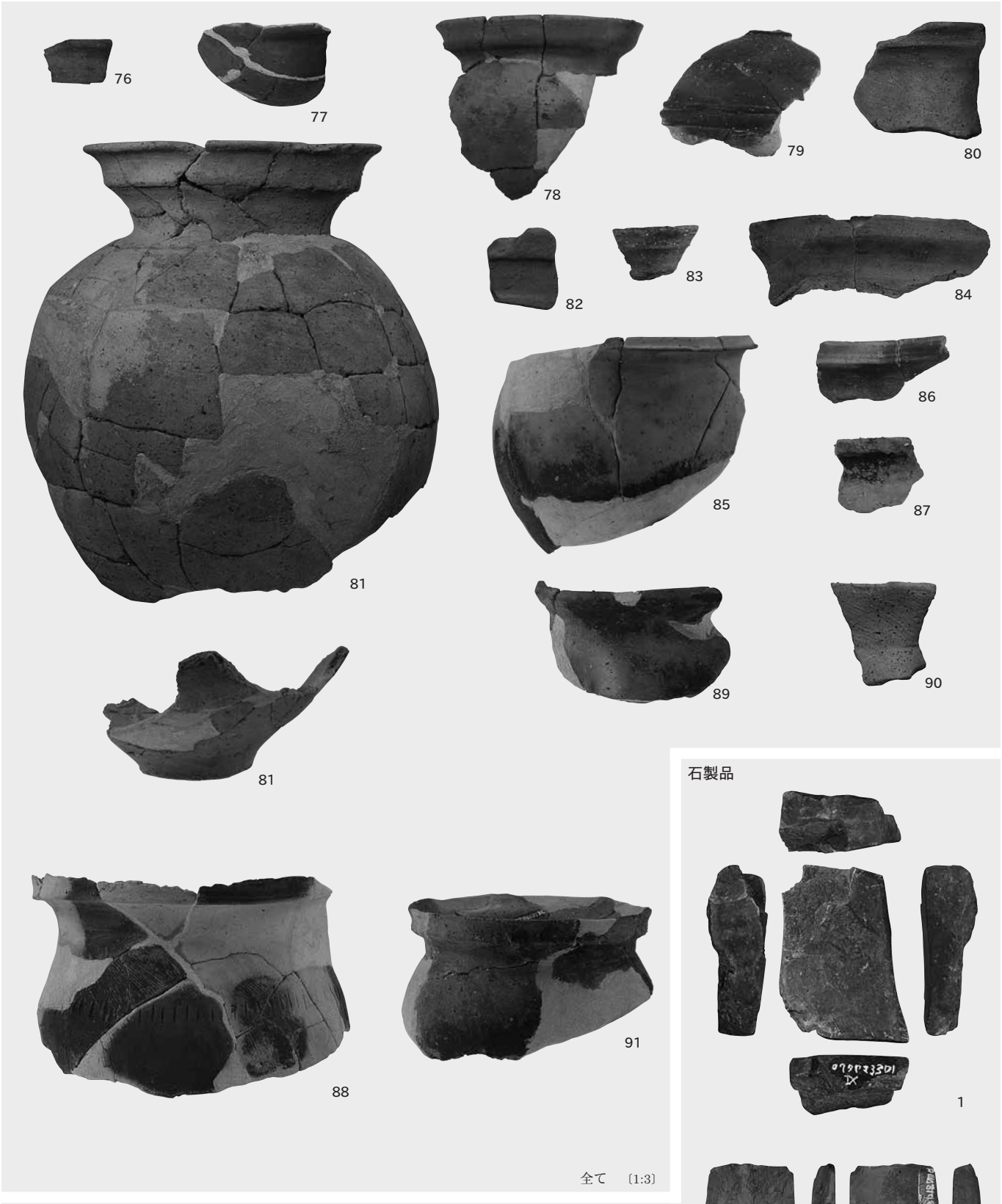
74

73

72

75

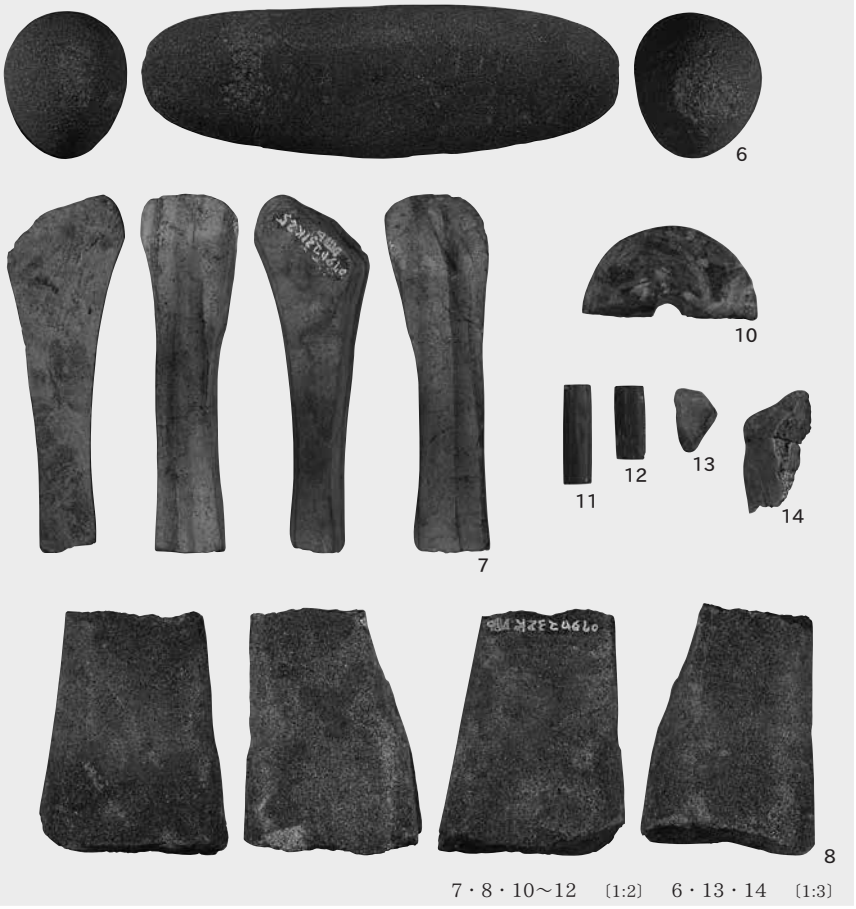
全て　〔1:3〕



全て　〔1:3〕

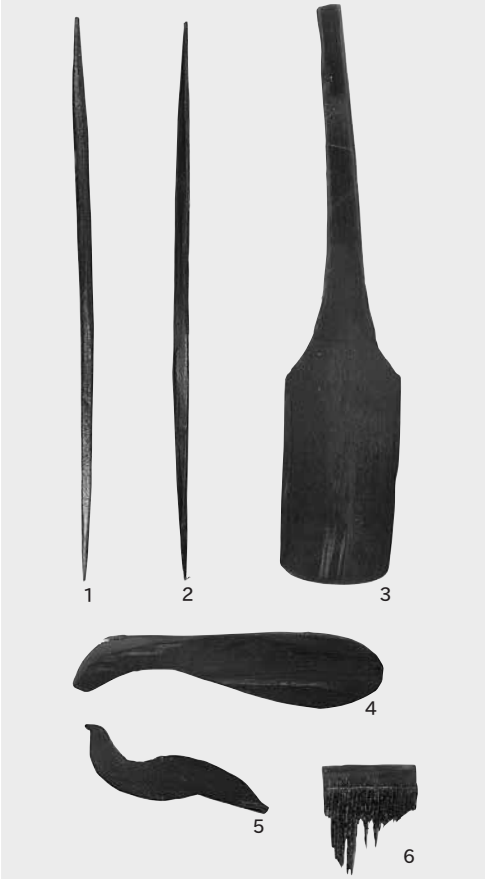
石製品

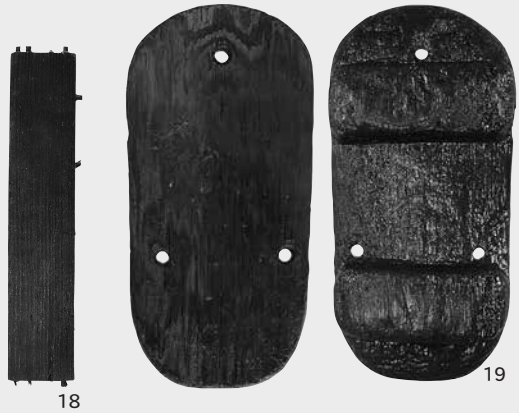
1～5　〔1:2〕



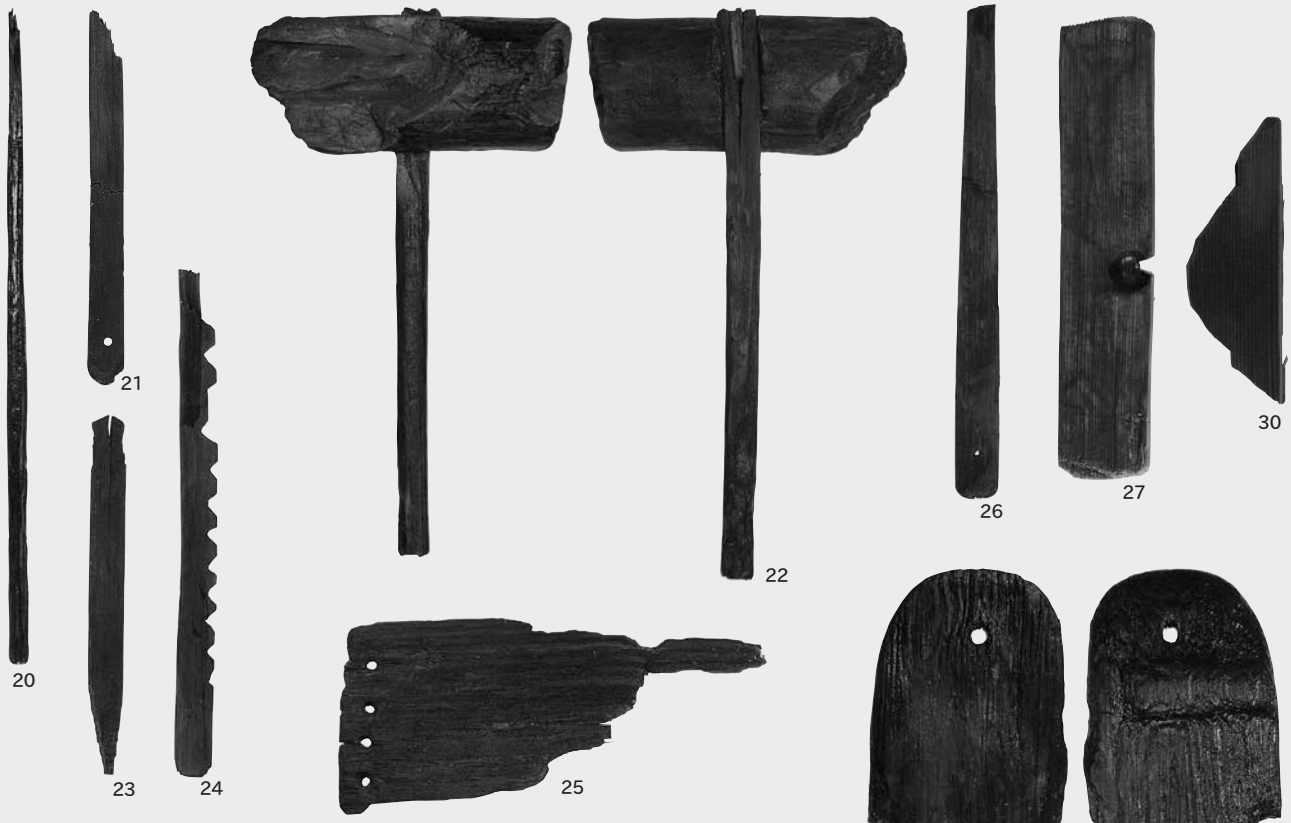
7・8・10～12　〔1:2〕　6・13・14　〔1:3〕

木製品



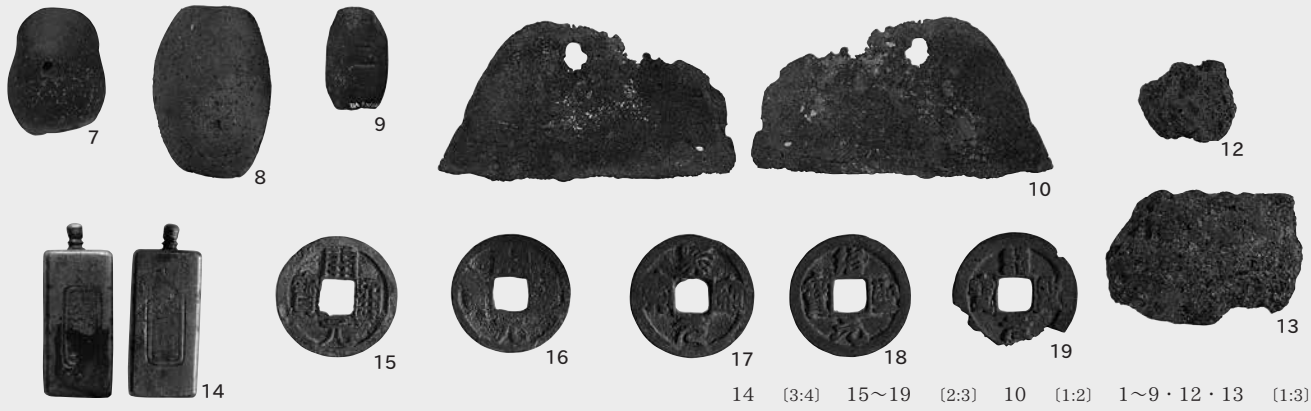


6　〔1:2〕　1～5・7～9・11～18　〔1:3〕　10・19　〔1:4〕



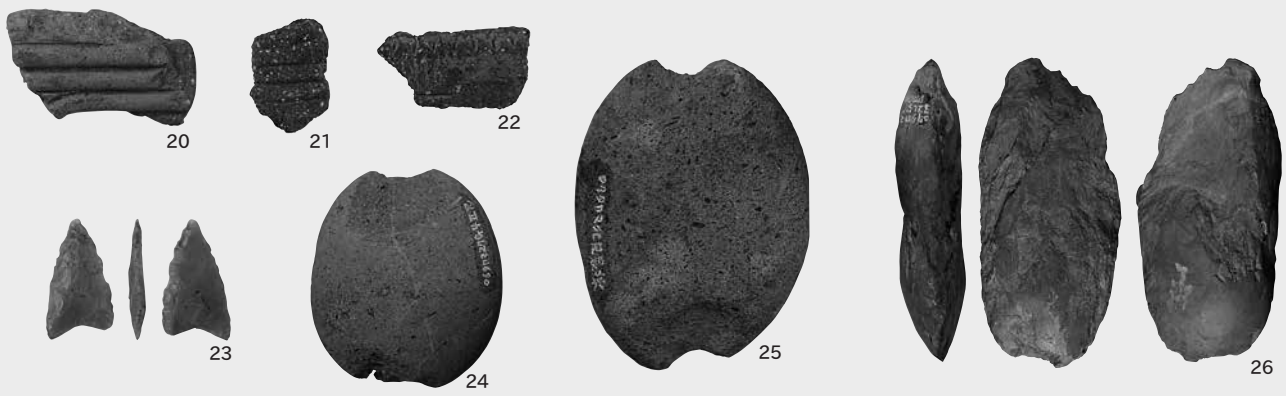
21・23～27・30 〔1:3〕　29 〔1:4〕　20・22 〔1:6〕

土製品・金属製品



14 〔3:4〕　15～19 〔2:3〕　10 〔1:2〕　1～9・12・13 〔1:3〕

縄文土器・石器



23 〔2:3〕　20～22 〔1:2〕　24～26 〔1:3〕

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たぶせやまざきいせき
書　　名	田伏山崎遺跡
副 書 名	北陸新幹線関係発掘調査報告書/一般国道８号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書
巻　　次	XIII/IV
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第205集
編著者名	佐藤友子（埋文事業団）、村上章久・安西雅希（以上、株式会社帆苅組）、 藤根　久・佐々木由香・竹原弘展・米田恭子（以上、株式会社パレオ・ラボ）
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒956-0845　新潟県新潟市秋葉区金津93番地１　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2009（平成21）年12月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
たぶせやまざきいせき 田伏山崎遺跡	にいがたけんいとい がわし 新潟県糸魚川市 おおあざ たぶせあざやまざき 大字田伏字山崎 777番地ほか	15216	279	37度 03分 06～ 09秒	137度 54分 01～ 04秒	20060901～ 1206 20070402～ 0831	3,515 （北陸新幹線 2,365） （糸魚川東バイパス 1,150）	鉄道（北陸新幹線） 道路（一般国道8号糸魚川東バイパス）事業

所収遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
田伏山崎遺跡	弥生時代後期～古墳時代前期：遺物包含地 古墳時代後期：集落 平安時代：祭祀遺跡か 中世：遺物包含地	弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代・中世（12～15世紀）	古墳時代後期：竪穴建物１ 平安時代：自然流路3、ピット62 中世：杭列10・土坑１	弥生時代：弥生土器 古墳時代：土師器・管玉 平安時代：土師器・須恵器・製塩土器・瑞花八稜鏡・木簡・腰帯石銙・斎串・箸状木製品 中世：珠洲焼・青磁・白磁・天目椀・銭貨・煙管・鳥形・馬形	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第205集

北 陸 新 幹 線 関 係 発 掘 調 査 報 告 書 XIII

一般国道８号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書IV

田伏山崎遺跡

平成21年12月24日印刷
平成21年12月25日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市中央区新光町４番地１
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市秋葉区金津93番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　北越印刷株式会社
〒940-0034　長岡市福住１丁目６番27号
電話　0258（33）0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第205集 『田伏山崎遺跡』正誤表　　2022年7月追加

頁	位置	誤	正
図版50	写真上から３列目	３７	５９
図版52	写真上から１列目	５９	３７